女學世界

第九巻 第拾三號



美顏水

美顏料として世界に名高き美顏水

品質精良にして色を白くしきめをこまかにつやを出す効力は天下類なし

又おしろいのとき水として化粧に用ゆれば巧妙なる作用にておしろい濃く淡く心の儘にのび常に用ゆれば花の顏ばせ雪の肌となる眞に美顏料として重寶なる發明品なり

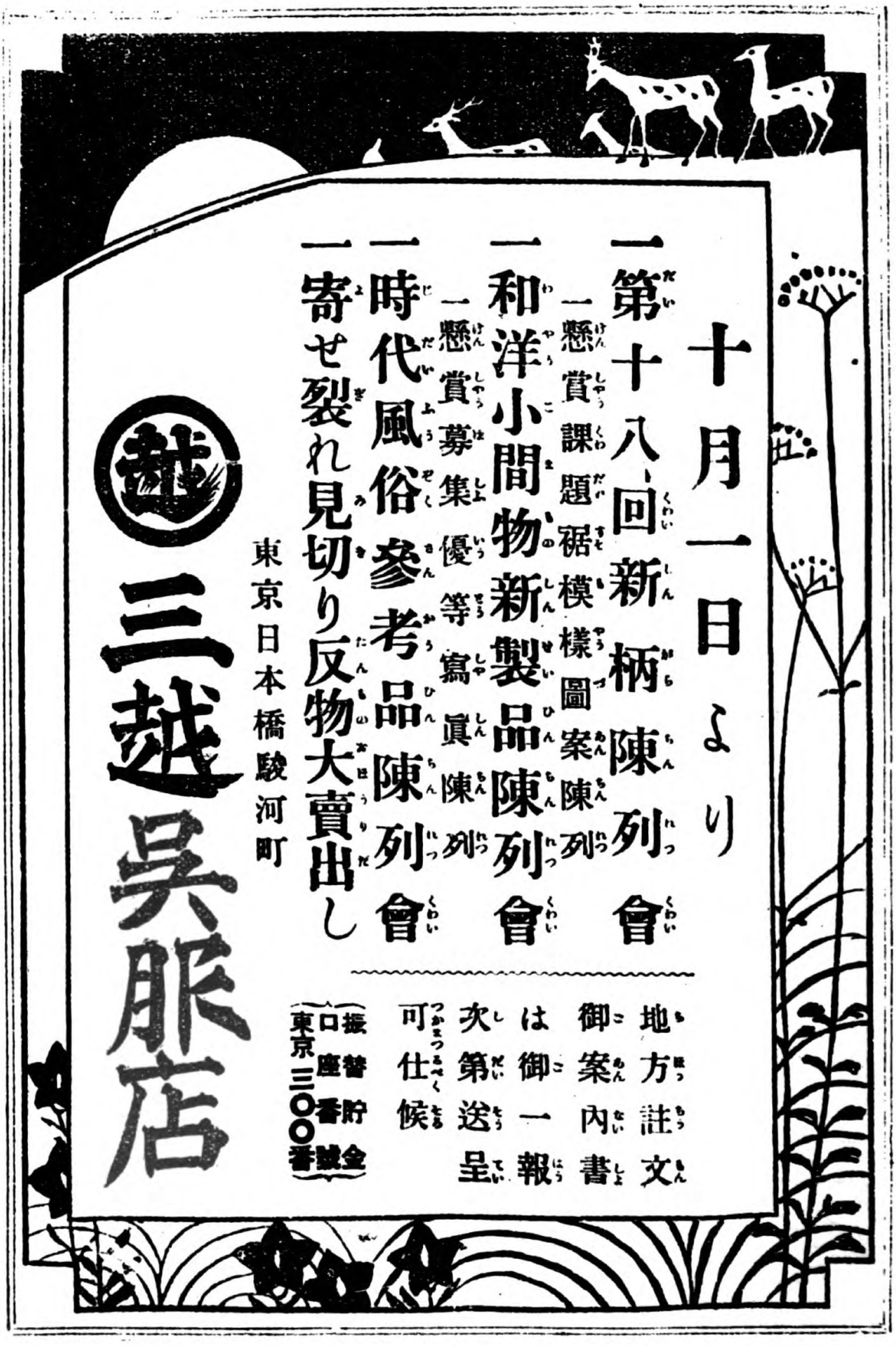
定價＝拾五錢、廿五錢、特別製五拾錢なり

○本品御購求の節は化粧用美顏水と御指名た乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる化粧品小間物店にて販賣す

淑女令孃方は常に美顏水を愛用す




十月一日より
一第十八回新柄陳列會
一懸賞課題裾模樣圖案陳列
一和洋小間物新製品陳列會
一懸賞募集優等寫眞陳列
一時代風俗參考品陳列會
一寄せ裂れ見切り反物大賣出し
地方註文御案内書は御一報次第送呈可仕候
（振替貯金口座番號東京三〇〇番）
越
三越呉服店
東京日本橋駿河町

女學世界 第九巻第拾參號 目次


御料
たつた
白粉
秋の月は薄の露を珠と輝
かしたつた白粉は美人の
肌を雪より白
からしむ

女(いの二)

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく皆同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥蓐の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告け試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及び**印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓▲遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり
用法及び詳細は本能書にあり但し本舗へ直接御注文の時は病状の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舗 川名助次郎 電話大森六十九番

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
越後國長岡町 藤井卯吉
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀨戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
長野市大門町 小林傳兵衛
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
馬關西南部町 賣藥會社
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通 大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷回春堂
相模横須賀汐入町 茶木商店

(全國到る所の有名なる藥舗にて販賣せり萬一無之地は本舗へ申越次第特約す)

冬物新柄御披露

十月五日より十日まで

○大丸式衛生子供寝衣（名 ねびえしらず）壹着七十五錢より一円まで

○寄せ切れ、見切反物 澤山取揃置申候

欧米最新流行の婦人装飾品十月七日頃着荷の筈に御座候

（大）

日本橋區通旅籠町（電車ならべ 小傳馬町 人形町）

大丸呉服店

女（いの三）



夏去り、秋來る、ゼムで、體丈夫、
心愉快、運動と、勉強と、家事と、
勉めよ、姫たち、好時節、今ぞ秋。
△朝起きた時
△食事した時
△氣の鬱ぐ時
△讀書勉強の時
△立働する時
△貰酒を飲時
ゼムを直ぐ召上れ
△氣分を爽快に
△病氣に罹らず
△勞疲を休めて
△元氣に働いて
△愉快に暮す
—ゼム常用の徳
「ゼム」主効
○消化不良○溜飲胸痞○氣の鬱ぎ
○食慾不進○胸腹の痛○飲食過ぎ
○食傷水傷○頭痛眩暈○宿醉喉渇
○船車の醉○氣附毒消○時候あたり
本舗 東京馬喰町二 山崎榮三郎 本店
大阪平野町一 擴張部
定價 小包十錢 小箱五十錢 容器入廿錢
大包廿錢 大箱一圓 益用包卅錢
德包買方 新製益用包は十錢 四包分に優美なる雲上形絹織美術容器を添へ定價三十錢
ゼム
口中香錠
懐中良藥
The Gem

女(いの四)

歡な載ぜて



田中製版所三色版

●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來癪に苦み常に不姙を嘆つ病婦の到る處に見るが其最も多き病狀は下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて從前の病歴を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程でも皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である曩に痳病の病原發見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅毒藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所　東京市本鄉區湯島天神表門中坂上
藥劑師　中西莊吉
（振替貯金東京口座千五百番）

●月經時は如何に過すべきか

村井弦齋

月經時の衞生法は私が申上げずとも、醫師の訓戒をお守りになれば夫に越した事はありませんたゞ一つ私どもの家族が用ひて居ります「月の帶」と云ふ物があります是は產婆で有名な山田逸子が歐羅巴へ行て西洋婦人の用ひる月經帶を調査し日本婦人に適する樣に改良を施し新に拵へたもので有ます此の「月の帶」は至極輕く腰の工合も自由で大層都合が宜いさうです

右は村井弦齋先生が「婦人日常生活法」に紹介されたる一節にして現に本品の効用は

●月經時に使用すれば如何程強い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來・運動、起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品で有ます

●赤白帶下の強き人、局部の惡臭を發する人、子宮病を惱める人等にも最も妙です

●初めて月經になりし令孃に頗る適當す又俗に冷え性と唱へる婦人常に用ひて腰を溫め子宮病を豫防するの効があります

各地に取次店あり發賣元へ直接の御注文は特別製（最近改良形）一圓五十錢●甲種一圓●乙種七十五錢●送料何れも八錢郵便爲替又は三錢切手代用一割增で注文あれば早速送ります發賣元は東京神田猿樂町二丁目の資生堂藥局です

女（ろの一）

會員募集

壹ヶ年 學科終了

入會の 最好時期

女子手藝講義錄

第壹號

十月五日發行

毎月一回發行

入會の手續は至極手輕な方法であります

手藝が女子に大切なのは今更申す迄もない事で是を敎へる學校も數多あります然し家の都合その他の故障で通學の便のない方併に在學中の方の參考用として共立學校の科目に依り左の十科を親切に傳習して

一般の家庭に普及させたいのが

●本講義錄發刊の目的であります講師は何れも專門の方が多年の實驗から組織的に説明されるのですから如何なる初學者素人方にも容易く了解されると信じます就ては此際速に會員となつて本講義錄の實益と趣味とを御試み下さい（優待會員には審査の上優等と認めたる時は賞品を呈す）

（講義課目）

裁縫科 和服洋服各種

刺繡科 和洋各種

割烹科 和洋各種

手藝用圖科

●編物科 各種

●袋物科 各種

●細工物科 撮細工綿細工瓶細工裁縫細工各種

●手藝敎授法

●組糸科 各種組立

●造花科 花卉、果實

●課外講義……數種

共立女子職業學校櫻友會內女子手藝普及會編纂

發行申込所 東京日本橋 大倉書店 電話本局四一四番 振替口座東京二三八番

入會期定及內容見本無代進呈

女（ろの二）


日本醤油
フジニホン
日本醤油は味美にして價廉なるのみならず其製法頗る清潔なり故に調理と衛生とを重んずる家庭には必ずその備付あり
賣捌店は全國各地の重なる酒醤油店にあり何卒御最寄りにて御買求を乞ふ


純白浮き
スワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
定價 二個積(壹本) 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
特約大販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助


千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶卅五錢 小瓶二十錢） 水製 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢） 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

女（其の四）

立田姫



榊原蕉園筆



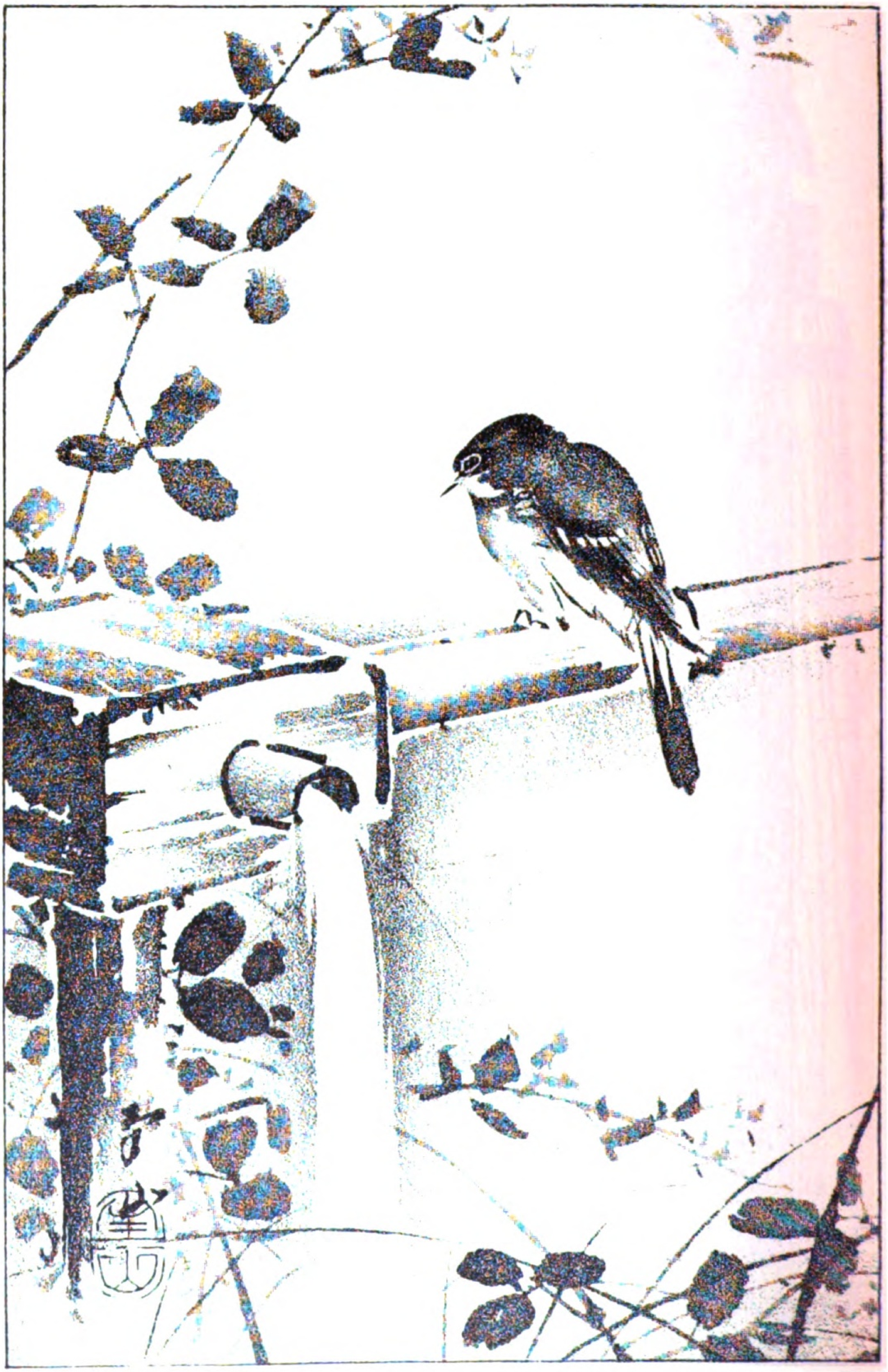


五(はの二)


水晶おしろい
文明の婦人は
薄化粧を尙ぶ
水晶おしろいは
最良の薄化粧料なり
本舖 東京
大和屋
定價
金五拾錢
金廿五錢
金拾五錢


素顔(すがほ)の美(び)を増(ま)すは
クラブ洗粉(あらひこ)の特色(とくしよく)
クラブ
あらひこ
女(はの四)

秋　暮



加藤南山筆

月 明




美術造花材料
新着品案内
ミレナリー用
一毛管 A1 A2 B C
郵送料貳錢封入御申込アレバ標本送呈ス
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛商店
特長電話浪花一六四三番
振替口座東京四九七〇番

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞賛良藥

改良月ぎく

女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

●肥滿病新藥

（米國新輸入）

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

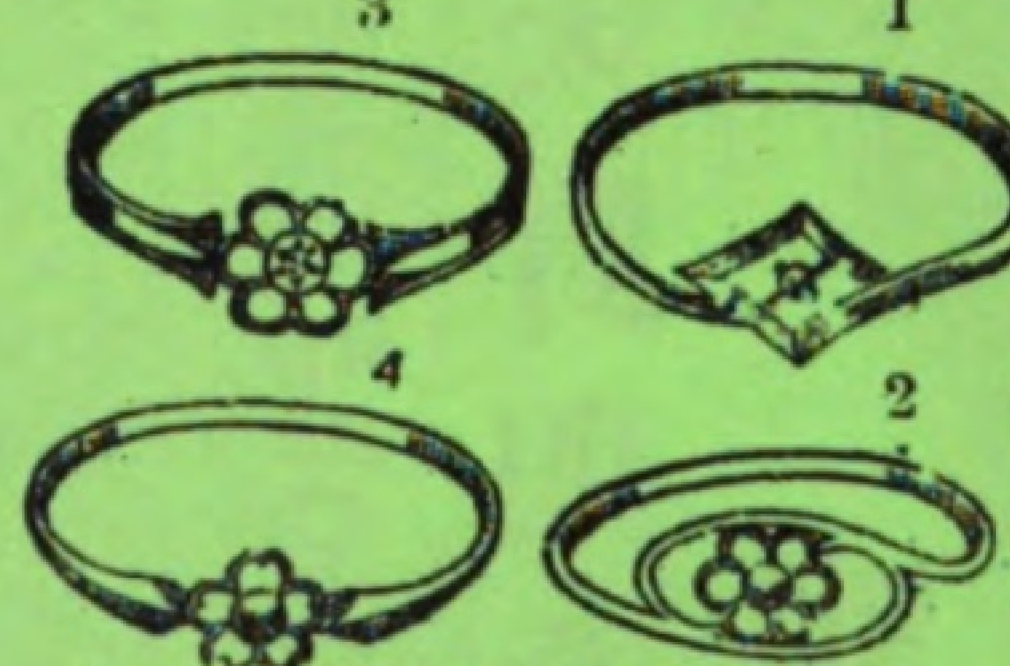
子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと／＼肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと／＼ふとり血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顏窈窕たる肥白となり誓て美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

藥價	一劑一圓五十錢	二劑二圓九十錢	
	三劑四圓卅錢	四劑五圓半	送料十錢

發賣元　東京々橋中橋和泉町　振替第壹〇六七七番

小宮愛生堂

流行時計指環類



（但何れも絹天箱付）

（1）十二金製電形眞珠入　指環　價二圓八十錢

（2）十二金製水形眞珠入　指環　價二圓四十錢

（3）十二金製中劍形光石入　指環　價二圓四十錢

（4）十二金製櫻形眞珠入　指環　價二圓三十錢



十四金無地側無双十一形中蓋付器械ニッケル石入シリンドル頭引鍛麺シ龍頭卷時計　價金拾九圓五拾錢

九金斜子側無双十一形中蓋付器械ニッケル石入シリンドル頭引鍛廻シ龍頭卷時計　價金拾七圓參拾錢

九金無地側無双十一形中蓋付器械ニッケル石入シリンドル頭引鍛廻シ龍頭卷時計　價金拾七圓八拾錢

貴婦人用金着鎖り　參圓六十錢、四圓五十錢、五圓二十錢

拾八金鎖り　拾貳圓五十錢、十五圓九十錢、廿參圓

●地方御注文は郵送料拾貳錢申受候　清韓樺臺に限り郵送料三十ヵ錢

時計眼鏡金屬指環類

東京淺草區茅町二丁目六番地

大隅商店

電話下谷六五七番

女にの二

最上醤油　キハク印

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハク又キハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

新流行指環

今川橋
松屋呉服店前



(1) K20 牡丹高彫　金甲廿圓 乙拾七圓

(2) K20 ルビー入亂菊高彫　金拾七圓

(3) K20 萩に水高彫　金拾五圓

(4) K22 金入梅花彫白　金拾五圓

(5) K22 眞珠入亂菊高彫　金廿圓

(6) K22 月に梅彫　金拾参圓

(7) K20 竹彫白金入　金拾圓

(8) K20 菊水彫　金六圓半

商品目録出來仕候（送料四銭）
東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
電話本局二〇四〇番
振替口座一五二二四番

女(にの三)


紅紫とり〴〵に美しき秋
の千種と大學白粉
の清粧をこらせる美人の
艶容はまことに秋の天地
を彩る自然の名花也

九條家へ入輿されたる武子姫



名家の令嬢



園田孝吉氏令嬢米子

大山綱介氏令嬢綾子

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見



に係る生毛に關する新說を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ●●

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

本舖 從七位勳六等 醫科大學卒業藥劑士 中島龜之丞鑑製

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市

本郷六丁目赤門前	瓜生藥局
麴町區紀尾井町三	齋藤藥局
日本橋檜物町十八	龜田藥局
京橋區八官町八	野田藥局
神田淡路町二の四	森田藥局
芝田町四の一二	加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二	岩本支店
赤坂田町四の一	竹内藥局
同青山北町五	西井藥局
本所吉岡町廿五	小島藥局
四ッ谷大傳馬町二	永野藥局
高松市片原町	新明藥局
堺市大寺南門東入	一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角	
京都市下京區五條通り富小路行當り	
大阪市平野町二	丹平商會
丸龜市本町	櫻井藥局
名古屋京町三丁目	飯田藤七
同 同 同	荒川長太郎
同 鐵砲町三丁目	谷田藥局
神戸元町一丁目	西村關東局
廣島市橋本町	萬代藥堂
神奈川青木七軒町	永崎藥店
仙臺市新傳馬町	櫻井藥局
岡山市橋本町	加藤藥店
弘前市下土手町角	菊地藥店
大津市菱屋町	磯崎藥局
福知	藥局
安江洋	反物店

●本法は

女髮結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛
一大奇方劑
毛はへうけあい

の多年實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり住復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十七

濟世園

女(ほの二)

蹄鐵印

シャターリヨン葡萄酒

●藥用飲料並食卓用

進物トシテ最モ妙ナリ

●至ル處取次店アリ



發賣元 東京本町 鈴木洋酒店

にきび とり 化粧水

本品は有名なる獨逸專門大家の調配にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢(但郵便切手は一割增)

化粧水パピロン

發賣元 東京市本所區綠町三の二九 小林榮進堂







女（ほの三）



都の花石鹼
芳香の高雅にして品質の純良なるは紳士淑女の愛用と名譽の金牌とに依り知らる
大阪 野村製
▲全國到る處の化粧品雜貨店に販賣せり
女（其の四）

名家の令嬢



海軍中將武富邦鼎氏令嬢荻子

伊東元帥令嬢延子



松下の月



海岸の月



波上の月


REX
SOAP FLOATS
英國製實用浮
レックス石鹼
佛國製
ケーバ石鹼
香水
CHIKUMA
REX
REX FLO
REX
REX
MNIUM

女(への一)

本誌を讀むは婦人向上の所以なり

婦人世界

十月一日發行 第十一號 定價一冊 拾五錢 郵税一冊一錢五厘

夫婦喧嘩は如何に豫防すべきか……村井弦齋

▲私の娘が洋燈を倒して燒死したる時の實際（娘の母）飯田千代子

▲大阪の女學生が始めて上京して女子大學寄宿舍に入る　室谷節子

▲獨逸より歸りて第一に母親に忠告したき事（醫學博士）加藤照麿

▲十五人の子供を殘して良人に逝かれし時の覺悟……色川靜音子

▼▲慰藉と幸福を求むる婦人は讀め

▲北京籠城中に良人を失ひし實歷　楢原政子

▲藝人の娘より奮發し遂に女教師となれる苦心實歷　杉橋よね子

▲御祈禱にかこつけて窃かに生神樣のお告げを承はる記…（婦人記者）

▲京都の女中は斯くの如き美德を有す……………川村糸子

▲女中となりて狂氣の良人を看護せし苦心…（狂人の妻）中澤米子

大隈伯遭難の當時の追懷…（伯爵夫人）大隈綾子

東京 實業之日本社（郵便振替口座三二六一番）

女（への三）

(への四)



大木宗保氏令嬢錦子



上杉伯爵令嬢米子



能勢辰五郎氏令嬢とし子

ネッスル、コンデンスミルク

育兒に必要なる



最良滋養品

ネッスル、ミルク、フード

●秋涼と共に本誌は如斯大發展●

婦人畫報

拾月一日發行　拾月の巻　一冊 廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共二圓八十八錢

本號より畫報全部を光澤紙とし畫面を增加す

畫報

◎秋の窓（中澤弘光筆 彩色美人畫）◎胡蝶の舞 ◎箱根塔ヶ島の離宮 ◎任ポ日本人の薔薇祭 ◎百華園と日比谷の秋色 ◎上野動物園の昨今…

◎御渡歐の伏見若宮妃殿下 ◎帯結び方二様…

◎馬車に召されたる三皇孫殿下 ◎新婚の大谷武子姫

◎御渡歐中の久邇宮妃殿下 ◎數名家の令孃

◎巴里にて御撮影の梨本宮同妃兩殿下 ◎馬上の女學生 ◎シヤトル婦人會 ◎米國女學生…

◎三閨秀才媛と其書 ◎月 ◎當世婦人風俗 ◎少女劍舞其他…

讀物

▼婦人の職業に對する誤解　法學博士 添田壽一 ▼特徴ある子供　岸邊福雄

▼婦人の結婚難　文學士 三輪田元道 ▼夫が議員候補に立ちし時…　星常子 ▼神戸絹子女史訪問　ゆき子 ▼臺所化學

▼鎌倉の女性　文學士 大町桂月 ▼烈婦清水數馬の妻　遠山稲子 ▼東京名物食物色々

▼最完全なる婦人を生みし時代　文學士 岡部精一 ▼我家 子供と下女　與謝野晶子 ▼料理 ▼育兒

▼子が看護婦を教育する方針　醫學博士 高木兼寛 ▼小説 瀑音　岡田八千代 ▼臺所拜見

▼婦人に職業は禁物　嘉悦孝子 ▼小説 十五夜　きく子 ▼秋の蟲… ▼其他滿載

婦人界の動靜一目瞭然趣味と實益ニら完備

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九

女（その二）

醫學博士柳瀨實次郎講述

小兒救急 母の手引

頁數 八十八
定價 九十錢
郵稅 六錢

●本書は大阪回生病院小兒科長●
●柳瀨博士多年の實驗に基き●
●小兒救急處置幷に育兒法を平●
●易に講述せる家庭の新福音也●

東京、大阪、京都 丸善



●博文館圖書陳列所……館内にあり

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵劵二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

にきび吹出そばかす

を絕對に全治し皮膚を艶麗ならしむる最新奇藥發見す

醫藥其効なき困難者は申込あれ詳細の療法書を送呈す

東京下谷區初音町日本女子美術學校前 長田

●本誌前號廣告に表神保町とあるは裏猿樂町の誤なり



女生徒補缺募集

東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

科目 唱歌 オルガン ピアノ バイオリン 其他樂器…敎授

女(その三)



女(との四)

百々瀬定子





藤竹さゑ子



中村鎌子

女(ちの一)

ムレー及ランマン製「フロリダ、ウオーター」はハンカチーフに撒らし又は化粧、沐浴等の使用に向つて最も高尚適當なる上品にして香氣優雅常に心身爽快を感ずるを以て洽く世界各國に高評を博せる香水なり

本品は芳香馥郁なる花卉及薫氣を蒸溜して採取せる純粋の原料を精選して釀造せるものなれば四時其香氣を變ずるの憂あることなし、是れ本品が殆ど過去一百年間貴紳淑女間に其聲名を認識せられ世界的流行の高等化粧品として賞讃愛用せられし所以にして決して偶然に非るなり



近時本品の成効を羨み粗惡品を僞造し廉價を以て之を市場に販賣せんとする奸商輩出し本社が古來貼用し來れるレッテル即ち蝶と小鳥とが花の飾環に息ひ中央の花壇上に噴水奔騰し右方には一青年の音樂を奏し左方には一少女の小鳥と遊べる等の繪畫を僞造し且つ英文にて印刷しある「フロリダ、ウオーター」、ムレー及ランマン、紐育市ランマン及びケンプ特製」等の文字の配置を巧みに模倣するに至れり

之に依つて本社は前記の弊害を防がんが爲め玆に圖を以て示せる如く「ランマン及ケンプ登錄商標」と記せる白色のレッテルを各瓶毎に貼付せり御購求の際は深く御注意あらんことを希望す



本社製造の「フロリダ、ウオーター」は日本帝國の各都市に於ける化粧品販賣店及び西洋小間物店等にて販賣す

女(ちの二)

▼來月の準備は今日にあり▲兒女を持つ母親の用意!!



◉來月は早々天長節の來るあり◉

◉來月は七五三御祝の例月なり◉

◉來月は郊外運動の好季節なり◉

近年男女子供洋裝の流行日を追つて盛なるは畢竟子供洋服が經濟的にして優美活潑に且つ兒童の發育に多大の効力あることと識者の唱道に依 家庭の實驗に依り動すべからざる事實になりたるが爲めたり故に此好機會に際し未だ其利點を應用せざる方は最も其道に經驗あり且又斯界の流行兒たる當店に御下命あれば御希に從ひ叮嚀親切に御調製申上べく御一報次第店員出張委しき御說明仕るべく候間續々御申越被下度願上候

○男女格安出來合ひ服及びベビースボックス（嬰兒洋裝）澤山陳列仕り有り候に付御來店御一覽下され度候

注意

東京市内御注文のお方は電話本局二九〇一番。端書なれば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下されば畵形と切れ地見本持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたす樣調進致します。

韓國には目下本店主人出張中に付御用の御方は京城浦尾旅館内中野屋洋服店まで御一報被下度候。



〔本店〕橫濱辨天通り（電話三四四番）

中野屋洋服店

〔東京出張所及地方掛〕東京市神田鍛冶町（電話本局二九〇一番）

女（ちの四）

濱松（遠州）造花講習會



前列右より（四）講師仲田華宮氏（五）講師安田三造氏


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
最上醬油之元祖
開業貳百六拾五年
上
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

自十月新學期開始

女子大學講義

十月中入會金免除

會員募集

入會好機

講義課目

會則無代進呈

記事

本講義は日本女子大學校が大學教育擴張の旨趣に基き本年四月通信教授を開始したるものにて爾來半星霜實績益々擧り本邦現下の社會要求に合致し愈盛況に進み全國の女子中遊學意の如くならざるは翕然として入會し好評頗嘖々たり、是一に講師たる博士學士其他専門大家が演壇に起ちて親しく學生に接すると同様熱心なると又編輯所たる**女子大學通信教育會**の誠實なる執務態度とに依るものにして會員の幸福之に如く莫しと云ふべし。今般新入會員の便宜を計り來十月より新學期を開講して第一號より發行すと、少き經費と短き時日とにて有益なる修學を爲さんとせば速に入會せらるべし(會費月五十錢講義月二回)

實踐論理(成瀨校長) 教育學(石田講師) 心理學(福來博士) 應用兒童研究(高島教授) 家庭物理(後藤教授) 生物學(渡瀨博士) 生理學(入澤博士) 衛生學(三宅博士) 經濟學(中隈學士) 法制(奥田博士) 應用社會學(浮田博士) 農藝(佐々木學士) 文學(藤井學士) 童話研究(芳賀博士) 英文學(松浦教授) 家事、料理、裁縫、和歌其他

電話又は郵便端書にて御申込あれば見本付詳細規則書一部即時進呈す、

新學期及び入會金免除

の好機を逸せず急速に申込みて有益無比の校外學生となられんことを、十一月より入會金五十錢は必ず申受く、

發行申込所

東京小石川久堅町

精美堂

電話番町九三三

振替口座一二八三八

女（りの三）

世に持囃されつゝある彼の有名なる

女子技藝研究會長梶山彬先生の女藝叢書は

裁縫新書

大和綴 仕上方積リ方裁方圖百三十餘個挿入
菊版頗美本 正價金五十錢 郵稅金八錢

世に裁縫書少からずされど實際に基けるもの尠少にして大抵は空論にのみ走りつゝあり。本書は此の缺陷を補ひたるのみならず實地上必要なる積り方裁方仕上げの難解なる所は一一圖解を以てしたれば如何なる初心なる人にても思ふが儘に縫ひ裁ちの道は會得せらるべし

編物新書

大和綴 圖案及雛形圖百二十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

袋物製作新書

大和綴 圖案及雛形圖百六十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

造花術新書

大和綴 雛形及說明圖二百餘個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

刺繡術新書

大和綴 圖案及雛形圖百五十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

花たば新書

大和綴 雛形及說明圖百二十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

摘み製作新書

大和綴 雛形及說明圖百四十個入
正價金五十錢 郵稅金八錢

全一冊

女子の技藝はいと高尚にして實益に富めるが故に今や非常に盛となり學校に家庭に行はれつゝあり、されば之が補佐たらんとして世に出でたる著書少からざれども大抵實際に適するもの無し、此書全國の高等女學校にて最良の參考書なりとせらるゝも實に其の實際を旨とし而かも學理と調和したるに因るなるべし、世の閨秀諸媛の好指南車也

女(りの四)

發行所 東京市京橋南槇町十八 廣文堂 振替貯金口座東京四六八四

天津幼稚園の開園式



天津在留の有志が同居留地に幼稚園を設立せし紀念として去る八月十六日同地大和公園音樂堂にて一同撮影せるもの、中央に立てるが片山夫人と濱田夫人にして姆母として熱心に盡力せらるゝ由。


シンガーミシン
秋冷正に親しむべきは
家庭のミシン
月賦販賣ト
裁縫書進呈
横濱市山下町六十一番館
シンガー會社
▲明細書御申越次第無代送呈す▼

女（その一）

◎産婦人科
◎小兒科

宅診 午前
往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需ニ應ズ

院長 女醫 鷲山彌生

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院 電話番町(二二五七)

洋画講義録

洋畫講義録は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆書伯
三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

(新學期開始)東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪画講習録

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆書伯
川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

●圖書目録

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時送呈仕候

東京本町 博文館

◉肥滿病の人に告ぐ

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとりにて御困りの方に害なくやせて美容となる奇藥あり郵券二錢送れば説明書進呈す

東京市小石川區第六天町十七 池田製藥部

意匠登録

玉おしろい



發賣本舗

東京市京橋銀座三丁目

松澤商店

賣捌は至る所の小間物店賣藥店に有り

女(その二)

第二回新學期開始

實用女學講義録

◉入會の最好機は來れり 拾月卅日迄は入會金免除の特典あり◉

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義録は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的なり
▲講義　言文一致書入り假名付きにて誰にも判る
▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌　會員には講義録の外機關雜誌を每月進呈

▲本會は中學講義録を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

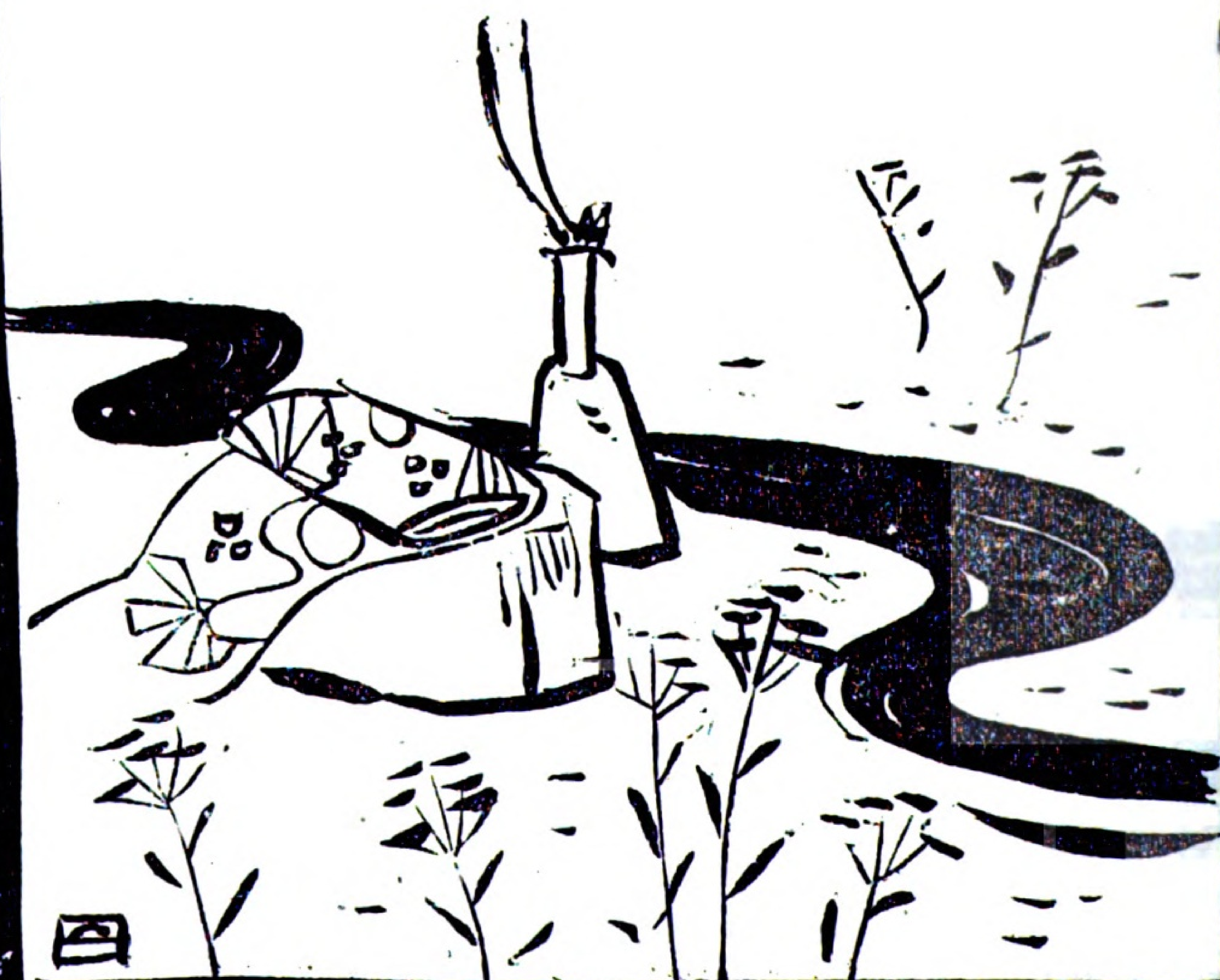
◉見本つき規則書 申込次第 無料進呈 講義録第一號は拾月一日發行◉

▲會員の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費　全學期の會費は都會半月の學費にて足る
▲入會　何時入會するも講義録は第一號より送る
▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

東京神田區駿河臺
大日本國民中學會女學部
振替東京四二〇〇番　電話本局（三三〇〇四番・三七〇〇七番）

女學世界

十月號



修養談

若き婦人の心の持ち方

棚橋絢子

△元は大家の令孃

或裏長屋の妻君が何處から紛れ込んだものか、琴の爪らしいものが二箇あるのを紙屑屋に賣らうとした處が、紙屑屋の爺さんは、之を見て熟々考へ、「どうも妻君相濟みません、今迄は貴女を普通の妻君とばかり思つて居ましたが、只今琴の爪をお賣りになる處を見ると、貴女は定めし大家のお孃樣で、奥樣と申さるゝお方でございませう、それを如何なる御不運か、今日の御有樣、誠に浮世は思ふに任せぬものですね、ほんとにお察し申します」と同情を込めて言つたので、妻君は鼻蠢し乘氣になり、「はい、私は今こそ裏長屋に住つて御覧の通り貧窮に暮して居ますが、元はお察しの通り大家に生れまして、琴の爪も二箇ばかりではなく、五箇とも揃つて居りましたので」とつい本音を出したと云ふ事があります。

これは一つの例話ですが、世間には能く問ふに落ちずして語るに落ち、あまりお里を隱す處から、却つて

お里を顯す人がございます。今日社會の上流に立つて居らるゝ奥様方の中にも、假親などして奥様となられた方があるやうに聞いて居りますが、何故かさう云ふ人に限つて多くはお里をお隱しになります。のみならず、殊更に以前の自分が卑しからぬ由を說き立てゝ却つて人に威張らうとなさる方さへあつて、さうしては何かの機會にひよい〳〵お里をお出しになります。

△お里の悪い人の手柄

私は斯う云ふ方を見たり聞いたりして何時も不思議に思ひます。初めが卑しくても、自分に其程の果報があり、才德があつて、今日の御身分とおなりになつたのですから、少しも恥づべき點はなさゝうなものではありませんか。初めから貴い人よりは却て貴いといつても善いのですから、何も隱し立てをするには及ばないと思ひます。それを殊更にお隱しになると却て醜い不體裁な事になります。それよりは、若し御自分の言行を、厭き足らず思召すなら、それ丈お磨き遊ばしたら善からうと思ひます。私の知つてゐる或華族の奥様などは誠に感心な方で、元は何とかであつたさうですが、それを少しもお隱しにならず、せつせと精神の修養なり婦人のたしなみなりをお勵みになつて居りますが、實に善いお心懸けだと思つて居ります。

これはお里ばかりではありません。學問のない人が學問のある眞似をし、德のない人が德のある眞似をし、才のない人が才のある風を致しますると、何時しか頓珍漢の事を仕出し、又は一の矢は射ても、二の矢が續かずして、思はぬ恥を曝すことが御座いますから、餘程考へねばなりません。又之と同時に成る丈豐富の學問をして、且つ家庭の實際に精通することが肝要でございます。

△斯る人は一生不幸に終る

次に社會の上流に立ち、又は立たなくとも、いと氣樂な幸福な身分の方であり乍ら、中には、私は決して幸福でないと仰る方がございますが、之れは私には甚だ了解し兼ねるのであります。思ふに、さう云ふ奥樣は、自分は別に幸福でない、當然である、何も今に限つた譯ではない、元々かうなければならぬのである、否この位なことでは不幸福な方であらうと思はるゝのでもございませう。又中には、自分の境遇に滿足しないで、あれでも足らぬ、これでも足らぬといふ處から申さるゝ方もございませう。併し如何なる人でも滿足と云ふ事も考へなければなりません。況して社會の中流以上に居つて大なる不足さへなければ、眞に幸福ではありませんか。假ひ貧乏して居つても、これといふ災難がなくしてその日その日を過して行くことが出來れば矢張幸福の内でございます。

△境遇に不平な人の行末

私は昔は却々難儀な身分で、雪の中を跣足で歩いたこともございましたが、暑中休暇どころではない、暑中にも寒中にも、夜の明けぬ前から夜の更けるまで、働かねばならぬといふ境遇でございましたが、只今では暑い最中に是非働かねばならぬ程のこともなく、外に是といふ太した不自由もないので、今の身分を至極幸福と存じて心中常に愉快で居ります。どうも人間は思ひやうで何うにでもなるもので、不足と思へば何も不足で不愉快で堪りますまいと存じます。

かう申しまするとお若い方は、否さう滿足に思つては進歩をしない、不滿不足と思つてゝこそ世の中の進歩發展は希はるゝのであると仰やるでせうけれども、私はさう思ひません。成程、學問なり品行なりを不足不足と思つて進歩さして行くことは、是非希望すべきことでございますけれども、各自の境遇を餘りに不平に思つては、進歩どころか、精神の不愉快の爲に、萬事

が手につかず、却つて身を持ち頽す本になります。それよりは足ることを知りて精神を愉快にしつゝ進歩なさつたら、どれ程善いか知れません。

△悟つて改心した人

婦人はどうしても感情に支配され易いから、精神の修養こそ大切でございます。虚榮を排し足ることを知るのも、矢張精神の修養が足りないと出來兼ねるのでございます。

昔支那に高攀龍といふ人がありました。この人は幼い時から學問に熱心であつたが、心は方寸に在りといふが、心は果して何處に在るか、又どういふものであるか、實見したいものであると思つて、種々苦心を致しました。處が、どうしてもそれが見つからぬ。或時は深山幽谷の地に分け入りつゝ、氣を靜かにして心を見やうと勉めましたが、どうしても見つからぬ。これではいかぬから獨學を廢めて善き師につかうと云ふ考を起して、二十五歳の時に、李元坤、顧涇陽といふ二人の學者に就き、日々講釋を聞きつゝ、一生懸命に見心を勉めましたが、矢張どうしても見つからぬ。又或時は身を山水明媚の地に置いて心地のよい時に心を見やうと勉めましたが、唯好い景色だなと思つた丈で、少しも得る處がなかつた。でもう見る事聞く事が不愉快で、怏々として樂まなかつたのですが、或時明道先生の語に、心は身體中一杯にあるといふ意味のことがあつたので、これは方寸に限らぬと思ひ直し、後繰返し繰返し程子の書物を見る内に、『百官の萬務、兵革、百萬の衆、水を呑み肘を曲げ、樂その中に在り、萬變は人にありて、その實一事なり』とあるので、濶然として大悟し、それからは、人に會うても花を見ても、眞に愉快になりました。その時の有様は、一綿脉々として、終に絶えずとありますが、これより大に悟つて、天地間は即ち心である、人は天地の如く、自然に無理のないものである、而も自然を助けるのが、人であると悟つたのでございます。

△最も完全な立身法

以上は高攀龍の話ですが、實に人生は天地と同じく變化のある中に規律あり、秩序のあるもので、未だ夏に霜が降つたり、冬暑さに苦しんだことはございません。即ち四時その季を違へず、晝夜その則を異にせぬのでありますから、朝顔の花が小い簡單な花だからといつて牡丹の花に似せやうとするのは無理でせう。畠の莢荳が早く實らないといつて、毎日ひねくつては却て實が入りません。やはり自然に打任して徐々に助長する外はないのです。そして如何に大きくなるべき茄子も肥料を遣らぬと十分に發達しません。同じ櫻の木でも肥料の有無で花の咲き方に大なる相違がございます。人も亦櫻の如く牡丹の如く、美しい花の咲くべき性は有つて居ても、學問をしたり、德を積んだりしなかつたら、到底成功といふ美花を着けろ事は出來ません。併し孟子にも言つてある通り、如何に苗の成長を欲するからと言つても、之を拔くやうにしてはいけません、無理をしては、却て枯らすことになつて仕舞ひます。人も亦自然に任して勉强といふ培養をして行つたならば、自然に目的が成就して、思ふやうになるけれども、それを矢鱈に急ぎますと、所謂虻蜂取らずになります。何、今の世は、正直に眞面目にするのは損である、何事も多少胡麻化しをせねば駄目だといつて、無理なことをしたならば、幸に一時の成功はあつても、終局は失敗に歸するのであります。天地は實に生々の德を有して居ります。自然は人を呪はずして、大に人の成功を欲して居ります。そして誰れも知るまいとは思つても、天知り地知り人が知つて居りますから、當人さへ辛抱强く德を積んだなら、必ず成功の美花が咲きます。

△私の境遇は變則である

婦人の務めも矢張婦人の自然性に法つたもので、家庭の事は、その天職であります。即ち針仕事なり、勝手元の事なり、良人の世話なり、子供の養育なり、舅

姑の世話なぞは、その重なるものでございます。如何に二十世紀になつたからといつて、それをしないで男子の真似ばかりして外出勝であるのは、例へば、梅の木が松の木を真似るやうなもので、只に自己の性を傷くるばかりでなく、社會に多くの害毒を流します。

今日女學校にでも出る若い婦人の中には、己れは女子教育家になる、學校教師になる、社會改良家になる銀行會社員になるといつてゐる方がありますが、已むを得ずして自然に其様せらるゝのは宜しいけれども、婦人の身として初めより目的を立つてするのは、何うも善いことゝは思はれません。私は、不幸にして女子教育家になつて居りますけれども、これは初めより希望してなつたのではなく。境遇上已むを得ずしてなつたのでございます。

私の最初の目的は、全く立派なる一家の主婦となりたいといふ一念のみでございました。それが、何時の間にか、こんな境遇になりましたので、私のは變則であります。ですから私は、家庭の事では誰方にも引を取らないやうと、思つて、裁縫は私の得意でありまして、永年一家に要するものは、外着も不斷着も、自分一人で縫張して人の厄介になつた事がありません。今日は境遇上さうは行きませぬが、矢張成るべく自分で致します。それも忙しい中に致しますから、普通の人より數倍早くする積りです。本年なども八月中に巳に冬着の準備まで濟ましたやうな次第でございます。昔夫の病氣の時などは、何も彼も一身に引受けて、隨分女の出來ぬ勞働まで致しました。女のする仕事なら、何事にあれ、人様に劣らぬ積でございます。

△人生の自然

然るに今頃の若い婦人達は、學問をすると、家庭の雜事は致したくない、裁縫、料理、掃除、洗濯は下女の仕事であるといふ風に、手先の勞働を嫌ふ様になる傾きがありますが、甚だしい心得違ではありますまいか。尤も數多い人の中には幾等裁縫がしたくとも身體の工合で出來ない方もございませう。其様云ふ人は別

として、普通立派な身體を有つてゐる人が、それを故意にしないで、却て方角違の志を抱かるゝのは、誠に遺憾な次第でございます。

婦人の務めは、當然家庭の事にありますから、何人も完全なる一家の主婦たらんことを目的となさるやうに希望致します。是れが即ち人生の自然であります。初めより女丈夫となりたい、女學者といはれたいといふことを目的として、學問をなさるのは堅く誡めます。

古より多くの聖賢の著された女訓の本がございますが、何れを見ても女は外で働らくものだとは記してありません。矢張、庖厨、裁縫、家政、育兒、僕婢を使ふなどのことを職務としてございます。是丈が十分に出來ましたら、男子の花々しい事業にも讓るまいと思ひます。昔し程子の母は、非常なる學者で、幼い時から文才に富んだ方でございましたが、程子に嫁せられてからは、全く文筆を拋ち、家事に專らになられたといふことです。私なども、家庭の事を疎にしてまで、讀書作文をしやうとは思ひません。

△主婦としての苦心

前に申しましたやうに、私は婦人のすべき事は、何事でも習ひまして、かの丸髷、島田の結ひ方まで覺え自らの髮、子供の髮は、自分で結つて居つたのでございます。これは近來流行の束髮を結ぶなどゝは、非常なる難易の差がございます。又育兒は、婦人の最も力を籠むべきものと思ひましたので、種々苦心を致しました。子供の善惡は、全く母の人と爲りに似るものでございますから、十分注意しなければなりません。

中流以上の婦人の中には、この大事な母の任務を、丸で人任せにして、自分は本を讀むとか、物見遊山に出るとか、又は夫婦相携へて散歩に出でたり、又は避暑避寒に行く方が多いのでございますが上流社會の子弟に、善くない人の出來るのは、恐らく是等の原因に基づくのでせう。

私方には、只今二人の下女を使つて居ります。舊い方は六年、新しい方は四年になります。その前のは八

年ぶりで出て行きました。何れも、どうかして好くして遣りたいと思つて居るせいか、永續きが致しまして、嬉しく思つて居ります。恁う云ふ下女を使ふにも、主婦たる者に下女の仕事が出來なかつたら、出來ることを寛にし、出來ないことを嚴にするといふ鹽梅に、その使ひ方が分らぬのみならず、その成績を見る明がない爲に、到底使ひ切れぬものです。

秋の流行色

帯に、洋傘に半襟に、半襟飾の流行を保ちし董の色去りて此秋より新に來るべき色は何と問へば藤と異なるべし。例年夏より秋に移る時は少しく色の濃くなるものなれど、今年の秋のみは全く反對にて薄く品好き色の流行すべき傾向なりとぞ、之に準じては掛帯地、半襟、肩掛其他の副色も著しく薄色となりて純白、クリーム、薄オリーヴ、肉色など總て藍を帯びざる物なる由、又模様物は地色の追々に薄くなると共に、従來の白上り淡彩等にては見榮えのせざるより、模様の染けかたは餘程濃艶なるものとなり、光琳風の花物を稍や堅き古代風に染めて、江戸褄と裾模様の間なる派手なる模様の置きかた流行すべしと云ふ、模様の高さは若き婦人は一尺五寸以上三十歳以上の婦人は一尺三四寸にて、紋は女物八分五厘男物は九分より一寸の間なり、友禪縮緬も地色は總て薄き物となりて、形は寫生を離れたる光琳の花模様多く、縞物にては柄の明るき縒りた召流行の模様なり、さればセル、フランネル等も縞柄は従來の洋服地風の物及び紋織セルは全く廢りて、地色の薄きお召風の縞柄のみとなり、殊にセルの地質は日本出來の細地の方評判よろしとなり。

三十年來實行しつゝある私の廢物利用法

陸軍中佐小野崎晉通氏夫人　小野崎たつ子

小野崎中佐夫人といへば一寸お若いやうに聞えますが、今年夫人は六十路あまりの老婦人で、良人は維新の際各所に轉戰された勇士であります今は後備に居られますが、夫人は甚若い時から非常なる艱難を嘗められた方で、世にも珍しい氣象の婦人で今は府下千駄ヶ谷原宿に廣大なる邸地をトし、老の身を靜かに送られてゐます。

△如何して財産を造りしか

役向の勤務は別として單に軍人の俸給や手當は、大抵定つたもので、幾干あせつて見たところが實業家などのやうにさう澤山な收入を得ることは出來ません。故に若し收入のある丈け遣ひ放題にして置いては決して資産など出來るものではございません。されば退職後に至つて、必ず難儀を致す事になつて、遂には軍人の體面をも破るやうなことが出來ぬとも限りません、さてどうか萬一の場合があつても決して軍人の妻として不面目な事のないやうにと努めました結果今では多少の財産を造りました次第でございます。

併し俸給などは、その人相應となつて居りますから、當然に遣つて仕舞へば、一杯一杯です、さりとて、食物を儉約すれば、健康を損じますし、交際をしなければ、世間への義務が濟みません。夫の身を詰めれば、愉快にお役が勤りません。この間で多少なりとも財産を作らうとするのは中々困難ですが、心掛て出來るのは唯廢物利用の方法丈けです。つまり廢物利用の精神を推し廣めて家計一切に應用するのでございます。廢物利用とは、申すまでもなく、物を無駄にせず、一つのものを二つにも三つにも使ふといふ方法でございます誰方でも、この法を實行して段々と其精神を萬事に應用したならば必ず相當の資産は出來る事と思ひます。

△折の板はどうなるか

宴會に參りますと、歸りには必らず折を與れます。訪問の人が見えると、時として菓子箱を戴きます。この折の板は、どういたしますかといへば、私は決して之を棄てません。箱になつて居るのは一つづゝ離して、之を新聞紙に包み、大切に仕舞つて置きます。ぢや、それが何になるかと思召すか御聞になつては甚だ迂遠な事のやうですが、この迂遠とおもふ事が即ち廢物利用の精神ですから、よくその馬鹿らしい方法の中から共通した智識を發見なさる事を望みます。即ちその折の板は只今の邸宅の一部の用を成して居ります。これは夫の留守中、私が工事を督して造つたものでございますが、御覽の通りこの家……お邸は中澁谷で、廣い邸地の中に、高燥な和洋折衷の二階屋です……茶の間二階の座敷などの障子の腰板に使ひました。御承知の通り、折の板位、柾の通つた杉はございません。障子の腰板などには、持つて來いでございますから、今も尙溜めて居ります。

△衣類はどうして着るか

私は始終綿服を着て居りまして、御覽の通り、この浴衣などは、明治二十七年に人から戴いた物を、毎年着てゐますが、今にこの通り破れては居りません。

と伺つて見れば成程普通の洗ひ晒しの浴衣ですが、手入れの宜いせいか、さう穢くはありませんが、殆ど切れかけて居りました、夫人は更に語りつゞけて

私の衣服の着方は、初めきれを買うて仕立てましたら、暫く着ます。汚れましたら裏返しします。それが汚れましたら、洗つて伸子張を致します。又それが汚れましたら洗つて今度は板張を致します。無論腰當なり肩當なりを致します。そして着て居る內に繼を解いて繼當を致します。裾まはしは、堅を使はずに横を使ひますと持が違ひます。又きれは天地に致しますと、非常に長く持ちますし、又横に縫つたのを堅に縫ひ直し、堅に縫つたのを横に縫ひ直しますと、長く持つものでございます。

△絲はどうして使ふか

絲は、解物をする時、叮嚀に仕舞ひ置き、二度使ひ三度使ひ、四度使ひ、使へるだけ使ひます。かうして新規の絲は成る丈使はぬやうにいたします。是等の事は、何でもないやうでございますが、年に積りますと數十錢の利益を生じます。私は繼絲としては、新しいのでも古いのでも、ゝ、ちやんと順序正しく、細長い板に捲付けて、絲口を小捻で一所に括り、新聞紙に包んで上の方を明け置き、必要の場合に絲口を解いて、一本づゝ引扱いて使ひます。かうすると、廢物がなくして至極便利でございます。

△煙草の用ゐ方はどうするか

卷煙草は、體裁丈よくても、隨分不經濟でありますから、一切使はぬことゝして居ります。そして今日では必要がないので餘り致しませんが、主人が軍隊に勤めて居りました頃は、煙草を卷く厚い紙を買ひ、口紙は古い葉書で拵へ、中の煙草は、田舍から粗切を買ひ置き、粗切の中に粉煙草を入れて、普通の卷煙草のやうに致し、役所に持たせて出しました。

△炭の粉はどうして使ふか

炭の粉は、一度篩に掛け、粗いのは庭園に於ける朝顏の根などに振り掛けて施肥とし、又細いのは、少々手數ですが竹の筒の中に詰め込み、ぽんと叩き落して干しあげて炭團となし、蜜柑箱の古いのに入れて置き入用の時に出して使ひます。但し炭粉の中に少許の灰と、左官の使ふ角又は海草で海羅の類で品のわるいのを煮て、味噌漉に掛けたものを混せ合せるのです。春夏秋冬何時でも出來ますが、夏は乾易いから、多くは夏の季節に拵へて置きます。この炭團は、店賣の物より小さく體裁も宜しうございますから、主として煙草盆の中に生け込みて、お客樣などに出しますと、非常に經濟になります。

△マッチの空箱

マッチの空箱は、その儘溜め込んで置きまして、その中に何か爲になるものを入れ、福田會の孤兒などに遣ることにいたして居ります。

△反古の處置方

反古は、何でも彼でも溜めて置いて決して紙屑屋に賣るといふことはありません。字の書いてある物は、主人が一々檢閲いたします。その中に他人が見て差支のある者は、萬一人の手に渡つた時には迷惑となりますから、といつて又燒棄も致しません。直ぐに引破つて紙捻にして何かの時に備へて置くか、又は幾枚も貼付けて敷紙に致し、何か物でも包む時などに使ひますからしますと中の文意は少しも判らず、而も廢物利用となります。又新聞紙は決して賣りません。出入の肴屋に呉れるのです。肴屋で干物など包む時とか、又は竹の皮で包んだ上を包む爲に用ゐるさうで、非常に喜びます。その他の反古は、差障りのないもの又用ゐ途のない物丈賣りまして、代金の半分は家のものとし、他の半分は、自分のものとして積み置き、他日何か慈善の資に供します。

△竹の皮はどうするか

何にせよすべて物を包んだ竹の皮は、決して其儘打捨つたり焚いたりは致しません。仕舞つて置いてそれぞれの用途に使ひます、或は賣つた商人に返して遣る事もあります。又私方の庭園には寒山竹があつて、小い竹の皮ではございますが、少しは出來ますが、先年出入の肴屋に相談しましたら、却々役に立つと申しますので、私は、その季節になると自ら竹藪の中に入り一枚も殘らず拾ひ取つて、肴屋に遣ります。こんなことを致しますと、手數がかゝりますが、先方が喜ぶので、成る丈いたして居ります。

△魚の串、ビールの空壜の處置方

魚の串は、無論溜めて置て肴屋に返します。ビールの空罎は、溜めて置いて、賣るのです。そして、その代金は、半分は家のもの、半分は召使のものと致してやります。それは召使が粗末にして、或は壊し或は打捨つて仕舞ひますと、それなりになつて、ほんの廢物に歸しますから一半を召使の冥利として與へるのでございます。

その他、主人と私とが心掛けて、何事も粗末にせず、一つの物品を二重にも三重にも用ゐることに致して居ります。私共の只今の財産は全く私共の艱難困苦より生じたものでございます。

△家計以外の出金は如何

只今の處では、召使は男一人で、永年勤續して居ります、丸で家族のやうにして居ります。人に物を施すことは、前に申す廢物の利用をして貯めた金をこれに充てるので、出來る丈のことはしたいと思つて居りますが、固より大したことは出來ません。困つた方より金錢の融通を頼まれる時には、決してお貸し申すといふことは致しません。額は少いのですが、熨斗をつけて進呈することにして居ります。その他慈善團體などにも、及ばずながら出來る丈のことは致して居るのでございます。

△庭園を荒さぬ法

庭園は手さへ入れゝば、荒れる氣遣はございませんが、何時の間にか、近所の子供が來て、草木を折つたり、根を踏みにじつたりすることがございます。之を叱りつけました處で、到底聞かないことは知れて居りますから、私は、近所の子供に向つて、お前方は好い子だよ、庭園に入らないと、お褒美に葡萄を上げる、桃を上げる、柿を上げる、お菓子を上げると申します。そして季節々々に庭園に生ずる果物を少しはかりづゝ遣つたり、さもなくは、菓子を與へたりしますと、決して入て參りません。御庭園の果物は、お客があると菓子の代りに出しますやうにして居ります、東京邊では中々珍らしがられます。



女の様な京都の町

宮きよ子

一千年の歴史を持つて居る京都、平安朝以來の物語を繙いた事のある人の耳にはいかに此京の一語が美々しく懐しく響く事でせう。

一、京都と名所舊跡

流石此處は舊都と稱へられる丈あつて名所舊跡は到る處に御座います。先七條の停車場へ着いたと致しませう、同停車場は市の南端、此處にとつては寧ろ場末にあるので構内を出ると東西に鈴蟲籠の樣な餘り美はしからぬ電車が往來して居るのが目につきます。前には賣物屋やら茶店人力車が遽しく走る樣など別に變つた光景ではありませぬが、ふと東を向くと目に入る物は……山、東山で御座います。それが澄み切つた空にほんのり紫がゝつて横はる樣は如何にも優くて是丈で京都へ來たと云ふ感じは充分御座います。名所を見物するとなれば勢東へ行かねばなりますまい一日一圓餘りで車を傭ふ事も出來ますが、さうする迄もなく總體京都の名所は殆ど東と北とに續いて居るので地圖でも持ちそゞろ歩く方が反て興味があります。

先づ七條通を東に石計りの鴨川を渡りませう、もうそろ〳〵山にかゝるので三十三間堂大佛なぞは名所の緒口、大佛と聞いて奈良の大佛を聯想したら飛んだ滑稽、其餘りに小さいのに驚かぬ用心が肝要です、豊國廟、帝室博物館は又此處にあるのですがズッと山の中腹を仰ぐと淸水寺が眼に見えます、こゝへ登れば京都は一目なので幾千萬の甍はキラ〳〵と、到る處に綠の木を雜へて、方一里半に擴り、其中に東西兩本願

寺の二棟は巨人の樣に秀でゝ居るのでございます。更に遠く眼を放つと葛野郡の野を限るコバルト色の西山低く南北に延びて巧に山城の國となり淀川は其西南の隅を白く流れて行きます、伏見から出る大阪通の汽車は此處を通るので御座いませう。

清水に續いて見る所は丸山公園、夜櫻で有名なので其頃は却々の美觀で御座います、亦釣鐘と淨土宗の總本山とで有名な智恩院は直ぐ其北側、本堂の奥床しさ境内の寂さは何とも申されぬ程、鶯張の床板、甚五郎のから傘は誰しも一番に見る物ですが只今は本堂修繕中で骨許の傘は大切に硝子の箱に藏つて下におろして御座います。それに鶯張と申せば風流ながら釘で打附けて無い床板の軋る音を云ふので智恩院に非ずとも少しお安い借家をすれば緣の板は大抵鶯張ですものを。

それから圓山を降り疏水の水力電氣を右に眺めて森の中を行くと數年前建つた南禪寺のお堂、見上る許の天井には松年の丸龍、總體此邊には良い建物が集つて居るので大極殿、黒谷、永觀堂、少し離れて銀閣寺、加茂神社等迚も一々擧げ切れませぬ。

今度はズット西に廻つて一休禪師に因緣のある紫野の大德寺。それから北野の天滿宮等も見逃してはならぬ所でせう此處は毎月廿五日には大變な人出で緣日の樣に樣々の店が出ます、亦金閣寺は其少し北絹笠山の下にあるので美しい池の鹽梅、石の配置など日本式庭園として上乘なる物で御座んせう、今は金閣の金箔は皆はげて終つて只古い木目のみが現れて居るのですが見る者の眼には反て其方が感じ深う映ります。かの南天の床柱萩の何とかは名高いのですが、腕よりも遥に太い其柱が南天だとの說明を聞くと、何か金閣寺其物が科學と交涉を斷つたかの樣で我知らず微笑まるゝので御座います。位置の都合で云ひ殘しましたが京都へ來る人の最も床しく感ずるのは勿論御所で御座います、内裏の外廓の方は現今松原になつて通り拔ける事が出來るのですが紫宸殿や清凉殿のある内廓の方は普通の人は入る事が許されませぬ。

最後に當地へ遊覽遊ざるゝ方に御注意致します、當地の車夫には時々惡いのがあつて賃金の割増等を請求を致します、亦土地不馴の方が案内者をお傭なさると蒼蠅い程買物を勸めます、是は何も此地に限る事ではありませぬが、皆商店と結托して手數料をとるので御注意なさらないと酷い目に遇ひます。

二、京都氣質



京都と申せば人の氣風も悠長だ様に想像するのですが現今では他國の人が多く入込むので純粹の京都氣質は只中京（京都の中心大なる商家の多き所）に殘る計りとは申せ矢張市全體として一貫した氣風のあるのは不思議でございます。

よく申せば上品な惡く云へば引込主義とも申せませうか、東京が性急な江戸子氣質ならば大阪は算盤首引の商人氣質、京

都は恐らく隱居氣質でせう、一例を擧ぐれば此處の電車、是は日本最初に出來たのですが少しも改良しないから昔の儘の面影で、一寸走ればガタン／＼と頭の底迄響き、其上單線で（近頃漸く一小部分丈複線にしましたが）二丁程行つては待ち合すと云ふ有樣、賃金が高くて、汚くて流石美術市の骨董電車と人を驚かすのでした。それでも肝腎の市民は何とも云はず「電車は樂ドすナ……」と幾ら停電しても怒りもせず、買つた切符が無駄にならぬ樣何時迄でも待つて居ると云ふ調子。

東京の人は一寸した事で警察を燒いたり、一錢の電車賃値上で燒打さわぎをやるではございませんか、こんな事は上方では夢にも見られません、上方の人は始終冷靜に利害を考へて居ります、殊に京都の人は「電車が上れば歩けば良い事、燒打なんてジヤマ臭イ物は止めトコ」と云ふ風で萬事消極的の節儉主義でございます。

亦是は誰でもと云ふ譯ではありませぬが此處の人は概して決斷力に乏しい樣です、（よく申せば萬事熟慮してするからとも云へませうが）早い話が買物一つしてもあれを見たり是を見たり一體買ふ積か買はぬ積かゝ分らずよし欲しい品があつても高いと根氣よく根切ります、亦賣る方も賣る方で辛抱強く少し宛敗けて行くので御座います。

よく大阪の食倒れ京の着倒れと申しますが京都（殊に中京邊）の衣類を飾る事は甚しく少し前迄は學校に試驗でもあると縮緬の着物を着せてお紅をさして遣る親があつた位、男の子に絹布を纏しめたりする處は殆ど此地丈でせう、而し「着倒れ」の裏面には食物につましい事が伴ふので町家では一日十五日の外はお精進計り、就中粗食で有名なのは西陣だと申します、茲に嘘の樣な誠の話が御座います、妾の知人が國から來て呉服屋へ奉公を致しました處が是では迚も體が續かぬと思つて居る矢先、或朔日のデンナーには何がついたとお思召す？　乾からびて紙の樣な生節、其人が海濱の人なのでとう／＼怒つて了つて庭から石を持つて來

て此生節の上にのつけました、それが見附かりて「何故こんな事をする？」「實は風で散るかと思ひまして……」何と良い當てこすりではありませぬか。其人は其日から解雇されたと申します。

　では御座いますがこんな氣風の内には亦何とも云へぬ人間の穩な親切な處があつて、道一つ聞いても仕事をして居る人が態々外に出て例の長々しい調子を以て敎へて與れます位。



三、風俗

此處の風俗で目に立つ物を二三。わたしが當地へ參りまして氣の付いたのは家の建て方、當地は槪して長屋が多い樣で、所謂しもたや（商賣をせぬ家）は大抵細かい格子が嵌つて居ります、それに最も變つて居るのは入口の工合で可成の家でも半間の口にめくら格子の猿戸がつけてあつて男ならずとも首を縮め體を斜にして入らねばならぬ窮屈さ、亦間どりも三間突通しの二階建が多く窓がなく陰氣でございます。

　亦今一つ京都へ來た人の注意を惹くものは、かの大原女でございませう、是は多く市の北八瀨、大原から參るので黑い着物に友禪の太い襷をかけ頑丈なお尻

を三巾の前掛でキリツとしめ、頭に草花や晩茶に柿子等のせて市中へ賣りに來るので、揃も揃つて血色の良い圓顔の女が多く、何となく氣持の良い亦美くしいものでございます。

言葉の事を少し申上ませう、此處の言葉の抑揚の無い切れ目の分らぬのには一寸まごつきますので、買物に行つても東京では「入來つしやい!!」と來る處を此處では「おいでやす」と至極悠長なもの、紫様の御紹介になつた言葉の外、ありませぬをオヘン。ほんとをほんま。たまらぬをカナン。七輪をカンテキ、雑巾をゾツキン、等數ふればホンマに限がありませぬ。殊に女の言葉は文句の構成からして東京と異り東京では大變語尾の省略がありますが京都では全くない、一例を云ふと『よくつて?』「入來しつて?」を京都では必ず「ヨロシオスカ」「オイデヤシタカ」と常に説明語の全部を申します。誰しもよく京都の女は表情が無いと申しますがそれはこんな處に起因して居るのでは御座いますまいか、即ち東京の女の「よくつて」の省略せられた部分は是非表情によつて現はさねばならんので「て」に「ですか」の意味を包めるのには必ず首を傾げるとかせねばなりませぬ、之に較べて京都の女は「どすか」と云つて終ふ處表情の必要がないものではありますまいか、こんな事を調べたなら必ず面白い事だらうと存じます。

四、祭禮

京都の祭禮と申せば誰しも加茂祭と祇園祭とを聯想致します。中にも加茂祭は平安朝時代から今日迄(應仁の亂より元祿七年迄中絶)續いて居るので毎年五月十五日(昔は四月中申日なりし由)葵をかざした裝束の人を葉櫻の蔭に拜するのは何となく奥床しく感じられます。

人も皆かづらかざして千早振
神のみあれにあふひなりけり　(貫之)

昔は大そう盛大であつたと見え落窪(二卷)源氏(葵)にも車爭の事が出て居りますが今はさ程の混雜はなく

とも年一度の此祭典を見んとて集る人は實に大した物で御座います。

次に祇園祭ですがこれは主に七月十七日に行はれるので其日には薙刀鉾、鶏鉾や澤山の山車、亦二十四日には山車計り何れも祇園囃につれて曳くのでございます。此等は皆各町内が一ッ宛持つて居るので裝飾の美を競ふの所其立派さは亦一入、扨それを曳くのは揃の衣に白足袋の男ですが何しろ、七月中旬と云へば土用の眞最中故見る者も曳く者も汗、それに屋形が支へる爲め電線を切る程の大さの物が只さへ狭い四條通を行くので其混雜は大變です。亦當日鉾の前に立つ稚兒がございますが、これは十歳位の可成容貌美しい男子を町内から選び、親達にすれば之を非常な名譽にして衣裳其他に莫大のお金を擲つのだと申します。



五、納涼と大文字

夏の夕暮、四條大橋の近くへ行けば身動も出來ぬ程の人雜です、此等は大抵四條磧へ涼みに行くので唯今では磧到る處に床を掛け無數の燈火が點つて居て恰度不夜城の樣、曲馬やメリーゴーラウンド迄ある位です。尤も數年前迄は人出も少なく橋の下に床几を並べ、ほの暗い雪洞を吊し微に橋上の物音をきゝつゝ足を水にひたせた風流もあつたのですが、今は全く變つて終ひました、もう一ッ夏の娯樂は八月十六日東山の大文字でせう、と申すのは十六

日の當日、日の暮れるを待ちて篝を大の字形に一丁程にも燃やすので其美さは山にイルミネーションが點いた樣です。尙當日は北山、西山に「妙法」とか鉾、鳥居などが點りますが何れも大文字の壯觀には遠く及びませぬ。

六、永住地としての京都

さて永住地としての京都は問題ですが、兎に角住みにくい土地でない事はお請合です。それは市として設備の整つて居ぬ點、例へば水道がないとか下水道が完備せぬとか町巾が狹くてコチ〳〵して居るとか、亦は冬、風が無い代りに空氣が乾燥して居て底冷えがするとか、數ふれば幾らも缺點はありますが第一大都市の割には物價が安く、其上人氣の穩な事は結構です。殊に當地の男女學生の氣風は四圍の感化を受ける物が一般に宜敷く、質素で控目な處は東京や大阪の學生を見馴れた者には嬉しうございます。

女學校では規模の完備を以て模範とせられる第一高等女學校、同第二を初め、同志社女學校精華女學校など皆相應の生徒を收容して居ります。玆に申上たいのは、當地學生の氣風が此通り故惡友に誘はれて我知らず墮落する等の患 殆どなく、其證據にわたし當地へ參りましてより警察沙汰や新聞種になつた女學生は未だ知りませぬ位、それに他人との交際上衣服の見えを張る必要もなく、地方より遊學なさる方は東京よりも大阪よりも當地が適當とおもひます。

物價の重なる食料品を擧げると、牛肉ロース百目四十錢、鷄肉四十五錢、酒上等六十五錢位、唯魚類は地勢上餘り新鮮な物は頂けず價も少し高い樣に存じます而しお米は東京よりは良い樣に思はれます、それから野菜も新鮮なのがあります、殊に聖護院蕪は當地名物で一抱程のが三四錢で他國の蕪とは較にならぬほどお美味うございます、亦皆樣の御好物の唐茄子は、此處では俊寛の陰謀で有名な鹿子ケ谷で出來る瓢形のが名物で頬が落ちる位です。

米國婦人の家政振り

金錢の出納と夫婦の關係

北村眹子

△打つて變つた境遇に驚く

誰でも結婚して新に家を持ますと、今迄の氣樂な娘時代や、謂はゞ春の花野に胡蝶の群を狩り暮すと云ふやうな太平な學生時代とは變つて、種々と大人びた考が起つて來るものです。これは曾て覺えの無かつた一種の責任が纖弱い肩に、にわかにかぶさつて來る爲でございませう、例へば金錢上の事にしても、今迄は父母の懷にすがつてさへ居れば何でも欲しい物は買つて貰はれ、少し位の無理はあつても、可愛い娘と云ふ處から、大抵の事は肯かれて、自分の意志を通す事が出來るものです。よし又娘の時代に境遇上多少の困難がありましても、それは多寡のしれたもので、希望と光明は絶えず若き血を漲ぎらせて居ります。處が一旦人の妻となつて見ますと、自分の前には新しい家族がある。少くとも夫と云ふものがある。關係は前の時代よりもはるかに複雜になつて參ります。鍛へた腕を試めされるのはこの時からで御座います。

諺に人はこの世で三度顏を見られる時があると言ひます。生れた時、結婚する時、死んだ時。男は兎も角、女と生れて婚禮の時ほど物珍らしく顏を見られる時はありますまい。しかし見られるのは顏ばかしでは無い。人柄技倆を見られるのも亦この時が一番でせう。袴と靴をぬぎ捨てゝ丸髷に衣紋繕らう花嫁の苦勞も中々一通ではありません。注意すべき事、愼むべき事はいろ〱で中々數へ切れるものではございませぬが、中にも金錢上の關係と申すものは又一段と骨の折れるものでございます。夫妻の間を圓滿に治めて平和な家庭を造らうとすれば、是非共此の關係がよくならなければなりません。新婚の夢漸くさめて、眞面目に一家の主宰者となります時、誰か、此の問題に、頭を惱まさない人がありませう。此の問題を都合よく解決

すると云ふ事は慥に主婦としての重要な任務でございます。

△妻として一番不見識な事

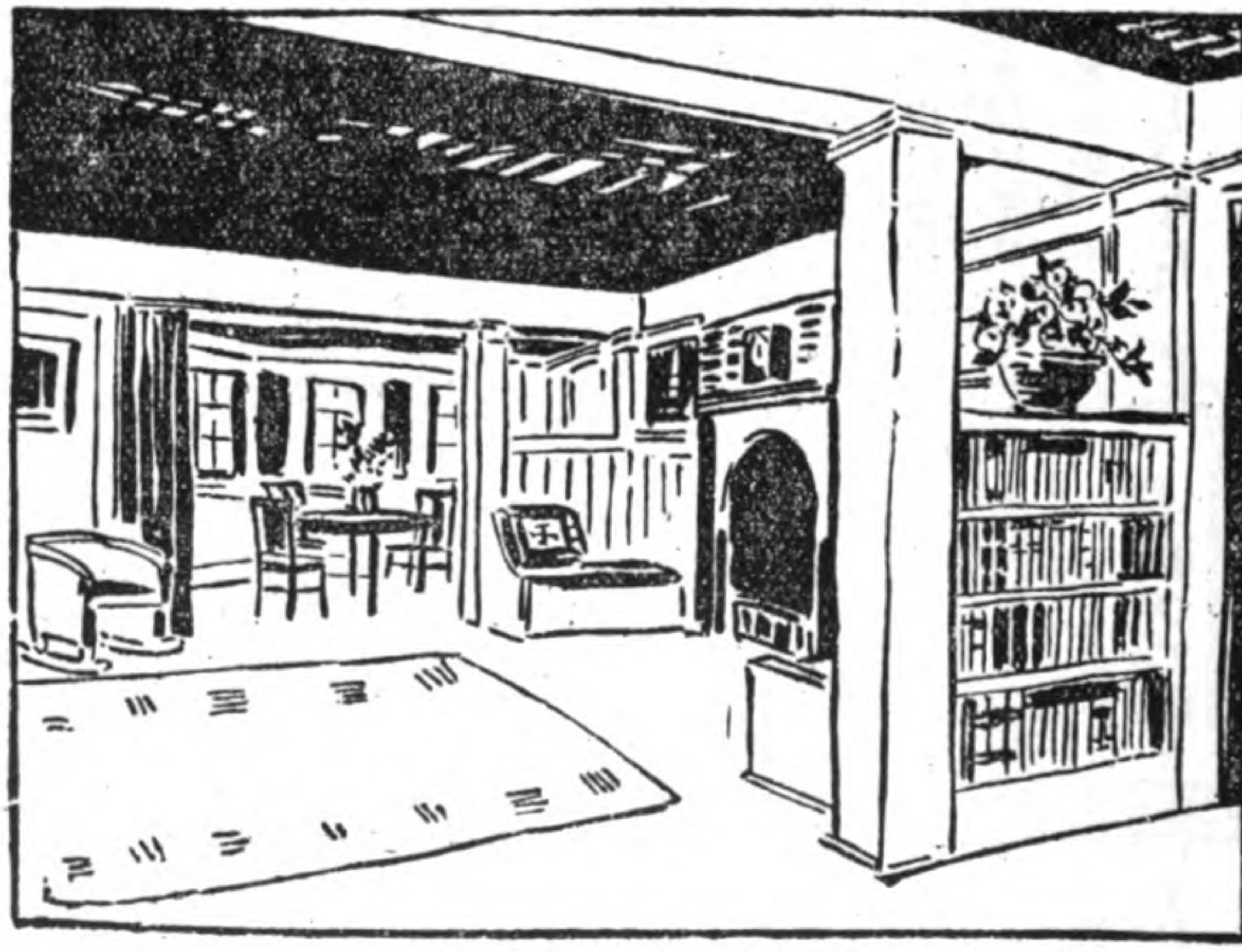
私が結婚致しましてから、先づ第一に心に浮びましたのは、これから如何にして夫と金錢上の關係をつけて行かうかと云ふ事でした。それで種々とこれに對する考をこしらへて、あゝもしよう、かうもしよう、と密に心に定めて居りました。其頃私の知人が、もうその人は奥さんですが、私に向つて何かと世帯持になつてから生じて來る面倒な事柄や、面白くない事件などを聞き糺されました。その人達の申しますには、何が嫌だと云つても夫からちよい〳〵とお錢を貰ふて遣つてゐる程心苦しい事は無いと云ふ事でした。無論私はこの人達の仰しやる事を輕蔑して聞いて居るのでございませんが、然し心の中では自分の家庭に限つて決してそんな事は無いと硬く信じて居りました。私は結婚してもう四五年になりますが、勿論家事向の細かい事例へば子供の育て方とか又は慈善的の寄附金などに就きましては夫と意見の違つた事もありましたが、然しまだ一度もお錢の事で兎や角と言ひ爭つた事はございません。凡そ家の中で此の事で云ひ爭ふ程見苦しい下品な事はございません。時には是れが原因となつて圓滿なるべき家庭を打ち壞してしまふことがないともいへませんが、私の家にはそれが無いので誠に仕合せで御座います。

△夫婦相談の上で決定

結婚早々私共夫婦は種々と家計上の事を相談してお互に滿足を得るやうに致しました。私の夫は毎月定まつた報酬を得ますので、私共の生計はこれで立てゝ參るのでございますが、一番私共が注意致したのは、生計上どうか不足を拵らへないやうにと云ふ事でした。そこで先づ收入を計算して種々の入費に割り宛て、第一に家賃の分を取り去りました。而して其の殘高から生計費として一定の額を私の方に貰ふ事に致しました

私共では何時も月末に拂ひを致しますので、其間には別に現金を出すことはございません。それで私の方で拂ひますのは、日常の生活費で一切の費用を出して仕舞つた跡は机の抽斗に入れて置いて、何時でも入用の時に勝手に使用することに致しました。勿論双方から別に其の費ひ途を穿議するなどの事は致しません。又私の遣り方で生計費の方から餘りでも出ますと、これは全く私の自由で装飾品を買ひませうと何うしませうと、凡て勝手でございます。そして慈善會に出すとか、又人に贈物を致すとか云ふのは皆此の中から出す事に致して居ります。

米國風の室内装置



都合よき間取（入口から見たところ）

△私が全く自由に遣ふ分

暫らく致しますと、私は筆を採つて少しづゝ収入を得る様になりましたが、これは夫も大變に喜んで呉れました。そして此の収入は一切私の所有として何でも自由に遣ふ方が善からうと申すので、娯樂の爲なり、装飾品の爲なり、又將來の爲に貯蓄するなり、凡て私の勝手に致しました。然し私が別に収入を得ますからと申て、決してこれは夫の分、これは私の分と區別を立てるわけでは御座いませ

ん。従つて此の爲に私共夫婦の間に面白くない感情の起るなど〻申す事はございませんでした。

△大抵は奥樣に落度がある

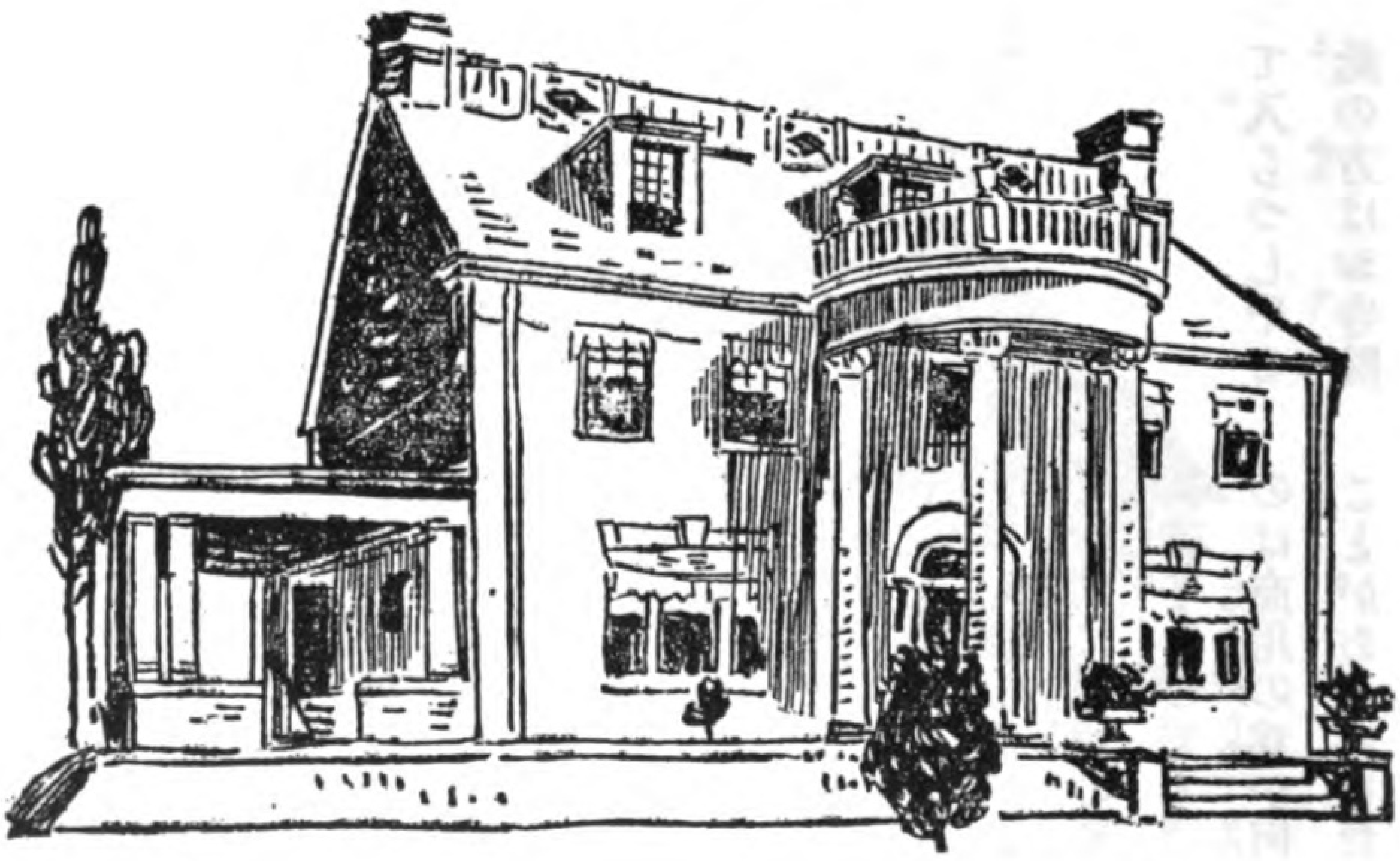
人樣に自分の經驗をお話しますと、大抵の方はさう云ふ風に甘く行くのは珍らしいと云はれるのです。それで他家の奥さん達は如何してゐらつしやるかと思つて少しは人樣の御經驗も伺つて見ました。世間には其家の主人が奥さんに隱立をせられる家庭がよくありますが、何故そんなことが起るだらうと打つけに尋ねて見ますと、幾分の取除はありませうけれども、大抵落度は奥さんの方にあるやうです。或る奥さんのお話に、「私は未だ宅にお錢の請求をした事はございません。結婚しました當時何心なく戸棚を開けて見ますとお錢の包紙が入つて居るぢやありませんか。不思議に思ふて如何したのですと宅にきゝますと、なに、それで生計を立てゝ行つて貰ふんだと申すのです。それから後はもう毎月其處にお錢が入つて居ります。來客其他でいつもより費用が嵩みますと、いつの間にか戸棚の中のお錢も殖えて居ると云ふやうな調子でした。家賃や瓦斯代や薪炭費等は一切宅が拂つてくれますし、道具とか家の修繕費とかも皆夫が支拂ふ樣になつて居ります。其外臨時の買物でも致します時には、私はいつもその書出を宅に渡して居ります。私の方で出しますのは先づ頂きますものと家族のちよい〳〵した入費位のもので御座います。仕立屋や呉服屋などの拂も皆宅の方で致すことになつて居ります。別に嫌な顔もせず機嫌よく拂つて呉れます。勿論私は宅の收入の高は承知致して居りますから、支出の超過しないやうにといつも注意致して居ります」と云ふのがありましたまづよく行つてゐる方かも知れませんが、と言つて理想的とは申されません。何處か奥樣に信用を置かれないところがあるので御座いませう。ならば財政を一手に握つて而も夫に十分安心させたいものではありませんか。

△一定の生計費を貰ふ人

今一人の方のお話はこんな風でした。「私の夫は毎日幾何と定まつたお錢を私に渡す事にして居りますが、これは結婚以來未だにずつと續けて居ります。時にお客がありましたり、又は何か臨時の費用が入りますと、私はそれを夫に話して入用丈のものを貰ふことにして居ります。すると夫の方では別によく糺しもしないで直ぐ出して吳れます。生計費の外に私の被服料や身の廻りの費用としては別に頂くやうにして居ります。時に夫が文學上の仕事でも致しまして臨時の收入がございますと、屹度その十分の一を私に吳れます。このお錢丈は全く私の自由で、夫も決してその使途など尋ねる事はございません」と仰しやる方もあります。

今一人やはり每月いくらと限つたお錢

米國風の建築



住宅向の體裁よき家屋

を御主人から貰ひなさる方があります。その方のお話に「私は主人から定まつたものを貰つて居りますが、自身でも少し持つて居りますので、相談の上で主人から貰ひました分と自分のとは、私の勝手に用ゐるやうに致して居ります。時に臨時の費用がありまして私で拂ひきれません時は、無論主人に賴みますと主人が持ち合せのあります時にはわけなく出して吳れますし、又都合の惡るい時には、月末迄待つて吳れ、今暫時するとよくなるからなどゝ打ち開けて申すのですと云ふ事でした。何れにしても定まつた金を貰ふのですから、一家の財政を全く託されては居られないのです。

△夫に金の無心をしない人

結婚してからもう廿五年にもなる或る奥さんにお尋ねし

ますと、その方はかう申されました。私は今日まで未だ夫にお錢の無心をした覺えはございません。私はいつでも必要な丈の費用を書きつけてそれを夫に見せるのですが、夫は碌々それを見もしないで出して下さいます。帳簿の方は一切私が致して居りますので、私の方がよく存じて居る位でございますが、金は成るべく遣はない樣にして居ります、實を申さば此のやうな事は夫の方でして貰つた方が宜しいのですけれ共、やはり私にさせる方が都合が好いなどゝ申して一切私の仕事になつて居ります」といかにも得意氣に申されましたが、さて何んなもので御座いませうか。未だ外にも澤山の方から伺ひましたが何れも似たり寄つたりでしたが、たゞ一つ極端なのが御座いました。

△驚く程信用のない奥樣

私の知人で或る非常な金滿家に嫁つて入らつしやる方があります。處がをかしい事には、此の方はお寺院や慈善會などへ寄附をなさるのに、一度も現金でなすつた事がありません。いつも帳面で呉服屋や八百屋や食物の商店などから品物をとつてはそれを寄附なさるのです。その方の御主人は誠に寛大な方で、決して家の細かい事には干渉なさる樣な人ではありません。そして奥さんがどれ程澤山の書出を持つて行かれても小言一つ云はれず機嫌よく支拂をなさるのです。處が奇態な事には、現金となるとすつかり樣子が違つて、中中容易には出されないのです。奥さんが時に現金をと仰しやると、「何に金が要るんだ」と一々その使途を問ひたゞした上でなければあげられないと言つた風で、一向奥樣を信用なさらないので、一錢でも奥さんの自由にはならないのです。一寸でも奥さんが無心なさると、「何故現金が要るんだ、お前の爲に馬車も備へてある、別に車賃の要るわけでもあるまい」とまあかう云ふ調子なのです。處が一日妙な事が起りましたと申すのは商用の爲か何かで御主人が二週間ほど旅行なさることがありました。そこで奥さんによく注意して二十圓を渡し、留守中萬一の備にせよ、決して無駄遣はな

らぬと呉々も念を押して出て行かれたのです。すると奧さんが現金を持たれたのは殆どはじめてゝ珍らしくもあつたのでせう、丁度御主人が町端あたりへ行かれたと思ふ頃、早速五十錢程でお菓子を買はれたのです。處が運の惡るい時には惡るいもので大變な事が起りました。丁度先方から電報が來て御主人の旅行は中止となり、途中から引つ返して其夕方歸つて來られました。さあ困つたのは奧さんです。いろ〳〵氣を揉んで見ても仕方がない五十錢はどうしても生れて來ないのです。それに御主人は早速奧さんを呼ばれて、先程の二十圓を返せと仰しやるのです。可愛想に奧さんは泣く〳〵お菓子の事を白狀なさると「それ見ろ、云はない事か、一體お前は金の信用の出來ん女だ、これもうこの通だ」、と甚い權幕で叱られたと云ふことです。隨分極端で御座いませう。御主人も御主人ですが、矢張り奧樣にも惡るい處があるからでせう。



田園生活向の住宅

△男に對して思遣がない

別に男の方の肩を持つわけでもありませんが一體にお錢の事から面白くない事が起るのは、どちらかと申せば罪は女の方にあるやうです。と申して女の方では別に惡氣でするのでも何でもありますまいが、つまり氣が注かない思遣が足りない爲でございませう。又教育の程度の工合からもお錢に對する考は間々違ひます。誰しも人の妻となつたからは何うにかして能く夫を助けたい、片腕ともなつて行きたいと思つて居りませう。また實際さう力めて居られるでせう。それに何ういふものかお金の事となるとをかしな考を抱いてどうも夫に對する態度が宜しくないと云ふのは遺憾な話で御座います。元來男子と申すものは家事

肉の細かい處などはよくわからず、又女の心は何のやうなもので、夫に對しては何んな要求を持つて居るかなどゝ云ふ事はよく知らないものです。從つて妻が夫にお錢を請求するのは心苦しいものであるとかないとか云ふ様な事も一向お察がありません。誠に無頓着なものですが、一面から見れば又そこが男子の長所でもありませう。それを覺らずに夫が能く氣を注けて一定のお錢を與れないからと云つて、忽ち膨れるなどは、ちと妻の方が同情が足りないで御座いませう。打ち開けて一寸話して御覧なさい。「そんな事とはちつとも知らなかつた、早く云へばいゝのに」と大概の夫は申すにきまつて居ります。

△執念深く默つて居る人

實際世間には夫がお錢を渡さないと言つて内心大に不平を抱いて居る奥さんがありますが、こんな人を妻に持つた男子こそ誠に氣の毒なものです。理窟から申せば夫の方から氣をつけて妻に渡すべきでもありませうが、さうかと言つて妻の方でも性惡るく默つて居るにも當らないでせう。夫がわざと渡さないのか、又氣がつかないで居るのか、一寸開けばわかるものを妻の方で執念深く默つて居るから、何時の間にか妙な感情が湧いて來るのです。謂はゞ妻が好んで夫の機嫌を害なひ家庭の和樂を缺いて行くやうなものです。若し夫が家計の爲にお錢を渡さない様な事があつたら、一人でむしやくしやと氣を揉まずに、靜に其事を夫に話したらいゝでせう。夫婦の間が奥歯に物の挾まつた様なをかしな工合になりますのは、結局思ふ事を十分打ち明けないからの事です。人によると不見識だとか馬鹿々々しいとか言つて、夫に打ち明けるのを嫌がる人がありますが、然し眞に夫を思ひ一家の圓滿を期する人ならば、必ずこれ位の事は忍ばねばなりません。さなくば何處に妻として補助者としての價値がありませう。

△夫が本當に愛する妻

昔の女に比べますと、今の人は確に金錢の仕末が上手になりました。お錢に限らず何事でも處理して行く力は餘程養はれて參つたやうです。これは近頃婦人も大分社會事業などに携さはる結果でございませう。

最早今日の婦人で經濟の道を知らない爲に夫に失敗を招かせる樣な愚な人はたんとありません。時には眞價以上に女子の技倆を稱讃せられるので、却つてこつちが恥かしい事もあります。そして此頃では妻は夫にお錢を請求すべきもの、夫はそれに應ずべきものとちやんと認められて來て居るのですから、此の煩雜な忙がしい社會へ出て朝から晩迄汗水たらして生存競爭に疲れ果てゝ歸る其の夫に向つて、妻の心を察しない、氣を注けて金の不自由を問はないなどゝ言つて一人で不平を鳴らすなどはそも〳〵間違つた考で御座います。夫は却つて妻の請求しないのを審かつて居るやうな事もあるのですから、女もちと此の邊の男子の心を察して因循な心を取り去り、此のやうな事に迄忙がしい夫の頭を煩すやうな事は避けねばなりません。本當に愛すべき妻は理窟の旨い人でもなく、交際の上手な人でもなく、唯々能く其の夫の心を汲み取る事が出來る人であると申します。



學問と趣味

◎一體女の敎育のあるとなきとは、先づ子供の敎育を全うすると否とに於て、或は家政を整理する巧拙如何に於て、乃至は人と交際又は應對上の點に於て著しき差異を生ずべし。若し之を思はずして僅かに手藝敎育の一端に滿足するが如き事ありては、恐らくは將來大に悔ゆる事あらん。

◎されど人々が學事をつとめ、敎育を尊ぶは、強ち之を實用のみに施すものとは思ふべからず。蓋し學問は實用と相離るべからざる事柄よりなれど、又一方より見れば更に女子の品性を作り、健全なる思想と高尙なる趣味とを養はしむるものとも云ふ事を得べければなり。上流の婦人が、敎師となるを要するに非ず、又著述家となるを要するに非らざるも、然かも高尙なる敎育を要するはまさに其の適例にあらずや。

◎高尙なる趣味の、婦人に必要なる事は云ふ迄もなし。彼の無趣味なる男子の、ひたすら利慾の念にのみ驅られ、やゝもすれば野卑の行ひに流るゝあるは、誠に苦々しき事乍ら、女子の餘りに無趣味なるは、更に苦々しき事どもなり。斯かる婦人が、妻として、母として、果して充分の任務を盡し得るやは、甚だ疑問なりと言はざるべからず。

◎社會の風潮は、能く人をして淳朴ならしめ、虛飾ならしめ、或は一世を救ふの英雄を出し、人類を毒する姦物をも出す。又更に他方を見れば、學校の風習は、能く人をして善人たらしめ、大人物たらしめ、將た柔弱事に堪へざるの愚者たらしむ。之れと等しく家庭の氣風好尙の如何は、其の子女をしてまことに種々樣々の人物とならしむるなり。

婦人の獨立と自活

藤井健次郎

日本に於ける婦人問題の性質及び其の決解等は、素より國柄が違ひ、又國民の性質が違ひ、又文明史上に於ける日本の位置が歐米諸國と違つてゐるから、歐米のそれとは決して同一のものではないと私なぞは考へてゐますが、併しそれらの問題の話になると勢ひ產業政治、敎育等の專門の問題に渉らなければならぬからそれは暫く省いて置いて、たゞ斯る問題に對して世の先覺の士が其の解決に向つて色々苦心しつゝある今日に當つて、我が日本の若き婦人の方々には、果して如何なる心得を以つて居らなければならないかと云ふ事に就て、少しく氣の附いてゐる事を述べて見たいと思ひます。

△現在自活してゐる婦人

今日の日本社會の日本婦人界の有樣を大觀すると、自分の腕一本で自分の生活を支へて行く事の能きる婦人が果して、幾許ありませうか。極めて少數のものであらうと思はれる。彼の學校の敎師、諸會社銀行及び官廳の書記、各工場の職工、看病婦等は心細い乍らも先づ獨立の生活をする事の能きる人々でありませうが、此等は日本の若い姉妹諸君の全體から見ると極めて少數のものであります。

次に夫の勞役を助けて、夫と共に、相持で半分程獨立生活をしてゐる人もある。即ち下級の官吏及び會社銀行員の夫人連の所謂內職と云ふが如きものでありますが、之れは決して自らで獨立すると云ふ程の收入は取れないで、たゞ夫の收入と合せて其の家計の一部分を助けて行くと云ふ働きをなしてゐるに過ぎない。

又農家の姉妹諸君は、親や夫の田圃の勞作を助けて多少其の補助をなして居られるが、之れも前の內職と同じ樣に、夫れ自らでは獨立する程の收入はなく、ただ親や夫の收入の幾分を助けると云ふ迄の事である。

此の内職をなし、或は農業上の勞作に服してゐる婦人は、數の上から言へば日本の婦人の餘程大きな部分を占めては居るでありませう。と申すのは、日本は歐米の各國に較べて見ると、農民の數が一國の全人口と比例して比較的多いのである。全人口の六割乃至七割は先づ農家であると云ふて宜しいのであるから、夫の收入を助ける爲に内職したり、農業の勞作に服してゐると云ふ方々は、數に於ては極めて多い事と信じます。

併し此等の方々は寧ろ社會の下層に居らるゝ方々であつて、社會の所謂中流以上の婦人は何うかと言ふと自ら獨立の生活をして居らない、又する事も能きない、ばかりでなく内職や又は夫と共に夫と同じ勞役に服してゐると云ふ事は殆んど無くて、たゞ夫の收入に依つて衣食してゐるか、若しくは父兄から讓られたる財產に依つて座食してゐる方々が多い樣に思はれる。

△座食徒食の婦人

たゞ寢倒んで遊んで居つて食べる、若くは食ふと云ふ事は、或る一部の姉妹諸君の間では、之を偉い事の樣に御考へになつてゐる事も無いではない樣である。が、それは婦人の虛榮心に依つて惑はされたる誤れる考であります。人間としては矢張り自分の腕で働いて、自分で食べる程、又食べ得る程貴い事は無いのであります。

日に三度々々頂く處の御飯の米一粒でも、何うして米になるかと云ふ事を考へて見ると、よく普通に一粒の米を生產するにも之を最初から計算すると人間の手が八十八度かゝつて漸くそれが穫れるのだと傳へられてゐる。眞に一粒のお米も幾多の人間の粒々辛苦の勞作の結果に外ならんので、其の勞作に從事致した處の人こそ當然其のお米を食ふの權利を有つてゐる筈であります。自分はたゞ手を懷中にして寢倒んで居て社會の上に何等の生產をも爲す事なくして徒らに其のお米を食ふと云ふのは、之れは露骨に申せば外の人の勞役を盜むと云ふ結果になる。人間としての恥辱此の上も無い事と信じます。

斯く考へて見ると、座食若くは徒食を人間の光榮であると考へて居る處の中流及び上流の或る婦人の方々は、其の精神に於ては極めて下等な不自然なものであつて、寧ろ社會上下層の地位に居ると言はれてゐる處の下級の官吏若くは會社銀行員の夫人や或は農家の子女や或は看病婦女工などゝ云ふ人々の方が其の精神に於ては上に位すべき貴きものと言はねばならぬ。

△中上流の婦人に望む

尚ほ他の方面から考へて見ると、我國は將來世界文明史上に向つて偉大なる使命を受けてゐる國柄であるから、益々兵を强うし、國を富まして行かなければならぬと云ふ事は今私が申すまでも無い事でありますが、其の强兵と云ふ方面に於ては、素より今日で十分と云ふ事では無論ないけれども、先づ此の方は比較的日本が他の列國に比して進歩してゐると云ふて宜からうと思ふが、國の富と云ふ方面から見ると、歐米諸國に比して非常な遜色があるから、我が日本國民たる者は今後益々此の方面に心懸けて行かなければならないのですが、扨て此の方面から考へて見と、中上流の婦人の方々が只消費する一方で少しも生產と云ふ事に與からないとすると、我が日本は其れ丈厄介者若くは居候若くは甚だ亂暴な言葉だが丁度一種の乞食を引受けてゐる樣なものであると云ふて宜しいと思ふ。其の厄介者より寄食者乃至多數の乞食を引受けてゐる間は之を一家の經濟から見ましても、其の家を富ますと云ふ事は餘程困難である事は事實だが、之を大きく國の上から見ても同じ事で、多數の厄介者や乞食を引受けてゐてはなか〱其の一國の身代を延ばすと云ふ事は能きないのであります。それであるから世の中上流の婦人の或る方々は深く此の點に鑑みて生產しない處の消費者にならない樣にしなければならぬと思ふ。

△奢靡の風潮

然かも近年奢靡の風が次第に增長して、其の衣食住の生活費と云ふものは實に莫大なるものがある。で夫

は其の奢靡なる贅澤なる妻の生活に奉養する爲に到底普通の一定の收入ではやり切れぬ、と云ふ處からして遂に不正の金錢をも收受すると云ふ樣な事に至つたと云ふ事さへ近頃では新聞紙に傳へられてある。

之れは素より極端なる話ではありますが、多數の中には其樣云ふ事は決して無いとはしない。其樣云ふ間違つた思想を有つて居る中上流の婦人は或は少ないでありませう、否少ないのを祈るのでありますが、併し其の少數の婦人は非常なる奢靡、非常なる贅澤をするのであるから、よし數は少なくとも、其の消費する金高から見れば實に莫大なものになる。婦人が所謂交際場裡にお出ましになる時の盛裝された一個の服装の價は五人の口を有つてゐる中等社會の一年の生活をも支へる事の能きる金を要すると云ふ有樣であるから、其の消費高の如何に莫大なものであるかを知る事ができる。

斯の如き誤つたる思想の根本は何處から來たかと言へば、先きに申した處の座食徒食すると云ふ事が人間の光榮であると云ふ誤つた考から來たものであるから、世の同胞姉妹諸君よ、願くは此の誤つた考をば根本より覆へして、自分自らをさめ他を導くと云ふ事に出でられん事を偏に望みます。

△我が言ふ獨立自活の趣旨

併し一言添へて置くべき事は、私が女子の獨立自活と云ふ事を言ふのは、たゞ目盲滅法に必ず專門技術を修めて一生獨身で、若くは夫と離れて生活をせよ、人の妻となる勿れ、家庭を構成しちやいかん、と云ふ考ではないのであります。男女相合して夫婦となり、一家を構成して子孫を作り、之を養育して行くと云ふ事は人間の本務の大切なる一つの事であるから、それをば止めて仕舞へと云ふ趣旨では毫もない。たゞ一家の主婦となつても徒食座食が人間の光榮であると思ふて居ては間違ひである、又不幸一朝夫と別れなければならぬと云ふ樣な境遇に際しても、或は自分一身、或は自分と其の子女とを養育して獨立の生活を遂げる事の

できる力を養へよと云ふ迄の事であります。

近頃よく夫に死に別れた若い婦人が、恰も樹から落ちた猿の如くに、殆んど何等の施すべき策もなく、徒らに其の父兄親戚にたよるか、乃至は社會一般の同情に訴へて生命を續けて行くとか云ふ樣な事に出る者も少なくないが、此等は誠に平常の心懸の足らざる事を表白するもので、其の婦人一人の爲めは無論、我が邦家の爲めに痛嘆すべき現象の一つであると思ひます。

それならば、獨立の生活をする樣にして家庭の人となれと云ふ事は果して如何云ふ事であるか。之れは實際問題として誠に大切なる問題で、また一段の考勘を要するのであります。それに就ても多少の愚存を有つて居るが、今は餘りに話が枝道に這入つて長くなるから、暫く其の方を省いて置きます。たゞ繰返して申して置くが、座食徒食は決して人間の光榮でない、否ただ光榮でないのみならず、座食徒食は或る意味に於ては一種の盗賊であると云ふ事を我が姉妹諸君が深く心に銘せられん事を祈るのであります。

三輪田女史の嗜好

私は一體食物に嫌ひといふものは少しもございません、好なのは栗の漬し物、蕗、蘭味などでございます、蕗は葉まで食べます、栗の浸物は三日途切ても困ります、近來は醫師のすゝめにより牛乳を朝晩一合づゝと葡萄酒を少々用ゐます、そして私は元來食のよい方で、滋養品の外に三椀位は頂きます、それに此頃西洋好になりまして食物も大分變りました菓子はカステラ、果物は蜜柑林檎、覆盆子何でも食後に家族を寄せて到來の果物を味ふのを第一の樂として居ります、又私は生來の潔癖で毎朝石鹼で身體を洗ひます下女が汚れた足で傍を通りますと、直ぐに雜巾で拭かせます、髮は若い時分に結つた事もございますが髮結に結はせた事はございません、併し生徒の髮は束髮でも銀杏返しでも更に頓着致しません

馬鹿になつて暮らす法

私の舅姑の待遇法

小野崎夫人

お若い婦人方の爲に舅姑の待遇法を申しますれば元々私には舅姑の外に九人の小姑がございまして隨分揉まれたもので御座います。私の若い時には舅姑に對しては決して世間並の義理立と云ふ樣な事は致しませんでした。又妙に遠慮したり包み隱しをしたりは致しません。何事に就ても平氣で居りました。

○

或日舅は、私の所作に腹を立つて、お前は家風に合はぬから出て行けと申しました。處が私は、一旦參りましたからはこゝが私の家で、この外にはどこへも出て行く處はございません、と申しました。すると舅は、何でもかまはぬ出て行けと强情を張りましたが私は一向平氣で、かう申しました、あの今日はお天氣が惡いのですからどうかお天氣の好い日に致しませうと、風に柳と極輕く受け流して申した。ところが舅は如何にも圖々しい奴と思はれたやうで、プン〳〵怒つて居られましたが、何分私が圖々しくて一向動きませんものですから、舅もとう〳〵根が盡きたと見えて、此奴仕樣がないといふ風で默つて仕舞ひました其の以後にも何か腹の立つた時には乾度出て行けと申しましたが、例の調子合で私が一向動かないのを見て、仕舞には、矢張り、あゝ今日も天氣が惡いかなアと、半ば滑稽的になりました。これは全く戲談のやうですが、先づこの樣な事もございました。

○

今時のお孃さん育ちの人は、何でもない事を根に持つて、出るの引くのと兎角風波が起る樣ですが、あれは私に言はせれば意思が弱くて心の鍛錬が出來てゐないのだと失禮ながら存じます。私思ひますのに、嫁として利口ぶるのは決して穩やかに行くものではございません。何事も舅姑に對しては馬鹿になつて居らねば駄目です、私の主義では世間的に義理立な

どをするのは馬鹿氣た事と存じます。これと同時に舅姑を生みの父母と思ひ、小姑を眞の兄弟と思つて、馬鹿になりつゝも心置なく待遇ふのが肝要です。それは腹の中にちやんと辨へて居て、表面だけ馬鹿になつてゐるのです。又腹が立つたら强て辛抱するに及びません。ぶう〱言つても宜いのです。あれはどうだ、これはどうだと氣を廻はした處が仕方がない。人間は誰れにも宜しいやうにはなるものではないのですからそこは善い加減にして置いて、只馬鹿になつて暮して行けば宜いのです。人間は腹が確りして正實に心を持つて居つたなら、必ず好い運が向いて來るのです。

○

それから又今時の若い婦人は强ひて話に纏りをつけやうとなさるやうですが、あれは間違です。餘り物事に要領を得過ぎるのは、自分から求めて難境に陷るもので、決して人に處するの道ではございません。私は何でも不得要領を主義として居りますつまり只今の私の談話の捉へ所のないのも之れが爲でせう。最後に人と交るには、決して相手を怒らしてはなりません又自分も怒つては損であることを深くお忘れないやうに希望致します。

老刀自の修養談

私は從來あまり富貴にも過しませぬが、又酷い艱苦にも遭ひませぬ、誠に平坦に經過して參つたのです、で何様事でも人様の話を聽くのが大好きです。世間にはくだらぬ女の繰言など聽くのは大嫌ひだといふ方もありますが、私はくだらぬ繰言でも何でも一向構ひません、熟々聽いて居るうちに何か彼か益な得るとがございますよ。又たとひ役者でも義太夫でも落語家でも何でも一藝に達したもの丶經歷にはキツト感心な事實があるもので、我身の鑑になる價値があるものでございます、それですから家へ出入する大工や左官の棟梁でも捉へて各々の立志經歷談を聽きます、又一藝に達しない平凡の人でも實際身の上話を聽くと大層心の修養になります、中にも苦心談はよろこんで耳を傾けるのでございます（勝見花願女史）

一身の整ふた婦人と整はぬ婦人

小崎千代子

▲隱れた模範婦人

某省官吏の奥さんで、私が敬服して居る方がございます。此奥さんは四十五六でお子さんは三人あり、良人は七十圓程の收入ですが、結婚當時極々薄給の中から貯蓄して、唯今では立派な家を建築された位ですから、却々勤儉な婦人で流行の物を身に着けた事もなく、物見遊山にも出歩かず、コツ〳〵と家事を働いて居られますが、敎會の集りなどは必ず出掛けられますし、信者の中に病人とか貧困な人とか在るのを聞きますと、乾度お金か品物を持つて見舞に行かれます。而して別に學校敎育を受けた次第でもなく、女大學を讀んだ位ださうですが、却々新智識もあり、當世の理窟が能く解つて居られます。無益な口を利かれないで極眞面目に交際せられます。お宅へ上つて見ますと隅から隅まで整然として拔目なく、三人のお子は皆良い出來で、母様を大切にして居られる様子が如何にも美しいのでございます。斯様な家庭を整理しながら敎會の爲めに働かれるのは、精神の强い上に、時間を用ゐる工夫が餘程上手なのであるといつも感服致して居ります。良人は道學者でございますが、細君の德行に感じて『私にはお前の眞似は出來ない』と仰しやる位でございます。

▲外ばかり働く婦人

又前の沈着いた婦人よりズツと敎育のある同年輩の婦人がございまして、これも善く敎會の爲めに働く婦人ですが、家が少しも治りません。家に居る時は膝の拔けた衣服を引きずり、良人や子供の世話も無頓着ですから、良人との間柄も自然冷淡に爲り、成人した實子が三人もありながら皆な母親を慕ひません。細君自身も家庭が面白くない爲めに、外の方が氣が晴れると

言つて出歩いてばかり居られます。集會の時などは散會後何時までも話し込んで歸る方角を忘れると云ふ風でございます。辯舌は好し交際も如才なくつて快活ですから、若し獨身で敎會の爲めに働いて戴いたならば、誠に結構な婦人ですが、私共は其家庭の樣子を心配致しますから『餘り彼の方を煽てゝ家を外にさせては宜しくありませんよ』と皆樣に申す位でございます。

私は此婦人の爲めに惜しい事だと存じまして、時々それとなく忠告して見ますが、何も彼も理窟は知り拔いて居ながら、反省の精神が弱いので、皆から惜しい人だ〳〵と言はれるばかりでございます。

△何樣な人にも長所

一般ではございますが、婦人は男子に較べると、大層謙遜のやうで、其實深い反省心に乏しいかと思はれます。これは御互に餘程注意すべき事で、何人に接しても其缺點を見出す暇に長所を見出して、自分の缺けてる處を補ひたいものと存じます。三歳兒も淺瀬を敎へて呉れるとあり、目に一丁字のない者も學者以上の心がけを有つてゐるのがございますから、階級心や自惚心を捨てゝ反省しなければなりません。

併し餘り自己に愛想が盡きて、どうせ仕方がないと自棄しても困ります。一つでも癖を改して行くことを心掛けたいものでございます。

△贅澤な婦人の不幸

華美に着飾つて如何にも生活程度の高いらしく見せて居る婦人が、義捐金にもなりますと僅かな金にも彼れ是れ苦情を並べることがございますし、何時も粗服で沈默して居る婦人が、イザとなると思ひ切つた出金をすると云ふやうな案外な例が往々ございます。是等の例を見ましても、平生の用意の差が分ると存じます。

何時ぞやも申上げた通り、轉地先で綺羅を飾ることは實に可笑しい次第で御座いますが、年々に此風が盛んになりますので、近頃大磯あたりに避暑する婦人は絹物を着けないで散歩すると肩身が狹いと云ふ勢ひで

ございます。私共一家が避暑に出掛けました茅ヶ崎などは、未だ此風が蔓りませんので幸ひでございますがそれでも時折り尋ねて來られる婦人方には、身分不相應に着飾つたのが隨分多う御座いまして、衣服や帶は勿論、洋傘から襟留、指環、履物に至るまで、流行に後れず五分の隙もない當世のハイカラ姿、斯樣な婦人が連れ立つて來られますと、何れ劣らぬ花菖蒲で私は熟々見惚れる程でございますが、偖此婦人達は喜びに滿たされて居られるかと存じますと、矢張り互に何かしら不足を訴へ合つて居られます。成程流行を追つて他に後れまいと焦りましたらば、限りある良人の收入で滿足の出來る筈はございますまい。此種類の婦人は其日暮しの貧乏人よりも却て煩悶が多いので、誠に殘念な次第であると存じます。

▲儉約な轉地生活

私共は避暑に參ると云ふ餘裕もございませんが、年に一度子供達に田舎の質朴な風を見習はせたい考へで茅ヶ崎へ出掛け、小さな家を借りて娘達に世帶の稽古を致させます尤も宅でも相應に家事を手傳はしては居りますが、平生は學校通ひや學課の復習に忙しく、終日家事を働く次第にも參りませんから、轉地して居る間は主婦の役を勤めさせます。魚類や野菜の買入れ、料理の獻立、炭薪の用ひ方、其他萬端を任せて置くのです。それから洗ひ張り、縫物なども此間に致させ、私も宅に居る時より早く起きまして、筒袖、草履ばきで手傳ひます。借家の庭は可なり廣くて立木も多う御座いますから、落葉や折れ枝などを掃き寄せて焚き物の代用に致したり、魚類や野菜も廉價に買ひ入れたり致しますから、却て東京の生活よりも儉約に爲り、良人が東京へ往復致す入費を加へましても尚失費が少いのでございます。一體彼の邊に避暑客の少いのは、土地が不便なのと、肺病患者が多く居るのとが原因ださうですが、私共には其不便が藥になりまして、水汲みを致しますので、歸京後臺所の專用水の有り難味もよく解ると云ふ工合でございます。又肺病患者は

大抵高田病院へ入つて居りますので豫防の設備が整つて居りますから、却て安心だと存じて居ります。朝晩藁草履で砂地をピタ／＼歩くのが誠に心地よく、太平洋の大浪小波が打ち寄する磯邊を松林の風に吹かれながら歩く心地は何とも言へぬ愉快でございます。費用が平素の生活向よりも少くて、身體の養生と精神の修養とを併せ得られるのですから、一同大喜びでございました。

▲米國風の襲來

心ある人が如何に質素儉約を鼓吹しましても、社會の勢に驅られて、贅澤風が日増に甚くなつて參りますのは、誠に歎はしい現象で御座いますが、これは我國ばかりではございません。西洋でも彼のヤンキー婦人連中の跋扈で、虚榮の競爭が漸々烈しくなつて參りますから、心ある婦人は追々社交界を退きつゝあるとの事でございます。我國でも追々婦人が外に働く必要が多くなつて參るに隨ひ、虚榮熱が伴つて參るのは自然の勢ひでございますから、此弊風に巻き込まれないやう確乎した自信力を以て生活向の平調を取つて參ることが肝腎であると存じます。



社會觀察

女に出來る商賣

文房具店と煙草小賣業

小商人の妻

三越や白木屋に澤山の女店員が出來て女子商業學校の生徒がドシ〳〵ふゑる。教育を受けた女子が商賣といふ職業の渦中にはいつて行く時代がきたらしい。本郷書生パン屋の女主人は明治女學校出の才媛で小石川富坂文房具店の主婦さんは明治第一流の閨秀作家一葉女史の令妹であるといふ。これ等はいづれも立派な御主人持ちであるが遺孤を兩手に良人にとり殘された未亡人や老朽職に堪へぬ女教師上りの獨身者などが女手に出來る綺麗な商賣といへば煙草屋に文房具屋だらうこれ等は兩方兼業する事も出來る。

△資金はどれ丈いるか▽

場所柄のよしあし、店の大小商品の種類によつて資本は一定しない。僅百圓で初めるもあれば一寸した小店の樣に見えて千圓以上かけて居る處もある。京橋日本橋あたりは場所株が高く競爭者が多くて素人商業の場所でないから別として、神田本郷あたりでは第一流目拔の場を引つこんだ橫町などでも、可なり人通りのある所で、二間か二間半間口の店をもつには、雜作二三百圓、商品三四百圓、合せて五六百圓の資本は是非必要である。小石川や本所の場末、なほ下つて郡部の小學校附近などへ行けば、雜作の五十圓に、商品の百か百五十圓位を入れたのでも出來る。

△雜作の賣買▽

雜作とは煙草屋とか氷屋とか八百屋とか、それ〴〵の商賣に都合のいゝ樣に疊、建具、戸棚、土間などの設備をした其の設備品の賣買を意味するのであるが、其の實は場所株の賣買で、疊二三枚に戸棚一つで數百圓の雜作を價するもあれば、疊建具店道具一式揃へて

數十圓で賣買される所もある。だから有望な場所を安い雜作代價で買つて店の設備品を增し客足の繁き店として高くうれば一時に澤山もうかるが、反對に場所の撰定を誤つて衰微にむかふ所を高く買つて店をさびさせれば半歲一年の儲は一時に損して賣らねばならぬ。

△商品の仕入れ▽

家を買ひ又は借りて店の設備が出來れば商品の仕入れは東京は極便利である。所々の卸し商人は毎日幾人となく車をひいておろしにくる。相競爭して得意をふやさうとするから大きな商店へこちから仕入れに出かけて行くよりも寧ろ坐ながら買ふ方が我まゝ云ふて安くかふ事が出來る。

△賣上げと純益▽

雜作を買つて、商品を入れて、ボツ〱客足がついてくると、一日二三圓から四五圓、五六圓の賣り揚げがある。場所柄と期節によつて十圓以上うれる時もあるが、雨ふりとか、二月と八月の不景氣時とかを平均すれば、女手の小商賣で、十圓平均の賣り上を得るといふ事はまづむづかしい。利益は三四割になるものあれば一二割にしかならぬものもある。煙草は一割二三分から四五分位の利益で、それに景品マッチを何處でもつけるから、平均一割一二分にしかならぬが、それでもこれは政府の事業でスタリが出來なくて、手數のかゝらぬ商賣だから、多くの人が爭ふて小賣業者たらん事を希望する結果、あまり小賣業者が多くなつたので、近來專賣局で大ひに整理を行ひ、數を減らす方針にして居るから、新たに始める事はゆるされない。それでも小賣指定所になつた所を其まゝゆづりうけて、他人の名義でする人もあるといふ。

△勉強次第▽

二三圓か四五圓の賣り揚で、平均二割の利益があるとして、石油瓦斯代または電氣の代を支拂ひ、營業稅家賃等をも拂つて行かねばならんから、小遣どりの內

職とすれば樂だが、それで三四人の家族の生計を支へて行く事はとてもむづかしいからそれには非常の勉强が必要である。

小ざつぱりとした着物きて、新聞讀んで店の火鉢にもたれて煙草吸つて居る商家の婦人は、賃仕事の內職に一分を惜しむ婦人より遙かに樂さうであるが、天は公平で、商人もなまけて居ては店は繁昌しない。

機を見て新らしいものをつぎ〳〵に仕入れ、商品の陳列に氣をつけて常に勢を惜まず。商品の手入れ店の掃除を手まめにして、埃にまみれたり、色の褪せたりした商品を客にすゝめぬ樣にせねばならぬ。其れでもなほ場所がわるくては到底商のみで食べられぬ店では、二階で素人下宿するもある。

△流行と運轉▽

文房具店などゝ云ふものは、到底流行や嗜好に投じて大きな儲をする商賣でないけれども、ペン軸一本ノート一冊にも、多少の嗜好も流行もあるから、それが一打仕入れたうち五ッか六ッ七八ッしかうれないうちに流行に遲れて人が買はぬ樣になれば損になる。流行すたりのない手がたいものばかり置けば間違はないけれども、やはり時々の人目をひく品がなければ、客足も減り、また、半紙や鉛筆のやうな薄利なものばかり賣つたのでは、利益が少ないのであるから、そこは手加減の上手下手、適當にやつて行かねばならんが、とにかく、どんな品でも、好い品を仕入れて安くうつて、數でこなしてゆく。商品を早く運轉せしめるといふ事は商賣に何により大切である。

茶屋や料理屋とちがつて酒に醉ふた客に肩たゝかれるやうな可厭な事もないがそれでもたまにはオイ姉さん〇〇をくんないか位云ふて這入つて來る客もあれば少しのものを買ふのに厭味や小言いつて、商品をいぢりまはして、お金を投げつけて威張りちらかして行く客もある。賣りかたは腰低くして買ひ方は鼻が高いのが世の中の定法だから、どんな客にも腹をたてたやうな顏見せないで愛想よくとり扱はねばならぬ。

大火に遭つた私の經驗

渡邊三代子

打つゞく暑さ。つゝがなき身でもしのぎかねまするに、伊豫殿を拂ふ風さへ害ありとて、醫師の進めまゝに、四間の障子ましろに立てさせなされし由。廿八日付御手紙にて承知致し、其地の冷氣さまでにかと母上と申合て居りました。清坊は其後、至極壯健で、此頃はよく聞分を致し、お母樣はと聞ましても、お留守と答て平氣で居ります故、御安心下さいまし。

さて此度は思もよらぬ大火で姉樣にも定て御心配下すつたでせうね。枕柱とも頼む兄樣は生憎の出張中で小兒と老人の外に、これと云て男手のない宅なのですから眞實に妾も、一時は途方にくれました。實際姉樣、昨日。一日一夜の妾の感想は、何時迄も忘る事は出來ませんの、當日もおひる迄は全く平氣で居たんですよ。ねえ。いくら風が強いと云たつて空心町の火事で逃げなきやアならないとは妾でなくたつて、誰だつて思は致ませんものね。夫は門外は隨分ざわ付てゐましたけれど。しますと十二時過に阿母樣が歸て（天滿橋の藤井樣と鳥井筋の島田樣とお寺とへ火事見舞にいらしつたの）いらつしやいまして、「お初。今日の火事は大變だよ。もう火は天神橋まで燃えぬけてね。中野屋も小林樣も先刻燒たさうだよ。今其所で人に尋て見たら今は森町の郵便局が燒てゐるさうな。なか〳〵急に靜りさうにもないよ。夫は酷い風だと云たらね。東を向くと砂ぼこりで眼も開て居られないと有仰て、阿母樣は息をはづませてゐらつしやいます。

このお話を聞てた妾は、九十幾度の暑い日盛に、全で背に氷をあてられた樣な感がしました。清坊がやつと寢付ましたので、阿母樣に御飯を差上ておいて火の見に上て見ましたら、朝方となら大分方角が變て居りますけれ共、火の手は一層盛になつて居りました。沈と見て居ますと、時々黃色い煙の間から、ぺろりぺろりとなめる樣に、紅の焰が見えますのが物凄う御ざいました。屋根と申す屋根に人の居らない所もなく、皆

照付く樣なあつい日ざしを手の甲に上げて、氣遣さうに東の方計り見てゐます。洋傘なんかさして見物して居る者は一人も有ませんでした。程なく一時が打ちます。今日は月末の支拂日ですのに、朝からまだ二人しかまゐりません。

門の外は次第に騷々しくなる計りで、格子の簾を少し卷上て見て居ますと、大なお重詰や、酒樽を高々と差上て足袋跣足の甲斐々々しいのや、家名の入た法衣の衿を肩までまくり上て、高張がついて勇ましく血氣盛が五六人一團になつて冲を飛で行くなど、東向て行く方は威勢が好いのですが、お氣の毒なは避難者でした。炎天に幌もない車が一輛まゐります。乘つたのは何處の奧樣やら、つむりには翡翠の笄など見えながら、なへたかたびらの一枚着に帶は何やら、胸もあらはに三つ計のお子達を抱へてお足許には大な風呂敷包みが見えます。洋傘なんか無論さしてはいらつしやいませんので、煙る樣な砂ぼこりを後から浴びて行ておしまいなさいます。後から牛乳配達の、車の蓋をガラリと開て、家財小道具を積る丈けつみ上たのが二臺も大地を蹴立てゝ來ました。其次にはたすき掛の女中樣が小兒をば三人も、一人をおひ、兩方の袂を一人づゝに持せて。さア早くですよと大汗に成て通ります。それはそれはいろんなものが通りましたが、妾の方も何時も見物役にはなつて居られませんのでした。

暫くしますと空の大八車が一臺ガラ〳〵と來てお隣の門口へ轅棒を下ろしますと、中で旦那樣と女中の聲がして、やがて大戸をギイとお開きなさいました。よもやと思てゐた妾は、此時ハッとして足が顫ふてきました。「眞實に樋口樣へいらつしやるのですよ。道草をしないで」と仰有る奧樣のお聲と一緒に開いた大戸から坊ちやんが二人鎖でつないだ犬を連れて出ていらつて、一散に廣小路を南へかけていらつしやいますの。野守樣でも、先刻から御門をお開きなすつて、いつになくお人の出入りが頻だと思てましたら、丁度この時お玄關の障子をさつと開て式臺の上に高々と結束した荷物をお積みなさいました。警鐘は次第に數多く聞え

産科婦人科専門　醫學士　北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮の病　自宅療法

無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次（婦人病の總論⊙血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法⊙神經衰弱、貧血、萎黃病とは如何及其療法⊙しらちながちの病理及其根治法⊙月經時の手當月經諸病の療法⊙姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學說を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳說せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の內無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所（電話新橋三六〇一番）東京築地新榮町四ノ一　笹岡省三

送花原料

東京九段坂　電話番町二〇五六番　振替口座六六七九番

吉住商店

●營業目錄●＝御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂＝吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

（その一）

女（るの二）

島崎藤村著

文藝入門第一編 新片町より

一册金五十五錢 送費金八錢

著者の序に曰く

文學を愛好して、その意味を知り且つ味ひたいと思ふと、よく言つてよこしてくれる讀者がある。さういふ人達に讀んで貰ひたいと思つて、この書を編んだ…この書は文學の講義錄ではない。…一種の通信に屬すべき種類のものである。種々なる境遇に處し、種々なる場所に住み、種々なる生涯を過しつゝある男女の讀者へ、この通信を送る…（九月二十日發行）

發行所 東京神田富山町十八

左久良書房

治庖會本部主事

安西古滿子女史著

四季 毎日 三食料理法

全四册

菊判和裝美本
紙數各二七〇頁
石版口畫入
正價各金五拾錢
郵税八錢

(1)春の巻 (2)夏の巻 (3)秋の巻 (4)冬の巻……全部完成

何れの家庭に於ても毎日三度の献立に就ては主婦が最も苦心する處ならん此の書は之が相談相手たらんがために安西先生が四星霜の間、苦心を以て衛生と經濟とに留意せられ一年三百六十五日毎日三度の豫定献立表をつくられ且つ其料理法は平易の文字を以て反復叮嚀に記述せられたるものなれば親しく先生に就きて教を受くるに異ならず何人と雖も容易に會得することを得、實に各家庭にはもとより學校及び軍隊に於ても必要缺くべからざる珍書なり。

東京本町 博文館 振替口座東京二番

女(その四)

日本唯一の演藝專門大畫報

第參年

演藝畫報

十月號

十月一日發行　一冊參拾錢　郵税貳錢五厘　三月分郵税共九拾四錢　六ヶ月壹圓八拾錢　壹ヶ年參圓半

◎三都九月狂言寫眞　三十頁數十種　アート紙印刷

◎繪畫　名優似顔畫（鳥居清忠）　葵の上之（田代古崖）

◎漫畫　演藝諷刺畫（北澤樂天）　滑稽演藝模樣（森靑山）

◎脚本『靜御前』紫紅　山崎『親の事業』陸郞　清見一二新作

◎芝居見たまゝ　幕無しの忠臣藏（巴之助）三勝半七　孔雀船　維新前後（妖星）毛拔（江戸川）重井筒（公孫）

◎役者の顔及び作者の見たる新派俳優（二篇共に佳境に入る）

◎名家眞相（東京）市川左團次（大阪）實川延二郞（寫眞及記事）（記事）

◎一役一言　一条寺彈正（市川左團次）寺岡平右衞門（中村又五郞）八劍玄蕃（中村勘五郞）等九月狂言の重なる役々

◎歌舞伎十八番『毛拔』得知　幸堂『十種香』の話　攝津大掾

◎樂屋見たまゝ　明治座市川左團次の部屋　石井三禮翁　鳥居清忠

◎芝居寫生畫　歐米畫報（金僊）宮戸座（靜雨）市村座（擲水）明治座（春川）

◎毛拔數畫（清忠）

◎九月狂言選擇撮影　明治座市村座舞臺面各數場

女（るの五）

東京京橋南佐柄木町　演藝畫報社　郵便為替貯金口座六〇〇貳番　電話新橋五〇五七番

文藝倶樂部 第十五巻第十四號 増刊

洋裝菊判 紙數三百二十頁 口繪寫眞版豐富

正價金二十五錢 郵税（本誌限り）八錢

十月十五日發行



文藝倶樂部の臨時號は、いつも讀者諸君の好評を受けたが殊に一昨年の秋季増刊『怪談揃』は空前の大評判で、未だ發行日にも至らぬ内に賣切れとなつた、そこで編者は大氣乘りで、其後蒐集したる材料に依り亡靈の三周忌ではないけれど、恰も三年後の當月當日に『續怪談揃』を發行せんとするのである。

（內容）

（ろの七）

女(ろの八)

てまゐります。

　これはどうでも助からないのだ。いよ〳〵宅も立退の用意をしなくてはならないと足もそゞろに茶の間へ行きますと、浄房から阿母樣が「お初。此所まで來て御覽。」と有仰いますので、參つて耳をすますと。パリパリツ。パリパリツと遠い所で底に強味のある音が瞭然きこえます。「何でし樣と青くなつてお尋ねしましたら、阿母樣は當もなく空を見上て。「初さん。もう火は堀



川まで燃えぬいたと見える。あの音はね。河岸の竹屋の竹に火が付て居るのだと仰有いました。姉樣も御存じの、あの堀川附近のね、河岸に立てかけられた幾萬本とも知れない、あの竹が燒て破る音ださうです。堀川あたりで、もえるのに、此所まで音が聞えるとは、まあ何といふ恐しい事でせう。妾はいよ〳〵決心しました。

　「阿母樣。おとなりもお向でも、お立退の用意をなすつていらつし

やいますから、宅もかうしてはゐられません。

「さうねえ。清坊をどうしたものだらうとこんな話を爲て居ります内、いの一番に平吉が弟を連て馳付て來てくれました。間もなく會社から清水樣を眞先に屈強なのが四人まゐりまして、其外に澤田組から見知た顔の大工計り三人と御藏跡町から宗助が來てくれました遠いところをよくねえ。

そして最後に左官が梯子と土をかついで、主人自身で參りましたの。大手を振て玄關から這入りましてね、土足のまゝでとつとゝ上てまゐりましてね。(最も其時分には疊までお藏へ運で仕舞たあとでしたが)「お藏の目ぬりを致しませう。えゝ。こちらのお藏は大丈夫です。おかまの下の灰までお運びなすつて宜しう御ざいますと威勢よく云ひましたわ。オヤお話が飛びました。また初へ戻て申ませうねえ。

妾は眞先に佛壇と兄樣のお書齋の中の物一切を運でもらう樣に賴でおいて、其間に阿母樣と清坊の着替を一二枚づゝ。おもちやも好きなのを二つ計りとお金を二十圓お渡して、久にお供させて御影の宅へ避難していたゞき。(車が有りませんの。電車まで歩いてゆくと有仰てゞした。)妾の着がへも取出して後、簞笥に錠を下して廻り、姉樣のと妾の手簞笥を眞先にして。二階に有ました古雜誌から、まつの針箱までおくらへ運び入れました。力仕事は皆で爲て呉れますけれど、細いものをまとめるのは皆妾の役でしてね。夫は働らきましたの何のつて、着物の袖付が三寸も綻びてゐるのも知らなかつたくらゐですの。軸は横斜に卷いたし、花瓶の水は鉢前へざんぶとまいて、大箱の中へ横倒に入れましたし、小間の方の柱掛は活て有りました早咲の桔梗の、花ながらに一つかみに入れてしまひましたの。盆石は、浦の苫屋を打ておいたのでしたが、有合た新聞紙の上へざらりと移し、永衛が自慢のくづ屋も、岩諸共、砂と一緒に包で仕舞たわ。勝手道具では米とぎ桶と庖丁とだけまつが運びました。盥は氣が付かなかつて三つ共燒ました。

妾が裏庭の燈籠をはづしに行きますと、背中合の横

山様では後鉢番をした店員が商品の金物を手當り次第に井戸へ投込でいらつしやいました。かうしておけば助るのでせうか。又茶の間を片附て居りますとき、高塀の向で「――保険が附てゐるからね。運ぶと跡が却て面倒だ。商品には手を附るなと怒鳴てゐらつしやるのは藤崎様の主人らしいの。いろ〳〵ね。茶の間からお釜の掛たお風爐を兩手で抱て來た清水様が、今一息と云ふ、手すりの所で片足ふみそこなつて、お庭へ落てね。仕合と怪我は有ませんでしたけれど、おもとの葉が滅茶々々になつたわ。お風爐も釜も、ころ〳〵ころげましたの、どうせ傷が付たでせうが、未だ藏を開ませんから分ません。姉様土藏は見事に殘りましたよ。すつかり目ぬりの出來上たところへ村瀬の姉様から書生をつけて菊ちやんをよこして與れまして「叔母様。阿母様がね。早く宅へ逃てゐらつしやいつて。僕お迎に來たの。お祖母や清坊は何うした、」と申ます。清坊は病後でもあるし、靜な所へやりたいと思て居た處だつたから、先刻御影へ遣たの。叔母様はもう直き逃て行くから、先きにこれをと云て、阿母様がお出まし際にくれ〳〵も云て行かれた鳥籠に餌箱を添えて持て歸て貰ひました。夫から書生様の袂に有りました鉛筆を借て、土間に落てた引札か何かの裏に、姉様と兄様へ打つ電報の原稿を書ましたの。立たまゝで。

電信局へは此書生様に行てもらひました。

奥へ行くと、松が金魚鉢を兩手で傾て、眞倒に、金魚を井戸の中に移て居ます。

破竹の勢とはよく申事ですが、堀川河岸の竹を燒て、一際猛烈になつた火はこれこそ眞の破竹の勢でもつて伊勢町から富田町。東梅田町と次第に西へ進で來る中に、池田屋様の酒造庫に火が入りましてね。時間は覺えが有ませんが、丁度妾が三度目に火の見え上た時でした。何共形容の出來ない物の響が聞えたと思ましたのがそれで。幾百石の御酒が一時に火になつた時の物凄さつたら有ませんでした。うづ卷上る黒烟に、燃ゆるほのほの色は更に新らしく、木幡町の全家を一炬に附し、元からの東風に加ふるに、烈しい烈しい北風

にあふられて、餘焔は遂に西天滿小學校に移りました。

老松町が焦土になるのも今の間。もう妾も逃なければなりません。住馴た此家を見捨て、どうでも立退ねばならぬ時が來ました。妾の胸は無量の感慨に滿ち、暫は行もやらず、只一人緣側に佇で、名殘の庭をつくづくと、心で最後の別れを告ましたの。

何にも知らぬ紅の朝顏は明朝の盛を樂んで朝よりは延した花の蕾が可愛想では有ませんか。妾は銀杏の木の傍へ行て、手をのばして葉を五六枚此家の遺品にと袂へしのばせ、淚を隱して式臺に下りましたが――。あゝ亡き父上が思ひ思ふてお建てなすつた此家も、最一時間經かたゝぬ中に一塊の灰になつて仕舞ふのかと思ますと、胸が迫て……。姉樣貴女も泣て下さるでせう。

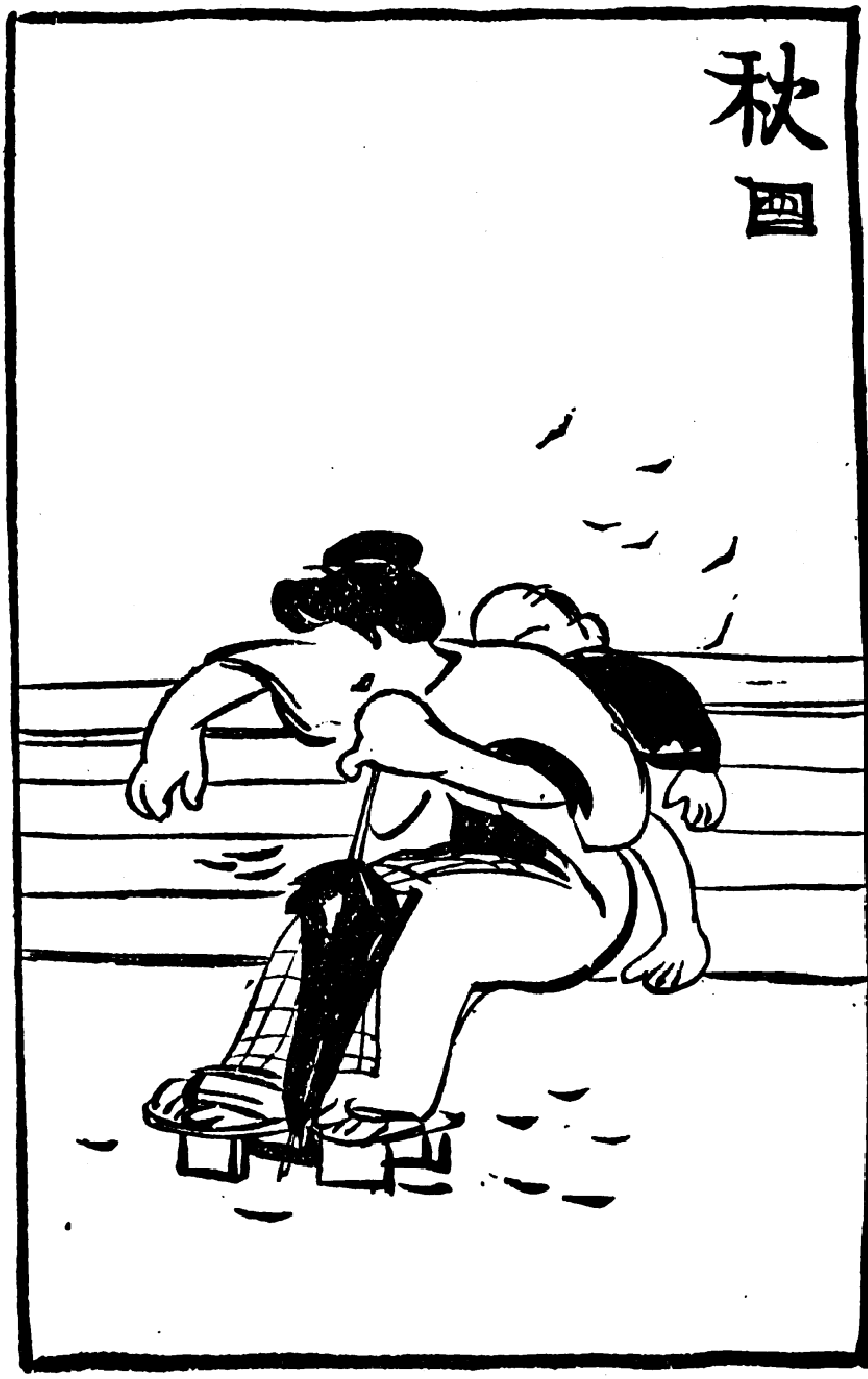
何時の間にか半鐘も聞えなくなりました。警察署も、最う立退かなくてはなりませんからでせうよ。

妾はまつに洋傘をさせて貰つて、素足に草履をはき人ごみの間を縫て眞砂町と絹笠町との境目の所まで參りますと、大八車三ッ程へだてゝ、ぱつたり森村樣と顏を合せました。まだお立退の樣子も見えず、袂を帶にはさんで、御自身はヴイオリンのサックを抱えこみ、外にお琴を二面、細引で合せたのを、紺飛白の單衣の裾高々とからげた三十恰好の男にかつがせて、回生病院の横手を南へ馳ていらつしやる處で。眼と眼は確に合たのでしたが、どちらの唇も動きませんでした。

濱筋へ出ましたら、附近の家から持出た家財道具で一ぱいになつて居まして、通る道もない程ですの。此所迄は燒て來ないのでせうかと松が聞ました。

ぢり〳〵と燒けさうな日は遠慮會釋もなく照り付ます。妾共は流る汗をぬぐひもあへず、右往左往に行違ふ人にもまれて、漸う大江橋から車をやとひ、大川町を一文字。東へ築地の姉樣の宅へ梶棒を下させて、門をくゞつて姉樣のお顏を見ますと、安心をしたのですが、急にふら〳〵として思はずよろめきましたが、自分ながら云甲斐がないと思て足を踏立ましたの。簪が落ちたのを、まつが拾て呉れましたので、何心なう

見ましたら、姉樣。割貝の胡蝶の羽が、黒くくすぶつてゐましたわ。お風呂を進て下さいましたけれ共止して、土藏の鍵と、金庫の鍵を姉樣に預て、浴衣を松に、包の中から出て貰て、さつぱりと着替て二階の一間で横になりましたの。うと〳〵として目がさめたら七時過て居りました。只一人で落付ぬ御夕飯を頂てをりますと、菊ちやんが屋根へ登てゐたと見えて、お座敷の庇から顔丈出て「叔母樣。此所まで來て御覧なさい。大江橋が燒てゐる」と云て呼びますから妾。あすこの兄樣の寫眞室へほこりだらけの梯子を傳て、登て見ました左手の方漫々とたゝえた、大川の水を眞下にして、



遙に眼を放ますれば、流をかこんで西へのびたる堂島川の北岸は見ゆるかぎり只一面の火になつて居りました。我家を燒すぎたと覺ゆる火は只今丁度北警察署と控訴院とを包で居り、濟坊の命を拾た回生病院の三層樓は、窓から盛に火焔を吐て居ります。夫より西方一體の地。火でない所も有ませず、餘勢は之に丁字形を成て、大江橋を南へ渡りそめたのでした。

女らしく恐しと云て面を掩ふには、此景は餘りに壯觀に過ました。一望の火焔。直に武庫、六甲の山影に續て、黃に紅に、染れる雲の色は、夕榮の夫よりも更に濃く明です。あゝこれをしも偉觀と云ずして又何をか偉と申ませうか。

兎にも角にも此一小時は、妾の生涯に取ての、悲くも又壯な、よき思出で御座いました。

雲が切て、いゝお月夜になりました。星の降る樣な凉しい夜の、凉しい影は水に落て、月にきらめく金波銀波。手をさしのべて結んだらあの月が香ふでせう。丁度浪花橋の邊を境にして、右手はさながら別天地の感が有ました。

病院の天心閣が火柱を立てゝ、燃えさかるほのほの中へ眞逆に崩れ落た時には、國子姉樣も思はず聲をお立てなさいましたわ。

姉樣。明日の今頃には兄樣が歸て下さいませう。後の始末は其上にて萬事。今日はこれでおしまいに致します。こちらの事は決て御心配なさらない樣にね。隨分おいとひ下さいまし。おときにも宜しくお傳を願ひますさようなら。

○

姉上樣へ。

先便で申ました通りに二日の夕。兄樣が歸て下さいました。所々の土藏に火がはいりまして、あちらでもこちらでも燃え上て居りますさうで。

「初樣。福島の借家は燒なかつたね。今車をよせさせて、ずうつと燒跡を見て來てよ」と有仰てゝした。直に旅裝を解て、お出かけなさいましたが、間もなく澤

田組の松本を連れてお歸りなすつて、板圍の相談と、燒跡の灰搔仕事のお話なぞも出て居りました。昨日今日の暑さは又格別ですの。妾は火事以來どうも身體がすぐれませんので、幸ひ兄様も歸て下すつたし致しますので、三日の日ぐれから、三日計り御影の宅へ參りましたの。清坊も喜びますし、阿母様も土藏が殘たのが何



より嬉しいと有仰て、機嫌よくゐらつしやいました。姉様土藏の殘た宅は少う御ざいましてね。旅籠町の丸京様なぞは、ね、御本宅から控家まで燒て其上にお衣裳藏が二つ共落まして、眞の丸燒におなりなさいましたよ。池田屋様では酒庫、衣裳庫共落まして、つい先頃いらつしやいましたお嫁様のお荷物迄、十三荷まとめて悉皆

灰になつたさうです。此樣お話は、致せば數限りも有ませんけれ共。土藏が無かつたり、有ても狹かつたりしたお宅は、安全と信じて家財を控訴院の構内や、前の濱地へお運びなすつた方が多かつたさうでしたがね。其。何樣火にも燒ないと保證の付た建物が、一たまりもなく燒ましたので、其餘波を蒙て、山の樣に積だ簞笥や長持の片端から火が付きましたの。人は大勢居たのでしたが、まのあたり見ながら何うする事も出來ず。頭から雨の樣な火の子を浴せられて、命から〳〵逃るより外に法は無かつたさうです。夕日神明の境内へ運だ方も、前同樣の始末になりましたが、只梅田停車場前の廣場や、構内へ入て貰た方丈が上出來でしたの。停車場は燒ませんでしたから。夫でも電車は勿論。汽車の發着さへも止りました。

夫な譯で、悲慘な丸燒の方が非常に多く、現に森村樣も其中のお一人で、全の着のみ着まゝ。お肌着の着替もなく、第一お履物からお求めなさらないでは、壹間外出もかなはぬ始末ださうで。お目に掛りました時。涙含でいらつしたのもさら〳〵御無理とは存じませんでした。宅でも二番藏が有ませんでしたら、是非共附近の廣場を求て運び出さねばならぬ處でした。忘もせぬ妾が十七の年。お父樣があの家をお建てなすつてね。土藏一戸前に二千圓とかお懸けなすつたと聞て、阿母樣が「夫なにお立派なのをお建てなさらないでもよう御座いましたのにねえ」と有仰て反對なすつたし。又家が出來上てから後に、妾が植物溫室を拵て頂かうと内々目論でゐた裏庭の空地へ、又最う一戸前建ておかうと有仰た時には。妾は一日、すねて泣たし。姉樣は姉樣で、土藏なんか二つも要は爲ない。夫なお金がお有りなさるのなら、茶の間を最一つ、原田樣の殘月亭の樣なのを造て下されば好いにと、おこぼしなすつたわねえ。夫も、これも、望はどちらもかなはないで、土藏は間もなく二戸前となりましたが。あゝお父樣の深い思召を初は今度の災難で痛切に思ひ當りました。

姉樣。あゝした場合に、溫室一つが何になりませう。數寄を凝らした殘月亭がどれ丈の役に立ませう

か見渡す限り茫々とした燒跡に立られた、下り藤の定紋付の高張にそうて、屹然と殘た土藏の錠前堅く棟もゆるがぬ二戸前は、昔、今は世にないお父樣のお魂かとそゞろに仰がれました。六日の朝涼に、又村瀨へ歸りまして、夕暮から松を連て燒跡を一渡り見て歩きましたの。避難してから天滿へ渡つたのが、これで二度目でした。二日の日に參りました時には、火氣が全く拔てなかつたと見えて足がほてつて、沈と立て居にくう御座いましたし、町は一面の焦土で、何所が家の跡やら、道路やら、さつぱり見分が付ず。蜆橋の上からひよつこり大阪ホテルが見えたり。宅の邸跡から、燒死の大波小波を見越て、梅田の仁丹の廣告が見えたりしました。(姉樣嘘では御座いませんよ。)も早や板圍が七分通り出來て居りました。今日も酷い東風が吹き、水撒く人も有ません故、砂ほこりで襞も何も臺なしになりました。板圍の中を覗て見ますと、眞黑い石燈籠が、彼所にも此所にも淋しさうに、によき〳〵立て居て、ねぢれ曲た鉛管から水道の水が、ひとりでにサラサラと流出て居る場所もありました。板圍の出來てない燒跡に、避難した人の、假住居の所書を、記た立札が思ひ思ひの場所に建られてあります。妾は何か墓場にある卒塔婆の樣に思はれてなりませんでした。木幡町迄參りますともう薄暗くなつて來ました。新らしい板塀の、木香が怪く香て、行逢ふ人も一丁に一人か。二人は六かしい位。墨くろ〳〵と地主、地主の名を記た小旗が、高い所で風にびり〳〵鳴る音も、只さへ泣たい樣な妾の胸に又一しほの淋さを添るので有ました。昨日にかはる町のさびれを、まつと小聲で語りながら、足を早めて大江橋に出ましたが、橋は七分通り落たまゝ、まだ其儘で、往來は渡舟で致して居ります。お金の不要ない渡に乘るのも變ですから、浪花橋から歸りました。我家も明日で板圍ひ全部出來上ります都合で。其れを一段落として妾は御影へ參りますし、兄樣は、直ぐ東京へ御引返しなさる事になりましたの。夫で明日か明後日。兄樣と阿母樣がそちらへ一度御見舞にゐらつしやいますよ。おゝ忘れて居りました。姉

様三日の日に、金庫を開きましたの、證券も書類も一切無事。形も崩ずにありましたわ。片附最中に、平吉と宗助が、此金庫へ手を掛て、金剛力を出て運うとしましたの。可笑かつたと申ては濟みませんが眞實に――オホヽヽヽ。

手傳つて呉た人達でも兄様からそれ〴〵おゆき渡らせなさいました。土藏は七日の朝早く開きましたが、之も異常なし。姉様が全快なつてお歸宅なすつたら好い物を見ませうね。燒跡で拾た珍らしいものよ。硝子の熔て塊たの。控訴院の窓硝子なんです。丁度妾が立退く時分に、使丁が此窓硝子を下して廻て居たのでしたが苦もなく熔て岩の様に塊て居ります。好い紀念だと思て磨て、仕舞て有りますの。幾度位の熱を掛たら、堅い硝子が此様に熔るのですかねえ。姉様、蜆川は埋るのですよ。燒跡のガラを皆な彼所へ捨させますの。

兎に角。宅は仕合でした。自宅もなくし、借家も燒ましたけれ共。愚痴を申せば限りもありません。加治木様などでは、借家を七十軒も失なすつて夫で保險が附て居らなかつたの。我宅では今日兄様が神戸へ保險金を受取にいらつしやいますわ。神様やお父様のお加護によつて、まだ此れ位の災難で濟むだのを、妾は喜で居ります。身體はもうよくなりました。此上心に掛かるのは、姉様貴女の御病氣計り。どうかお氣永く御養生なすつて、清坊が歩く時分には、健康になつて芽出度う御歸宅下さいまし。



主婦の任務

△親として子を愛せぬものはなけれど、やゝもすれば内に居るを窮々しと叱り、外に出づれば危ふしと制し、子供をして殆んど途方に暮れしむる事あり。これ子供に取りては誠に迷惑な話なれば、成るべく都合して彼等に一室を與ふべし。偶々之を與ふる家庭あるも、多くは光線の射入悪しく空氣の流通宜しからず。されど子供は外界に對する抵抗力の極めて弱きものなれば彼等には、最も良き室を與ふべきなり。

△夫婦は固より家庭の中心なれども、更に老者を安んぜしむる事も我國の家族制度の習慣上最も重要の事なり思ふに主婦がすさびの床の間の花一枝、その培ひし菊の一本はときに老者の心を慰むるに足らん。斯くしてなどか家庭に風波起らんや。眞に樂しき家庭を作らんとするものは、我が身をすてゝ愛を老人にそゝぐべきなり。

△子供には成るべく獨立自主の習慣を養はしむる様に心掛くべし。例へば朝も自ら起き。夕も自ら寢ねしむべし。其他通學にも、復習にも、乃至は衣を着るにも、髪を結ぶにも、子供の爲し得る限りの事は何事にても自ら之を爲さしむべし。これ他日世に立ちて後の活動の上に非常の便益あるべし。

△學校にては學術を教ふれども、善き習慣を附けると否とは主として家庭の薫陶によるものなり。されば時間を大切にして之を嚴重に守る事、睡眠時間或は食事に就て一定の規律あらしむる事、帶を正しく結び襟を調べて容姿を端正にする事、其他何事に依らず善き習慣は主婦に於て十分注意して常々之を習はしむる事を力むべし。

△總じて貴婦人と呼ばれ、紳士と稱せられて、一世に仰望する人々は、外に出でゝは社交上の善習慣を守り、家にありては起居進退に規律ある人ならざるべからず、斯かる節度は子供の中より躾けざるべからず。

△斯くして一歩々々に家庭を改善し、趣味を高尚にし、子供の健全なる發達を促して更に世に立たしむ、これ主婦の任務なるべし。



近世史に名高い會津の若松

華名芳子

日本鐵道を岩代の郡山で、岩越鐵道に乘り換へて、間もなく、長いトンネルを拔けると、すぐに會津平野へ出ます。平野の中心が若松で、郡山から三時間程かかります。會津の四境は山又山で東に吾妻山、西に出羽山脈、南に帝釋山、北は飯豊山で圍まれた中の一大平原地で、慶長のむかし上杉中納言景勝が大阪と相呼應して徳川氏を一擧に滅さんと企てた、優勝の要害地であります、會津の名は、崇神天皇の朝、四道將軍が一方越の國から又一方は上毛の方からして互に相會ふた事から、起つたのださうです。會津の都、若松はもと戰國の末蘆名氏の居城地、其の後、城主は蒲生氏郷、上杉景勝、加藤嘉明といづれも天下の英雄が據つて以て奥羽を控制したもので、その後徳川の世になりて保科家となり戊辰の幕になつたので御座います、戊辰以前に、城主松平公が京都守護職となられた時には、多數の武士を京都に置く必要から、會津領內に重い税を掛けられたので、民力は疲れる、そこへ戰爭で、急に又五郡の金穀を若松城中に集められたが、一朝にして兵火のために烟になつたので、若松の創痍は、今に至りて癒えず、戶數は當時の半分にも當りません。

△白虎隊と鐘樓守

戊辰當時の話を、古老に聞けば、勇ましい事、憐らしい事、數限りもありません。白虎隊が、話の中の花で御座います。白虎隊と言ふのは、春まだ淺き、少年の一團で、三十七人が一隊となつて、若松の東方猪苗代湖畔の戶の口原に、東軍をむかへましたが、或は討たれ、或は傷いて、殘るは十九人。一同は、踵をかへ

して、飯盛山につき、若松城が火焔に包まれたのを見て、吾事了れりと、遂に自盡して維新の戰史を飾りましたので御座います。

其れは世に聞えた物語、これは深山の朽木櫻、世にかくれた、老鐘樓守の物語です。

保科公入國の時より、若松城中に鐘樓が建てられて風雨二百年の間、怠る事なく、朝夕の時を報じました戊辰の秋、戰は日に一日と激しくなつて、彈丸は日に幾度となく、鐘樓をかすめましたが鐘樓守の老爺は、平常のやうに、大國媼祖に線香を立てゝ、もう一本燃えたら、暮六つ、もう何本で、明六つとやうに、指折りかぞへて、鐘撞く事は、一時でも怠りませんので城外の將士は、露しげき野營の床に、鐘の音をきいてはまだ城は落ちない、主君は御無事と幾度勇を鼓したかしれないさうです。彈丸は益々激しく、雨霰とふりしきる。老爺は一彈に倒れた。鐘は鳴らない。つゞいて開城。

今でも若松では時の鐘を撞きますがそれが此の鐘ださうで御座います。

△飯盛山と東山

白虎隊で名高い飯盛山は、市の東北に當つて、町盡れから十町もありませう。山腹には、白虎隊の墳墓も石碑もあります。其の下に榮螺堂といつて榮螺の殼に似せた、建築があります、山はあまり、高くはなく花の名所になつてをります。飯盛山から東南十二三町で東山溫泉へ出ます溫泉は山の峽の谷川の兩側にあつて水も空氣も淸いので

「出羽で庄內最上で上の山、こゝは會津の東山」

と昔から有名で、若松三萬五千市民の、遊覽所です。

土用になると、土用湯と言つて、若松や近所の村々から此の溫泉へ[illegible]朝三時頃から出かけます。土用中通つて、二十錢もお茶代を置けば上の部ださうです。

會津に東北の入口ですが、雪は、割合に深き上に時期も長く、天長節に初雪を見て四月に殘雪が消えぬ事があります。昔は道路から下に階段を作つて、降りて、家の入口に達した程の深さだつたさうですが近年は薄くなりました。が、十一月の末から都大路の櫻の頃まで老幼男女の別なく、炬燵に籠城して食事も炬燵、寢むのも炬燵といふ有様で、暖國の方の御目にはをかしく見えませう。外出する時には、雪の中を素足で、角巻といふショールの様なもので顔を蔽んであるきます。この素足がある

ばかりに、短夜時代が冬眠時代とならずにすむので御座います。

此國の春は遲いが、花神が御揃ひで御出掛け下さるから有り難い。掛値なしの、梅、櫻、桃、李一時の春で御座います。其の上花時が、大層、長いので、この長閑な春光が、あの、のんきな會津節を産み出したので御座いませう。

祭事はすべて舊暦で盆踊が初秋の、否、年中の大騷で、これまで每年缺かさずに行はれます。男女老少の別なく、夢中して夜を徹して、三四晚踊るので御座います。唄も歌も簡單で、のんきで、鄙びたものですが此處にはなくては、ならぬ、社交機關でせう。

△生　活

簡易生活とやらに適した所で御座います、去年聯隊が出來まして物價が高くなつたとは申しますが、まだ割合に安く家賃は特別高昇りと申しますが土藏付八疊二間六疊二間門構への庭付、畑付きで六圓位です尤も瓦葺の家は藥にする程しかなく、大抵は、コバといふ板葺か藁葺きの陰氣な作りで、爲に市中の光景は何分にも引き立ちません。

青物、乾物、魚類はすべて何匁（百目一錢を一割）といつて目方で賣りますが青物は大層お安く漬茄子が一錢で十五六から二十五六、南瓜中二錢が今年の相場です、魚は多く仙臺や平邊からまゐりますが、海岸育ちのものには戴けないさうです。それは魚屋は勇俠のものだとお思ひの奥樣には、縮へ入れて手にかゝへたり肩へのせて、お練りのやうな歩み振りの若松の魚屋さんの魚は猶更買へないとの事です、尤も魚一方の商賣屋は一軒もなく、靑物、乾物、荒物、酒、味噌、魚と胃の腑に關係のあるものは何でも一軒で賣つて居るのが普通です。

いつか八百屋が「ハタケナス」はエエカエロ（宜しいか）と申しますから、持つてをるのを見ると只の茄子なので、何故、畑茄子といふのかと聞きましたら「キノナス」（木の梨）と間違ふからとの、事で大笑でした假名違ひは隨分多い所で、イとエ、ツ、とチなどは普通とり違へて用ゐます。

婦人間の交際が少いから衣服は一般に質素で、ふだん着は土地織の會津縞が多う御座いますが、そろ〳〵

都の風が入り込んで來た樣で御座います。

土地の人は若松は食ひ倒れと申しますが美食するではなくてたゞ大食するので、文字通りと、解釋すべきでせう。氣候の加減か、婦人でも飲酒家が多く、一升位平氣な人が珍らしくはありません。お酒は上の上の部一升五十錢。

△產　業

昔は會津人は二十三萬石の御領地からは、海魚の外には何でも、出ないものはない、鹽まで出ると誇つた位で、天產物には、乏しくはありませんが、工業とか商業とかは盛んだとは申されますまい。工業では、漆器が筆頭で年產額四十五六萬、それに、酒、朝鮮人參などがあります。漆器は格安で角盆八寸物一對で、七十錢も出せば丈夫一方の可成宜しいものが求められます。

商家は揃ひも揃つて無愛想で御座います、それも、名物の一つでせう。

△人情と方言

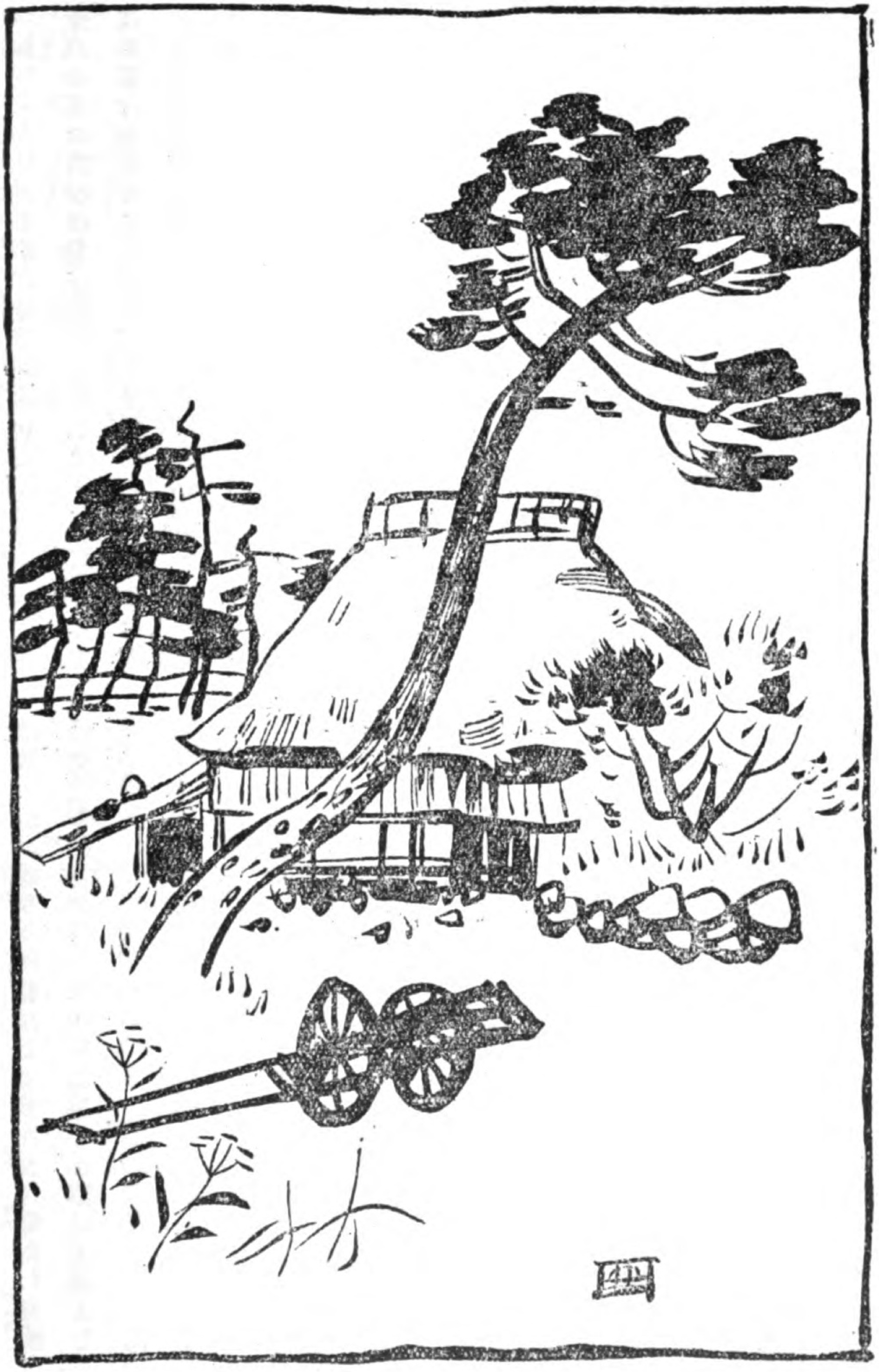
生活は簡易の上に萬事が鷹揚ですから人は惡ひ方ではないが、進歩、活動はしません雪に鍛えた身體、會津武士の精神を持つたのかして、意志はどこまでも強固で、義は堅いが、我がつよく團結がなく、頑固で、近年までは方言を用はぬと機嫌の惡ひ人が隨分とあつたさうです。

方言は少なくない樣です。

意氣地なしが(ツァャチカナシ)牛が(ベイコ)子供が店前で立つて買物するに(ヤッチクチクナンショ)下さいが(クンチャンショ)嫌だが(ヤンダ)

岩越鐵道は、越後に通すべく、今工事中ですが全通の後には、こんな言葉も少なくなりませう。





女學校評判記　七

跡見女學校

河岡潮風

△超然主義の學校▽

此頃電車の開通した小石川の終點に近く、名さへ女性の柳町に、生垣高くしつらひ、紅、花の如き學生を集めて教授してゐるのは跡見女學校である。

明治八年の創立と云へば、女子教育界では殆んど草分けとも謂つてよからう。產出した出身者の數幾百千その內には恐れ多くも閑院宮妃殿下（當時は三條智惠子の君）などまします位。敢て求めて廣告せずとも、入學志望者は門前に市をなすの盛況。されば校長の花蹊女史は、俗務に離れてあまり人とは面會せず學監の李子女史が其任を務めてゐる。事務員會計係などの末に至るまで、ともすれば『本校は別によく書いて戴かうと云ふ野心もないのですから……地方の學校の敎師か何かで、百哩も二百哩も遠方から來たのだけには特別の詮議を以て見せてます――』などゝ中々の氣焰。夫れも時にとつてはよからう。

△花蹊女史奮鬪の生涯▽

女史の經歷については數月前の號に肖像迄挿入して詳しく書いてあつたから、再び詳說する要を見ない。四歲にして書をよくし、七歲にして人に敎へ、十二より繪を學び、十七で立派な作品を遺した。現に姉小路伯爵家に珍藏さるゝ孔雀の畵の如きも其一枚で、半世紀以前の品である。而かも此時代は女史の家運も左まへの時代で、全力を修養に傾倒する事が出來ず、晝は酒掃爨炊の業に從ひ、夜間暇を偸んで仕上げたのだから、先づ天才肌の部に入れて然るべき人である。

慶應元年には京都へ移り、明治三年には全家を提げて東京へ來られたが、當時維新の動亂の後を受けて女子の風俗はひどく粗野に流れてゐたので、その矯正の

法を考案し、天下に女子教育の聲おこらざりしに先だち、神田仲猿樂町に跡見女學校を創建して、時代の引率者となつた。時に明治八年、女史卅六歳の春である。

爾來今日迄一貫せる教育の大方針は、國粹の保存である。いやにバタ臭き薄つぺらなやり口はつとめて避け、溫良篤實なる賢母良妻を養成するが目的である。その當時の學課は國語、漢學、習字、繪畫、裁縫、琴、挿花、點茶の九目で、習字繪畫は女史の任、裁縫は姉君の千代瀧君の分擔と云ふ風に、一家大車輪になつて經營の局に當つたのである。

又たその頃は女學生で袴を穿けるは頗る少なく、稀に男子の馬乘袴を用ゐてるもあつた。女史大いに憂ひ、古來宮中に行はれたる型に擬ひ、色だけは緋を紫にかへよと、皇后陛下の思召ありしを體し、現在の女學生袴を作つた。此一點だけでも女子教育界の殊勳者である。

十年には三條智惠子の君御入塾あり。十三年には一條辰子の君、皇后陛下の仰によつて御入塾あらせられた。何がさて、畏きあたりの御覺え目出度き塾なればめき／＼と發展し、從來の敷地では手狹になつたので、二十年小石川柳町に引き移つた。三條內大臣の祝文、中村正直先生の演說、各宮妃殿下の御臺臨などあり、朝野の紳士淑女雲の如く集まつた。

爾後廿三年一夢の如し。今や上流子女三百五十名を網羅する一大私黌となり、近く花蹊老刀自の古稀の祝賀と、開校三十五年式とを兼ねて大なる式の開かれたのは諸君の知らるゝ通りである。閑院宮妃殿下は御詠を

一いはひて歌へ聲々に野邊の雲雀も鶯も
　五ッの春を七返り迎へしけふのよろこびを
二いはひてかほれ諸共に庭の櫻もやまぶきも
　千とせの坂にのぼるべきけふ七十路の山ぐちを

下し賜はつたも身にあまる光榮である。

閑院宮家の三女王殿下は現に御在學中なので、松方、柴、茂木の三令孃が御學友で此六名は特別教室で、特別教育をしてゐる。潮風生は同校參觀の砌、チラリと

覗がつたが、一方が食卓になつて、一方敎室を兼ね、淸礎な室であつた。

女史は老いて益々元氣である。毎朝早く起き出でゝ冷水摩擦を行ひ、一時間餘を散歩し、夫れより午後二時迄は雜務を處理し、或は繪を描き、なほ日課に法華經を寫し、つねに溢るゝ如き元氣を以て日を送つてをられる。先日余が大隈伯に逢つた時、伯は女史の事をヒドくほめて、吾黨の女傑ぢやと云つてゐられたが、此分では壽命も伯同樣百二十五歲迄は確かゝも知れぬ。そしてなるべくは高等女學校程度で滿足せず實力はこれ以上に向けやうと意氣込んでをられる。

△監督は極めて嚴重▽

校則のうちで一寸他校と異るは式日の制服である。

▲本校生徒は式日ごとに所定の正服を着するを要す。一上着。黑地五ッ紋(模樣なし)地質本綿。一下着。白地(模樣なし)地質キヤラコ。一袴。紫地(模樣なし)地質メリンス、又はカシミヤ

と定めてある。平素は別に制限はないから、午後二時の退校時刻には、衣香衿影、ずゐぶん目の正月が出來る。手俥を飛ばすもあり。乳母がお迎に參つてゐるのもあり。流石は跡見女學校だとうなづかるゝ。

本科の課目は

▲修身▲國語▲漢文▲數學▲英語▲習字▲繪畫▲洋畫▲寫生▲裁縫▲地理▲歷史▲家政▲唱歌▲體操▲禮節

などで、先づ一般女學校と大差はないが、流石花蹊女史の學校だけあつて繪の時間は多い。尙ほ別科として琴曲山田流、點茶(千家流等)挿花(古流)を授け、五年級生には割烹を實習させる制度だ。授業時間は朝八時から午後の二時迄(但土曜日は正午限)

學費は束修一圓五十錢、授業料は三年級以上一ヶ年三十三圓、一年以上二十二圓の二種に分れ、三期に分ちて前納する。別科授業料は二十五錢以上一圓迄——挿花が一番安くて、琴が一番高い。

寄宿舍は每室八名を定員とし、百名あまりの舍生を有す。每室から學術德行の優等なもの一人を選びて室母とし、監督の任に當るのだ。舍監は室母を總括すれば役目は濟む。

舍生は舍監の許なくて外出する事が出來ない。舍内には男子は如何なる理由ありとも入れぬ事となつてる。保證人には印鑑が渡してある筈だから、舍生に面會を求める者は、夫を携帶せねばならぬ——但、授業

中及點燈後は許されない。

たゞ毎月二回土曜日の午後から翌日の午後五時迄歸宅を許される。此時も印鑑を持つて來るべしと規定がある。一人で手ばなさぬと云ふ主義で、監督は特別非常に嚴密である。

も一つ風變りなのは居間の机の置き方で、故參が一番奥へ座を占め、新入ほど末席に置かれる習慣だ。舍生は又た私に金錢を所持する事を許されず、一冊三圓の切手帖を授けておき、舍内の賣店で必需品だけ購ふ樣になつてゐる。

△卒業生に才媛多し▽

卒業生にはもろ〳〵の皇族妃殿下を始めまつり、名流の夫人枚擧に遑なき程である。出身者の中で有志が校友會を編成してゐる其中から一寸見あたつたばかり拔いても。

毛利公爵夫人、山田(英夫)伯爵夫人、坪井九馬三博士夫人、三宅博士夫人(花圃)北里博士夫人、美濃部博士夫人、江副廉造氏夫人、岩下清周氏夫人、原英三郎氏夫人、増田義一氏夫人、棚橋一郎氏夫人志賀重昂氏夫人、千家尊福男令嬢

と云ふ風の顔ぞろひだ。何しろ開校以來三十五年と云ふのであるから、昔し女史に手を握つて敎へられた少女も、今は如何に白粉でも塗りかくせぬ、皺の波うつお婆あさまになつてる位ゆゑ、其娘も本校出身だなどと云ふのも別に不思議はあるまい。もう數年すれば孫を三代目の學生としてよこす樣になるであらう。學校もかう根が生えると。全く占めたものである。

會の機關雜誌を汲泉と云ひ、「古への野中の淸水ぬるけれどその眞心は汲む人ぞ知る」の古歌によりて命名したもので、年二回發行し、菊判百頁以上、表紙石版色刷、アートペーパーの口繪など挿んで用紙もよく文章も名士の部は結構(學生の作文は思ひ切つてまづいのがある。どこの學校も同じだらうがナゼだらう)色刷の附錄には會員の動靜、校友會記事。それに近頃始めた擴張基本金寄贈者芳名錄と云ふのが載つてゐる。


野の花

英國婦人の政治運動

某 歸朝者

△街路を壓する異樣の一隊

私が倫敦滯在中に尤も興味を以て見たのは婦人の選擧權運動であります。婦人が參政の權利を獲やうとするのは果して好い事かどうかは彼國でも大分議論がありますが、兎に角英國の或社會の婦人は、非常に熱心に、どんな高い犧牲を拂つても、之を獲やうとして奔走して居ます。

勿論やゝ御轉婆の樣には思はれますが、然し其運動は甚だ感心なもので、實に秋霜烈日の慨があります。殊に其の首領と仰がるゝ二三の婦人の如きは、天晴れ當代の女傑と言つても差支ありません。

最近に其運動を見たのは、私が歸朝する半年前、即ち昨年の六月二十一日の事でした。此朝私は妻と共に何氣なくハイドパークの方へ馬車を馳らせました。すると公園に近づくに從つて、段々人集りが多くなつて來た。町々、巷々が何となく色めき立つて、群衆の顏が何れも〳〵興奮し、何か非常の大事件が起つた樣であつた。何だらう〳〵と二人で不審がつて行くと、群衆は益々蟻集して來て、四辻などには、例の尖がつた高い帽子を頤で締めて嚴然とかまへた巡査が澤山配置されてゐる。終ひには馬車の通ふ路さへ塞げられて了つた。

やう〳〵押し別けて兎ある橋の袂に差掛ると、此處で異樣な一隊の行列に出會しました。其は百名ばかりの婦人のみの一隊で、各々白衣白帽の醉張とした甲斐甲斐しい扮裝をしてゐる。そして眞四角なギザ〳〵の刺繍をした大旗が四五本、尚他に各自に小旗を持つてゐた。その小旗といふのは、中央が白、兩端が目醒めるやうな紫と、綠で、其美しき旗を、日本の騎兵の持つやうな尖つた旗竿の先に一樣にヒラ〳〵と飜して行くところは、時ならぬ花畑が街中に出現したやうでし

た。

其の大旗の方には、大きく白抜きで、W、S、P、Yの四字の頭文字が現はされてあつた。此を目早く見付けた妻は、あゝ、道理で！ 今日は婦人選擧權運動の大會がある日ですよと申しました。成程その頭文字は「婦人の社會的政治的共和團體」とでも譯すべき熟字から拔いたものでした。其で私も初めて氣が付いて、此は好い機會に出遇した。幸ひだから見物して行かうと、益々押寄せ來る群衆を右に避け左に避けて公園の方へ進むと、同じ樣な婦人の一隊が、また違つた街から公園指して進んで來た。見物と巡査とは其を左右から挾んで雪崩のやうに流れて行きました。

△ハイドパークの大會合

扨て彌々公園へ着た處が、實に魂を潰してしまつた。人波が打つと言はうか、雲霞の如しと言はうか、さすがに廣き公園も男子の千差萬別の帽子と婦人の華かな帽子とが、秋の野の薄の如く入亂れて、身動きもできない有樣でした。其れから會が始まつて、例の白衣の帽子が、幾人か中央に高く突立つて演說したり、唱歌を唄つたりしたやうでしたけれど、傍に寄つて見るなどゝ云ふ事は迚も能きませんでした。

此會合を目擊して、私は此問題がいかに英國の朝野に絕大の興味を惹起させてゐるかと言ふ事を、泌々と感じた事でしたが、後で聞くと、其等の婦人團隊は、都合七個團隊が七ケ所の別方面から集つて來たのださうです。また一隊なぞは陸上の運動のみでは滿足せず、一艘の大艇をテームス河の浪に浮べ、此に例の大旗か旗を押立て、衆議院の側まで漕寄せて、公園に於ける運動に聲援を與たさうであります。

そして婦人團隊は、凡そ倫敦の市民にして此日の會場に赴かなんだものが一人でも有らうか、また赴いた者にして、此日の盛況を永久に記憶に留めぬ者が一人でも有らうか、と言つて誇つてゐました。實際是は威張られても仕方がありません。倫敦始つて以來、否、或は世界の歷史始つて以來、唯一の大會合であらうと

は英國の誰でもが認めてゐる處なんですから。

△首領パンクハースト夫人

其日の大會合で決議された事は、勿論、婦人にも男子同樣の選擧權を與ふべしといふ事でありました。之れはつまり婦人もまた男子の樣に自由を得たいといふ希望から起つた事で、此希望を貫く爲めに、明治三十五六年頃に初めて一つの團體が組織されました。其が所謂「婦人の社會的政治的協和團體」で、出來たての頃は、ほんの極く極く少數の母たる人や、娘さんなぞが會員として働いて居たばかりですから、一向世間の注意を惹かなかつた樣でした。

此團體の創立者と仰がれる婦人は博士パンクハースト氏の夫人ミセス・パンクハースト女史でありますが。現今英國にて女史ほど數多の運動に關係してゐる婦人は恐らく無いと言はれて居ます。夫人自身が既に鋭敏なる政治家的氣質を具へてゐる上に、夫博士も夙くから婦人問題に熱中して今から三四十年も前に既に第一回の婦人公民權案といふものを起草して議會に呈出した程の人ですから自然夫人は恁かる境遇になつたのでせう。

△集會を催す事五六百回

扨て會を組織して先づ恁ういふ事を決議しました。其は會員は何處迄も婦人に限る事、婦人たる以上は身分の階級と種類とは問はぬ事、の二箇條です。そして此が完全に實行されたものですから、此會員の親睦と協和の念は實に鐵の如く堅固になつて居ります。此等も皆パンクハースト女史の人格の感化と言つて差支へありませぬ。

で創立以來團體の爲した仕事を顧みますと、最初一二年間は僅に五六十の會員であつたものが今日は非常の增加を示し、野外の會合を催す事無慮五六百回、議會にも續々請願書を呈出しました。其の本營は博士夫人の住地なるマンチエスターにあつて、其處から凡て

の命令が發せられました。

△マンチエスターの紛擾

此の團體が發展したに就て是非共お話しなければならぬ事は今から四年前の秋にマンチエスターで演ぜられた活劇で、今迄徐々として振はなかつた婦人團體が勃然として奮躍したのは、實に其秋からであります。當時英國では自由黨が非常な勢力で政權を掌握せんとするやうになつたから、團體では自由といふ主義を同じくする上からも、此黨に縋れば婦人の選擧權を獲る事も出來るだらうと思ひました。其で偶々マ市の「自由貿易館」といふ處で自由黨の地方大會が開かれた時に、團體は此機逸す可からずとして同じく大會を同所に召集し、先づ自由黨の名士エドワード・グレー氏に向て、團體の委員に面會せられん事を申込みました。處が見事に跳付けられたものですから、此上は會場に出て聽衆の中で訴へるより仕方がないといふので、二人の委員が選定されました。其一はアンニー・ケンチーといふ婦人――此は僅か九歳の折からオールドハムの綿布工場に雇はれて自活し來つた勞働婦人で、他の一人は當時ビクトリア大學在學中のクリスタベル・パンクハースト孃(博士の長女)と云ふ花恥かしき妙齡の女學生でした。

△妙齡の少女の活劇

自由黨の大會が開かれたのは十月十三日でしたが、彌々グレー氏の演說が濟むと、委員のケンチー女史は數萬の男子を悔ともせず、毅然として立上り、「自由黨は婦人選擧權問題を解決する爲に果して如何なる準備を爲しつゝありや」といふ質問を呈出しました。が、他の問題はドン〳〵討議されるけれ共此のみは一向顧られない。其中書面で呈出せよと或人が忠告するから其通にしたが、此も却下されて了つた。女史は屈せず再び起立して再び絶叫した。此間委員の一人なるパンクハースト孃は片手で女史の腰を支へ、片手で女史を引摺り降さんとする壯士連を、健氣にも一生懸命防い

でゐました。議場は騒然雜然、混亂の巷と化した。「擲れ！」、「突落せ！」、「恥を知れ！」、否々、ヒヤ〳〵、滿場は立つて足蹈する、怒號する。而も其間に女史の晴朗なる聲は凛然として響渡つた、「私の質問！　私の質問！　私の質問に答へて下さい！　婦人選擧權問題に向て自由黨は……。」と突然二女史は數十の壯漢の爲めに館外へ摑出されて了ひました。扨て議論の靜穩になるを待てグレー氏は、婦人團隊の熱心は同情すべきであるが、彼等の要求する問題は今の處到底空想である、我黨は遺憾ながら此を採用する事が出來ないと演說しました。雖然、團體の方では承知しません、直ちに館外に抗議的會合を催さうと致した處が、警官が押寄せて來て、終に二女史を捕縛して、ストレンヂウエーといふ處の牢獄に投じて了ひました。

△本營を倫敦に移す

私は三四年前にも二三回此等婦人團體の行列を、倫敦市中で見掛けた事があります。彼等の或者は男子の如き服裝をして、栗毛の駒に打跨り、駒の橫腹には例の眼に付く旗幟を垂れて、悠々と打たせて步いてゐます。また、警察から放免された會員を歡迎する行列なぞはなか〳〵大したもので、二輪馬車の上に其婦人を乘せ、婦人の膝掛けは大字を染拔いた團旗を以てし、二三十人づゝの婦人の一團が此を率ゐて市中を步きました。

此婦人團體は保守黨內閣が瓦解して自由黨が代つて內閣を組織した時、如何にしても意見を貫徹せしめんとてマンチエスターから倫敦へ本營を移しました。そして第一回の婦人議會は倫敦のカツクストン館といふ所で開かれました。其時の評判は大したもので、百里二百里の遠地から參集する婦人は引きも切らず、また市中の高貴の婦人たちもどし〳〵傍聽に行きました。

△頻々として獄に下る

而も依然として、團體の意志は政府に採用されませんでした。次で總理大臣に無理强ひに面會を遂げやう



としてケンチー、ドラモンド二女史を初め四五名の者は再び捕縛されました。

此より先き、議員ケイル・ハルディス氏の提出に係る婦人選擧權法案は採用されて兎も角も議會の議案に上る事とはなりましたが、大勢は相變らず非で婦人の運動者は續々捕へられました。千九百六年、即ち三年前の十二月には二十八人、翌年二月には五十六人、其翌年の二月には百三十八人の會員が捕縛され、首領パンクハースト老女史も竟に牢獄に下る樣になりました。此等は皆決議を齎して衆議院に押掛けた罪に座したのであります。

彼等の目的は未だ貫徹されません。そして世人からも或は贊成を受け或は非難されて居りますが、此運動が將來如何に落着するかは注意すべき事と思ひます。

家庭に於ける母親の威嚴

私などが幼少の時代と今日とは社會の事情も違ひ、教育の方法も異つて居りますから、其の結果かも知れませんが、今の嫁達はどうも我儘が多くなつて來た樣に思ひます、それで多くの嫁達が如何な考を以て居るかと云ふに、今の母親の中には昔の教育を受けた方が多いやうですから、何事も現代の事には通じない、之を見習つて行くのは間違つて居るとの考へから、自然と母の權力を壓する樣な傾きがあるらしく見受けます、さうして父たる人も亦それを相當と思つて別段矯正しようとも致さない、それでは到底善良な女子となることは出來ないと考へます。

全體子女の善い惡いは母の躾如何に、大部分基づいて居ます、私が多年教育に從事して居つての經驗に徵しますると、之は善い嫁だと思ふと、屹度其嫁の母は賢母で、賢不賢は性質で已むを得ないとするも家庭に於る母の威嚴は一般に今少し重くありたい從つて子女に對しては嚴格でなければならぬと思ひます。

昔は嫁入りをするのは人生の大難事に赴く樣に考へて、充分覺悟して往つたものですが、今日の嫁達は嫁入りをすることを大層喜んで愉快なやうに思つて居ります、そして娘を與れる親達でも、先方に小姑でも多い處には可成與れたくない、若し與れるとしても何とか直ぐに分家でもする樣な條件でも付けなければ不可ぬと云ふ傾きがあるやうです、ですから、貰ふ方に權力がなくて與れる方に權力があります、之が爲嫁入つても其家の家風を學ぶなどは、却々出來ない、遂い一家の内に風波を起すことが珍らしくない樣に見られるのでございます。

男子の方も亦大學を卒業してから資産家の娘を貰つて、其處から金を出して貰いたい樣な考を持つて居る人もあるやうですが、こんな考へは斷じて宜しくないことです、私の學校の生徒で一人感心したのがありました、それは大層何事も能く出來る娘であつたから或る伯爵家から是非にと望まれたけれど、私は到底左樣な處に嫁付考へはない、私は遊むで世を送るを好まない、即ち夫婦共稼ぎの處が一番宜い樣に考へると云つて斷つて仕舞ひましたそれで其娘の母はどうかと云ふと却々の賢母でございました。

之と違つて私の知つて居る娘が或る人の處に嫁ぎました、その娘は禮儀と云ふことを少しも知らない、外の家に來ても「今ま來ました」と云つて突然大聲を發し上るより早く足を踏み出して膝轉げて仕舞ふと言ふ風です、ですから私は母の教育が一番大切で充分嚴格に躾ける必要があると思ひます(跡見女史談片)



花嫁の候補者

花散里

九月の女學世界を何心なくバラ〳〵と開きましたら三年後の同級生といふ記事が目に入りまして私も昔なつかしさに堪へられなくなりましたの、實際斯うして一年二年と母校に遠ざかる程なつかしさは増すもので時には木の葉ちる丸窓に身をもたせて學生時代の追懷にふけることも有りますし折にふれて舊い友を訪れて昔語に花を咲かすことも御座いますの、せめて左樣でもしなければ今の身が淋しくてたまらなくなるのですもの。

こんな婆くさい事を云ふつてお笑ひ遊ばすの？　あら私まだ實のところは漸つと一昨年卒業ましたんで御座いますよ母校の名？　それは明白には申し上げられませんわ、こんないたづら書が若しや先生のお目にでも留りましたら後で御眼玉はしれてますから……

私達三十餘人の一組は皆快活な無邪氣な人ばかりでそれはもう實に賑やかで御座いましたのよいたづらッ子揃ひでハイカラで級中が一致して居りましたので隨分惡いこともいたしました。惡い事ッていふと變ですけれど強盜や何かぢやないのですから御安心なすつて頂戴ホヽヽまあ一寸新任の先生の綽名なんか直ぐ付けてしまつたりSをしたり……今でこそ男爵夫人ですましてらつしやいますけれどあの御存じの多嘉子さんねあの方なんぞ中でも隊長でいらしつたんですよ。

私達が學課の中で嫌ひなのは教育學と倫理と數學でした、でも數學は眠るひまなんぞ有りませんけれど敎育ときたら觀念がどうの、何とかゝすべつたのつて、譯のわからない事ばかりですから忽ち上下のまぶたが仲好になつて、誰れでもほんとに困るんです、でもま

さかロクリ〳〵とポートレースなんぞ氣が利かないから教科書を前に立てゝ其のかげでたゞ眼をふさぎますのよ、それを知らずに口角泡をとばして御講義遊ばす先生こそ好い面の皮ね、いつでしたか私が歸宅つて此のことを云ひますと小間使の千代つていふのが、これをおつけ遊ばすとよろしう御座いますつて、わざ〳〵ピン入の薄荷を求めてくれましたの、私大よろこびで持つて登校て自分も、ためさないうちに、多嘉子さんに上げましたらね、あの方急にお眼が痛みはじめて、ほんとにびつくり致しました、先生がどうした〳〵つてお尋ねになるんでせう私胸をドキ〳〵さしてましたら多嘉子さんてば到々薄荷をたらしたのですつて白状なさるんですもの、親切もめつたにするものでは御座いませんわ。

　體操のことを考へますとよくまあ、あんな滑稽な眞似をしたものだと、つく〳〵をかしくなりますよ、たすき十字に綾取つて、右向け左向けはおろかな事、鐵砲代りに球竿かついで、新兵の出來損ないみたいなことまでまじめくさつて致しましたし……でもあの頃はそれをさほど滑稽とも思はずに號令のまゝに動いたのですから猶更をかしいわ。

　この春の同窓會の時、體操が一番お上手だつた杉原さんが上品なお髷に遊ばして赤さん連れて御出席になつたので皆で大笑ひいたしましたつけ、ダンスも好きで御座いますの、松平さんは毎年お宅で舞踏會をお催しになるし他の級友も鹿鳴館の會に出た方が多かつたので實に舞踏は盛んでした。

　私なども父と共に天長節に外務大臣の夜會に招かれるのが何より樂しみで今でもその日が待遠でたまりませんのよ、外國の大使館の方々がランサースを靜かにお踊りになるスタイルなんぞ……それから日向さんの奥様ねあのよく御似合になる洋装をわざと黒の三枚がさねに御替へ遊ばして艶やかなお髷の美しさ、實に當夜の呼物で御座いますわオヤお話が逸ワキ道に入りましてね御免あそばせ、、、ダンスつては隨分珍談が有りますが、百合枝さんておもしろい方でね、いつもド

ロップとか何とかキャンデーの類を紙に包んで袂に入れてゐらつしやるのその譯？　そりや一寸舌の裏側に忍ばせますのホヽヽところがポルカか何かしてましたら、はねた拍子に其のおたからがパラ〳〵ととび出してしまひましてねほんとにをかしう御座いました。でも先生がお怒りになつて恐ろしう御座いましたの常からお裾分けの恵に浴してるから皆で拾つて上げましたわ。



人様のことはかり素破抜いちや悪いから私のもつておつしやるの？　まあお人が悪いのね、エヽそりやいろいろ有りますけれど……何でも二月頃のこと、下品なことを云ふ様ですが私はあの海苔でくるんだ御餅が大好きなのでせうですから或るＨ臺所に頼んでお辨當代りにあれを燒いて貰つたとおぼしめせ、そして次は午食といふ前の時間にストーヴの下へソツと突込んでゐたゝめ

ときましたら目ざとい先生が引張り出して誰のかとおきゝになるんですもの、きまり惡さに名乘りもされずとぼけてましたら主がないならつて沒收されて實に口惜しう御座いましたわ折角樂しみきつてたものを取り上げられたので其の日は三枝子さんのサンドウキッチをわけて頂いてすましましたけれど……三枝子さんにも半分さし上げる約束でしたのであの方も一生懸命惜しい〳〵とおつしやいますのネ、、、意地がきたないとお笑ひ遊ばしても仕方がないわ。

理科の〇〇先生つて方はお丈の低い横肥りの逆ぼたるでおまけに大きなコブがおありになるのでいつも皆の畫材でしたの、私もその得難いモデルを目の前に置きながら其の儘にするのも勿體ない譯だと一寸お姿を拜借した罰はテキメン、天下一品の寫生畫を落しましてねそれがまた運惡くその先生の手に拾はれましたのでその當座は非常な逆鱗で、ほんとにビク〳〵いたしましたわ、でも誰のしはざか判らなかつたのでせめてもの幸福、もしも發覺した日には迚も卒業まで滿點の續くとは無かつたらうにと少しは寐ざめが惡ふ御座りますのよ。△△先生つてのもおもしろいんですよ、うすいおぐしを一本並べに油でなで付けてねよく〳〵白色がお好きと見えて背廣か何かに白ネキタイ、靴下まで白色を召すんですもの、其のくせカラーやカフスは茶色がゝつて居るんですよ、參觀に入らつした方などはよく事務員と間違へたり何か實にもう恥かしいわねといつも申したことで御座いますわ、でもなか〳〵腕が敏いので昨年の秋關西の某女學校の校長に御榮轉なさいました、きつと今頃はフロックコートに白靴か何かで反り身になつてゐらつしやるでせうよ、國語は割合まじめに勉强いたしましたの、受持は若いおやさしい女の先生でして敎科書の方はサッサと豫定だけ進めてそのあとでは源氏物語の御講義して下さるのでそれを樂しみに皆よくはげみましたんです。

音樂？　エ、大好き！！　四部の合唱なんかたまらない程大好きですわ、あの低音の聲はハイカラね、今でも折々は聲はり上げて心ゆくまで唱つてみたいと思ふ

ことも御座います私……？　ハア、ソプラノでした。
　習字の先生はお眼が近いのでちつと位ないたづらは知れないのを好い事にしてよく手紙かいて級中グルグル廻しますの、それにはいろんなことを書くのですおもしろいのよ。
　いつでしたつけ黒紬のお羽織の御紋が「キリツケ」とかいふのでしかもそれがフワ〳〵はがれかゝつて居ましたのよ何がさて目早い私達がどうして見逃すものですか後からフー〳〵吹きましてねほんとに腹筋よりましてよ。
　地理の先生はお話の中に「要するに」つていふ癖が有つてひどくそれが耳障りなので筆記なんぞ、、、そつちのけで「要するに」を勘定したら一時間に六十三遍おつしやつたなんて御熱心な方も御座いましたの。
　帝大出身の若い先生が一人ゐらつしやいましてね實に大變な人氣でした、生徒が皆をかしい位夢中になつて花束を上げたり無い用事を無理に作つて先生の下宿へ訪つたり、先生の方でも可愛い人なつツこい生徒とみると無暗にオハナに遊ばすんですもの、たまらないわ大學出てからやつと女學校なんかにウロ〳〵してる樣な方……と思へばほんとに興がさめますわねアラマア振られた返報なんてあんまりで御座いますわ。
　一週一度の割烹も樂しみの一つでした、けれど、お甘藷の皮もろくにむけない樣な者揃ひにどうして鹽加減や御飯炊が出來るものですか、どせうの骨抜きでは今も大わらひ致しますのよキャア〳〵云つて漸つとの思ひで裂くは裂いても肉は骨の方に付いてるからこれぢやア骨抜きつて云ふより皮むきだなんて割烹の先生がいつもお困りなさいましたつけ。
　鰺を一尾こしらへるにも庖丁片手にこわ〴〵俎の前に立つ恰好つたら……そのスタイルを想像してごらん遊ばせエゝ今ぢやもう女中の先に立つて鳥の毛でも何でも平氣でむしりますんですよ。
　それからディアとかペットとかつて下級の人と特別に仲好くし合ふことも隨分一時流行りましてね　お美しい方なんぞ二三十人もペットをお持ち遊ばすんで

すの、最初はレターや寫眞の交換からリボンでもお對にする位なのが追々深くなりますとふだんの袷もパラソルも果ては山繭縮緬の裾模樣をお揃ひに三越に注文して頂きませうなんて大變なことに成るんで御座いました。そして三枝や關口に度々行かないのは恥の樣になつてましたので私なども隨分よく親をせびつては出かけましたわ、舊大名の御姫樣方などはそんなことは餘りなさらないんでしたけれど私達の組にはそんな方は三人ほどで他は新華族だの博士だのゝ家庭のお子樣が多いので割合にお轉婆だつたんですの、この頃よく雜誌にお姿の見えます延枝樣ね、あの方なんぞ軟體動物の例をと云はれて直ちにはんぺんとお答へになつた程の才媛ですもの關口の商品なんかすつかり覺えてゐらしつて商品目錄つて綽名さへお有り遊ばしたのですよ、ハアさうよ、よく有樂座へお出かけになるあの方で御座いますよ。

　おめかしはしても皆實に子供らしかつたのでしてね他の組の方々の樣にこんな人が理想だのどんな處に嫁きたいのつてそんな事などいふ人は一人も御座いませんでした。ブランコには十八の春卒業間際まで平氣で乘つて居りましたの隨分でせう。

　運動會だのボートレースは帝大のだけには缺かさず大勢連れ立つて出かけました、だつてあの裾みじかのお袴にバンドしめて、マガレツトか何かのお茶の水の生徒が澤山おいでになるのが憎らしいつて皆私達の方では申すんですの、ですからわざとこちらでは胸高のたて矢の字に髮も上品な唐人髷お振袖の胸にはプラチナまぢりの鎖をきらめかして大勢がゾロリと揃つて出かけましたんです私達にはお茶の水と虎の門とがまあちよつと商賣がたきつていふ樣な工合で、絕えずにらみ合つて居りましたの、今から思へばそれもこれも皆なつかしい追懷のたねなので御座いますわ。毛利さんですか、あの方だつて矢張り一ツ穴の何んとかですの……

豐作の歳に農家の生活を現した女の日記

小萩女

△稻刈りの一日

星の數が一ッ消え二ッ消え遂に殘らず消えて仕舞ふと、東の空が白う光つて、薄暗かつた天地は漸々明け行きて幽玄な曉の風色は實に氣持がよい、そよ吹く風は冷やかに襟元を拂ふて何となく氣が悄々する、次郎の家にも太郎の家にも皆起き出て、金波ゆらぐ田の面に鎌を提げて下り立つのであつた、私の家も稻刈りで家内揃つて刈穗にと出掛けた、今日は日曜を幸、良人も局が休みなので手傳つて貰ふので賑やかで有つた。

今年の稻の出來樣は殼が三尺穗が二尺、一鎌刈れば千石有ると童共が謠つて行く、實に豐年を形容した俚諺で今年の樣な出來秋を云ふので有らう、何處の田も彼家の田も稻穗ゆたかに實入よく、黄金色に出來て居る、人は實が入ると反り身になつて歩行くが、稻穗さんは實が入る程下を向くとは比喩的の言葉では有るがよく人情を穿つて居る、誰れでも金が出來て實が入ると兎角人を見下げ横柄になり易いもので有る、今年の稻穗は實入がよいので皆地に付く許りに首垂れて居るのは誠に謙遜の風情が有つて嬉しい、

去年は大風に喰はれて白穗が大分出來た、加之に根蟲が入つたので仆けたのが非常に澤山有つた、今年は風も無ければ蟲も付かず、加之天候が順當に行つたので近年ない大豐作で有る、お父さんの咄によると、ここ十年程が間に今年位出來の好かつた年はないとの事で有る、同じ稻刈りでも今年のような稻を刈るのは張合が有る、昨日刈つた一反五畝の田に去年はたつた二百しか無つた上げ把が今作は殆ど三百近く有つた、今日の田には何程有るかと、お父さんの問題に、お母さんと良人と私とが近寄せをした、お母さんが三百と被仰ると良人がまだ多い三百二十は有ると答へる、私は

昨日のと反別に大差が無いのでお母さんの方へ同意をする、お父さんはと聞くとまあ〳〵其處等かなと云はれた。小春日の暖かい太陽が脊中からぱかり〳〵と照つて來る、去年の稻刈りにはピウ〳〵風が吹いて、手に足に泥が一杯塗いてそれが冷たい風の爲めにひゃとなり、皹と切れてなか〳〵辛らかつた事、それに引換へ今年のお天氣續きは誠に上都合で有る、お父さんが昔しの歌を出すとお母さんが其後を附ける、良人が流行り歌を謠ふと私しがはやす、斯うして今日の一日を面白う樂しう良人と打ち連れて稻刈りをした、刈り終つて畦に出て上げ稻を數へると案外にも三百と餘りが三十五把も有つたので、良人が大得意、外の者の見當違ひを冷やかすと、お父さんが斯んな見當違ひは度々有るがよいといつて笑はれた。

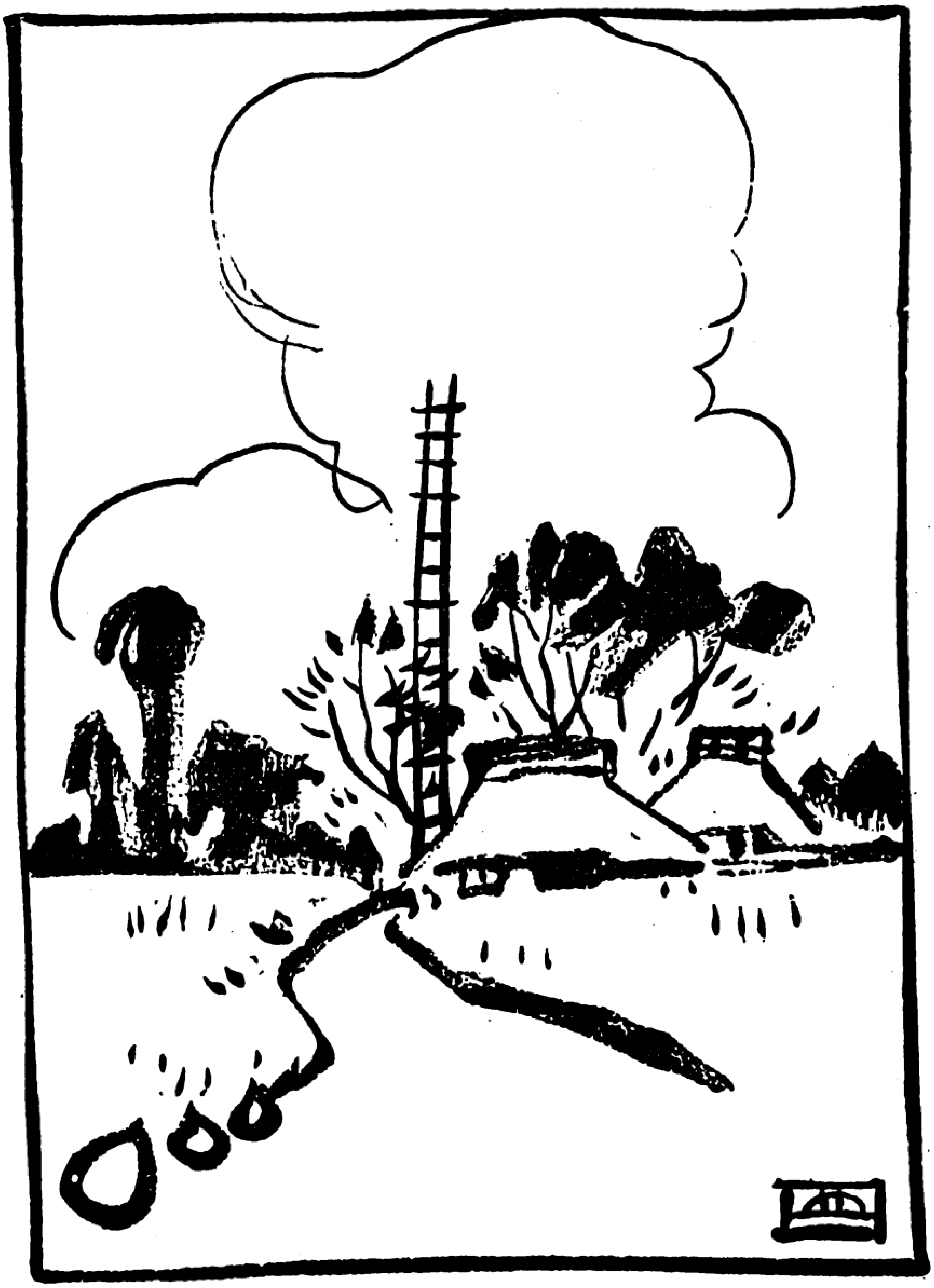
向ふの松の枝で鳥が淋しさうに鳴く、生名山の谷合に入日がぱつと當つて、櫨の紅葉が目覺しい色に映える、と見る間に直に消えて次第に太陽の光線が薄らぐと、黑胡麻を蒔いた樣に出て居た人の影がいつとも無く數少なになつた今暫しで野は無人の境となるので有る。晩のお菜にと思つて大根畑に立寄つた、根の大きなのを撰つて引いて見ると中々拔ぬ、それも其の筈、月の二日から今日で殆ど一ト月と云ふもの雨が降らぬので土がから〳〵に乾いて濕り氣が無くなつて居る、女の弱腕では一本の大根も中々容易でない、もう雨が欲しい時分で有る。

△雨の日記

ゴーンと鳴るお寺の鐘に目が覺める、此頃の長い夜でも矢張り眠むい、お年老は夜が長い夜が長いと被仰るが私には左程にも思はぬ、年が若いからで有らう。風も收まつて極靜かな朝で有る、雨戸を繰ると戸外はまだ薄暗い、夜明けの明星樣が眩ゆさうに覺束ない光りを放つて居る、

お茶を沸かして居る内にさしもよかつた天氣は何處からともなく雲が出て來て、空は一面に薄墨を流した樣になつた、昨日の事、幸榮丸の船頭さんが此暖みでは

雨が近うござると話して居たが、實に船乘りは能う晴雨を豫知つて居るものであると思ふた、果して朝飯の濟だ頃からぽつり〳〵降り出した、今日は大根を引いて香々の仕度をと思つて居たのに此雨で中止した、而し却て土が軟くなつて幸で有る。例日の通り八時十分前に良人は局へ出勤、それからお父さんは裏の納屋で藁仕事、お母さんは叔母さんの宅へ話しに行かれる、英さんは學校へ行く、家は私一人取り殘されて淋しい秋の室内に火鉢を前に縫かけて有つた羽織を取り出した、



ぽたり〳〵雨垂れの音が淋しう土を敲いて居る、藁打つ音が納屋を漏れて來る、障子の硝子から透けて見ゆる畑の中には二三本名殘りの茄子が花はもう跡なく散つて小指程の小さいのが梢に二ッ三ッ、芋の葉は此頃の寒に凋んで恰ど冷氣の前に降伏して居る樣な趣が

ある、木々の梢に黄ばんで居た葉は大方に落ち散つて葉のない柿の枝先に熟柿がたつた一ツ眞紅になつて早もう落ちさうにぶら下て居る、向ふの鶴山も大分裸になつて骨が出たのが煙る樣な雨の中に見える、秋は何となう淋しいもの加之こんな雨の日などにたつた一人話し相手もない室内で悄然として居ると一層の淋しさが身に迫る樣な心地がせられる。

庭の障子が開いたのに振り返つて見ると新宅の玉さんが姉さんと云つて這入つて來た、玉さんようお出で此方へ來てお暖りと云ふと、ニコ〳〵笑ひ乍ら小さい楓の樣な手を火鉢の縁へ差し出してちんと坐る、私は淋しい折よい相手が出來たので色々の話しをする、先ふさんもお構へなしに、今日お母さんが茶碗こわしたの、姉さんが煙草盆を轉覆り返して灰神樂を出來してお父さんに叱られたの、兄さんが明後日兵隊さんに行くのでお祝に明日は親類中呼ぶの、姉さんも來て下さい、肴も今朝から澤山買つたのよ、など色々の事を出鱈目に喋舌る、私は針を動かしつゝ聞て居たが玉るん淋しさうなので林檎を出して上げると、嬉しさうにほんのり赤い頰に小さい笑くぼを作つて頭を下げると其儘直に立上つて歸つて仕舞つた、玉さんは何時見ても可愛らしい子だ、あゝ私もこんな可愛らしい子供が一人も二人も欲しいものと羨ましく思つた、何日の事で有らう?。

夕方に大阪のしげさんから手紙が來た、別に變つた事もなく只時候の挨拶と無沙汰の詫が書いて有つたので、賣言葉に買言葉とやら、同じ文句の返書を出して置いた……。

△風邪の日記

病人と云ふ程の病人ではない、ほんに少しの風邪で頭が少々痛いだけの事、強て起きれば起きて居られぬ事はない、御飯を炊いたりお菜をこしらへる位の事が出來ぬではないけれ共、母樣が用心するがよい病は總て輕い内に養生せぬと却て癒り難くなる、それに風邪は萬病の基だと言ふから何でも早く熱を取るがよい、

病を押してはいけないと被仰つて無理に休まして下さる、お母さんにお世話をやかして私がかうして寢て居るのは誠に濟まぬ樣な氣がする、其れも大病なら仕方がないけれ共、、横になつた儘色々の事を思ひ出す、昨夜もお母樣からお小言が出た、お前の樣に馬鹿に仕事をするものが有るか、身體を構はずに働いては後で障る、風邪の氣味でも有る樣ならなせ早くから藥を呑んで熱を取らぬのか我身知らずが、と叱られた、妾は此小言を受けて嬉し泣きに泣いた、世間の姑は、平生から箸の上げ下げに迄嫁いぢりをし、少し長い病氣でもなると厄介者扱ひ、やれうちの嫁は仕事が仕度くないからだのやれ遊び度いからだのと邪慳に當り散らすのに、私の姑御は平常仕事が過る體を大事にせよ餘り精出して障つてはいけぬと云つて下さる、少し風邪でも引くと藥を呑め用心せよと注意して下さる、それを押して居るとつい昨夜の樣に馬鹿だ身知らずぢやなど叱られる、けれ共同じ叱られても他家の嫁とは叱られ樣が違ふ、こんなよい叱り樣をする姑がまたと世間に有るであらうか、私はほんとに仕合せ者である、今朝も熱が有る樣ならお醫者樣に診察貰ふがよいと被仰て下さつた、根が健康な質なので何の是しきの事に藥など呑まぬでも直によくなるとは思つたけれ共、母樣のお言葉を無にするのも本意でない、振出しを一包貰つて呑んださうしてお醫者樣の方はよしにした。

小春日の晝過ぎて暖かい日光が障子に照つて室内は氣持のよい程明るくなつた、天井を見詰めて居つたがいつの間にかうとり〳〵夢路を辿つて居た、不圖目が覺めて見ると僅かの間しか眠らぬと思たのに柱時計はぽん〳〵と早四ッ打つた、短かい秋の日はもう暮れかけて居る、パッと夕日のさした障子に寫つた梅の枝に何鳥かちゝと囀いて止まつたが直に又何處へか飛び去つて元の梅の枝ばかりはつきりと殘つて居る。

又色々の感想が胸に浮んで來る、常ならもうお夕飯の仕度をして居る時分ぢやと思ふて居ると臺所の方でこと〳〵俎板の音がするお母さんが何かして下すつて居るらしい、ほん統にやさしい人、私が此家へ來た時

に人が私の事を噂して居たのを聞いた、あの娘は本統によい内へ嫁つたあの娘には過ぎる家ぢや、あんなよい親を持つのは矢張りあの娘の仕合がよいのぢやなど云つて羨んで居たが、誠に波風の立たぬ平和な家庭で有るのは全くお母さんのお心柄がやさしいからであるといつも思ふて居るが、此樣ときには尚更思はれる、家こそ富裕と云ふでは無けれ共村中で一番の平和な家庭と許されて居る、他家の不和が起ると直に我家の事を引合に出して對照される樣になつたのは誠にお母樣の御心がらである、私がかうして寢んで居ても始終親切を盡して下さる痒い所へ手が届く樣にして下さる、常でも不束な私の樣な者がする事でも默つて辛棒して下さる、少々の落度が有つてもツイ八ヶ間敷い事は一切被仰ずに、あれはあゝするものぢや、是れは斯うする樣にせよと叮嚀に敎へて下さる、これが他家の姑さんの樣に若しお母さんのお心がよくないで何でも彼でもつらく當られるとして見ると、なんぼ私でも終に自烈て來て、エーまゝよこんな無理を云はれて直に服從する事が出來るものかと、ツイ口返答をする、それが重なつて不和を起す、小言が絶えぬと云ふ樣にならぬ共限らぬ、いや屹度なるに違ひない、それがかうして他家から羨まれる樣な平和な色がいつも褪せぬはお母さんのお心一ッに依ると云ふもの、私でもかうして親切にして下さると尚々じつとして寢て居るのが勿體ない樣な氣になる、何でも早く起きてお母さんの手傳をせねばならぬがと云ふ心が自然に起きる、斯んな氣が起きるのも矢張りお母さんの感化を受けたからであらう。



神に救はれつゝある哀れなる姉妹の話

平井絹子

姉は逝きました、姉は私一人を殘して逝つて仕舞ひました、私の胸に生涯消す事の出來ぬ深い〳〵教訓を刻み付けて。世の戰ひに疲れ果てた時、今は遺品となつた姉の手紙を繰り披げて見ると、胸一ぱいにつかへて居つた塊が、詫しい熱い涙に溶けて、聲もなく沁みじみと胸の中を流れて降ります、僅か計りの勝利に心が傲つて、兎もすると易い途に就かうとする時、此の手紙を見るとキユツと身體が引き緊つて、何とも云はれぬ刺戟を感じます。姉の血と涙を學資にして、苦學三年、やう〳〵の思ひに高等の教育を受けた私は、宗教にも、哲學にも未だ安心立命の境を見出す事が出來ず、姉の手簡――田舍の小學校を卒業した丈で、餘は獨學の姉が人目を忍んで屑紙に走り書きの文、此の中に聖き神の愛と、限りなき人間の努力とを見出しますのです、私にとつては之れは聖書です、法華經なのです。もし此の手紙を御覧になつて、お一人でも谷間に咲いて谷間に朽ちて仕舞つた花のあつた事を知つて下さるなら、それで私は本望です、地下の姉もどれほどか喜びませう。

◎姉より東都に苦學の妹へ

酷い暑さですね――腦の工合がよくないとの事、心配でなりません、山田樣から聞きましたが、用事の爲に徹夜する事が度々ださうですね――繼お母さんの手に掛かつて、氣兼ね氣苦勞には慣れて居たが、身體の苦勞はした事のないお前故、どんなに骨が折れるかと思ひますが、どうか一旦志を立てゝ家を出たからには、飽迄辛抱し通して下さい、神樣はお前と一緒に居られます、私は朝も晩も御前さんの事を祈らぬ時はありません、餘計に苦勞をした人でなければ、人並より優れた人にはなれませんよ、私はお前がどうか少しでも多く神樣の御心を行ふ樣にと夫れ計り祈つて居りま

す、淋しい寄宿舎で、故郷の事のみ思ひ出して居るとの事、皆さん方は暑中休暇を待ち兼ねて、九州北海道の遠きを、厭はず、親御樣方の御無事な御顔を見に、御歸省なされた中に、お前さん一人暑い東京に殘つて一日の休みもなく牛乳配達やら勉強やら、さぞ〳〵と思ひます、其の事を思ふと私は本統に休まれません。

早いものですね、お前が家を出てからもう三年です其の間姉妹の間の文通さへ表面には叶はぬ樣の仕儀故、猶更歸り度くもなるでせうが、もし本統に歸れたら、屹度御前さんは後悔するでせう。今の家庭は御前さんの居た頃の家庭とは違ひます、あの頃は店に番頭も小僧も、奥には仲働きとおさんと置いてありましたつけね、其の外鳶の頭や、大工の棟梁や、清元のお師匠、御茶の先生、人出入も多くにぎやかでしたが、今では番頭にもおさんにも私一人です、誰れも寄り付きもしませんお母さんは五人の子供の世話がしきれません始終肝癪を起したり、口小言を云つて居られます。お父さんが働きがないからと口癖に申されますが、商人が商賣で損をするのは當り前です、それより私は一家が和合して居らず、銘々勝手な事を致して居つたから、こんな事になつたのだらうと思ひまして、お父樣が御氣の毒でなりませぬ、お父樣は俄にお年寄られました。

毎日近村の學校廻りをして、本の御注文を受けて參られます、引割麥の御飯にたくあんを刻んで、香を盗んで削つた花がつをせめてもの心盡しの御辨當、ああ男であつたならもう少しはお役にも立たうにと涙が流れます。先日お前さんのばあやがお前さんの安否を氣遣つて六里の山路を杖に縋つてわざ〳〵參りました其の節母上は矢張り

「あんな者には用はない、骨になつて歸つても此の家の敷居はまたがせぬと」申されましたさうな。

「私等から見りや、あんな強慾爺の嫁にならんで、苦學しとりなさるなあ天晴だと涙が零れますのに、繼母と云ふものはなし」と

乳母やは泣き〳〵申ました。忘れても學業半ばで家に

歸りたしなど思ひ給ふなよ神と共にあらば至る所故郷です、神樣は我慢のしきれぬ程の運命は作り給はぬものですよ、忍べぬ運命はないものです。私共の運命ばかり斯う嵐や雪の多いのではありません、之れが普通の運命でせう、神樣が私共に忍耐力を與へ給はん爲に困難をさせて下さるのでせう。

五厘切手二十枚三錢切手十枚送ります、何か送りたいが御母さんの目が嚴しくて駄目、



身體を大切にして下さい頼みますよ、夜が更けたから今夜は之れで止めておきます。

八月十三日夜
姉より

きぬ子樣

○

來年卒業の後もう二年程英語をミッシリしたいとの事ですが、出來る事ならばさうしたいけれど、今の處ではどうしても都合が出來ません、來年の三月迄續けるのが中々の心配ですよ月に六圓か七圓の事ではあれど、私の收入とて

は一文もないから骨が折れますよ、いくら骨が折れても出來る事ならば爲やうけれど、身を絞つてなりと御前さんを立派に仕上げないでは、亡きお母樣に對して面目がありません、姉は死ぬにも死なれませんけれど堪忍して下さい不甲斐のない姉を持つたとおもつてどうぞ斷念めて下さい。

一緒に牛乳配達をなさる方が、いゝ、ずるい事をしてお前さんに迷惑ばかりかけるとの事どうも困りましたね、どうしたらよいかとの御尋ね、私は親切に其の方の爲に考へ、働いて其の罪を贖つておあげなさいと御奨めします。人に眞から親切な人は少いものです、けれど人に親切にさるゝを好かぬ人はもつと少いものですから。盗人でも自分の箪笥の鍵は正直な人に預けたがるのが何よりの證據です、「心には願へども其の肉弱きなり」とキリスト樣は仰せられました、馬鹿な子程親は愛します、不親切な人は愛の缺乏から來たものですから、どうか缺けたのを滿たしてやりなさい、神樣はちやんとお前さんの身の上を見てお居でなさります。ですから、くだらぬ事に心を碎かず勉強を專一にして下さい

拾圓封入して送ります、寒くなりました、着物を寒くない樣にして下さい、いそがしいでせうが、時々樣子を知らして下さい、何より夫れが樂しみです、申越しのウエブスター辭書と萬年筆は近日小包で送りますが、人目を忍んでする事ですから中々思ふ樣になりません

十月廿五日　　姉より

姉の臨終（妹より友へ）

つゞけ樣に三回モヒ注射を施され候爲、只今姉は少し落付き、微なる聲にて呻吟致し居り候、此の暇にと急ぎ筆をとり候。姉危篤の飛電に接して夢心地汽車の五十里、今日日暮れ方三年振りの歸宅に候。感慨無量に候。姉の病名は慢性腹膜炎、斯程迄にならぬ間に、治療せしならば、斯く晝夜を分かぬ苦しみ致し、生ひ先長き生命失はでも濟むべかりしを、昨日より苦しみ通し、臥床の四周を半死の人は立ちては倒れ、はひま

わり、うつぶし等して身を悶ゆるを、手を束ねて見て居らねばならぬ妹の不運御察し下され度候。

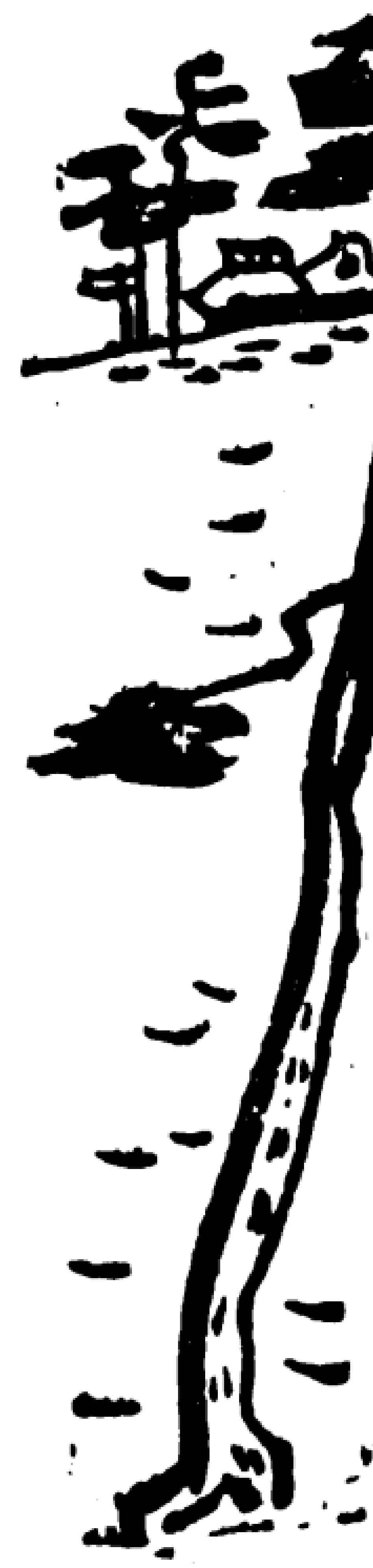
姉に逢はんと、息ある中に相見て恩を謝したしと、歸るなと云はれし家へ歸りし妹は、其の人とは思へぬ迄瘠せて垢づきたる病人を前藏の小暗き片隅に見出して、慰めはえせず、聲を擧げて泣きしのみに候。「逢ひたかつた、逢ひたかつたあゝお前にはもう逢はれぬかと思つて居たのに、あゝよく來て呉れたねえ」と片息に云はれては猶更涙止め難し。腹部に疼痛始まりしは昨年夏よりとの事、東都に學ぶ妹が心ひかれん事を思ひて、斯かる際迄無事とのみ書きし文を、妹は只眞と思ひて書物を送れ、萬年筆を送れと云ひ、お小遣ひをねだりしを思ひて泣き候。失禮なる御話ながら屈從と遠慮の幾年を、父の爲に妹の爲に忍び候姉は、今日明日と申すに便器をよう用ゐず、蟲のうごく樣にして、縁づたひに參るにて候。肩貸して扶けて參り候折、明るき世界に始めて姉妹顏見合はせて泣き候、明るきに見れば姉は猶更此の世の人とは見えず、誰が爲に血と涙を絞りてと、妹は肥えて血色美はしき身を恥ぢて泣き候。

「病人が可哀想故看護丈は許して上げます、後の事は解らないのですから」と家に着くや母より申渡され候猶昔のまゝか母の心。あゝ今鐘がなる……鐘がなる……初夜の鐘……三年振りに聞く鐘の音、此の鐘數へて姉も我れも人となりぬ――鐘樓を東に二十歩其所に我れ等が母は眠れるを……鐘が鳴る……音の波紋を夜の暗に擴げて……此の鐘樓の下姉も又……覺えず身慄ひして暗き行燈の火影を見返へりぬ、あゝ永久の眠り、久遠の命、我が姉はいづれぞ

二月八日　きぬ子

みつる樣





古今の和歌にあらはれた
秋の月

金子薫園

秋は今最中です。空高々と紺青の色に澄み渡つて、野は百千の花に錦を織るやうです。風颯々と吹いて、秋の氣は身内を引き締らせます。秋は心の落ちつく時です。じつと物を考へるに好い時です。水のやうな夜氣も確かに秋の特色ですが、もつと〳〵特色のあるものがあります。それは月です。月は一番よく秋の心持を表はして居ります。月といへば直ぐ秋の月を聯想させますやうに、秋と月との關係は深いのです。古今の有名な詩歌に此月を詠じたものゝ多いのは、最も詩人の清い心持を動かすからです。實に月位人の心持を多感ならしめるものはありませぬ。然うして、此の月の景色を寫し、月に對する心持を言ひあらはすに、和歌は最も適はしい形です。觀た處、感じた處を、その儘描き寫すに、最も都合がいゝので、古今の歌に數限りなく詠まれて居ります。そこで、此等の歌には月が何う云ふ風に描かれて、又何んな心持に詠まれてあるかを檢しようと思ひます。

わたつみの豐旗雲に入日さし今宵の月夜明らけくこそ　　天智天皇

これは大きな、ゆつたりした御歌です。廣々とした、何と云ふ善い心持の御歌でせう。胸のくさ〳〵する時など、此御歌を高く誦み上げると何とも知れずせい〳〵して來ます、月の歌は前申しましたやうに數限りもないのですが、此御歌位壯嚴の氣に打たれるものはありませぬ。此御歌は月の出る前、即ち夕方に今宵の明月であらうと云ふ事を想像したので、未だ月夜の景色に詠み及ばれては居りませぬが、明らかなる月夜の光景は言外に歴々とあらはれて居りませう。月の歌を出す前は、先づ此月の出の前の御製を御出し申したのは、之を通して、大なる月夜の景色を想ひ浮べますからです。「今宵の月夜明らけくこそ」と堂々とした想像を加へられた處に、月夜の大景を偶ふに餘りあると思ひます。

さて此御歌の意味ですが、大きな夕陽が遠い西の海に沒しやうとして、豐かに旗のやうに棚引く雲を、黄や赤やに染めて、夕映の壯觀と言つたらない、此夕映の壯觀の景色を眺めて、さても今夜の月は明ら

かなことであらう、いや明らかに違ひないと云ふ餘情を含められた御作であります。力が一首の隅々に滿ち渡つて居られますが、それが露骨では無い、どつしりと、落ちついて、何處までも帝王の御製であります。今上陛下もよく御歌を遊ばしますが、矢張り大きく堂々とした處があらせられます。天下萬衆の上に立たせられる御方の御詠み振りとして、感嘆申し上ぐる御歌を拜見し奉るのです。

月夜よし河の音清しいざこゝに行くも行かぬも遊びてゆかな　　大伴四綱

これは田舍から都に上る人があつて、それを見送つて途中で詠んだのです。月がいかにもよく澄みわたつて、流れる河水の音が耳に清く聞える、もう此處らで御別れをしなければならぬから、遠く行かれる貴下も、引き返す吾々も、こゝでしばらく遊んで行くことにしようと云ふ意で、いにしへ人のおほらかな、無邪氣な心持がよく表はれて居ります。「月夜よし」と云ふ一句に、月が明らかに照らして居る狀景を伺はしめる、更に第二句の「河の音清し」と云ふに至り、其邊りの景色がよく表はれて來る、遠い昔人の淳樸なさまが、おほらかな月夜の景色の中に融化されて居ります。

あかなくにまだきも月の隱るゝか山の端にげて入れずもあらなむ　　在原業平

有名な業平朝臣の作です。自分は未だ彼の月を見飽きもしないのに、早くも隱れて行くことであるよ、それ〳〵月の隱れて行く彼の山の端が逃げて月を入れないようにして呉れると可いが……と、傾き行く月を頻く惜しんで詠んだものです。即興の豊つとした感じではありますが、朝臣の性格の情熱的な處が伺はれます。「山の端にげて」と云ふやうな考へも、言ひ方も、此當時としては大膽であつたに違ひありません。朝臣は當時新派のチヤキ〳〵であつた事を想ひ浮べさせます。

秋の月光さやけみもみぢ葉の落つるかげさへ見え渡るかな　　紀貫之

秋の月の皎々と冴えわたる光に、もみぢの葉の一片二片落ちるその狀までも、明白に殘す所なく見えると云ふのであります。いかにも明るい作です。二句の「さやけみ」とあるに對して、五句「見え渡る」と云ふやうに、曲々しい理窟を示した作が、此作者の家集の全部を占めて居ると言つても可いのです。

月見ればちゞにものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど　　大江千里

殆んど誰も知らぬ人は無いと云ふ位に、人口に膾炙して居る歌です。秋の月に對すると、何んだか知らぬが、いろ〳〵と物悲しくなつて來る、自分一人の爲めの秋ではないのに……と云ふ意味です。秋は悲しいものである、其月影に對ふと、いろ〳〵悲しい感じの起るものであると云ふ法則を示したやうな作で、「ハヽア左樣ですか」と引き下る外はないのです。つまり分りやすく俗耳に入り易いので、有名になつたに過ぎません。

風吹けば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕月夜かな　藤原忠經

風に吹かれて、枝がぐら〳〵する、其木の間から夕月がちら〳〵見えると云ふ景色を歌つたもので、繪のやうな趣を呈して居ります。餘り巧を弄さないで、美くしく細かに描かれてあるのが取柄です。二句の「枝やすからぬ」と云ひ、四句のほのめくと云ひ作者が細心の著眼を察しなければなりません。可憐の作であります。

雲はみな拂ひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな　藤原良經

空にたゞようて居た浮雲は、殘らず秋風に拂ひつくされた、その拂ひつくした秋風の名殘りが松に動いて居る、然うして、その松の上に澄み渡る月を見ることであると云ふ意味です。四句の「松に殘して」と云ふのが、一首の面白い言ひ方で、五句の「月を見るかな」は落ちついた言ひ方をした處なのです。秋の月らしい心持が出て居ります。新古今集の中で名歌に數へられて居る作です。

秋風に夜のふけゆけば久方の天の河原に月かたぶきぬ　源實朝

秋風の吹く中に、夜が次第に更けて行くので、今出てゐる彼の天の川の邊りに月が傾いたと云ふのであります。「天の河原」とあるので、秋夜の涼しみを備へて居りますが、其處へ月影が傾いたと云ふので、一層の涼しみを覺えます。無雜作にいかにも自然的に言ひ下した處が面白いのです。

吹きわくる竹のあなたに月見えて籬はくらき秋風の音　親子內親王

親子內親王は玉葉集、風雅集に散見して、女らしい細かい著眼の、凡でない事を證明して居ります。そこで此作ですが、山里の家などで結んである垣根の近くに一むら竹が生ひ繁つて居て、その竹の葉を吹き分

けて、遠い彼方が明るい月夜になつてゐるのが見える。然うして、こゝの垣根の内は暗く秋風が何か音を立てゝゐる……と云ふのであります。景色の稍ゝ複雑した作で、「庭はくらき」と云ふ着眼が妙です。一寸女性ならでは得難い見つけ處があります。

播磨路や夕霧晴れて久方の月おしてれりいなみ野の原　　賀茂真淵

播磨路にかゝつて来ると、丁度夕方の霧が晴れ渡つて、いなみ野の原は、一ぱいの月であると云ふのです。大きな明るい景色が目の前に開かれるやうで、調の高い、堂々とした詠みぶりです。

松陰にたちかくれても見つるかなあまりに月のくましなければ　　香川景樹

此作者は前の作者と並んで、徳川時代に一流の名を博した人です。月が照り渡つて眩しいやうに明るいので、とある松の蔭を求めて、そこから月を見たと云ふのです。才気のある詠み振りですが、厭味がなく白日の如く輝やかしい月光のさまを十分に描き盡して居ります。言葉遣ひも、やす〱と、興じて作つたと云ふ跡が、よく見えて居ます。

いにしへを月に問はるゝ心地して伏目がちにもなる今宵かな　　大田垣蓮月尼

前の作者の系統を引いた人で、明治の初年まで生きて居られました。さても今宵の月の明るいことかな、何だか過ぎ去つた自分の所業を訊されるやうで、自然に頭が垂れて来ると云ふのです。優しい、はかなげの女心を言ひ顕はしてあります。月に対する感想が、近代の風になりかけた處に、注目すべき値ひがあります。

おなじ月をおなじ川瀬におなじ友と今年の秋も来て見つるかな　　落合直文

「おなじ」を三つ重ねて、感じを強く出さうとした作で、よく其所期を達し得て居ります。「今年の秋も云々」と云ふ句の裏には、二人共無事で斯うやつて、揃つて見に来られたのは、何たる仕合せの事であらうと云ふ歓躍した心持が含まれて居りませう。昔のに比べて確かに思想が複雑して来ました。尚、つゞいて所謂新派側の作に説き及ぼし、更に思想の複雑して来た事を説明するつもりでしたが、紙数の都合で又の日を期して述ぶることにしました。

次回には季節にしたがつて、「春」の歌を紹介することにしませう。



新式和歌作法(三)

想美を捉へる方法

停春

以上述べた直覺的把美術には術が有つて無い樣なものであるが、又別に研究の結果として、一定の方式に據り、想美を把捉する手段がないでも無い、

△詩材を擇ぶ事

それに就て第一に注意すべきは詩材を擇ぶ事である。宇宙の萬有悉く詩的であるとは謂へず、社會百般の事悉く詩的美感を惹くと謂へない以上は、歌に詠めるものと歌に詠めないものを擇り分ける必要がある。又歌に詠めるものといへども、詩的美感を惹くことの多いものがあり、少ないものがあり、或は詩的美感を惹くことの多いものゝ中でも、已に人に詠み古るされたものがあり、然うでないものもあるから、之れは十分撰擇しなければならない。

即ち詩材撰擇に關しては、第一成るべく詩味の多い詩材を擇ぶ事、次に人の詠み古るさない詩材を擇ぶ事其れから歌はうとする詩美の性質に恰當した詩材を擇ぶ事の此の三つが大切である。尤も題詠などの場合は題が已に決まつて居るから、別に詩材を擇ぶ餘裕はない樣なものゝ、猶之に取合はせるあしらひ、即ち之が背景に用ゆる詩材は大に撰擇する必要がある。例へば桂園の寒月を詠だ歌に

てる月の影のちりくる心地して、よるゆく袖にたまる雪かな。

と云ふのがあるが、詠み古るした詩材に夜行く袖にたまる雪をあしらひにして、一層清新の趣を添へてゐ

る。又同じ冬の月を詠むとしても男性的詩美を發揮し樣と思ふならば、もつと怖ろしげのあり大きさのあるあしらひを取合はせて、例へば

吹雪せし伊吹颪の冴えくれて、月にしづまる余吾の浦波。(加茂眞淵)

と云ふ如うな風に詠む。

△詩境を擇ぶ事

次に詩境を擇ぶことも注意すべきである。例へば繪にしても最も似合はしい背景の中に、最も似合はしい位置を占めなければ、如何なる名畫も、死で仕舞ふ樣なものである。此の詩境を擇ぶに就ても亦成るべく詩味の多い境を擇ぶ事、成るべく人の詠み古るさない境を擇ぶ事、歌はうとする詩美の性質に恰當する境を擇ぶ事が大切である。

これを實例に由て說明するならば、前の寒月の歌で月影も白く、雪片も白く、而も夜の事であるから、はつきりとは見分け難い中に邊りの景をしのばせる處などはたしかに前人の未だ歌ひ古るさない詩境を捉へたもので、而かも似合はしい位置を占めてゐる。而して此は、寒月に關する女性的の詩境を把捉したるものであるが、次の眞淵の作に成ると、同じ詩材ながらも、男性的に、雪を吹いた伊吹颪が冴え、余吾湖上の波は靜まり、萬籟寂として、寒光のいやに強く照ると云ふ如何にも物凄い詩境を取つて居る。此等をよく〱比較して研究すれば、おのづと詩境を把捉する工合を覺り得られるであらう。

△詩趣を擇ぶ事

詩材を擇ぶのは、想美を其材料の上で把捉する道、詩境を擇ぶのは、想美を其位置の上で把捉する道であるが、詩趣を擇ぶのは想美を其働きの上で把捉する道である。詩味の少ない詩材で、詩味の饒い歌を作り、詠み古るした詩材で新奇の歌を詠み出すことは、詩境の撰擇如何にも由るが、最も多く詩趣の撰擇如何に由るものであるから、之れも作歌の上に於て肝要な事で

ある。「語人を驚かさずんば死すとも休せず」と、誰やらが言ふたが、和歌も矢張り同樣の意氣込で作ることを要する。

前の寒月の歌で、雪を照る月の影が散り來るかと見立てたなどは、たしかに前人の歌ひ古るさない詩趣を把捉したもので、よく歌を生動させて居る。尤も後撰集に、

うば玉の夜のみふれる白雪は、てる月かげのつもるなりけり。(詠者不詳)

と云ふ歌があつて、着想の頗る似た處から考へると、景樹も或は此歌より思ひ着いたかは知れぬが、影のつもるとあるのを、影の散り來ると直して、別に一種の新意にし、つもるの意は之を袖にたまるの語で現はして、以て上の散り來ると云ふ句を活躍させたなど、優に一の獨立歌として、模倣歌以外に或る位置を與へて差支はない。又眞淵の歌の方は、湖上の月が吹雪に冴えて物凄い處に、或る崇高の詩趣を把捉したもので、月に靜まると云ふ語に、目に見えない一種の力が働いて居る。

△方面と部分とを擇ぶ事

想美把捉の方面と部分とを擇ぶことも肝腎である。精しく言へば、正面より把捉する乎、側面より把捉する乎、反面より把捉する乎の方面撰擇と、一端を把握する乎、全部を把捉する乎の部分撰擇とを考へなければならない。尤も和歌はもと〳〵最も短簡な詩であるから、概して側面把捉一端把捉の方を適當とするものであるが、場合に依つてはさうとばかりも言はれない。實例を擧げて言つて見れば

君のため世のためなにかをしからむ、捨てゝかひある命なりせば。(宗良親王)

さま〳〵の花はあれとも、ひのもとの華の光ぞさくらなりける。(伴蒿蹊)

と云ふ如き主觀美男性美を歌ふものには、正面から想美を把捉して却て力のあり重みのあることを見るが、玉ぼこの道ゆく人のことつてもたえてほどふるさあ

だれの空（藤原定家）

東の野にかぎろひのたつ見えて、かへりみされば月傾きぬ（柿本人麿）

と云ふ様な女性美客観美など歌ふものに成ると、むしろ側面から一端を把捉し、以て全般の想像を人の勝手に任せる方が、含蓄もあり、趣味もあつて面白い。

併し概して側面的、一端的がよい。歌は幽玄の道なりと云ふのは即ち其意味である。或は稚なかれと云ふのも、亦一端的把捉を奨励する言葉と思つても差支はない。

△模倣的習練

これは模倣的習練に由て想美把捉の手心を覚えることである。即ち古名歌を手本にして想美の捉へ方を習練するのである。以上に挙げたものに較べると稍卑法な遣口ではあるが、習練の手段としては、これも一法で、丁度書家が粉本を模し、書家が法帖を習ふのと異る處はない。之れには古名歌と同じ想美を同じ様式で把捉し習ふもの、其れを異る様式で把捉し習ふもの、古名歌と異る想美を同じ様式で把捉し習ふもの、それを異る様式で把捉し習ふもの等がある。

其内、古名歌と同じ想美を同じ様式で把捉し習ふことは習ふには差支ないが、自分の歌として之を作る場合は、模倣になり、剽窃に成るから、断じて之を戒めなければ成らぬ。少なくも同じ想美を異る様式で把捉する乎、若くは異る想美を同じ様式で把捉する位の處に止め、出来得べくんば、古名歌の想美から連想し、應用して、異る想美を異る様式で把捉し得る様に成ることが肝要である。是は古人も一般に勉めた處で、藤原基俊なども、

たゞよき歌をうちあんじて、その歌をわがよまむずる心地に、我心のうちにもたせて、天をもはしらかし、山野河海をも思ひめぐらせば、心得れ侍る物也。

と言つて居る。そして例へば在原業平の

月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、我身ひとつはもとの身にして

と云ふ歌を本歌にして、藤原家隆は、
　梅が香にむかしをとへば、春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる。
と歌ひ、右衛門督通具は、
　梅の花たが袖ふれしにほひぞと、春やむかしの月にとはゞや。
と歌ひ、皇后宮太夫俊成の女は、
　梅の花あかぬ色香もむかしにて、おなじかたみの春の夜の月。
と歌ふたことがあるが、此等をよく翫味すれば、おのづと想美把捉術の呼吸が分り、手加減が知れる。黄昏の少將と呼ばれた松平定信なども、源氏の夕顏の歌を本にして、
　心あてに見し夕顏の花散りて、たづねぞわぶるたそがれの宿。
と詠んでゐるが此等も翫味すべきである。花散りと云ふ處に、極めて清新な想美を把捉して、別に一つの名歌をなして居る。

尙一言添へて置くが、古名歌を手本にして想美の捉へ方を習練するには、一種類の想美を把捉し習ふた方が好いが、多種類の想美を把捉し習ふた方が好いかと云へば、これは兩者共得失がある。例へば繪畫を學ぶに、狩野派なり、土佐派なりの一流一派のみを學ぶとすれば、容易に其流を突き破つて新機軸を出すことができなくなるのと同じく、桂園派なり、眞淵派なり、古今調なり、萬葉調なりの、或る一派の想美把捉術にのみ熟すると云ふ事は其派内に跼する恐れがある。其れかと云ふて、あれも此もと種々の想美を把捉し樣とすれば、何れも急所が分らずして竟に虻も蜂も取らずに巳む氣遣がないでもない。こゝは大に注意すべき處である。





古風を保存せる長崎市

朝顔女

地勢は皆様御存じの九州の端で三面山を負ふて、地味は肥沃で馬鈴薯、甘藷、柑橘、蔬菜は十七萬市民に供してあまりあり年々多額の輸出を見ます前には石炭の島、漁網島碁布し、鶴の港の波靜かに三百年來變遷繁き世々の歴史を長へに睨いて居ます。

△市中の見物

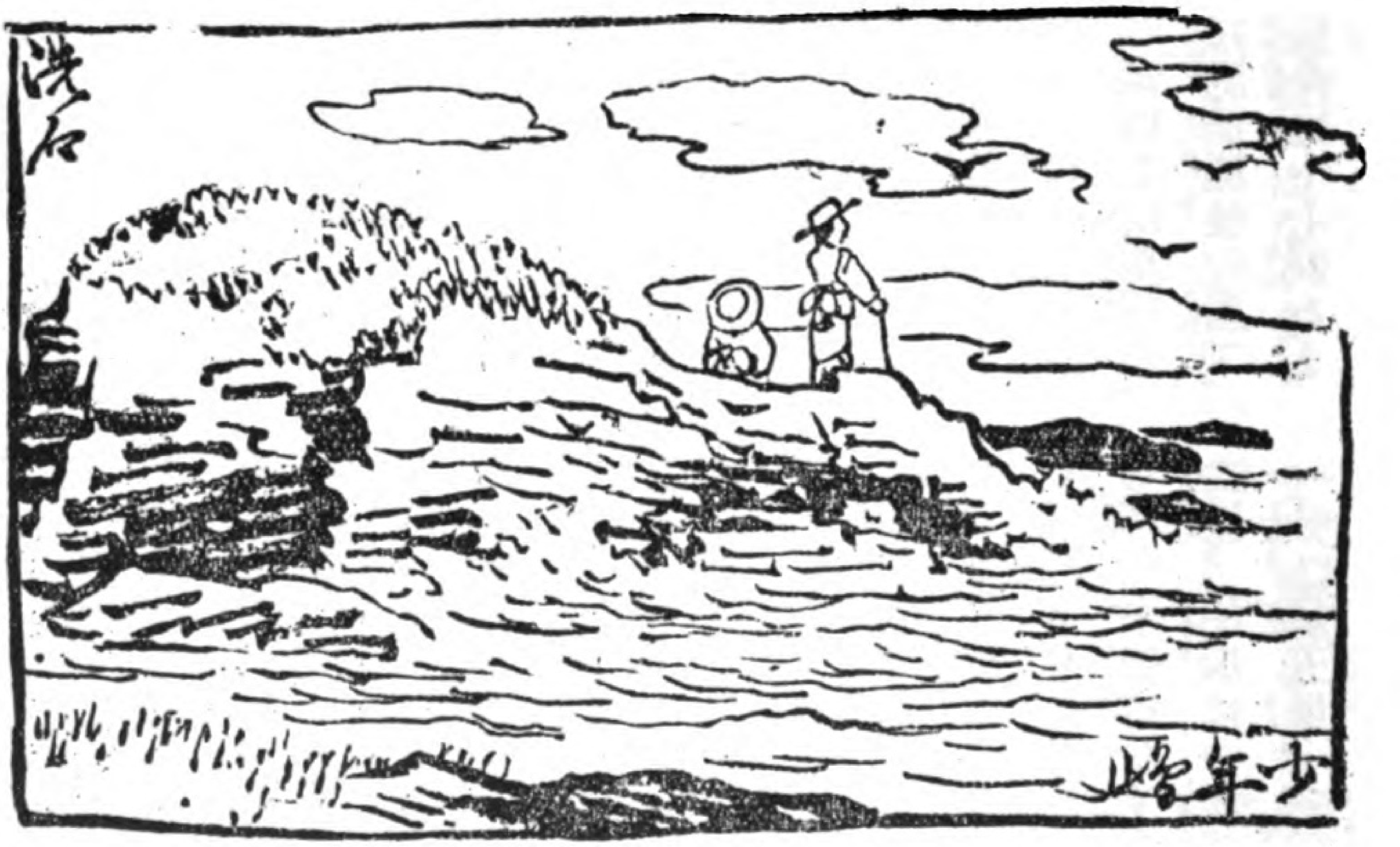
大阪三池などに比して甚だ小規模ながら、昨年築港工事も目出度竣成して、四五年前までは徒らに草のみ繁れる出島も、今は美事町續きになりまして、瓦斯や電燈の光まばゆく、市中と少しも變りません、十年以前までは當地の商人は外國軍艦の入港を指折り數へて待つ程で、當日は毛色の異つた偉大の勇士は三々五々打ち連れて續々上陸いたしますから、車屋さんは目の廻る樣ないそがしさ、商人は法外の懸値を申してぬれ手で粟のつかみ取り、隨分大枚なお金が落ちましたが榮枯盛衰は世のならひ、追々長崎商人の信用地に落ちて以來、めつきり淋しくなりました、近來は店屋の轉住移轉が盛に行はれる樣です、お多分には漏れぬ不景氣の風は此處にも吹いて空家の數は全戸數の三分の一とは驚くでは御座いませんか、併し大分金持連が樣々の發展畫策を行ひつゝある事は日々の新聞紙にも明かで御座いますから遠からず其名を實に花の長崎となりませう。

△人情風俗

皮層の見では御座いますが、男子は一體に人の好い方、從つて覇氣に乏しく、打てば響くといふ譯には參

りません、女子は今のお若い女學生方は別として、保守的で心の奥底は執着心が強くこびり附いて居る樣です、併し一般に愛郷心に富んで親切でもあり、お世辭も中々上手で御座います、宗教は隨分盛んでお寺の數も澤山御座います、每年舊三月の大師樣には參詣人、今日を晴れと着かざり市中をめぐります、此日は嫁さがしと申して日頃は隙もる風も厭はせ給ふ大家の箱入娘まで、よそほひ凝らしてお出ましになります、開港場にはあり勝ちの、一寸往來ですれ違ひ樣プンとえならぬ匂ひに見返れば、扮ても見事なマダム振り、流行の標本はわたしとばかり、私共の目には品もわからぬ召物にお指に輝くダイヤの光に眼くらみてためらへば何だ洋妾ぢやあないかと背たゝかれて悔りし、さうかと思へばひさし髮に白のリボン後に蝶を止まらせて可祝織の袖長う薄化粧さへほどこして、團扇片手に二人連れ、いづこのお嬢樣かとお見上げ申せば、所謂インバイフであつたり、市中の娘さんのうちにも、また或る人に世話になつたり、ある可からざる業を營んで盧榮心を滿足させつゝある樣聞きます、此等は土着人ににあるまいですが、何とも斷言は出來兼ねます、當地の誇りとする三大行事は諏訪神事に、盆祭、凧上げで御座います、諏訪の大祭は昔は舊の九月七日八日の兩日に執行致しました、只今は新の十月九日十日十一日の三日に渉つて行ひます、流石は全市民の尊崇をあつめし氏神明神の祭禮だけに、其儀容の盛な事全市は勿論近郷までも賑はひます、六月一日は小屋入と申して踊子は早朝より諏訪社祇園社へ參拜し囃し方もシャギリながら參拜して踊町を廻ります、庭見せの當日には踊町の家々はおのがじゝ趣好を凝して庭を見せます、築山の後に離れを見せて枝振美事な松の梢にぼんぼりの火かげあわきゆかしきあれば、電燈の光まばゆく噴水などあしらふたハイカラのも御座います、傘鉾踊の衣裝も陳列いたしますから、夜分は見物人で雜沓を極めます、愈々當日には家の内外を潔め、竹笹立てゝ定紋つけたる幕引き廻はし、金屛風を立て、毛氈を敷て親戚知人を饗應します、奉納踊は早朝から繰り出します

が、しかも此奉納踊と遊廓とは大に關係があるのです、傳説によりますと天正五年時の領主大村豐後が長崎の地を擧げて切支丹領として以來勢力隆々として九州全土を席捲し、跋扈跳梁甚だしく、奉行榊原飛驒守は敬神の風衰へたるを歎いて寛永十一年始めて神事の祭禮を行ひ其時丸山遊廓から餘興として神意を安ずる爲時の名妓二名が神前に三韓退治の謠曲舞を演奏したのが抑々の濫觴です、又凧上げは東京と違つて三月に上げるので十日金比羅山、十五日風頭山廿八日が合戰場と定まつて居ります、當日は女子供まで辨當持參で見物に參ります、電線に引かゝる憂もなし、巡査のお目玉頂戴する



心配もないので、兄シャマ伯父チャマ連は前に走り後に飛びどなるやら笑ふやらそれは可笑樣に夢中で御座います、盆祭は七月十四十五日當地は山上に墓所があつて昔は上程いゝとしてあつたので御座います、隨分難澁ですが風景は格別で、對岸稻佐飽ノ浦の三菱の建物は箱庭の樣、港外遙かに端島高島など五六の島嶼碁布し其間を眞帆片帆點々たる有樣は實に繪の好材料で天氣晴朗の日にはもこの間に朝鮮の山々が見えるさうで御座います、日暮になりますと定紋の長提灯を高く縱横に點じますからあだかも筑紫の不知火を假りに山へ移した樣で中々美觀です、以前は盛に飲食致しましたが、只今は

衛生上一切嚴禁されて只花火を打ち上げます。

△生活の程度

温和な氣候を受けて地震は皆無と申てもいゝ程で、火事などの天災も滅多になく至極安穩でございます、物價は海陸交通機關の完備するに連れて追々騰貴して參ります、家賃は二疊に四疊半二間二階六疊二間に小庭でもつきますと六圓五十錢から七圓五十錢位で、場所によりますと間口三間奥行五間で五十圓の敷金に二十圓二十五圓の家賃です、商品の多くは京大阪仕込みで、年々流行と申ても大した變動があるでもなく、可惜旦那樣に煩悶おさせ申したりお母樣に又かえとお小言聞く心配も御座いませんが、併し年々華美に趨きつつあるのは爭はれぬ事實で神佛の祭禮などには隨分美つたお姿をお見受け申ます、昔氣質の當地では夏冬とも一通の紋付は必要でせう、米は主に肥前肥後の產で一きりは二十錢近く致しましたが、只今は十七錢あまりで一等米が得られます、炭薪も市中にいくらもありますが、天草長與あたりの田舎から馬積や荷なつて參りますのを、ひやかしますと、案外お安く手に入ります、お茶も番茶は田舎からまわりますのを毎年きめて置きますと、二百五十目一斤で四十五錢も出しますなら結構に頂けます、魚類は近海から獲れますのを翌早朝に漁夫の内儀や娘などが擔ひ込みますから、潑溂として金色に光つて居ります、鯛の刺身伊勢エビのフライなどもお安い時にはお總菜に附けられます、あら鯖も盛り頃は一斤(百目)八錢位甘鯛(當地ではクヅナ)レビ烏賊なども澤山御座います、今年は鰯の大漁で大鰯のピン〳〵したのが一斤七厘八厘でしたが、通例三錢五厘位が相場でせう、野菜も店屋で買ひますより百姓がパラに擔つて參りますのを取りますと、お値段も安く、品も新らしうございます、大根にカブナ、蓮にそら豆、牛蒡になすび、大抵ありますが南京芋が一升十二錢、胡瓜は一尺ばかりのもの五本で二錢、美人豆が一升二錢五厘、三錢で例の琉球芋は白、赤、源氏とも澤山で、當地の人は主に赤を好む樣です、盛りには一

斤七八厘から一錢位、唐人菜(白菜)は中々美事で東京のも種は一ツだらうですが、まるで比較にはなりません、湯煮してお汁ものに入れても結構ですが、ぬかを少し入れて鹽漬に致しますとほんとに頬が落ちさうで思はず喰べ過ごします、先づ漬物界では東京の澤庵と、當地の菜漬が兩大關で御座ませう、料理は中々進歩致して居りましていつかの新聞にも大層褒めてございました、併し日本七分に支那三分と申ませうか、大分お料理の仕加減が違ひます、こちらには阿茶(支那人)さんのうどんやが澤山あります、東京なら書生さん達がそばやに入らうかと



云ふ處を、當地ではチャンポン屋に參ります、これは支那饂飩をぶたの油でいため、牛肉、蒲鉾、えび、野菜などごた〳〵入れて煮ましたので、最初はあまりむごくて頂けません、それに例の阿茶さん一流の不潔なのでは全く閉口致します、人の喰ひ殘りでも何でも入ますから體面のない方は、傍に張番をなさるさうです。

△教育△言語

教育は市其ものは熱心ですが、家庭にはあまり重んせられては居らぬ樣見受ます、學校の講話會などにも保護者の三分の一出席するのは上乘でせう、土地のせまい割合に公私立の學校の多いのは喜こぶ可

きで、指を折つて見ますと師範校、附屬小學校、醫學専門、高等商業、中學、東山學院、鎭西高等女學校、梅ケ崎女學校、鶴鳴女學校、此外何々裁縫學校曰く何曰く何と門札打つたのや近在までも數へましたら隨分多數に上ります、何處へ行つても第一に氣のつくのは言語ですが、昔から長崎バッテン江戸ベラボーと申ますが、實際よくバッテンを申ます、今二三をひろつて見ますと

（オトシャマ）（父樣）（オバーシャマ）（祖母）（アンシャマ）（兄）（オッチャマ）（伯父）（こんけんしてをせつけまつせ）（コーシテ下サイ）（サイセンカラ、オメクトニ、オーチャキロエント）（先きから呼ブノニ貴女キコエナイノ）（ホンニノ、キラヘレバ、ヨカバッテン）（本當ニ來レバイイノニ）（ヨカメラ）（イヽカ子）（イ、ヨリマシメバッテン）（云フテマシメオ）

此外限りは御座いませんが、女學生の間に言語の終りに必ずへーを附けるのが流行りますが、何となく下卑て聞えます。

△名所△名物

諏訪の長坂を登りますと直ぐ向ひ合つて二軒ありますのが、名物のぺた餅屋で、名物にうまいものなしと申ますが之れは一寸おいしく戴けます、併し頗る氣取つて頂きましても二口限りでそれは可愛らしいものでも、一皿に五ツで四錢とは、隨分儲かるだらうと遂いらぬおせツかいも申して見たくなります、それから方角違ひの大德寺に燒餅の御案内致しませう、形は太宰府の燒餅と同じですが餡は數段上でございます、普通まあ一つか一つ半で大概な甘黨でも三つ戴けばがつかり致します、此處は夏時分になりますと涼み客で大繁昌します、燒餅屋は軒に、、べに提灯を點して氷屋と早變り致します、先づ一杯の氷水に涼みを取りながら夜の港内を眺めますと、汽船の燈火は幾十となく明滅して丁度み空の星を散らした樣、折々は汽笛の音ひゞきて小蒸汽の機關の音さへかすかに風が傳へてまゐりますこゝに一つなくも哉の名物が御座います、それは夕凪と云つて日暮れにもなりますとやれ〳〵とほつと一息つく間もなく軒の風鈴なぶつた風はぱつたり止んでし

います。

名產は特更御吹聽申す程のものもありませんが、カステーラは本家だけに一寸おいしく戴けます、長崎煙草と申ても島原鹿兒島あたりからまゐりますのを總稱して申ますので、實際の地出來はあまり振はない樣に存じます、其他のは石炭鯨等が主なるもので御座いませう。

長崎の山の端に出る月のよさ

こんげん月はゑつとなかばの

言文一致で大層よく出來た歌だそうで、實際凉みがてらに舟を浮べて、西の山の端に出る月影を眺めますと恍惚として暫時は俗界を離れた心地が致します、春は中島川の堤上にうす紅の霞棚引きて赤き手柄の初い初いしく、お老人の手を引きて眺め給ふもあれば、かるるす溫泉宿にあだな姿を侍らして得意滿面さゝくみかはして眺むる馬鹿旦那あり、人樣々に寄りつどひ隨分賑やかで、夜分は電燈の光處々にかゞやきますが、矢張昔ながらのぼんぼりの方が趣味深き樣思はれます、これも前の縣知事が市民の冷笑嘲罵を空吹く風と聞き流して、百本ばかりの苗を植ゑ付けられた賜ものでございます、市外では島原の溫泉に浴しつ、四邊の風景に俗塵を洗ふもよし、又はわづか一時間汽車にゆられて諫早に茸狩もよほすも興ある事でございませう。



一家の團欒

△人は一日も快樂なくては叶ふまじ。されど山海の珍羞も一度之を口にすれば其の樂みは盡くべく、羅綾の飾も既に身を被へば其の樂みは足りぬべし。故に眞に盡きざる快樂を得んと欲せば之を肉體上に求めずして、よろしく之を精神上に採らざるべからず。精神上の快樂は恰も湧き出づる泉の如く、汲めども〳〵盡きざるものなり。特に趣味を自然に求め家族打和して、霞たなびく春の朝、月さえ渡る秋の夕をめづる如き、何の樂みか之れに如かんや。

△婦人が世間に立ち働くは、先づ家庭を整理せし餘力を以てなしたきものなり。若し女子より家庭を奪はんか、殆んど其の巧能を發揮すべき天地は消失すべし。

△一家に主婦たる者は、能く注意して先づ食卓を圍る空氣を樂しくする事に力むべし。即ち食卓に向ひたる時は叱言する事、苦談する事等總て不愉快なる言行を愼むを要す。又話材も成るべく無邪氣なるもの、高尚にして面白きもの、訓戒的にあらずして娯樂的のものを選むべし。食卓は實に家庭和樂の中心なればなり。

△次には料理法の大要を心得、敢て奢侈に流れざる程度に於て家族に營養分を味はしむる事を心掛くべし。而して日本料理は更なり、西洋支那料理なども合せて用ゐんか、食卓は賑はひ、ます〳〵團欒の樂みを增さん。されど料理はさまで困難のものにあらざれば成るべく自ら工夫して試むべし。

△家庭は苦樂を共にすると云ふ基礎の上に立つものなり。されば母たる者が美服を纏ふて芝居遊山に餘念なきも子供に教育の道を與へざるが如きは勿論、良人の眉をひそむるを知らずして妻女の美裝の外に關ゆるが如き、或は老人の病に苦しむも之れに水だに與へざるが如きは孰れも愼むべき事に屬す。



オールドミッスの哲學

病床の姉より其妹へ

暮れゆく空

暑い〱と言ひ乍ら、また一日を空しく送つた。

私は四五日前から、殆んど持病ともいふべき例の間歇熱にとりつかれて居ます。今しがた、お前にも覺がある通りの、あの焦熱地獄もたゞならぬ苦患からのがれて、ホツと心持炎のやうな息をついた處です。濡鼠のやうになつた寢衣をサツパリした浴衣に着更へ、新らしいシーツの上に身體を横たへて窓から射込む覺束ない月光を浴び乍ら此筆をとる。

海水浴のエハガキは受取つた。お前の寫眞もたしかに見た。いつもながら健康さうな生々した顔を見るのが、何より嬉しかつた。お母さんも喜んで居らしたよ。着てゐるのは、此間こちらから送つてやつた、あれだと思ふが、大層よくうつゝてゐる。少しジミぢやないかつて、お母さんも言つて居られたし、私もさう思はないでもなかつたが、あれなら結構だと思ふ。實はあれもね、もう少し早くやりたかつたのだけれど、こちらも思ふやうに仕事の遣繰がつかず、氣ばかりあせつてゐたのです。それにあの時分は田舍ではまだ單衣の時期が早いので、呉服屋に頼んで置いても、容易に持つてきてくれず、一度や二度では揃はないし、實際困りました。お前から催促は度々うけたのだけれど、まあそんなやうな理由だつたのです。

子供等に毎月雜誌をやつてくれるのね、小さい方などは殊に喜んで、まだ繪本は來ないかつて、發行日を待ちかねてゐます。

此間に×××出たお前の文は面白く讀んだ。それにつけても思ふのだが、くれ〲も身體を大切にして下さいよ。第一夜ふかし、これは絶對にいけない。殊

に讀書、作文など、頭腦を勞し乍ら夜ふかしする事は身體全體にわるい。これらの不攝生は、今はさほどに見えなくても、必ず後年の悔の種である。お前の仕事の都合もあらうから、必ず何時にといふ事も言へないけれど、私の考では、先づ九時には床につきなさい。そして五時に起きる。もし夜寝られないなら、朝早く起きなさい。朝早く起きたら夜は必ず寝られる。今迄に右のやうな癖があるなら、この手紙を讀むと同時に斷然やめて、私の言つた事を實行しなさい。これが姉がお前に對する最大の願である。私も九時には寝る、必ず寝る、朝は五時半になる事もあるが、大抵は五時に起きる。身體は二つとないもの、年とつてから後悔しても何にもならぬ。大事にしなさいよ。自分の身體を損する迄に——たとひ職務にでも忠實であるのは、決して褒むべき事ではない、二葉亭や紅葉はこれを考へなかつた馬鹿者である。——と思つて居れば間違はない

學校の校長先生はいよ〳〵辭職なされた。十日の日本校で盛大な送別會があつた。それから先生の赴任當時からの卒業生、凡そ二千名程が、在校中の薫陶に報ひ、多年の勞を謝する爲に、五百圓の金盃一個を贈呈した。うちも三人分七十五錢を出しておいた。

お前の日記『杜鵑の巻』は受取つた。それはいゝがなぜあれを開き封で送るのです。いつたい日記といふものは、筆者の希望、若しくは許諾——否快諾なくしては、絶對に他人が見るべき性質のものではない。信書以上の秘密を要求すべきものである。殊にあの日記には、所々をだやかならぬ文字さへ見える。あゝいふものを開封で送るなどとは、以つての外の話である。自分で書いて置きながら、自分で其秘密を尊重するといふ事を知らないとはどうしたものであらう。信書日記の秘密は親兄弟の間でも、充分尊重すべきものであるといふ事を忘れないやうに。今後は小包にするか、封をして相當な印紙を貼つて送りなさい。

お前もその位の事は心得て置く必要がある。

これも序だから言うが、前々便のはあれはハガキではいけない、ハガキに書く用事と、封書に書く用事と

最新美顔用化粧水原料

化粧香水 プラチナ

○プラチナ…は衛生化粧の原理に基づき最新大發明の美白原料液なり
○プラチナ…は牛乳中の主成分たる乳素と果實汁の美白原素の合劑也
○プラチナ…は皮膚に必要なる滋養分を悉く併有せる濃厚原料液なり
○プラチナ…の香料は花卉浸出法に依て採集せる花精エッセンスなり
○プラチナ…の實質は實用香水として殊に毛髮用に適し毛根を養ふ
○プラチナ…の單味は皮膚上の殺菌作用顯著にして吹出物等は消滅す
○プラチナ…を鹽分なき軟水又は湯に點滴せば直に乳劑化粧水となる
○プラチナ…の容器は最新式にして一滴づゝ正確に計られる仕掛なり
○プラチナ…の十倍乃至五十倍は牛乳製化粧水と同等なる効力を有す
○プラチナ…の數倍量は濃厚美顔料液として皮膚を滑澤艶麗ならしむ
○プラチナ…の數滴を洗面の湯水に點滴し用ふれば肌理能し色白くす
○プラチナ…は意匠の斬新體裁の高尙優美なる實に破格の價値を有す
○プラチナ…の取扱店は全國到る處の小間物店化粧品店藥店にあり

發賣元 東京横山町 天野源七

▼郵劵代用一割增し遞送無料▲

本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す

煉製美顔料
フエスおしろい
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
定價 金參拾五錢 金貳拾五錢

高等香油
チエリーオイル
特効 ふけを去り髮をしなやかに毛の發育を補く
定價 大八拾五錢 中四拾五錢 小貳拾五錢

高等煉香油
チエリーポマード
特効 フケ取りツヤを出しチヾレクセ毛を直す
定價 小金貳拾錢 中金參拾錢

發賣本舖 高橋初次郎
東京市日本橋區本町二丁目
特電話 四一三番

女(その一)

（その二）

純潔の家庭を作れる者にして一本を備へざるものありや

日用百科全書中拔萃目錄

◎和洋禮式 全
◎茶の湯と生花 全
◎實用料理法 全
◎家政案内 全
◎裁縫と編物 全
◎育兒と衞生 全
◎通俗書簡文 全
◎西洋料理法 全

◎作文自在 全
◎圍碁と將棋 全
◎作歌自在 全
◎秘術傳法 全
◎日常行爲法則 全
◎易占及骨相法 全
◎果樹と蔬菜 全

裝禎 每編洋裝菊判紙數二百卅頁以上 口繪極彩色木版寫眞版挿入
正價 一冊廿五錢 郵税各六錢宛

東京本町 博文館發行

(その四)

博文館女學世界編輯局編纂

家庭日常の寶典

家事整理の墨繩

明治四十三年

家庭日記

洋裝總クロース金字入題美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅拾錢

家庭日記は最も進歩したる。文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、荷も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

（要目）

- ▲收入明細表
- ▲支出日計表
- ▲出納計算及殘高表
- ▲家計分類出納表
- ▲出納分類表
- ▲貸附契約一覽
- ▲保險契約一覽
- ▲諸關係掛金一覽
- ▲租稅一覽
- ▲年中行事豫記
- ▲家庭重要記錄
- ▲我家の家族
- ▲家庭紀念事項
- ▲戶籍表
- ▲崇廟祭祀日錄
- ▲通學要錄
- ▲兒童生育要錄
- ▲健康要錄
- ▲衣類目錄
- ▲財產目錄
- ▲貸借關係錄

（附錄）

●家計安全法

月收百三十圓、七十五圓、五十圓、四十圓、三十圓にて見積りたる生活費の內譯

本書內容の一斑

本書は始めに一年三百六十五日の日日欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に涉る家庭重要記事を始め　交際、通信音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼れて財產、衣類等の品目を揭記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前揭附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則をも網羅せり。

- ▲音物贈答日誌
- ▲通俗日誌
- ▲親族名簿
- ▲備人名簿
- ▲知人名簿
- ▲備忘錄

- ●交際の心得
- ●音物贈答の栞
- ●見舞の心得
- ●物品の整理
- ●火の要愼心得草
- ●日用心得草
- ●庖厨日事顧問
- ●臺所の整理
- ●料理節用
- ●四季魚菜の眞味
- ●臺所道具の取扱
- ●お彼岸の配りもの
- ●飲用水の注意
- ●一週間の仕事配り
- ●子供の衛生
- ●婿ゑらびの標準
- ●妻の本領
- ●嫁ゑらびの標準
- ●美顔法廿五則

●新案歌占ひ

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり秩序あり教訓あり趣味ある日記にして眞に一家の重寶たる實質を具備せり

（その五）

東京日本橋本町三　**博文館**　振替東京二百四十番

明治四十三年 當用日記

當用日記は卷頭に皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷として掲ぐ

（當用日記定價）

大形（菊判）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金五十五錢　郵稅十四錢

中形（四六判）特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）
▲正價金五十錢　郵稅十錢

中形（四六判）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金三十八錢　郵稅十錢

小形（菊判中截）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金三十錢　郵稅八錢

（紙數各五百四十頁）

附錄
●金錢出納錄●知己人名簿●雜錄●諸統計表●米價換算早見表●諸稅則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則

博文館發行の當用日記の正確にして便益なること既に定評あり世間幾多の同種發行中に獨り異彩を放ち其發行部數の如き到底局外の人の測度し難き高に及び今日にては日記と云はゞ博文館を聯想するが如き盛況を呈すること本館の榮とする所なり從て四十三年度分は此たび輸入せる最新式の印刷機械と製本諸器械とを利用し特に用紙を精選し印刷を鮮明にし改良を加へ部數を增加し一點遺憾なき計畫の下に發行し全國賣捌店より發賣せり乞ふ倍舊の愛顧を賜はらんことを

▲賣捌所は各國各地の書籍雜誌店及紙類文具店等到る所にあり▲

（その六）

四

發兌元　東京日本橋

販賣用電話　本局二六二〇番

女(その八)

の區別位は、キチンとしなくてはならぬ。少し物事に注意する氣なら、あんなつまらない事は出來ない筈だ。それから封書に「親展」といふ文字は不用です。殊に前便のやうに長い、重い、かさだかな手紙に仰々しく「親展」などゝ書くのは人に疑を受けるもとである。

日記を見ると、大分いろんなものを讀んでゐるらしいが、みなお前が買つてゐるのですか。ほしいのがあれば、それは買つても宜しいが、なるべくつまらない本は買はぬやうにしなさい。小說もまだ〳〵進歩しない今日の有樣であるから、私等が買ふのはつまらないたとへ大家名家のものでも、評判のきまるまでは、決して買ひ給ふな。中にはほんの手習草紙も同樣で一年ならずして忘れられてしまうもある。否、かういふ風なのが多い。要するになるべくお金を出さないやうにするので、買ふなら、少なくとも十年位の生命の持つて居るやうなものを買ひなさい。

私の、其人の著作（文學）全部を集めて研究したいと思ふ人は、逍遙、鷗外、緑雨、露伴、一葉、透谷、思軒、二葉亭、獨歩。

さて此間からの手紙などによつて考へると、お前はどうやら今の境遇に不滿であるらしい。どういふものであらう。お前をそちらへやるにきめたのは、無論お前の希望を容れたので、私は勿論のこと、父上も母上も、衷心から進んで居られる樣子ではなかつた、私の一家では、さういふ仕事で身を立てられるものではないと、父上が常に口にしてゐられたのは、お前も記憶してゐるだらう。私も父上も母上も、もう學校に入れる事にきめてしまつてゐたのだが、その間際になつてから、お前がそちらへ行きたいと言ひ出したものだから、本人の意志をまげてまで學校へやるのも面白くない。本人が浮いた淺墓な考からさういふのでさへなくば、其希望を容れてよからうといふので、そちらへやる事になつたのである。折角その仕度までしたのを、お前の考から學校をやめるのだから、愈々責任は重いぞといふことは、私からも父上からも聞いた筈ではなかつたか。

私はお前をそちらへやる事を欲しなかつた。けれどもお前の意志を枉げてまで學校へ入れる事は更に欲する處ではなかつた。お前の事はお前自ら決する責任がある。何で人の鼻息をうかゞふ必要があらうぞ。今更私や父上の考を彼是いふのは、自分の責任を辨へない暴言と言はねばならぬ。

要するにそちらへ行く事はお前の希望であつたのです。父上母上及び私は、それが爲に學校へ入れる事を中止したのです。私等には、お前の意志を束縛する心は些しもない。自分の歩む道は自分が選まねばならぬお前の思ふ通りにやるがよい。

迷ふ紫陽花七色かはる
色が定まりや花が散る

この歌をよく味つてみなさい、

ものごとに、何でもおとなしく出て、義理を缺かないやうにといふのが、私の方針である。言はんでも分つて居やうが、世の中に立つて行くには、四方八方、まるく／＼と考へながら行くのが何よりで、これを忘れてはならぬ。「勝つて負ける」といふ言葉があるが喧嘩口論では勝つても、終には仕様のない處で、見す見すヒケを取らねばならぬやうな事が往々出て來るものだから、物事に角を立てぬやうの注意が何より肝要である。腹の立つた時には「辛抱は金だ」とでも思つて、ヂツとこらえて居れば、遂には向うからあやまつて出るやうになる。一から十までさうときまつたものでもないが、まあさうなる方が多いやうだから、さうするのである。また時によると自分が馬鹿になつてかかる必要も出てくる。腹の底にしつかりした考をたゝみこんで置いて、知らん顔で馬鹿になるのである。相手に話す機會を與へるのが談話の秘訣で、相手の思をきるのが交際の秘訣なら、相手の煽動に乘つて見せるのも處世の秘訣であらう。いづれも腹の底にシツカリした處を持つてゐてゝある。

私も何かやりたいとは思つてゐる。けれども差當つてこれといふ考もない、生計上に於ても思想上に於ても其日暮の有樣である。心配してみた處で、いま別に

どうなるといふでもない。所詮はなるやうにしかならないのだから、だまつて運命に従つてゐる方が得策だと思つて、なるべく考へないやうにしてゐる。これ以上心配しては身體をこはすからねえ。心ではお前の成功を待つてゐるだけです。

どうぞ身體を大切にして下さい。これ以上お前にいふ事はありません。さよなら

△月△日の夜病床にて　姉

百合どの

二人の女

むかし或る一人の男があつた、年も大分老り、頭が中ば白くなつて来たから、もういゝ加減に結婚しなければならぬとは思つたがさてどんな女を貰つたらいゝものかと色々と考へて居た。けれども世間を見渡すと自分の妻になりたいと望んでゐる者は随分多いやうである、とおもつたから好男子先生さう急がうともしなかつた。そして「結婚はなか〱重大な事だから、さう輕率にはできないまあゆつくり考へた上でなければ……」と言つて居た。

然るところ、こゝに二人の未亡人があつた、――其の一人はまだ若葉の水々しい女で、今一人の方は相應な年老であつた。

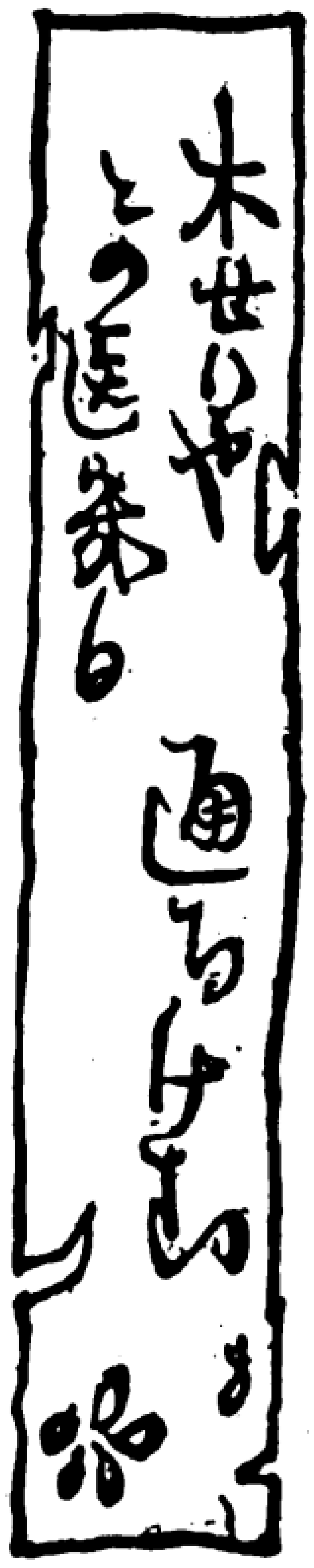
さて男は其後此の二人の女と大變に親しくなつて、折々遇つてはいろ〱な事を話し合つたり、笑つたり、又互いに御馳走を仕合つたりして居たが、終には双方とも心易くなつて了つて、男の頭を弄くるほどの仲となつた。

その中に年老つた方の女は何時も男の頭に少しばかり殘つてゐる黒い髪の毛を一本づゝ抜き取つて居た。と云ふのは、自分が年寄であるから男を成るべく老人くさくして、自分に釣合せ樣としたのである。然るに若い方の女は年寄は見ともないとおもつたから男の頭からいつも白髪を一本づゝ抜いて居たのである。斯うして居るうちに中白の好男子は、双方から別々なのを抜かれて終に髪の毛の一本も無いすつぺらぽんの坊主になつて了つた。

そこで男子の言ふ樣、

「皆さん、何うも色々難有うございました、貴女方のお蔭で頭は誠によく剃れました、……ですが結婚の話は先づ是れきりで御免蒙ります。……その故は貴女方は、私を思ふ樣に暮らさせないで、却つて貴女方の思ふ樣に私を仕様となさるのですからナ、……

……私は坊主になつて善い教訓を得ました。



金色の宮と空蟬の雪子

秋好女

久しく待ちたる終編金色夜叉、風葉氏が筆により て公にせられたり、いかにながら〳〵の間、世人は、宮と貫一の行末を思ひわづらひたる事よ、其間あらぬ風說は屢々傳へられて、猛火の中に、彼は宮を救ひ出したりともいひ、瘋病院の一間に幽閉されて、狂者の扱をうけたるを助け出したりともいひ、そゞろに我等をして、美くしき宮が行衞と、身の成行をまどはさしめたるが、紅葉氏の筋書を謹みて骨子となしたる、終編の書に因りて、知るを得られし、と思へるは、獨り我のみにては非るべし、もとより二なき靈筆の、これに眞似んの苦心はあり〳〵と筆の上に見ゆれ共、先師が靈や、この人の上に加はりけん、編中の人物悉く筆しく寫し出されて、宮の悔悟はいはずもがな、貫一の復活、滿枝の妖、さながら一つ樹の花を見る心地して、是や上、是や下枝と別ち難きの妙筆なり。

もとより編中數多の人の性格言語を批評せんなどの企あるに非ず、貫一が心機一轉の妙處に思ひ及ぼす事無きにしもあらねど、唯こゝに述べんとするものは、宮が狂と、一葉女史が作なるうつせみの雪子が狂の、あまりに憐れにして、泣かざらんと欲するも忍び能はざるが故なり。

富貴に眼くらみし宮は、己が心柄とひとへに、悔悟の念に身を苦しめて、六年の久しき、實に翠帳紅閨の中に泣ぎ明かしたり、晝は唯病むともなく、病まぬともなく、生けるものゝ如く、死せるものゝ如く、或時は夫の執念さにわづらひ、或時は姑の君の優しき訪問に泣き、又おもひやりなき實家の母の敎訓に悶えて、日を送り月を重ねしが、夜は宮が爲めには、いとよき期なるらん、ながき〳〵手紙を思ひの儘にかきつらねて、是を戀人のもとへと竊かに送りたる、もとより、一條

の嬉しき返信はなけれ共、まのあたり其人にものいふ如く、かいて〳〵、かきつゞけたる、さこそはたのしき又苦しきおもひ出多かりしならん、十三夜のお關は七年の間、夫との仲をかくして、始めてそれと明かし し折の、親々の驚き、母は油紙に火のつきたる如く、たけりに猛りて、一ぺん勇さんに會つて、油を取つてやりませうといふを、父親は、こら無茶の事を言ふなと、たしなめて、諄々と說き出す人生觀、今迄の辛棒がなる程なら、親の爲、弟の爲、太郎といふ子もある身の、無分別な事してくれるな、淚はてんでにわけて泣かうぞと、いひきかされて、おとなしきお關の、おもむろに運命に服しゆくあはれさよ、宮が六年の苦痛と、お關が七年の沈默、彼をおもひ、是を考へて、筆はおのづから、外へとそれぬ。

さても、うつせみの雪子よ、文あまりに簡にして、愚かなる身の察するに難けれど、許嫁の人のあるそは知らで、戀せし植村に「申さないが惡う御座いました、兄と言うては居りますけれど」、憤死の男が名をよびて悶えに悶え、苦しみに苦しむ風情いぢらしく、是は朋友の仲柄にてもなく、若き師の君などがやるせなきおもひに、文の交換、折ふしのとひおとづれ、親しうものいひ替す暇さへ無かりしものなるべし、誠に淡き戀、宮と貫一が、放れ難なの情緒を、黃金の爲、絕ちたる女性との差は、たとへば、櫻と萩が花程の差にて、一つは春をほこりと咲き匂ひしもの、他は即ち、露深き秋の野の果敢なきものゝ類か、宮は六年の悔のゆるされずして狂の人となり、雪子は、男の憤死、我が身の爲めと悲しみて、狂のものとなりにき。

あはれ終生、宮は醒めざるか、貫一の厚き看病も何の効なきか、其始め、荒尾の切なる勸告によりて、漸う逢はんと決したる貫一が、病室に至りて、其處に、活きたる宮の骸は、型の如く端坐せる」を觀たる刹那の感やいかなりけん、稍暫くありて網をさきたる如く「貫一さん」と叫びて「許して」「許す」「嬉しい」、かくて宮は正氣に復せりといへども、そは僅にものゝ十分が程にして、切なる心緒那邊を迷ふらん、やがて、鳴澤の

宮にかへりて、よその葬式を見、あれは私の葬式かと幌の中にて叫びたりし事共思へば、雪子が絶えず、我罪おあとから行ますする、勘忍して下され、と叫ぶに比べて、そゞろに、狂者の心ひとしきをぞ思ふ。宮が知覺の、漸う數分時醒めたるといふをよみて、嘗て幽芳子が作か「弱き女」といへるをおもひ起しぬ、是は盲目の夫が、洋行歸の專門家に手術をうけて、明僅かに數分時、この時妻なる人は、顔にアザあるを恥らひて、看護婦の容姿美きに己が服裝を粧はしめ、己看護婦の白衣をつけて、戸口に佇むなるが、漸う眼をみはりて己がおもひける程の美くしき人なりけりとよろこびて離し難きものと抱きよするを、妻なるは、僞りの罪をも忘れ、その刹那、嫉妬にからるゝといふ筋なるが、弱きものよ、爾は女なりとの語を說明して餘りある作なりき。是は明僅に數分時、かの宮が正氣の數分時と相對して、またなく哀れならずや、博士の手術も甲斐なかりき、彼はとこしへの暗をたどりゆくめれど、ちらとみとめし妻の美貌を、さばかり嬉しとおもひけむ、想像に違はぬ美くしさを稱へしが、盲者のなか〱に幸多きに比べて、妻が僞の苦痛、世を通して、いかに深からん、嗚呼うつくしき宮は遂に醒めざるか、其最後の章に於いて、くれゆく海の上いろどる雲の赤きが、次第に消えて暗うなりゆくを「あれ私の影が」と取とめなき言の葉も「二人が生の姿に似たり」といひて、「宮さん、二人は寂しいねえ！」と結ばれたる、いみじき結末にあらずや、我はこの最後の文字をくりかへし、又繰返してよみ侍りぬ、「空蟬はからを見つゝもなぐさめつ」こは熱海の宮にもふさはしき文字にして、大塚の奥に、植村樣と泣き叫ぶ、雪子が親の心のみにてはあらざるべし。

荒尾も海のかなたへ渡りぬ、つゞいて滿枝もかしこへ行きぬ、荒尾と離るゝ折、「僕はこの秋は寂しい」とか、こちたる貫一がおもひにもよう似たるかな、一葉女史は、あはれ門なる柳に、秋風のおと、聞えずもがなと筆をとゞめて、其編を終れり、うつくしき世の少女子達よ、お胸が十字架上のさけびならねど、宮の悔をばくりかへし給ふな。はたまた雪子が憐しき身の上にもと、祈り參らす。

職業として筆もつ女の一夜

垣 わらび

今日こそは、今夜こそは、明日こそは、と延引のびて、十日間は空に過した。愈々明日は〆切である、泣いても笑つても最早今から僅かに十二時間、此の短時間のうちに考案も、書く事も、振り假名も、綴ることもすべてしなければならないのだ、狡猾く構へて期日を延ばせぬ事もないがあとに苦痛が何時迄も從いて來るから何にもならぬ。

夕飯後、氣を靜めに裏の墓畔を逍遙した。けれどもあまり幽寂にすぎて、自意識が餘り明瞭して、どうも構想に醉ふことが出來ぬ題をつけてしまふ迄は何しても氣がのらぬ。今度も實は一昨日から考へて居るのだ。かれにしやうか、此樣なものに仕樣かとの迷ひが胸に蟠まつて日曜の朝雨が降つたように、不安な、情けない感じがして起きあがるのもいやな氣持ちがするのである。

そして斯樣な時にかぎつて、種々な他の考へが出て來て邪魔をする。あゝ、あゝ、これでは不可ないとしひて問題の文字を睨みつけて一心に思を凝らすと、生憎また時計の刻が耳に姦ましい、

と間の襖がスーッと開いて、

「姉樣お茶が入りました」

と妹がわざ〲持つて來てくれた。わたしの好きなミウクリームを美くしく盛つたのが一番に目につく。

こゝでまたしばらく考へがお菓子に移てしまつた。ふと軒の雨垂れの音がきこえた。

「みいさん、雨になつたの？」

と妹にきくと

「えゝ、七時前からですよ、姉樣は御存じなかつて？」

と返事をする。「當然のことを」と言ひたかつたが、お茶と一緒に疳癪の蟲をのみ下して

「難有うよ、ちやまた彼方室へ往つて居て頂戴！」

といふと、從順に「はい」と立つて行つた。

扨と、また構想の糸を手繰り出す。千行二十字詰の原稿紙に表はれて居る文字は、まだ八字にすぎぬ。むしろ悲しくなつて來た。

穗の切れた筆を握り乍ら、片手は火鉢に翳し乍ら、茫然と鼻つまらして俯伏いて居る影が障子に映つた鹽梅、どう見ても碌に離れた浪人の詫住居といふ姿だ。仰げば天井の隅に蜘蛛の巣が張つて居た明日は箒で掃ひませうと、餘計な事に解決を下してゐるのであつた。

「何と今夜の洋燈は暗いのだらうチヨツ」獨言のような、八つ當りのようなことを言つて自暴に心を掻き立てる。置時計が八時を報じた。あゝ、本統にどうなるんだらう熟々歎息した時、人の氣知らずな。母樣や妹は正體もなく高聲を出して彼方の室で笑ひ興じて居る。何から何迄癪に障つて堪らない。

何だか今夜はいやに頭髮が痒いので髷を摑んで搖ぶると前櫛がパラリと紙の上に落ちた。櫛の歯に細かいフケがついて居る。矢張り斯うして坐つて頭腦ばかり使ふのは、誠に宜しくないのだいつその事、解いて仕舞ふか知ら、そしたら少しは氣が晴れるかもしれない。いや〳〵もう八時も二十五分過ぎた。机にかぶり付いてギヤツと泣き度い。

冒頭の文句が漸やう出た。さあこれからは流るゝが如き筆勢ぞと急に元氣づいて一時、筆を走らす。

雨がやんで居るのか田町の方から新内が來た。……おや時雨の炬燵……まあ……。まだ學校に居た時分、あの先生から江戸ッ子の篭ゝメー式なお講義に胸を透したのもあれであつた。なんて懷かしい音がするのだらう。あんな音を聞くと、慾も、得も、自分も世の中もあつたものぢやァ無くなつてしまふ。濕つた好い音だが罪な響だ。

亦何時の間にか思想の糸は縺れて、三筋の糸に曳かされた。自分は此の誘惑にすら勝てないのかしら。それ九時がなつた。

半泣きになつて二三枚書きあげた時、お父樣から鄙

便が來た。うれしかる可き此の手紙然るに封を切る勇氣もなかつたのだ。とはいへ矢張り氣にかゝるのだ。いつもならば鋏で叮嚀に開封するのだが、今日は無躾に手先きで引き切つた。

果して〳〵、これだから讀まなければよかたものを。あゝ、身を斬られるよりも心苦しい。何故かう自分は因果なのだらう。空想の甘い味より知らなかつた小さな頭から、四苦八苦の思をして書いたものを、金といふものに代へて、ともかくもわが身ひとつは人の厄介にならぬようにと計つて居るものを、此上幾何の動きがとれよう。いかに家運が傾いたとはいへ、餘りお年の老りようが早過ぎる。これだから日本人は駄目なのだ。子を育てるのに、老いては左團扇で居ようといふ根本の思想が西洋と反對なのだもの……アッ飛でもない事を、これだから、わたしは不孝な子と罵しられるのだ。ハイ何もかも承知いたしましたと我が胸に答へて、見れば火もない火鉢の灰には無數に「命なり〳〵」と書いてあつた。

數へると、もう何度、思想が途斷れたかしれぬ。十時は先刻になつてしまつた。奥でも皆な寢てしまふたのか漸やく靜まり返つたようだ。これから此方の領分時間なのだ。が、好事魔多し、今度は自分の眼が少し鈍つて來た。ともすれば頭部は前へ〳〵と下りたがる、どうなるものか倒れる迄としひて氣を勵ますうちに時計の針は長短ひとしく重くなつて十一時五分前をしめした。

堪へきれなくて、眼の覺めるような苦いお茶をすゝりながら、矢鱈に書いて〳〵二三枚をはねた。しかしまだ僅かに五枚半、かうなると、もはや張りも、意氣地も何處かに行てしまふ。殘るは愚痴と欠伸ばかり。

こんな思ひをする程なら世間なみに社會の棧敷に入つた方がよかつたかもしれぬ。まして只お父樣の仰しやるように金にばかりしようとおもふなら、何しに坐つて働からうとおもはう。教員もよからう、事務員もさだめし面白からう、それで、わたしの孝行が立つなら、今からでもきのふからでも行ります。が人間は

只物質で活きて居るのではない。もしさうとすれば人は皆高利貸と差がないのだ。何も金の高利貸ばかりを冷酷と輕視しなくともよい、人爵を得んが爲めに我利我利して、潜める人間の美くしい情をうち消さうとするがごときものはそれこそ眞に憎む可きアイスである

して見ればある目的に向つて働き、それに附隨する樂しみ安んずる處あつてこそ、人はまことに生きて行くことが出來るのだ。「活きんがために活くる」のではなくて「爲さんが爲めに活きて」こそ始めて人の價値もあるといふのだ。何をしても、苦と樂との二分子は絶えず運命について廻る。とても表面から見た丈けの淺はかな眼で見徹せるものではない、人各々には天職がある、此の天職を忠實に盡すものには天爵がある。人はよく無報酬を喞つけれど、物質以外に得て居る無形の報酬を氣付かずに居るのが多い。金のために頭を下げて恩を謝するものは殆ど萬人一樣であるが、天爵に對つて額づく度量の人は先づ少ない。

こゝに於ての自分は家庭にある可き天職を授けられてゐるのだ。女子といふ尊とい天爵もすでに二十年以前に與へられてゐるのだ。但し如何の樣な方法で此天爵を謝し、此天職を果す可きかは自由なのである。此方法故にある人は敎師にもならう、事務員にもならうそれ〳〵、自分で自分を枡にかけて適當とおもう點に進んでゆくのだ。さすれば何處に一つ不平の起る可き道理も疑問もない筈ではないか。物質上の糧は目に見えて滅ずるが精神の糧は千古不磨である。

隨分我田引水な處もあらうが、自分はかう信じてゐるのである。

かう氣がついて其つちのけにしてあつた原稿紙また取りそろへて次の頁に筆を走らした。

今度は胸に根據がある、世間は甚だ靜かである。弛んだ瞼は朝の樣に健かになつた。そして筆は淀みなく走つてゆく。此の調子で行と一時迄には綴ることも難くはあるまい。



宗教に囚はれたる婦人

川村文芽

衣通姫が『わがせこか來ます宵なりさゝかにの蜘蛛の振舞かねてしるしも』と詠で、允恭天皇の御戚を蒙ばれましたのは當時の口占から出たものでせうが、一度佛教の渡來してからは、僧侶はあらゆる方便を以て意志が薄弱で蹈き易く、そして一方男子を動かす不可思議の力を有する婦女を囚へて感化して、之を弘通しやうとしたのです、光明皇后が惡疾の膿を吸はれましたといふのも、其善根を形容したものでせうが、兎に角貴き御身を不潔極る湯殿に導きましたには相違ありませぬ、孝謙天皇が道鏡に禪位の御思召も、亦佛教に囚はれてゐたら御身を佛教傳道の犧牲に供せられましたのです、安德天皇降誕の砌にも二位殿が、自ら一條戾橋に橋占を問ひに行かれましたなども、如何に當時迷信の上流婦人に深かつたかを知る事が察せられませうそれは源平盛衰記に斯う書いてあり升。

二位殿心苦しく思ひ給ひて、一條堀川戾橋にて橋より東の爪に車を立てさせ給ひて橋占をぞ問ひ給ふ。十四五計の禿なる童部の十二人、西より東へ向て走けるが、手を叩き同音に搨は何搨國王搨、八重の鹽路の波の寄搨と四五遍うたひて橋を渡り東をさして飛が如くにして失せにけり、二位殿歸 給ひて、平大納言時忠卿にかくと仰せられければ波のよせ搨こそ心に候はねども國王の搨を待れば王子にて御座し候べし、目出度御占にこそ候へとぞ答へたる

これは安部晴明が十二神將を戾橋の下に咒し置いて、用事のある時に召使ふたといふ事から、二位殿が迷信で橋占を問ひに行かれたのです、それを盛衰記の作者がチャンと童謡を作爲して、後人の信仰を高むる材料

に供したのです、二位殿こそよい迷惑です。

　これらは歴史上から見た著るしい例ですが、風俗上から見れば、實に數へ切れぬ程面白い例が澤山あり升そして此場合には多くは無學の徒にも入易い樣に比喩を用ゐたのを、比喩其儘事實として信せしむるに至りました、殊に婦女を蛇に配したものゝ多いのは誠に失禮極る仕方です道成寺、謠曲にも、戯曲にも、俗曲にもあつて名高い導成寺は必竟安珍の持戒堅固な事を現はし、且婦女の徒の僧侶に懸想すべきものでないことを戒めたものでせうが、どうです鐘が熔けて燒死した安珍は其名を全ふしましたが、清姫が蛇に化た抔は、あまり婦女を馬鹿にした業ではありませぬか、この清姫の蛇に卷かれて熔けたといふ鐘は熔もどうもせずに京都寺町の妙滿寺に天正十六年に寄附に成て、其銘さへ明瞭と左の通 判て居升からをかしいでは有りませぬか。

聞ニ鐘聲一智慧長菩提參ス　煩惱輕ク離ニ地獄一出ニ火坑一
願ハ成佛度ニ衆生一天長地久御願圓滿、聖明齊ニ日月一
叡算等ニ乾坤一八方歌ニ有道之君一四海樂ニ無爲文化一
紀伊州日高郡矢田庄文武天皇勅願道成寺治ニ鑄鐵一勸
進比丘瑞光別當法眼定秀檀那源萬壽丸拜吉田源賴秀
合力諸檀男女大工山田道願、小工太夫守長
　正平十四巳亥三月十一日

山城大原の龍女山攝取院を俗に蛇道心寺といひ升が、開基淨往法師が在俗の時、妻の妹と通じ升たのを、妻は怨で死まして其靈忽ち小蛇と爲つて、法師の首に纒ひ升ていくら取すてゝも、殺しても又元通に纒付きますので、遂に其罪業を覺て僧侶となつたと傳へますのも矢張婦女が蛇になると侮辱したものです、尚一層甚しいのは、領巾山の故事、即大伴狹手彥の任那に行くを愛惜して石に化つたといふ佐用姬をさへ肥前風土記には

大伴手狹彥連、船を發して任那に渡るの時、弟日姬子此にのぼりて褶を用ゐて振り招く因て褶振峰と名く、然るに第日姬子、狹手彥連と相分れ五日を經るの後、人あり夜每に來りて婦と共に寢て曉に至て早

く歸れり、容止形貌狹手彦に似たり、婦、其怪を抱て忍默するを得ず、窃に麻絲を用て其人の裾に繋け麻のまに〳〵尋ね往くに此峰頭の沼邊に到る、寢たる蛇あり、身は人にして沼底に沈めり、頭は蛇にして沼堤に臥せり、忽ち化して人と爲り、歌て曰く

　しぬはらの、おとひめのこを、さひとゆも、ゐねてむしたや、いへにくださむ

時に弟日姫子の姿、走り親族に告ぐ親族衆を發して昇りて之を見る、蛇、弟日姫子と共に亡せてあらず

と蛇と婦女との間に何か因緣あるかの如くに說いて、佐用姫を誣いて居升。

山城國相樂郡綺田村に普門山蟹滿寺といふ名刹が有て、其建築は特別保護建造物、本尊は國寶と爲つて居る程ですが、其開創に就いて

昔此鄕に住める某慈悲心深くまた佛に仕ふ、其女七歲にして能く法華普門品を誦しけるが一日野に遊びて村人の蟹を殺さんとするを憐み之を請ふて放つ其後父田を耕しけるに、一蛇の蛙を追ふて含めるを見、意はず汝蛙を捨てなば我婿にせんといひしに、其蛇頭を擧て一盻し蛙を吐て去りしが、後三日の夜衣冠の人あり、女を訪ひしに、女堅く室を鎖して出ざるを見て怒て大蛇と爲り其室を纏ふ、折しも數百の蟹何處よりか來りて大蛇を夾み之を斃して去る、女は終夜普門品を誦し居たるが、翌朝大蛇の斃れたるを見、父母と共に大に喜び塚を造りて之を埋め、其地に寺を營みて蟹滿寺と名く

これは昨年の陸軍大演習に相樂郡民が天皇陛下に献上した、紀念寫眞帖に寺說や古書を引いて說明した處です、此處では婦女の方は蛇には成ませぬが、矢張相手に蛇を配はれて居升、この寺の緣起は畢竟は蟹が觀世音の化身だといふのを示さんが爲に作たものでせうが丁度美濃國加茂郡太田村の顯興寺の本尊藥師如來が風雨の夜蟹を從へて出現されたといふのと異工同調です。

　然し蛇を配せられた方は、婦女を信仰させて寺を肥やさうとの野心よりも、只管に本尊や、緣起を難有が

らせる爲の裝飾に過ませぬが、段々世が末になると、婦人の戀慕心に乘じて、比翼塚、久米平內の東京に於ける、お俊傳兵衛の京都に於けるが如き、不道德なる男女の墓參を挑發したり、分娩の苦痛といふ婦人の恐怖心に乘じて富士山麓には胎內竇を設けて鎔岩の空隙を以て利得の用に供するは香具師の所業としても、大抵の寺院には安產の御祈禱を爲し、安產の御守を授けて居升、其他病氣平癒、子孫繁昌、頭髮發生等特殊の靈驗を說いて婦女を迷はしめて私利を謀る佛敎家は全國に數へきれぬ程あります、是が爲に病氣に罹て醫者に診て貰う事を遲らして取返しのならぬ憂目を見たものも澤山に有ませう、私が集めました禱願文の中で、左の二通は確にこれらの迷信の爲に醫者の手後をした人々と思ひ升のは其信仰の厚い事が文句に現はれ、其無敎育な事が筆蹟にあらはれてゐるからです。

一　京都新京極蛸藥師本堂に捧げたるもの

十三歲の女でござります、つむりにくさでけまして
まことにこまり候ゆへなにとぞおなをし被下候た
こやくしさまその代りにたこを三ヶ年たち申候間ど
おぞ〳〵くさおなをし下されますよう御たのみ候。

二　京都今熊野町劍神社に捧げたるもの

一卯年女でござり升、あしがつりますゆへどうぞお
なおし下されませつるぎ大明神樣なにとぞ〳〵
おねがい奉つり升一日も早くおなをし下れませ。



幼稚園主の見たる子供の性癖

古市静子

子供の育て方の一番肝腎なのは、生れ落ちてから小學校へ入學する迄の處であらうと存じます。ちよつと考へますと、物の道理が少し解つて來た時から充分敎へ込むのが宜しいやうに思はれますが、物の道理が解らぬ頃に受けた感化が最も深く一生涯に影響するものでございます。無心の内に父母から良い感化を受けたものは、成長の後惡友などに誘はれて邪道へ踏み外すとがありましても、或場合に於て悔悟する力がございますが、亂れた家庭に育つたものは、學校敎育を完全に受けて居ても、一度邪道に踏み込んだら、最早其儘堕落して了ふものでございます。如何しても幼い内に植ゑ付けられた第二の天性は爭はれぬものと見えます私なども母から聞いた御伽噺が唯今以て大層難有味があるやうな感じが致して居ります。私は明治十九年から今日まで保育の方に從事致して居りますが、却々理想通りの發達を得られないのでございます。一體日本では敎育の進んだ割合に未だ保育の進歩が見えないのは、まことに殘念な事と存じます。

▲手に餘る子供

腕白なお子さんは、大抵時間前から幼稚園へ見えますが、多勢のお子達のおありの上にヤンチヤ盛りの御子のお世話は隨分お骨の折れる所から少しも早く幼稚園へと思召すのはご尤もなわけで、實際又幼稚園へお出になれば何樣なヤンチヤなお子でもお宅の行跡とは大層違つて無理も言はれぬものでございます。併し萬一お母樣が幼稚園へ遣りさへすれば心配は無いと重荷を卸したやうに思召して、お宅で少しも其お子さん方にご注意なさらぬ樣な事がありましたならば、折角私がお世話致しても、無効になるのでございます。お子さんが幼稚園通ひをお役所勤でもなさるお考へになつ

て、お宅へ歸れば我儘を通すと云ふ風に幼稚園と家庭と別々になりましては、感化と云ふ効能が見えないのでございます、それですから私は出來るだけ生徒方のお宅へ上つてお母樣から平生を伺つて成るだけ連絡を通ずることを努めて居りますが、

▲キマリだけは附けて頂きたい

お子さん方のヤンチヤなのは當然の事で、特に五六歳ぐらゐの男のお子が腕白なのは、天眞爛熳とも申すべきです。現に延びつゝある蘖を撓めて病的の靜肅にするのは、宜しくない事でございますが、唯だ幼心にも惡いと知りつゝ飽くまで我意を押通さうとする場合には、シツカリお灸を點ゑて頂かなければならぬと存じます。私方へお出の五歳になる悧巧な男のお子さんが在りますが、他のお兒がして居る積木をヒヨイと壞すとか、玩具を取り上げるとか、邪魔をして見たい方で而して他のお兒がちよつと仕返しのやうな事をしますと、大聲を揚げてワア〳〵と泣き出し、幾らなだめても諭しても止りません。二時間ぐらゐ泣き續けて居られるので、表を通る人も何事かと立ち止まつて見るくらゐです。兒は賢い性質で物事の是非はちやんと心得て居られるのですが、俗に申す癇性でどうしても自分の我儘を抑へることができないために泣き通されるのでございます。このお兒のお父樣は既に世を去られ男兄弟がなくて戸主になつて居られるので、母樣と姉樣とが腫物に觸るやうに取扱かつて居られますから、無理もないわけとは存じますが、此儘で成長して、世間へ出られたなら、萬事意の如くならぬのに憤慨して精神病にでも罹られる樣になりはせぬかと心配して居るのです。先樣では私方で充分嚴しく仕付ける事をお頼みですけれども、餘り泣かせて卒倒でもなさつてはと危ぶみますので、ピリツとした制裁をお加へ申す事ができません。これはどうしても親御が、お子さんに我儘の惡いと云ふ事を感せしむる制裁を加へられた方がよろしいかと考へます。此お兒に限らず、他を害する場合とか、非を通さうとする場合には、家庭で嚴重に制

癖を加へて頂きたいものと存じます。ある醫者から獨り兒や末子は、成長してから精神病に罹り易いと聞きますが、つまり大事〲に溺れて我儘を通させるのが禍因となるのでせう。我儘を通させるから身體が丈夫に育つと申すわけでもなく、煩悶の結果かへつて病氣をおこすものですから、此點は餘程ご注意が肝要です。

▲偏らぬ保育法

多勢のお子さん方の中には、偏し易い性質――例へば積木を始めると一日それはかりして居るとか、石板へ畫を描き出すと一日それはかりに凝り固まつて居ると云ふのが、往々御座いますが、幼稚園では時間〲で遊び方を取り換へ、勉めて心を變化させるやうに致します。一たい一事に凝る性質は、將來專門學をさせるに適した天才ですが、小學から中學までの時代は矢張り多方面に心を向ける習慣を附けて置くのが必要です、且つあまり幼いうちの凝り性は、發育上にもよろしくありませんから、此點はよほど注意致さねばなりません。それから又交際嫌ひなお子さんは始終獨りぼつちで遊んで居る、斯ういふのは、皆さんに名前を呼ばせて勉めて多勢の仲間いりをさせるやうに仕向けます。それから左利の方には、右手へ持ち換へさせるなど、種々子供の風に應じて工夫致すのでございます。

▲慘酷な遊び

幼い兒は吃驚するほど、慘酷な事をするもので。蜻蛉の眼をむしり取つたり、蛙をたくさん集めて土の中へ生埋めにしたりして遊ぶ事がございます。そんなひどい目に逢してかわいさうではありませんかと申すと先生なせと不思議さうな顏してゐる。子供は慘酷とも氣付かずに、唯だかうして見たら何樣なるだらうと云ふ經驗を得たいからするので、下に何があらうと構はずに高い處から飛び降りたり、其他いろ〲危い眞似をするのも、矢張り經驗思想が盛んな故です。又お話の中にも血が流れたとか、首が飛んだとか云ふ風な事は耳に入れぬやうに致したいと存じます。

修養手引草

△人は能く言ふ、我が理想は斯の如し、我れは斯の如くありたしと。なれど其の能く實現されたるものの世間果して幾人かある。舅姑のなき家に嫁がんと思ひしものも、實際は、之れあるのみならず、兄弟姉妹其の他親族の同居さへする家に婚を結び、又富裕なる人にと思ひ居りしものも、家もなく、衣も乏しく、食さへ豊かならざる悲運に陥り居るは、世間なべての例にあらずや。紳士に嫁ぎし者が、眞に紳士に嫁ぎしものか否かさへも測り難きが世の習ひなれば、斯かる困難に際しても、尙ほひるまざるの覺悟は、處女時代に於て之を養ひ置くべきなり。

△人は春野の胡蝶にあらざれば、各々自ら我が心を勞し手足を役して幸福を捉ふるの氣概あるを要す。之れ無からんか、忽ち世の廢殘者、劣敗者たるの悲運を招ぐに至るべし。實に幸福は之を得んとする者は之を得ず、反つて苦難に堪へんとする者が之を得るものなり。

△理想は固より絶對に非なるにあらず、人間の進歩は、一に完全なる理想を描き、一歩々々之れに近かんとするに依りて生ず。此の意味に於て理想は誠に必要なり。されど一歩誤らば空想に陥り、失望煩悶相ついで至り、遂に回すべからざるに至らん。警戒すべきは理想にあらずや。

△婦人は虛名外聞を貪らず、優雅にして或は育兒のために一身を委ね、齊家の爲に生涯を終ふるの覺悟あるを要するは勿論なれども、而かも今日は昔日と異り世間一切の事は皆近世科學の上に働らき居れば、所謂箱入娘に甘んじて學問を疎外するが如きは、誠に時勢にうときものと云ふべし。

一週間の献立

あさ子

△月曜は

今日はまた雨がびしよ〳〵降り出した、昨日は夜に入てから御歸宅、それでも昨日は降らなくて、本當に仕合せであつた、今日はお土產の、鮎を晩食のお料理に用ふることにする。先づ、

(1)鮎しほ燒き　配ひ葉生姜　(2)鮎の鱠
(3)鮎の天麩羅　(4)松茸淸汁　へぎ柚子
(5)鮎の姿すし

(1)は先づ腹を開き、腸を除きて内部をよく洗ひ、鹽を澤山にふりかけて十分程其まゝになしおき、それから水にてよく洗ひ、竹串にさし火を強くして、燒き乍ら、手先きにて串を捻り廻し焦附かぬ程にあぶる。

生姜はくきの處一寸五分程のこして葉を切りおとし薄く皮を去りしばらく日に干し、酢の中に鹽を加へたる物に漬ておく。

(2)は先づ鮎を三枚におろし肋骨をすきとり酢に浸し、燒き鹽を加へ花鰹をかける。

(3)はなるべく大きさうな鮎をえらみ、三枚に卸し、小骨を除き水氣を切りおき、さて一合のメリケン粉を七八勺の水にてとき、玉子を一ッ入れてよくかきませ、之を衣にして胡麻油にて揚げる（油は鐵の鍋にて、ごく強き火にかけ、青い烟の立つ頃右の魚を鍋の端より滑り込ませ、三四回裏かへして揚げる）。

(4)は先づ鰹昆布にて、よき煮汁を作り、煮立ちたる時絹こし豆腐を、金じやくしにてすくひ入れ、松茸もともに入れ（松茸は石附の處を薄くとり鹽水にて洗ひて後淸水にてよく洗ひよき程に切る）ふき上るを度とし醬油をすこしおとし椀に盛る。

(5)鮎を開き骨を拔き鹽をあてゝ鹽のしみたる頃、上等の酢に三時間以上も漬けおき、御飯は一升に付、酢二合の割合にて鹽少し加へて炊きたる御飯を腹に滿

れ出す位に詰め、手にてよくおさへてそれを酢箱へならべて薄く切りたる生姜をばら〱とのせてふたの上からおしをおくなり。

△火曜日

けさお庭へでゝ見ると赤の朝顔が開いてゐたので、あまり大きくて、美麗であつたから鉢をふいて、机の上に置いて、尺て見たらさしわたし三寸三分あつた。

さて今日の献立は、先づ、

(1)海老フライ、(2)もみ瓜、
(3)茄子の作り、(4)牛蒡の甘煮、

(1)は先づ車海老の頭と胴とを關節から放して尾の處は殘しおき皮を去りて腹の方から背の方へ向けて切れ通らぬ樣に注意して庖丁で切り海老の身を開きて、臓腑を出し鹽胡椒をよき程にふりかけ、メリケン粉を海老全身につけおき、フライ鍋に胡麻の油を入れ火に掛けて其油が煙る程まで熱した時に前の海老をしづかに入れ、兩面ともに狐色に揚げた時新聞紙の上に取り上げる、別にメリケン粉を五勺に玉子一ツを割り入れ箸にてよくかきまはし、水を少し加へ、天ぷらの衣位にとき、淺草海苔を巾一寸長さ二寸位に切て片面だけ衣を付けて揚げ、大根卸しを醤油で赤く色を付け、皿に盛り合す。

(2)は越瓜をよく洗ひ薄く刻みて鹽をふりかけ之をよくもみてしぼり、後酢の中に砂糖と醤油を入れた中に越瓜を入れ紫蘇をもみ込み、海老を鹽湯でになしたるを皮をむき、入れまぜて小鉢にもる。

(3)は先づ茄子を湯でゝ、軟になりたる時汁をしたみ爼の上にならべ板をのせておしをなし充分に水氣を搾り、竪に一分程の薄さの作身となし、皿に盛り、酢味噌をかける（酢味噌はみそ二十匁に砂糖七匁程の割合に加へよくすり、鍋に入れ弱火にかけて、飯杓子にて攪拌し乍らざつと煉りて裏漉にかけ灰汁ぬき芥子を加へて少しの酢を入れドロ〱にゆるめる。

(4)は牛蒡を湯でる時水の中に糠を澤山に入れて、湯でそれを一旦揚げてよく水にて洗ひ、次に昆布を一緒

に入れ味を付けて氣長く煮る。

△水曜日

相變らず雨がよく降る日魚屋は來たけど何も思はしい品も無いから鰺を取ておく、先づ今日は、

(1)越瓜肉詰、

(2)鰺、細作り、

(3)藤豆ひたし、

(4)はす紫蘇卷き、

(1)は先づ中位の越瓜皮を去り、兩端を切て中の種を箸にて殘らず突き出し、水にて洗ひおき、さて牛肉を肉挽器械にて挽き鹽少しと胡椒とを入れ、よく混せ合せたる物を前の越瓜の中に詰め、蒸籠の



中に入れ二十分程蒸して取り出し、小口より七分位に切り、一人前五切程を皿に盛り入れ、其上に白い餡をかける、餡の製法は、先づスープ一合を鍋に入れて火の上にかけ煮立ちたる時、大匙一杯の葛を水でとき、どろどろ汁を作りて鹽にて味を附ける。

(2)は鰺を三枚に卸し、薄き紙の樣な皮をへぎ取り少し斜めに細く作るなり、青紫蘇に山葵をそへる。

(3)は藤豆を其まゝざつと水にて洗ひ、煮立たる湯の中に入れ、軟かく湯でゝ、すじを取り斜に細くきざ

みて、黒胡麻醬油をかける。

(4) 蓮の皮をむき、四ッ割位にし小口より薄く切り、鍋に少々酢を入れて茹で笊へ揚げ鍋に入れ味醂、砂糖、鹽、酢にて煮揚げ皿に取りさまし紫蘇をひろげ其上に蓮をのせ親指位の太さに巻き五分程のあつさに切る。

△木曜日

朝は相變らず雨が降たけどおひる頃から大變宜いお天氣になつたものだからよ程暑くなつたので、今日の献立は先づ左の如く、

(1) 洗ひ鱸、　(2) 越瓜サラダ、

(3) 茄子バター焼き、　(4) 鱸 切身結び昆布 清汁

(1) は先づ鱸を三枚に卸し皮を取り、薄く作身となし、冷水にて數回、水を替へ、肉のはせるまで洗ひ笊に揚げおき、茄子を薄くきざみ鹽をふりかけて三十分程もおき、鹽氣を水にてよく洗ひおとしかたくしぼり、青紫蘇と山葵醬油を配ひ皿に盛る。

(2) 越瓜を薄くきざみ焼鹽をふり三十分程してから別に大匙二杯のオレーフ油と同量の酢と小匙一杯の胡椒に砂糖少しを入れすぐ其中に右の越瓜を入れよく攪拌す。

(3) なすの皮を去り四分位の輪切りとなし、串にさしバターを兩面にぬりて焼き、大根卸しをそへる。

(4) 昆布にて煮汁を作り煮立ちたる時、鱸の身をすこし斜に切りたるを入れ醬油をさし椀に盛る時結び昆布を入れて身を一切れ程入れ、吸口にへぎ柚子を用ふ。

食後來客あり、デザイトを饗す私にこの製法を話す。

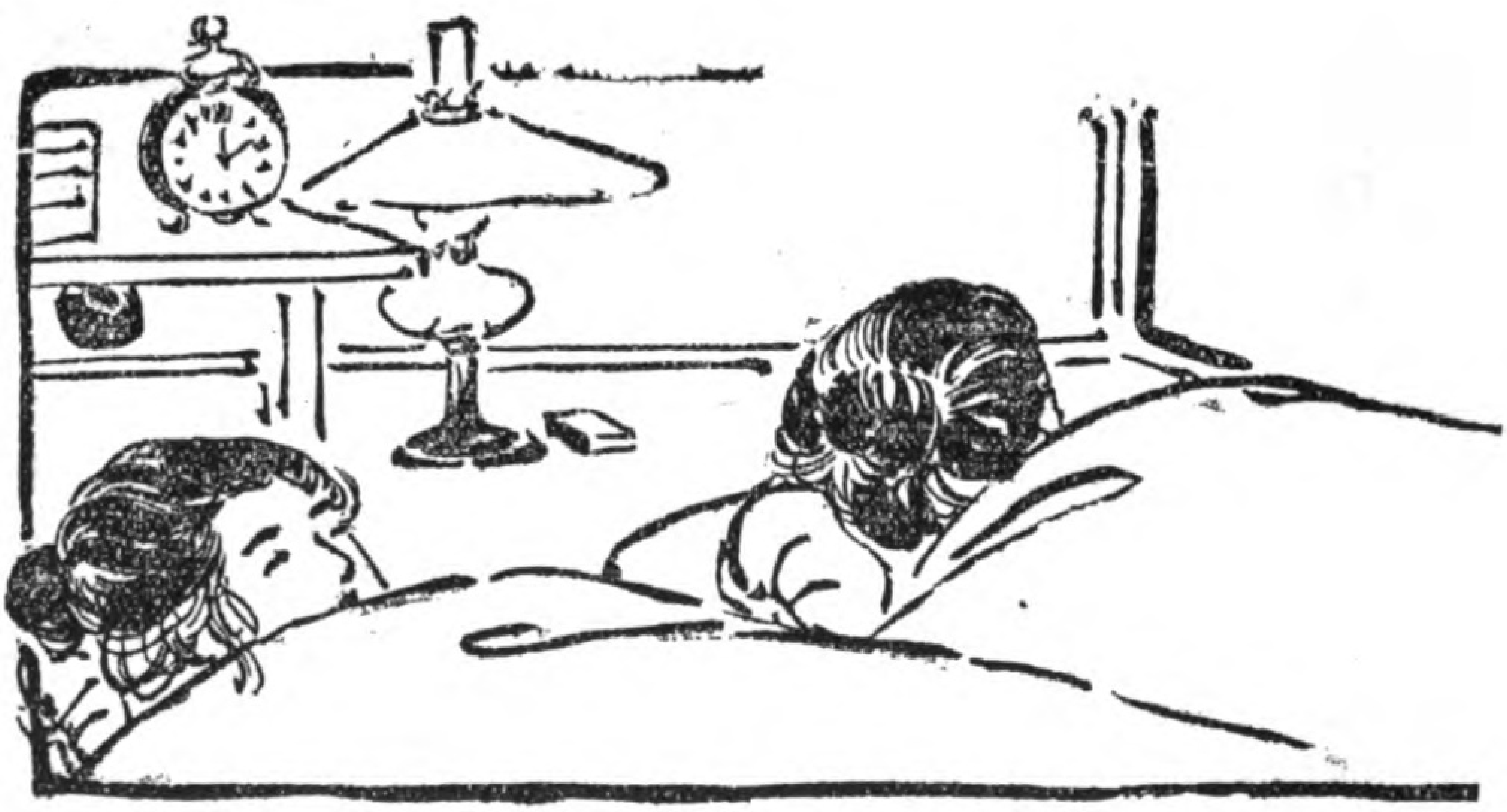
先づ角天半本を水に浸しおきよく洗ひ、搾りて小さくちぎり土鍋に水三合位入れて一緒にまぜながらよく煮立せ裏ごしにかけたものへ、また別に夏蜜柑を搾た汁と山葵卸しで卸したバナヽとをよくかき交せて流し込み、白砂糖四半斤入れて又煮立せて他の器へ流し込みて冷すなり。

△金曜日

今日の献立は、
(1)メンチホールエッグ、
(2)鱧の味噌汁、
(3)林檎の雪、
(4)蕗の三杯酢、

(1)は牛の挽肉に鹽胡椒を入れ、パンの柔き處を少し加へ生玉子をつなぎに入れて、平たく二寸位の丸さになしフライ鍋にヘットを少し引きて今の肉を入れ、兩面より燒き、皿に取り後玉子を崩れぬ樣に鍋にて燒き、肉の上にかける。

(2)鱧をこまかく骨切りをなし、一寸位に切り、おき、昆布を敷き、白味噌にて汁を作りて裏漉にかけ、煮立ちたる時、鱧を入れ、かんざらし粉をとき、小さく丸めて中におとしふき上りたる時、火



をかける。

より下し椀に盛る。

(3)先づ皮をむきたる林檎を鍋に入れ砂糖を入れ、水少々加へて柔かくなる迄煮て、其林檎を裏漉になしおき、先づ玉子の白身ばかりへ砂糖を入れ、玉子廻し機械でよく泡立て、其泡がだんだんかたまつて雪の樣に白く光りが出て煉た物の樣になりたる時、裏漉しになしたる林檎を木の杓子か何かで少しづゝ今の雪へ混せる、其時はもうかきまわさず、潰す樣に混せて、皿に盛る、之は召し上る前に拵らへぬと直ぐ溶けて了います。

(4)は先づ湯を煮立せ、蕗を皮のまま灰を少し入れて茹で柔になりたる時水に放ち、皮を去り、たてに細くわり、一寸位に揃へて切り、酢醤油をかけ上に黒胡麻



野山の茸狩

紫苑女

秋の娯樂にも色々ありますが、茸狩抔は先づ最も樂しき愉快なる遊びの一でありませう。茸狩の中でも松茸狩は一入皆さんが面白く感じますが、是は場所によつては、縦令松樹は澤山にありましても、茸の發生せぬ土地がありますから、一般には此の樂しみは知れ渡つて居りませぬが、私の郷里は關西方面ですから、秋になればいつも村の小丘へ、父母、兄妹、さては御朋友方とお辨當抔用意して終日狩暮します。誠に〱樂しい遊びです。

秋の空は空氣が清く澄み渡りますから、天が自づと高くなつたかと思はれ、夜分抔星が明瞭と見えて何とも云へぬ好い氣持です。そして野山の景色は一しほ趣を増し、山邊の錦に夕日の照り添ふ風情など實に春の花よりも美しく野には一面に萩、桔梗、女郎花、さては名も知れぬ優しの秋草の紫黄白紅千艸の色鮮麗に野路を飾り、又彼方の遠く近く天へも續くかと見ゆる萬頃の田畑には、穣々たる稲の色、黄金もて飾られたるにも彌勝りて心地好く木の實は野にも山にも充滿ち、夜は蟲の聲々澄み渡り、天國の音樂もこれには勝らじと思はれます。此の面白き氣持好き景色の中を、野に、山に、花を摘み、茸をさぐるの愉快は實に筆にも言葉にも盡されませぬ。

昨日も花ちやんや金ちやんやをつれ、祖母樣、母樣伯母樣などゝ一緒に近傍の丘へ茸狩に參りました。お辨當に、お菓子に、果物といふ嬉しづくめの數々を花子の乳母車に積み載せて、朝夙くから出掛ました。お伯母樣の來臨が遲いとて勇は駈け出して御迎にまゐりました。勇は平素よりは一入の周章方でしたがそれも其の筈です、今日の茸狩こそ前々から催ふす筈のが降

雨で延びたので待焦れたからです。

　茸に名高き丘は勇の住む隣村で、丘の麓には郡中第一のお池があります、周圍は一里にも餘りて大蛇が棲むと昔から言ひ傳へたる程の大池であります、雁鳧の群れ居る事も、魚類に富みて居る事も、郡中第一です。村童等の心持では隣國に名高き琵琶湖もヨモ此れ以上ではあるまいと思ふ程の自慢のお池です。此の周圍の丘が茸の發生に富んで居ります。丘はさほど深からず、千艸、熊笹生ひ茂りて、誠に茸の發生には適した地であります。茸の發生するのは斯る場所で比較的赤松が多く、樹下には小灌木も蘚苔類も澤山に發生して居る、日あたりの好き山地でありますが、此の池の周圍の丘は誠にお誂へ向の山であります。

　此日午前十時にはハヤ勇の一群は丘の中腹のお池の好く見える適當の場所を擇んで、敷物をのべ燒火をなし、御湯が沸き、お茶とお菓子も取出されて、勇も花子も最早極樂界の人となりました、其のお顏を標本にでもしたら確に笑顏雜誌の口繪位には打てつけです。

祖母様や伯母様の採られた松茸、香茸、鼠足抔各種の茸は忽ち母様のお手料理で御辨當のお菜となりました山で喰べるお辨當のおいしき事喩ふるに何物も無い位です。食後には母さまのヴイオリンに、若き伯母様と勇さんの合唱で、寂しき山も今日ばかりは、誠に賑かな事でありました。中にも小波先生作の茸狩の一曲は、時にとりて誠に面白ふ御座いました

（一）

村に小山あり　茸の名所。
嬉今年も　秋は來にけり。
遠近の　老も若きも、
打ちつれて　茸狩りに、
わけ行くや　千艸熊笹。

（二）

誰ぞやまづがけて　茸の獲物、
見よと誇るよ　松の下道。
おとらじと　此所や彼所に、
爭ふて　香ぞ漁る、
面白き　秋の終日。

此日勇の採集せし重なる獲物は、各種の茸類、蘚苔類盆栽用小灌木、秋の草花の各種にて、何れも歸宅後標本となり、盆栽となり、勇の小さき書齋を飾りましたのは、現在にも、將來にも、誠に樂き一日の山遊びでありました。



皇后陛下の御平常

▲御起床の時間＝皇后陛下が大奥にましまして何呉れと無くいそしませ玉ふ御有様を洩れ承はるに、陛下には毎朝六時といふに御起床ありて先づ夫れ〳〵御化粧の御準備を遊ばさる、御化粧の御用務を仕ふ奉るは御側近う侍る高等女官にて毎日交替し、陛下の御目覚め前約三十分にそが準備一切を整へ奉らす。

▲御化粧の間＝先づ當日御化粧番に當れる女官は、陛下の御居間近く隣れる十二疊の御化粧の間に臨む足音も靜かに伺候して御障子敷居等を清めたる上、御化粧の間なる中央正面に塵をも止めぬ大御鏡を右に疊紙を延べ擴ぐ、次に御櫛道具まては梳搔等の順序に從つて綺麗に配列し、御鏡の左には臙脂白粉を始め白粉御刷毛霧等を順序正しく並べたる其の側に銀の盥や手桶水の手桶等を備へ奉る、扨て又た御鏡の前には雪なす白羽二重の大座蒲團を敷きて靜かに陛下の御起床を待ち奉る、軈て陛下には宿直の女官二人を左右に從へて御機嫌麗しく此の御化粧の間に臨ませらるれば、冬ならば湯にて絞れる麻の御手拭を進め奉れど暑き此頃は毎朝冷水にて絞れる御手拭を進め奉るが常にて、陛下には之をもて御手を悉く拭はせ給へる後更に白麻の新しき御手拭にて御手を清めさせ給ふ、斯て大座蒲團を取らせ給へば女官は先づ一通り御髮を梳上まゐらす、終れば御嗽ひを遊ばして御頸より頭筋を數回も洗はせ給ひし後、更に當日の御用向きに從つて御髮をそれ〳〵の風に上げさせ給ふが常なれど、此の頃は行啓遊ばさるゝ御事もなければ極めて御手輕に御束髮あらせらるゝなりと申さる。

▲大廣庭の御散歩＝御化粧は約五十分乃至一時間の間にて御召更となる、此れも暑中等行啓又は高位高官の拜謁卒れなる時は大概御和服を召させ給ふにて御下羽二重に御上に上布を召さるゝが、御化粧濟みの後は大奥の御裏庭に降立たせ給ひて女官御相手に約四五十分の御散歩あり、その御序でに御愛の盆栽花壇に御歩みを移させ給ひて、今日は此の花卉は此所に彼の花は彼所にと一々御指圖あり。

▲御書見と御歌＝一旦大奥の御座所に御歸り遊ばして午後四時頃までは何呉れとなく御書見あり、又た和歌をも遊ばさるゝが、只今は御書見は昔の日記物語類にて、御歌は日に五六首若しくは十首まで遊ばさる、午後四時に至れば毎日の如く必ず御湯殿に御湯を浴びさせられ、晝召されたる御衣を更に着替へ給ひて欄干近く立たせ給



ふ中、早くも叢に蟲の音の聞え來るにぞ、陛下は殊の外興あることに思召され、それを和歌にものし、文にものして、時あつて女官方に示させらるゝこともありとか、床しとも床しからずや。

佐々木侯爵夫人の美德

以前高輪御殿にありて今の竹田宮妃殿下并に北白川宮妃殿下御兩所の御養育を仰せ付けられし佐々木高行侯の夫人定子が當世稀なる賢婦人なる事は夙に世の知るところなるが、其當時夫人が宮樣へ盡されし忠節の一端るては夫人の美德の數々を洩れ承はるに、佐々木家は元と、土佐藩にて二百石の家格なれど、それは表面の高にて實際の收入は極めて少く、貧窮の所帶にて夫人の嫁せられし時は一貧洗ふがごとく、而かも此際夫人は姑に對して孝養一方ならず婦道のあらん限りを盡されしといふ、當時手許の俸祿の上に負債も相應にありて家計の困難名狀すべからず、それ故晝間は竹籠を負ひ、熊手を携へて野山へ落葉掻きに行き、片手には稚子ながらも深く憐愛を籠めたる一子の手を曳いて家に歸り、それより機臺に上りて機を織り、糸をつむぎ、間斷なく働らかれしが、その後侯が明治政府の大官となりて東京に上り、駿河臺に邸を構へし時すら猶以前のごとく機を織り糸を繰りて只管生計の爲を圖られたり、其後内親王の御生誕に就き其御養育方を佐々木夫婦に仰せ付かることゝなりて、侯夫婦は共々齋戒沐浴して伊勢の大廟に參拜を遂げられしが、併し大命を承けて愈々御養育申上ぐるに就て侯夫婦は畏れ多きことながら。小臣の小兒同樣と存じ奉りて御養育申上げたしと決然上申されたり、主上には其の雄々しき氣象に太く御感遊ばされ「萬事卿の善いやうにせよ」との御諚おらせられたり一日夫人が常宮殿下を御連申上げて參内されたる折、主上にはいたく御滿足あらせられ、御手に高く宮樣を御抱遊ばされしに畏れ多き事ながら宮樣には粗相を遊ばされたり、主上には御吃驚あらせられ「定子〳〵」と頻りに御聲をかけさせ給ふゆゑ「何事の候ぞ」と伺ひ奉れば、勿體なや、御衣裾とは申上奉りながら御膝の邊を濡し奉れりと御看上申す程に夫人は即座に宮樣を御受取して何の用捨もなく一ツ二ツ御打擲を加へられ「おいや」と御意ありし程も無う「何たる疎漏に在し給ふや」と氣强も御譴責申上しとなん主上には黙と御覽遊ばして御感斜ならず「然てこそ眞の育方ぞ」と御賞の御言葉を賜はつたと謂れ家



りぬ、其の後物の御序に主上には之を北白川宮殿下に御物語りありしに、宮殿下にも御同様御満足遊されしと見え、一日夕景飄然と御馬に只一人の従者召れし儘の御微行にて佐々木家へ御成あり、門外にて。定子々々と御意あるゆゑ門番は眉に皺を寄せつゝ窺ひしに、其の御客こそ北白川宮殿下と知れ、恐れ入つてその由を奥に通じければ、その際殿下には恒久王の養育を偏に頼むとある御言葉を下されそれが爲め、態々の御成と知れて、侯夫婦は感奮措く能はず終に侯の自邸に御預り申上ることゝなれり此御方こそ今日の竹田宮殿下に在しますなり

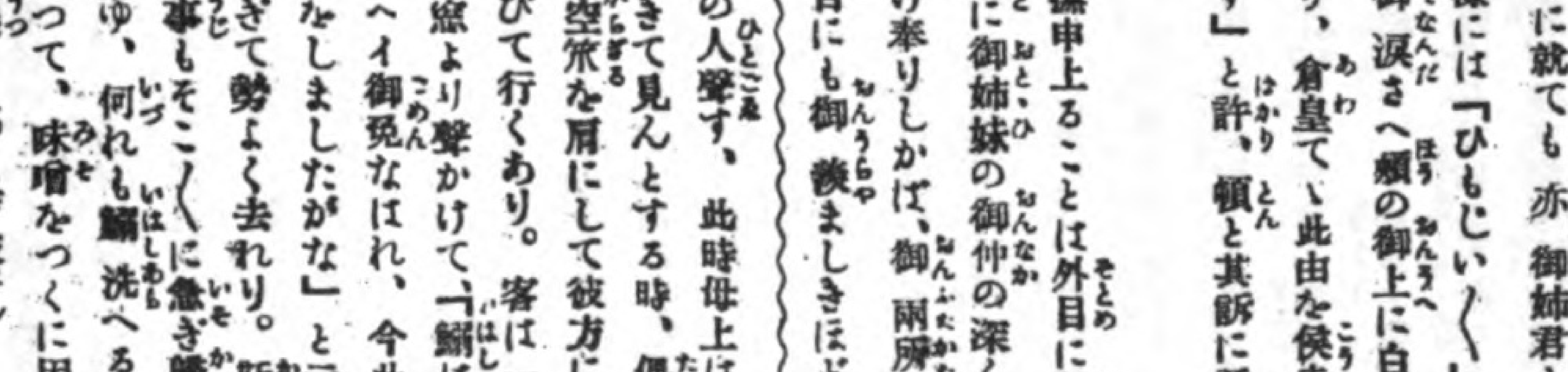
周宮殿下を御養育申上るに就ても亦御姉君と同様の御取扱方にて一日宮様には「ひもじい〳〵」と御意遊ばし、果はホロ〳〵と御涙さへ頬の御上に白玉を綴り給ふゆゑ、侍者の方より、倉皇てゝ此由を侯夫人に訴へしに夫人は「刻限外です」と許、頓と其訴に耳を傾けられざりしと

されど其の代り不断御愛撫申上ることは外目に拜し奉るさへ涙を催すほどにて殊に御姉妹の御仲の深く〳〵と肝膽を碎きて御世話申上げ奉りしかば、御兩所の御睦しき夫人への御なつき方よそ目にも御羨ましきほどなりと。

秋の漁

午後少し曇れり。うら庭に今を盛りの吾妻菊を眺め居れば、灘の方にて多勢の人聲す、此時母上は我を呼びて、此の下の灘にて今鰯漁ると云ふ見て來ずやとのたまふに、今日こそは行きて見んとする時、偶ゝ來客ありて見合す客は隣村の人、暫く談話するうち、前の道を人忙はしく往來す、空笊を肩にして彼方に走るあり、棒の撓むまで重き笊を荷ひて此方に來るあり「鰯や鰯やーい」と大聲に呼びて行くあり。客は「何處にとれたでせう」と氣になる様子、弟は「一つ聞いて見ませうか」とて、二階の窓より聲かけて「鰯は何處にとれたね」と問へば、其の一人は立ちとまり、我等を見て叮嚀に鉢卷をとり「へイ御免なはれ、今此の下でもとつて居りますが之は下甲にとつたので御座います、何でも下甲は大した事をしましたがな」と云ふ。「下甲のどの網だ」と客の問ふに「元網で御座います」と答へ、重さうな笊をかつぎて勢よく去れり。斯くと聞きし客は「私等の組合の網がとつたのですかうしては居られませぬ」とて、用事もそこ〳〵に急ぎ歸れり。

夕方前の川端には、此間來りし隣りの後妻の婆も、向ふの嫁や娘の赤襷も見ゆ、何れも鰯洗へるなり。誰やらん直ぐ其の川下にて足洗ふ男の「斯う鰯が澤山とれては急に鹽の値が引立つて、味噌をつくに困るが」と云へば、嫗等も何か云ひつゝ、共ににぎやかに笑ふ聲す。空には夕ばえの雲美くし。（芳枝子）



古今女傑の面影

千古の美人クレオパトラ

飛燕

▲昔し榮えし國の王女

古往今來、この渾圓球上に生を享けた幾百億の男女は、みな一度以上は互に戀をした事であらうが、その中で最も傳奇的な、演劇的な、詩的な戀をなし、戀物語二千年を貫いて未だ消えざるもの、クレオパトラの如きは蓋し稀である。

彼の女の生國エジプトは、アレキサンダー大王が、夢に白髪の仙人に敎へられて、アレキサンドリア港を開いた以來旺んになつたので、住民は大半ギリシヤ人。クレオパトラ自身もギリシヤ種で、トレミー王朝十一世の娘であつた、元來クレオパトラと云ふ名は、同王朝の王女につける習慣の名で、嚴格なる固有名詞ではないが、丁度秀吉が大閤の名を獨占した樣に、クレオパトラと云へば彼の女に限る樣に思はれて仕舞ふたのだ。

伊太利の歴史家でクレオパトラ研究に令名あるフエラレオの言に據れば、當時のアレキサンドリア港は三四十年前の巴里位の美しさで、同國一千萬の國民から徴する稅で立派に經營されてゐたさうだ。上下こぞつて音樂を好んだが生產にも熱心で、リンネル、モスリン、紙、ガラスなどの特產があつた。公園あり、圖書館あり、博物館あり、近代文明の副產物と惟はるゝ設備さへも整つて居つた。更に〳〵誇るべきは世界最古の燈臺を持つてゐた一事だ。浪碧なる沖合に、白い岩の峙つのがファロス島で、燈臺の高さ四百尺。世界七不思議の一ツに數へられた。

わが、クレオパトラはこゝに生れ、こゝに娘盛りの十七を迎へたのである。

▲中から美人が立ち現はる

彼の女は十七で孤兒となつた。木の葉の散るにもをかしき未通女は、王位を繼がねばならぬ事となつた。王冠は必ず男兒に渡さるべきものであるから、トレミー家の慣習に基き、その弟の十二歳になるのがトレミー十二世となり、彼の女はその王妃となつた。

三四年は夢の様にたつたが、宮廷顧問官に奸惡な奴があつて、王の名を假りて、クレオパトラを放逐した。罪なくて見る配所の月——彼の女はシリアへ亡命して、一矢酬ゆる處あらんとしたのである。

時しもローマ一の名物男ジユリアス、シーザーは古武士を提げてポンペイを追ふて、アレキサンドリア港に渡つたのだ。此の人さへ取り込めば……とはトレミー王も、クレオパトラも等しく感じた處である。王の顧問官も妙計を考へてゐるに相違ない。彼の女は、獨り胸に問ひ胸に答へて、生れて始めて女性的自覺を得た。

彼の女は美貌——嬌態を以てこの英傑を動かさうと決心したのである。

昔語りに殘るを聞けば、始めシーザーは彼の女を容れるを喜ばなかつたさうな。處が一日奴隷の一群が莫蓙か何かで包んだものを鄭重さうに齎らして、玉座に運んだ。何か美術品でもある樣に見えたので、開けて見ろと命ずれば、直ちに莫蓙は取り除かれてシャナリと現れ出でたるは、眼も眩むばかり盛裝したクレオパトラであつた！

翌朝になると、クレオパトラは昨夜シーザーの幕營に留まつて歸らなんだといふ事が遍ねく知れわたり、一夜の中に彼の女の敵は彼の敵——即ち女王と殿下とは利害を倶にする次第になつたのである。

兩人は相結托して、トレミー十二世を殺し、王冠を回復した。シーザーのローマに凱旋するや、倶に從ふてかの地へ赴いた事もある。

生な箱入娘は、今や世の浪風に揉まれてだん〳〵食へなくなつた。男性の弱點を研究し、知覺を動かす術を考慮した。如何にかして男を惱殺してやらうと苦心を積んだ。あゝ「十五より酒飲みそめて今日の月」的

の彼の女は、一度グレ出してからは、此の惡癖は固疾となり、後に眞面目に戀した時にさへ、なほ權謀を弄する事を歇めなかつた！

▲女王の眞美は如何

クレオパトラは決して絕世の美人でなかつたと云ふ異說は、シグノル、ファーレロなどが發見した樣に書いてゐる。けれども此怪女王の死後一百年後に出でたる、大歷史家、プルータークの驚くべき一節に、下の如く記述されてある。

「彼の女の眞の美しさは較ぶるものなしと云ふを得ず。人もし始めて彼の女を一見したるのみにてはその美に打たるゝ事なし。されど、彼の女の身近く坐せんか、その美に醉はさるゝや爭ふべからざるものありき。何者をも牽きつくる一種の品格は、會話の妙と相俟つて、聽く者を魔化し終らざれば止まず。二人さし向ひとなれば、彼女の言行は何者をも誘惑し了らずばやます。

又たその嬌喉の婉囀よく玉をまろばす如き、聽者をして快感を抱かしむ。絃多き音器の音色の嫋々として可憐なる如く、言句々みな心を引きぬ」と。

なほ彼の女は七ケ國の言葉を遣ひわけたと云ふ事だ。

六年過ぎた。

シーザーはプルータス一派の爲めに刺殺されて復た起たず。



（最も正確なるクレオパトラの肖像　四個の貨幣を參考して作りしものにて三十五歲當時のものといふ）

渦き返す紛亂の時、花形役者となつて登場したのは、故シーザーの養子オクタビアスと武人アントニーとであつた。前者は有爲の壯者で、冷靜にして權謀に富めるの人。後者は劍と鐵火によりて鍛へられたる。粗野

なる、そして勇敢なる軍人であつた。ローマ大帝國は二分されて東はアントニー、西はオクタビアに治められる事となつたと聞いた時、一閃、電の如き或者がクレオパトラ怪女皇の腦中を横切つた。

彼の女は又亦辣腕を振ふのである。

▲男らしきアントニー

アントニーは葬儀演說の一と芝居で、大勢を一變せしめた偉才である。若くして美しき丈武夫であつた。而して美しいと云つても内裏雛の殿様の様な業平的ではなく、深緣りの公孫樹が、夏の炎天にそゝり立つ如く、勇ましく、强き、男らしき男であつたと傳へられる。彼はなべてのローマ人に似ず頰から顎へかけて紫髯が茂つて（と思ひ切つて申す）ゐた。顏は英雄の相を具へて廣濶に、鼻は別段に曲つて所謂ローマン、ノーズの好典型であつた。

彼の財產は今の金にして一千萬圓もあつた。四輪馬車に乘つかつてローマ大道を疾驅し、其の窓から兩脚をヅン出し乍ら、宴會で歌ふ様な俗謠を高唱した事もある。

とは云へ、是は半面の彼で、主將としての彼は自から進つてゐて、シリア征伐の時などに遺憾なく能力を發揮された。頗る平民主義で、部下と共に食堂に質素な食事をして心地よく談笑した。

彼は俗な言葉で云へば「男がよくて、金があつて、いゝ人から」であつた六ケ敷形容すれば、精力强く、雄々しく、熱情ある。而かも粗野なる、至誠の英雄であつたのだ。

クレオパトラはアントニーを生捕らん爲め、彼の出征したる小亞細亞のシリシアへ出向き、その幕營がシイドナス河の上流にありと聞き、會見の爲め船を艤して溯らうとしたのである。

彼女は甲板に金を鏤り込んだる天蓋を張り、左右には花の如き宮女をいづれも水澤の精と云ふなるニムフ。然らずば萬神の司、ジユピターの愛娘と云はるゝグレースに化けさせて侍さしめた。いづれを菖蒲、引

さぞわづらう。是ばかりでも好者は魂を天外に飛ばすだらうに、御本尊のクレオパトラは美と愛の女神ヸーナスに粧ひ、妖艶の極を盡して控えてゐる。美斧、解剖す壮士の腸。あゝアントニーは危うい哉。

▲シイドナス河上の對面

蜚語あり。クレオパトラ來る。クレオパトラ來る。愛の神の扮装して平和を求めん爲めに來る！と耳より耳へ。そして



クレオパトラ初めてシーザーにあふ。
（サー、ローレンス、アルマ、テデマ筆）

アントニーにも達した。彼は彼の女を疑つてゐる。然し相手は女だ。不粋に薙刀をヒ子くる譯にもゆかぬ。即ち招待狀を出して、正餐を共にせんと申込んだ。

彼の女は直ちに典雅な文章で、恐るべき手練手管を書き込み、寧ろ當方へ御出でを願ふ旨を告げた。柔よく剛を制す。アントニー先生、のこのことやつて來たのである。

計略は半ば成功

したといふものだ。

話を進むる前に、初對面當時の光景を正史から拔き書きさせてもらいたい。

クレオパトラを乘せたる龍頭鷁首の船は碧緑の波を切つて進む。白日に輝く金の金具の物々しさ。櫂は銀に光り、薫風は人の心を醉はしめる樣な香氣を吹き送る。管絃の妙へなる響は若き血汐を湧きたつべし。愛の神に象どりたるクレオパトラは翠帳紅閨の下にシヤナリ〳〵として横目を使つてゐる。

質素なる輕舸を飛ばせて來たアントニーは、先づ美妙の音樂に、ついで噎せる樣な蘭麝の香りに驚かされた。絃々相摩して、互の視線の衝突した時に――髯男の眼底には、美目、盼たる神話中の人――ボーナスが映じた!!

涼風横來、綾羅の袂翻へる處、英雄と怪女王とは初めて會つた。僕はわざと描寫を避けておく。讀者乞ふ想像したまへや。

其夜クレオパトラはアントニーを引いて、當代の豪奢の極をつくしたのである。殺伐のローマに生ひ立つて、約しく飮み食ひしアントニーは如何に度膽を拔かれたか!

大廣間に幾千の銀燭燃ゆるほとり、幾百の賓客は或は圓く、或は方に卓を圍んで、酒池肉林に夜の更けやすきを惜しんだとある。

見よ硬骨漢も骨拔泥鰌の如くなつて仕舞つた事を!

▲英雄と女王の惡縁

この時クレオパトラは二十七歳であつた。見返れば社稷の安危の爲めに、政略的結婚を敢てしたのも一と昔の前となつた。近代生理學の敎ゆる處によれば女の廿七はすでに成熟し切つて、すがれといふ三十も間もない筈である。しかし此儘で枯れては花も實もない。

人は一生の内に一度、切實なる眞摯なる戀を味ふ時代があるといふ。彼の女は此の機に逢はなかつた。今や新らたに「戀」を味ふべき時とはなつた。アントニーの男らしき美貌と、熱情は、彼の女の機敏と、嬌態

とよく調和すべきものである。

彼の女の爲には彼は「情熱ある戀人」たるに過ぎなんだ。彼はすでに海のあなたに精緻の妻を有してゐる。外に義理に縛られてオクタビアスの妹も娶つた。今、更にクレオパトラと關係すれば、重きが上に褄を重ねる譯である。背徳、不仁！と思はぬでもなかつたらうが、一たび女王の明眸に對すれば、朝日を迎へて消ゆる殘雪の如く、意氣地なく融け去り、身も心も彼の女の足下に捧げて悔いなんだ。

二人はかたみに、、、、いとほしく思ひ合ふ間にも政略といふ念を除外した事はない。

二人の同棲は十年あまり續き、アントニーはタツタ一度東部の野戰に參加した外は、つねに〳〵彼の女と離れなんだ。アレキサンドリアでは彼はこの美しい魔物の爲にローマ人なる事を忘れ果てたる樣に見えた。幾多の艶物語が後世に傳はつてゐるが、わざと云ふまい。プルタークは、大哲プラトーが「媚」には四色あると說いたのを引用して、但、クレオパトラを以てせば、千色にでもなると云つてゐる。まことに彼の女は「嬉しがらせ」にかけても古今獨步の女王である。

アントニーは重々しく構へて居ない時は快活に行動した。彼とつねに〳〵伴へるクレオパトラは恒に新らしく珍らしき考案をめぐらして彼を倦かざらしめ、アヤームし去るを努めた。かの新婚後僅か數月にして夫に倦かるゝ如きは「腕」のないお嫁樣のする事で、チト彼の女に見習ふがよろしい。

二人は共に狩りゝ共に戯れ、共に飲食した。彼が武技を練る時、彼の女は傍にあつて、喝采して、その業を勵ますのが常であつた。

日暮るれば二人は身を下民に窶して華やかなる燈影、黑き窓より洩るゝ大道を浮れあるいた。流石に人目恥しき時には裏町の淋しきに切れ込むだが、是がかへつて大事になつて、土方共に

「ヨウ、うまくやつてるせ！。」

などゝ虐められた事も一再でなかつたとやら。

彼の女は戀の甘みに醉ひつゝ、三十九歳を迎へた。

▲アントニーの失敗

もの盛なれば衰へ、會へば別る。萬年の後までもと契ぎりし彼らも、寄せくる命運の浪には抗する事が出來なかつた。年表は云ふ。

「紀元前三十一年、オクタビアス其の妹の離縁されしを憤り、アントニーを攻む」と。

戰の幕は切つて落された。彼の女の情人は軍旅に從はねばならぬ事になつた。十一萬二千の軍勢に加ふるに五百の船艦はオクタビアスの夫れより多いと註せられた。クレオパトラは別に六十隻の船艦を率ゐてゐる。

九月二日、兩軍の艦船はダリーキのアクチユーム灣角で會戰した。雙方とも興亡此の一擧にありと思ふものから、善く戰つたが、戰ひ半ばにして、何等の大早計ぞや、クレオパトラは退却の信號掲ぐるより早く、滿帆風を孕んで遁逃した。大切の女王に逃げられてアントニーもジッとして居られぬ。最も船脚迅き船を撰んでその後を追ふたのである。

兩軍は七日戰ひ、アントニー方は負け色が見えなんだ。とは云へ主將すでに去つて在らずと聞きつたへては力瘤もへタ／＼と拔けていぎたなく敗北した。

オクタビアンの歩騎兵がアレキサンドリアを攻撃するに至つて、彼の女は大事すでに去れるを知覺した。あゝ亡國！今は忌はしき亡國の淵に瀕してゐるのだ！と身も世もあられず悶え泣いた。

▲弱きは女の心哉

アントニーの手兵が二度迄敗られた時、クレオパトラはひそかに歸順を申出でた。オクタビアンは、アントニーを殺して呉れるならば……と諷して答へた。

アントニーと國家と、自身とすべて亡ぶべきか。はた彼を先だゝせて、女王の位置を保つべきか。劇しき思は腦中をめぐつたらうが――「弱きは女心哉」クレオパトラも御多分に洩れなかつた。

彼の女は新築の靈廟へ彼を誘惑した。その門を閉ざして自殺し果てた樣に風說させた。なにかは君に遲る

べしやと、短氣にもアントニーは即刻劍に伏した。尤も息を引き取る間際には、彼があらゆる犧牲を拂つて悔いざりし愛人、クレオパトラの面前に運ばれ、其腕に倚りかゝつて英魂、天の一方に飛んだのである。

　オクタビアンは捕虜として彼の女をローマへ伴れ還る事は許したが、シーザーや、アントニーの轍は踐みさうにない。今更纖手に金の鎖を曳いて野蠻視するローマに赴くは、彼の女の堪へ得ざる侮辱である。光榮ある王家に人となり、時代を代表する二偉人を手玉にあやなした女王の最後の夏を飾るには自裁するより外はない。つひに彼の女も逝いた。毒を仰いだといふ説と、白き胸を毒蛇に咬ましめたといふ説とあるが、予は後説の眞ならん事を望む。

　怪女王去つての後は寂寞。十三代續きしトレミー王朝空く絶えて、あはれを歴史に謡はれるばかりとなつた。シーザーとの間にシーザリオンと云ふ一子。アントニーとの間に二子があつたが、夫れも不肖に終つたらしい。



教員檢定事務所の一時間

櫻子

何れも學窓に居た頃は千里の駿馬を自任して居たものである、八木屋のリボン關口の西洋花と日曜毎の外出に浮身をやつして寄ると障ると理想の家庭だの未來のマダム振だのと甘い事を話題とされる連中に超然としてゐた、私、圖書館か教會より外に足をも向けず、女村夫子と度外されても學業の點に至つては、貴孃方に劣けるものかと心の底に誇つてゐたのであつたが、扨社會に踏出して見ると中々以て世の中は安樂でないそこでまづ何は扨て、中等教員の檢定でも受けて、萬逆の時の用心をして置かうと決心したのである。檢定試驗は官報で八月廿日開始と示された。

電車を九段坂下で降りて、事務所に行つて、其控所を見ると、實にはや面白い配合です、風采の立派な堂堂たると云つてもよい、美髯の方もある、まうかとおもへば老後の一戰仕らんと意氣ぐむ半白の老靑年、朝日新聞の與二郎君の樣に、當世嫁探しにござつた、のかと見える樣な、撫でかずらのハイカラさん、

色の醒めた絣の單に、小倉の袴、髮さへ蓬の樣な、のは、蓋し國漢文志願の方であらう、向ふの卓を圍んでござる男女の連中は、どうも圖畫志願の美術家か、お化粧美はしく金線の眼鏡、ちゞれた毛、それでなかなか粋に見える方もある、

まあんなに若い方がと驚ろかれる色繻子の帶に月見草の花かんざしも居らつしやる、と見れば大きなお腹抱へた、令夫人どうした御奮發でと聞きたい位、あちらに三人、こちらに五人、どうせ私、駄目です、いやあなたは大丈夫です、などゝ話し合つて居る、椅子に寄つて非禮は見ず、非儀は聞ずと澄して居る方いやもう種々雜多な方々の寄り合です、更に是等一人一人の心の裡を、活動寫眞に採つたならどんなでせう、とつまらぬ事を考へて居る、と時間ですとの一聲に、各々自筆の名刺を以つて、受付へ渡

して席々に就きました、

膝下丹田、今は封切つて配付される問題を、待つばかり寂として一場靜りかへり、獨り窓外の槐樹に喧しき、蟬の聲ばかり、

試驗に立會される方々の内、事務官の老人の、極めて濃厚なる方が、一同に二三の注意を與へられて、後いよ〳〵答案にかかりました、

今年の家事科の豫備試驗の問題は凡て四項



一　家計簿記の日記帳記入と月計算

二　食物貯藏の種類と其効用

三　外孫男兒に送る産着に就て作法上種々の問題

四　腸窒扶斯患者の看護法

大要申せば右の四題で、時間は八時より十二時迄、私共も出來るだけ、正確に答へてと存じつゝ、大分失敗も致しましたが、答案を試驗係りの方に渡して、門を出ました、御蔭の柳を吹く風涼しう、重荷を下した様

な氣もしたり、一種何とも云へぬ心持で、歸宅致しました、三十一日には女子高等師範で、教育大意の受驗をせねばならぬ、此頃は餘り用事が無いので、お茶の水は三年振りに通りました、赤壁に髣髴たり、と稱せられた神田川畔の勝景も、電鐵の爲に大分俗化された樣に思はれました、昔時は德川氏が育英の府として、居つた茗溪の學窓、幾多の女流教育家を出した、女子高師の門を入りました、

此教育大意なるものは本年始めて行なはれるので、小學校本科正教員の有資格者は、受くるに及ばぬのでありますが、今日は各科を通じて男女一同、此校の講堂に集りました、問題は三問で、

一　普通教育の意義及其價値を述べよ

二　直觀、觀念、概念の意義を說明せよ

三　教授と訓練との意義を明かにし中等學校に於ける兩者の關係を述べよ

大要右の有樣で時間は八時から十時迄

中にはヘルバルトや、ペスタロッチを、丸呑みにして居られた方もあつたのでせう、或は今迄學術技藝にのみ集注して、居たので二度や三度の素讀では、容易に腦が消化吸收をせぬ爲めに、困つた方も少くなからう、今迄無名の教育者で、ひそかに期の來るを待つて腕の鳴るのを禁じ得ぬ、經驗家も御出になつたでありませう、

扨結果は如何でせう、

勿論通過したらうれしいけれども失敗に終つても恨みがありません、自分の勉强が不足で、智識が不確實であつた爲ですから、前途猶遼遠なりと來年を待つより、外はございません、

然し得た事は讀書に親しんだ事、

時を無駄に過さないで、常に向上の精神を持し得て此爲めに凡てを忍ぶ事が出來た事、などでありました

之れは無形に授けられた愉快な免許狀であります、

千里の道も遠しとせず、一歩づゝ歩んでこそ遂には目的地に達する事も出來ませうと、存じて居ます。

病院で手術を受けた私の經驗

清水糸子

夜來の嵐、名殘なく晴れて、誠に良いお天氣になりました、窓押し開きて患者の日向ぼつこするのが見えました。

今日は愈々私が、手術をうくる番となりました。前日來同病患者に、手術の事や、其の經過など詳しく聞いては居ましたけれど、私には丁度可愛ざかりの子供がありますので、若しか間違でもあつたならと、いつしか想は行先の事に及びて思はず涙が瞼を濕ふしました。

早やお母さんの、いらつしやる時刻、坊の爲めにはどんな乳母をお頼み下すつたらう。お乳は澤山出ようかしら、旦那さまは遲くとも正午までには來て下さる管、早く來て頂きたいものだ。

賄部屋では早や、晝飯の準備が始まつた．膳椀の音がする、ふと自分の室の戸を、開く音がした、と見ると看護婦が參つて、私の脉を見たり、體溫を計つたりして、午後二時より、手術する旨を言置て行きました。

昨夜來、食を禁じて置かれたので、乳も思ふやうに出ません、坊は泣き出します、手を盡して漸くなだめすかして寢かせました、未だ家からは、誰も參らない樣子、時計を見ると早や十時過ぎです、待つ間の徒然に、かれこれ行く先の事が案じられ、若しか魔藥のために、間違でも出來た時はどうしやう、あゝこれが永い別れとなるかも知れない、と、涙ながらにすやすや寢むれる坊をゆり起して、又も乳房を含ませましたが、悲しさは胸一ぱいになつて、獨り袖をぬらしました、折から小使に導かれて、お母さんは入らした、乳母もつゞいて來る、急ぎ涙を拭ふて挨拶する。

入院は始めての故か昨夜は淋しくて寢られなかつた事や、いろ〳〵話し合ふて居ると、旦那さまが見えたのでうれしかつた、早速事務室に行かれて、手術を受

ける手續を濟まして下すつた。

隣では配膳が始まる、私は三人分注文する、やがて、膳が來る、皆さんは食事を始められる。旦那さまは食事中私の顏を時々見て居られたが、総ての茶話に、愈々となつては厭になつたぢやないかとからかはれる、大丈夫とは言つたもの丶、内心ではやめたい樣な氣がした、不安のあまり眠りきりになりはしまひかと、尋ぬると、其なぬかりがあるものかと言はれて、安心はしたもの丶何となく、恐ろしいやうな氣がしてならなかつた。

坊には澤山乳を飮ましてやらうとしましたけれど、思ふ樣に出ません、心配の所爲でせう、

時間はだん／＼と迫まつて來る、立合のためにと、里の父と、親類の方とが來られた、お母さんは、手術の立合などは出來ぬ、自分が卒倒でもしては困るからとおつしやつて種々注意すべきことを言置いて乳母と一緒にお歸りになつた。

間もなく看護婦が迎に來た、決心はして居つたものの思はず脊に冷水を浴びせられた樣な氣がした、看護婦の注意により身輕にし、下締め一つにて、皆さんと一緒に手術室に行きました、室内はストーブの加減誠によく、中央に手術臺を東より西に長く置き、東の棚には藥品、刄物、繃帶などを並べて置き、南の窓の下には、湯、水などの準備も整つてあります、傍への椅子に倚り、待つて居ました。

間もなく靴の音高く、四人の醫師が來られる、一人は副院長さんで、外科の主任の方それ／＼手術衣を着られる、最前から五人の看護婦は、各分擔があつて、立ち働いてゐる、さあ始め樣とおつしやつたのは、副院長さん、看護婦の言はる丶まゝに、湯卷一つとなつて、手術臺の側に立ちましたが足が震へて何だか上る事が出來ません、暫し躊躇しましたが、良人に助けられて漸く上りました、そして仰向になつて毛布を着ますと、早や何となく氣が遠くなつた樣で、言ふに言はれぬ嫌な心地がしました。

看護婦の隙を窺つて、そつと良人に、「どうか側を離れずに居て下さい」と頼みました、何だか漏斗形の物を以て鼻を覆はれたやうです、臺の下方に當つて早やキユツ、キユツと言ふ音がする、魔藥を送り始めたのでせう、考へて居るともう譬られない厭な香がし始めました、折を計つて呼吸をすれば思はず送られて深く吸ひました、成るべく吸はん積りで居ましたが、不意に打たれて、十數回、深く吸入れた事は知つて居ますが何だか手足の自由を失つたかと思ふと、其れなり氣が遠くなつてしまつて、後の事はすつかりわからなくなつてしまつた。



ふと眼が覺めて驚いた、電燈は燦爛として室内に輝き、自分は病室に歸つて寝て居ました、もう手術は濟んだので

せうかと、ききますと、良人は側に來て氣が付いたかとおつしやつた、手術は濟んだのですかと聞くと既二時間前に終はつた、傷所は痛むかとおつしやるから痛みませんと答へて思はず手を首にあてゝ再び驚いた、繃帶が首から頭にかけて縱横に卷き付けられ、首が自由にならなくなつて居たのに、俄に甚だしく渇を覺えたので。水を求めますと、醫師より差止められたとて與へられません、其上口中は一種言はれぬ厭な香がして、不快でした、良人は切りに。氷を碎いておられる下さるのかと思つて居ると、氷嚢に入れて頭に上げて下すつた、吐氣が催してくる、然し幸ひに吐もしませんでしたが誠に苦るしくて仕樣がありません。

かゝる苦しい場合にも、第一腦に浮かんで嬉しかつたのは、手術中怪我のなかつたことゝ、再び皆さんのお顏が見られる事とであつた、次には手術中つまらん事をいつて、良人に、迷惑を掛けやしなかつたかしらと、言ふ事でした、聞いて見ると何も言はず、唯兩三回睡つたばかりであつたと承つて、大きに安心しました、手術には二時間半も費したさうで、再發の患なき樣にとて、叮嚀にして下されたとの事、衰弱した者には、やりたくとも出來ぬのださうですが、幸に身體が壯健な爲め、長時間の手術に堪へたのださうで、傷は痛みませんが、體を動かすと、針を刺さるゝ樣な心地がします、あまり話をして居ると熱を增すとの事故、眠つたらよからうと注意されましたが、何分にも吐氣が烈しくて、なか〳〵眠ることなどは出來ません、其うかうして夜の十時頃までには、疲れきつて、いつしかうと〳〵と、眠つてしまひました。





戰さに榮えし廣島市

附安藝の宮島

梓の神女

廣島は淺野侯四十二萬石の城下人口は十五萬神戶以西の大都會中國一の都であります。

▲海陸二軍の重鎭

日淸の役には畏れ多くも主上は此地に大本營を進めさせられました其行在所は五師團の城廓內で招魂祭の時々拜觀を許されます日本一の美人の御嫁樣を迎へられた野津元帥や北淸事變で有名な山口中將は嘗つて師團長として此地に英姿を留められました。

饒津公園の二葉山の麓に淸洒なる邸宅は以前梨本宮樣が五師團附武官として滯在中御起居遊ばされた跡だと申します。

帝國第二軍港の吳は吳市にありまして廣島からは海路陸路何れを行つても一時間で行かれますが、之實に瀨戶內海の咽喉であつて、蒸汽船の甲板上から見ますと鐵工所に林立する煙筒の煙り、小山の樣な軍艦幾艘舳艫啣んで整々堂々波を行く有樣は勇壯なもの、晴天の日などに沖のかもめの飛びかふ、波の間を、日頃手練の短艇を漕ぎ廻る水兵の活潑さ一朝事ある時の美しい心はかゝる時に養なはれつゝあるのです。

この地へ一寸上陸して見ると實に玉石混淆でウエフハースと鹽煎餠風月のカステーラと田舍の豆腐屋のがんもときとが、一緒にされた樣な感じが致しますよ、まあ考へても御覽遊ばせ、後ろ山々前海原の、狹い所へ海軍將校、商人、職工と雜多な社會の人間が集合して居るんですもの、血の雨降らして其筋の厄介になる事なんか每晚の樣です短劍に制服嚴めしい士官さん、靑服の職工、突つかけ下駄の遊び人ひさし髮の夫人令

嫌に櫛卷のお神さん、下等なお白粉澤山の醜業婦いや込みも込んだり、此土地は活馬の眼玉をも拔きかねぬ勢は、和庄町通りの一寸東京化して居ると同樣、一般の人の言葉迄下手な江戸辯なんでございますもの。

更に船を進めると、玆は船頭可愛の音戸の瀬戸、平相國の入道が、此堀割工事を命じた、今將に工成らんとして日が沒したので、淸盛は扇で以て太陽を西山から引歸さした天罰として日の病を得て他界の人となつた、其墓所が甲板とすれ〳〵な所にあつて、日招き神社として祀つてある。

廣島市を流れる太田川口に宇品港がありまして、こゝ迄は城下から汽車でも圓太郎式馬車で或は人力車でも二十錢出せば走つて來る事が出來ます、船舶の輻輳する事夥だしく、戰時には軍用停車場軍用棧橋、決して人民の入るを許可されない、出征軍人送迎の關門となつた宇品は、永く忘れる事はありますまい。

▲人情風俗

東京の山手が御國者澤山な通り、この地も申さば地方人の寄合地である、三度の外征には焦點であつた海陸の交通は日に月に進んで行くと申有樣なので、質朴で、厚い點があるとは慾目にも申されません、商業地なのであるから致し方もありますまいが、大阪六分に東京四分と申したら適當かもしれません、春秋二期には三越や白木屋、高島屋、十合などが例の廣告人形を持出して出張つて來る、土地にも角八、有米、山瀨などゝ云ふ呉服屋は、各々店頭の飾附に腐心して客を引て居るけれども、何所も同じ秋の夕暮、粗品進呈や福引券に景氣を附けた舶來雜貨店にもめつたに人を見受た事もない。

先づ革屋町、平田屋町、中島集産場を目拔の場所として、傘屋町、大工町、鐵砲屋町、猫屋町、などゝ其町名が殆んど其住民の生業を現はして居る。

岡目ではあるけれども當地の商店は軍人本位であると考へられる、軍人の持てる事夥多しいものである、勿論カーキー色の軍服に、栗毛のお馬を堂々と打たせ

給ふ服振りは立派に違ひありませんけれども、此社會の常として萬事が派手で金遣ひが荒いのなどが大に原因である黄金萬能主義の廣島人の渇仰の的となるのも無理の無い話しでありませう。

精出して勉強しんさい、軍人さんのおごうさんになれますやうで、とは私が女學生時代に出入の婆やにいはれた言葉であります、特に珍妙なのは當地の方言で、オキャーセ、スカタランの名古屋以上かもしれません、官吏は多く東部に住つて居ると思召せ、顔や姿は見られるが、言葉には全く參らざるを得ずと評した若い學士がありましたが誠に御説御尤と存じました。

お神さん(オゴウサン)　なさるから(シンサルケン)
あべこべ(ヘコサカ)　御出なさい(キンサイ)
ございます(ガンス)　ください(ツカアサイ)
うらやましい(ケナリイ)　そうでしよう(ガンヒョウデ)

こんな岩の様な言葉を黄色の聲のアクセント澤山にやられたら全く通辯なしでは駄目であります、私共も初めはまご付たものでした。

宗教は俗に安藝門徒と申位ですから眞宗の信者の多いのは勿論で、說教は至る所で聽聞する事が出來ます、早い例が私立學校を設立するのに本校は佛教の趣を以て云々と、活字に仕組んで置くと成功が早いさうです、基督教も諸派の會堂があつて、悔い改めて福音を信ぜよ、と盛に活動して居るけれども、出入するのは小數の官吏や男女學生基耶君に蓋額の連中が、多數らしいとは、酷評かも知れません、

佛教の方でも佛教婦人會などがあつて、さうでがんすのおごうさん連がなか〳〵活動して居る、

葬式の時にも男は必ず社杯に冷飯草履編笠といふいで立ち、女も素足に同じ草履、珠數を手に提げて被衣と申て一ツ身の様な、白無垢の物を頭にすつぽりと被つて、左手で一寸額の所をつまみ上て行く風は、なかなか珍な風俗と存じました。

▲教育の狀態と名物

廣島高等師範は市外の高燥な地に塵をよけて設立されて居る何しろ中學校以上の學校は唯一つなので此生徒は一寸鳥無き島の蝙蝠然と、細好みの洋杖振つて濶歩する處などは、東京の角帽の面影がある、然し未來の教育家だけに、新聞の三面をにぎはす様な事は餘り無いのみならず、本校は能く社會的教育に注意して市民を歡迎する通俗講話通俗音樂會、等を開催して人氣取をやつてなります。

男女師範學校は遠く宇品灣を臨んで、比治山麓に設けられ、中學校女學校の數校實業學校職工學校、など獨特の校風によつて教育されつゝあ

ります。

生徒は地方の者も多いけれども、軍人や官吏の子弟が半數以上である、父兄の職業として移動するといふ事がある故か、地方の割合に人づれがして、教師とは吾等の授業料に依て雇入たる物を敎ふる器械なりと蔑した點はたしかにあると某先生が溢して御出でした。

軍隊の發迎だ、外國高貴の御上陸だつては、此大小學校生徒が宇品迄行くのですから、之を車上で見ると一側は軍人一側は學生で、廣島迄を築道された樣であります。

△當地の名物

傘、蚊帳、柿、牡蠣、行李、山繭織、と申て置ませう、傘は田舍向で、とても都の御方の手に觸れ給ふ程の價値はありますまい、當地では麻の栽培がなかなか盛なので、蚊帳はずゐ分賣行もよいさうです、格安のかたびら等も出る樣子です。

柿は柿羊羹、祇園坊の干柿など一寸召上られると存じます、名物に甘い物なしで、割合に値段がよい、柿羊羹一本十五錢、干柿でも十個入で五十錢位も出さねば上品は得られません。

魚は瀨戸内海に近いだけに東京の樣に水を吹たり、線香を立てたりする必要もない、種類は鯛鰈鰹鰡などを初めとして、蛤や海老なども可なり多く見られますが、需用が多いので價は東京と餘り差はありません、新鮮なのが御馳走樣なのであります。

東京で一つ模倣の出來ぬのは本場の牡蠣料理でありませう、特に飼養場の設けがあつて盛に繁殖さしあてる、産額も年々莫大なものださうです、全國でも第二位にあるさうです。

市を縱横に流れて居る太田川の支流に架つて居る橋畔には、十月頃から屋形船が繋がれて居る、其掛行燈には牡蠣料理千客萬來。

牡蠣飯、牡蠣フライ、牡蠣鍋其他の料理も御好み次第、牡蠣飯は一人前づゝ小さい釜で炊て揉み海苔の香りに咽喉をならす間に、運ばれるといつた寸法、御酒でも何でも御自由です。

第一注文をすると船に飼つてある牡蠣をむげて殼を割つて出すといふ有樣ですから、其おいしさ加減も亦

まがきの菊



格別、一人前三十錢で多の寒さと、飢を凌ぐ事も出來る、新任の御役人樣方はお高祖頭巾に吾妻コートの夫人同伴必ず試みらるゝとの事であります。

暮の贈り物にしても、水なしの貝ばかりしかも殻を取つて一升が、二十五錢位であります、此自慢の牡蠣船は大阪くんだり迄出稼にまゐります、此船で出る漬物は一寸なか〱たべられますよ。山繭織と申せば黄色のと思召すかもしれませんが、此頃は小紋形や其他異り色の縞物なども出來まして、代は最下一圓半から三圓半迄、木綿と絹布の間召に一寸よろしい樣ですけれども、使つて見てさほどよいとも存じません、何しろ洗濯が利かぬのと地巾に皺が來るのが缺點であります、これは太田川の上流の可部といふ地方で多く出來ますのが、廣島に來てレッテルを貼り付られて廣島名產として賣出されるのであります、序に旅館の事を申て置ますが。

市内で有名なのは長沼、吉川、溝口、等でありまして、長沼は建物から申ても貧乏人の入る可きところでもありますまい、次に吉川これもなか〱行屆て勉强して居ますが、長沼程派手では無い。

溝口は西洋料理が甘いので外國人などが多く泊るさうです、其他何でも教科書事件で顏を惡くした前身視學官の早代りした旅館もあるさうで、大手町邊は旅館だらけ、何れに御投宿も御勝手ですが、一夜泊りの多い勢か宿屋氣質が餘り氣持よくも思はれません、今一時間辛抱して宮島驛で下車して嚴島に泊つた方が觀光を兼ねて却つて一擧兩得かもしれません、私共の樣な貧乏人は、いつもこんな手段を取りますので、

△嚴島の記

安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七惠比子といふ俗歌の通り、此嚴島は周り七里の小島であるけれども、日本三景の一つで市杵島姫を祀る社は淸盛入道の建立したもので、史料に富んだ此小仙境に、繁る一本の松にも昔物語りがある樣に詩化して、考へると實に何とも申せない味があると存じます。

其社は蛭に寄り、水に架し、潮滿れば殿樓悉く水面に浮ぶが如く、朱塗の御殿長い廻廊の兩側に、集められた額の書や繪、私共には珍紛わからぬけれども、後ろの寶物殿の品々同樣、日本美術の粹といはるゝ代物も少數ではありますまい。

一風呂流した心地よさ、海上を吹き來る風に旅の衣を弄ばされつゝ、そゞろ歩きの海岸通り、社迄立並ぶ燈籠の光りは落ちて水面に金の筋を引く此地は、花によし紅葉によし、妻戀ふ鹿の遠音一聲高く一聲低く、波の音を破つて耳に達する時、實に何とも申せないのであります、社を通り拔けて海岸に沿ふて行くと、大元公園即彌山の麓で、滔々として白泡を飛ばす淸流は、其昔毛利元就が陶晴賢勢を皆殺にしたところ、七日七夜血が流れたと言ひ傳へて居る、古杉の立木晝尚暗く郭公の一聲時にとりまして哀れに感じました。

旅館で登山の事を話すと、潔め風呂と云つて朝湯に入れて呉れる、案內者はちやんと待設けて居る、此彌山を登ると遠く防長の海門を雲烟の間に見渡す愉快を感じます。

特に面白いのは御山烏といつて昔から三羽の烏が其數も殖えずに居る、之れ神樣に仕へる使者で、これを拜した人は惡事災難を脫れる事が出來ると案內者が話す、其上の杉の枝でアホウ〳〵と其御烏樣にからかわれました。

中腹にある寺は、弘法大師開基の地、二た抱へもある樣な、煤澤山な鐵瓶此火は勿體なくも、大師が燃し付た火、今尚殘れりといふので南無大師遍照金剛と、在所への土產にと古風にも火なはにして持歸り、線香に點じて灸でもするのであります。

岩と岩とで樓門になつて居る所にも小祠がある、茲には平宗盛の献上した鐘が古色蒼然として昔を語り顏につるされてある。

福島正則が山の禁物たる酒食を携へ登山して、見晴しのよい岩に腰下して一獻と出かけたのはよいが、山の神の怒に觸れてお尻が岩にくつ附た切り離れない、我慢の正則も閉口して、御詫の神樂でお尻をやうやく

我物にした、といふ岩など、其他珍岩奇石數ふるに暇なし、夏の盛りでも頂上には藪鶯の音がきこえました、

本に歸つて、海岸の一部に尼の洲と稱するところがある、之は源平の戰に哀れや平家は壇の浦の大敗戰、二位の尼は安德帝を抱き奉つて海底の都をさして御入水、其尼の死體が波の儘に打上られた場所だと申ます。

當所の弘文院と申寺に、其木像や中將姫の蓮の曼陀羅、其他國寶の二三が保存されてあります、特志の方は是非拜觀を試みられたらば、面白い事でありませう。

豐太閤が三韓征討の紀念に建立した五重塔千疊閣、なか〳〵一日では詳細に見られぬ程の名所古跡があります。

昔は此島の神聖を保つ爲めに、死體は決して埋葬せぬ、產も此島ではせぬ、神に使へる神鹿ですら女鹿の或期間は海を渉つて本島の山に隱れるを常としてあつたとか。

とにかく水もよし、蚊は夏でも居ない、旅館も有名な紅葉谷の岩惣大渠屋、白雲洞、など割合に安價で料理も氣が利て居る。

藝者も割合に美しいのが居るので、吳や廣島の軍人さんはわざ〳〵御出馬に及ぶとの噂さ、こんな事は女の私が申さないのが、溫雅かもしれません。

下關行列車が廣島驛を過て、四、五の小驛を過ぎるともう右手に海中の大鳥居を見る事が出來ます、これが宮島驛で、下車すると嚴島詣での客專門の小蒸汽船が、體格相當な汽笛をならして往復して居ます、ほんとに淸盛もよいところへ考へた建築をしたもの、日本三景の一の嚴島記は此位に致します。



我が家の經濟法

小官吏の妻

私共夫婦に男の子一人と舅姑の兩親に弟と都合六人ですから、經濟と申しても自分勝手には出來ませんが、互に勤儉の方法を自然に實行して居ります

弟は中學の一年、子供は當年三歲です、子供には私等夫婦で每月五十錢づゝ、生れた月から他日の學資にと貯金して居ります、また私どもも日に二錢は必ず貯金箱に入れ年末に出して時の用の物を買ふことにして居ります、一寸私どもが里へまゐるにも車なからずに車代だけは子供に玩具を買ふて與へます、私宅では男の子には一切絹物は用ゐませんで弟も子供も絣ガスリにいたしましてこしらへる時にはいつも積丈二枚分にして裏表通しにして置き次の洗濯に裏表にしますと目立ちません、別に裏の切も入らず結構です、キャラコの紋付羽織で何所へでも通じて便利であります。

また大きい子供にも小さい子供にも運動を十分いたせるやうにして居ります、運動に便利なやうにと心掛けまして、男の子には一切羽織を着せぬ習慣をつけて居ます、人樣は寒くはないかと申される方もありますが、却て活潑に見え丈夫になります、極寒の時も風一つ引きません、習慣は第二の天性とやら今では二人とも羽織を着ることを厭ひます、子供の綿入には三十日の綿を入れまして寒中も綿入一枚に子ルの襦袢とチョッキ、シャツの外ヅボン下足袋をはかせて居ります、襟卷は一切させません、私どもの國で一月中頃から三月の始め頃迄雪が降りまして、寒さもつよい土地ですが、餘所さんのやうに綿入の二枚に羽織など御召しなさる御子樣とくらべては遙かに丈夫であります、如何に木綿物なればとて數多くては、洗濯上からも中々手數がゝります、かうして置けば子供の活動も違ひ身體に及ぼす影響も尠ないと思ひます、老人はともかく私等夫婦もつとめて薄着の癖をつけて居ます、

今一つ學校へ行く子供には紙草履などは小學の時から古くなつた草履や、書よごし御清書など持つてこなければ、新らしいのを與へぬやうにして居ります、之れはたゞきびしくするよりも物を粗末にせぬ精神の修養に外ならぬのです、また此頃には家の中に紙屑など落ち居らぬ反古籠へ持ち行くやうに申つけました、反古の代を子供に與へることにしましてからは、一寸見ても拾ひ行き決して掃き棄てないやうになりました、舅は晩に五勺位の御酒で機嫌よく主人は少しも飲ます少々の煙草を慰みにして居ますが、經濟にも大層違ひます。

私の經驗に時間の利用ほど經濟なるものはありません、私どもは每朝五時起出て油斷なくマラソン式に働くのですから、仕事もはかどり身體にも餘裕が出來まして讀書なども出來、何より樂しみです、

貴婦人月旦

▲岩倉公爵夫人久子

愛國婦人會長として令名一世に高かりしは人の知る處、而して家系と云ひ性行と云ひ些の非を入るべき處なく、實に現代婦人の典型なりとは一般の評なり、彼の或る婦人の如く八面六臂的なるとは異り、其の關係せる會の爲には誠に熱心に盡力せられ、愛國婦人會は實に好會長を得たりと思ひ居たりしに、今や去つてなし、或はいふ、過般會長を辭せられしは公爵が宮内大臣に就任せられしより夫人は宮相夫人と愛國婦人會長と兩部にて社交場裡に出入する事の頻繁に過ぐと見られし故なりと、果して然るか。

▲長崎省吾氏夫人多惠子

故寺島伯の令孃にて、長崎家に嫁ぎし以來社交界の貴婦人として夙に令名高し、最初ミスブラックに就きて英學を研究したるが、夫人は元來外國語研究の志なきのみか、當時は非常に外國語を嫌ひしも、後頗る上達して、先年前米國大統領の令孃來朝の折も夫人先づ選ばれてその接伴係を命ぜられ、それより夫人の名社交界に高くなりたり、而して長崎家と久邇宮家とは特別の關係あるより夫人は頃日宮妃殿下の御渡歐の際には特に隨行を命ぜられたるが、宮家にては夫人に對する御信任頗る厚く、外人を接待せらるゝ時は先づ夫人を呼んでその任に當らしめらるゝよし家庭に於ては極めて質素にて全く女中同樣に襷がけ白前垂がけにてセツ〳〵と臺所に働らかる。

▲東郷大將夫人鐵子

總て物事に注意深く同情に富む大將の夫人の事とて萬事に用意周到且つ憐み深く、例へば家庭にて茶菓子など取らるゝ場合にも、大將の指圖を受けざる前に必ず下女書生にも頒與さるゝと云ふ風あり、故に交際社會に出づるも凡て同情を以て人に接せらるゝが常にて婦人會或は祭典の幹旋等に於て其の平民的にして親切なる接待振には何人も感心せざるはなし。

▲伊藤公爵夫人梅子

近頃は健康上醫師の勸めに從ひて多くは大磯に退隱せられ、少しも交際社會に出でられざるも、一時は何の會何の慈善會にても必ず其頭に推されて、是れを斡旋されし事もありて、物事を取纏めらるゝ才と其勉强には何人も敬服せり、又一時宮内省の御用係りとして皇后陛下にお仕へなされし時も、中々能く勤められたりといふ、所謂賢夫人とか、學問のあると云ふ方にはあらざるも、晩學ながら今日も始終手習ひを爲れ、書籍も調べられ、歌も能く詠まる、控へ目にして怜悧の方なり。

▲寺内陸相夫人多喜子

熱心なる徒歩主義者にて、散歩は勿論訪問會合などの場合も概ね徒歩なり、時に電車の便を藉らるゝ例あるも、馬車人車などを用ゐらるゝ事は殆ど見受けず、堅實なる人にて、陸海軍將軍婦人會の大黒柱と稱せらる。

▲濱尾男爵夫人作子

愛國婦人會の評議員たり、寺内夫人と同じく徒歩主義にて、愛國婦人會の會合或は其副會長たる大日本婦人衛生會の會合などに出席する爲に漸く電車の便を藉らるゝ位なりとか、嘗て衛生會長代理として横濱に赴かれし時、總裁宮妃殿下より特に乘用車として一列車を賜りたるも受けずして、事務員等と共に普通列車に乘られしことある由、我が婦人界にては殆んど飛將軍と目せらる程勢望あり。

▲山脇玄氏夫人房子

愛國婦人會評議員として最も勢望ある一人なるが、其他大日本婦人教育會を初め如何なる婦人の事業にも殆んど夫人の盡力を見ずと云ふ事なし、學才に富まるるは貴婦人中稀に見る處、其の經營せらるゝ女學校は日に〳〵盛大に趣きつゝあり。

▲大山元帥夫人捨松子

婦人として第一回の洋行者だけに語學の力など充分に備はり居るも、極めて謙遜の質とて對話中英語にて語るを好まれず、其の態度、容貌は共に人の長たる資格充分にて、他の婦人會長などが會合のある節自宅に

て盛んに挨拶を稽古したる上出席するが多き中に夫人には更に此事なく別に用意せずして其長たる將校婦人會などに出席せらるゝが例なりといふ。

▲岡部法相夫人坻子

前田侯爵の養大叔母にあたられ、交際界に於ける夫人の地位は誠に人の羨む處なるが、加ふるに夫人には長剛、長寧、榮子、豊子、登子、長世、長量、久子、(今日下義雄氏の養女)長建の五男四女の子寶ありて一家團欒の樂みゆたかに、世にたぐへなき家庭として其名も高田千登世の里に匂へり。

▲松崎博士夫人悦子

愛國婦人會の本部評議員にて、又小石川區主任幹事たり、近頃同會の紛擾に際し、或る幹事と共に劈頭に辭表を呈出せし程に同會役員中の熱心家にして、又有力なる方なり。

▲伊東中將夫人マリー子

外人だけに交際に長けらるゝはいふ迄もなけれど、趣味は廣く、特に話好きの方にて話題も多ければ、往訪の客は、快談數刻、更に倦怠を覺えずといふ。

▲高木貴族院議員夫人榮子

女子高等師範出身だけに學才は山脇夫人の如く是亦貴婦人社會に多く其の比を見ず、其の最も熱心に盡さるゝは愛國婦人會にして、現に評議員として有力なる地位にあり。

▲乃木大將夫人靜子

陸海軍將校婦人會の爲に最も力を盡さるゝが、流石に大將の夫人とて、衣服なども常に綿服を纏はれ、乃木家に輿入ありて以來自分にては更に絹物を購求せられし事なく、所藏の衣服中絹物は僅に二組あるのみなりといふ。

▲鳩山博士夫人春子

愛國婦人會、婦人教育會、大日本女學會、篤志看護婦人會、東洋婦人會等に評議員として盡力せられ、能く辯じ能く活かるゝは人の知る處なるも、其の家庭教育家としての夫人は未だ多く世に知られざるが如し、特に令息に夫人を迎へられて以來の夫人を見て頗る意

外に思ふ者もある樣なれど、そは實は從來夫人を誤解せるが故なりと或る人言へり。

▲古市工學博士夫人幸子

婦人會にては愛國婦人會、大日本婦人教育會、其の他の色々關係せられ貴婦人社會にては最も德望の高き一人なり、女子高等師範出身にて學才餘りあれど、至つて無口なる方にて、愛國婦人會中に紛擾があるとも一向お關はりなく、全く中立に立て、逐一それを傍觀さるゝと云ふ風なり。

▲鍋島公爵夫人榮子

大名の奥方として威厳も具はり、貫目もありて、誠に申分の無き御方、而して交際社會に出でられても、或は婦人會の會長としても、其のキビ〳〵したる御取なし振りには亦何人も敬服せざるはなし、例へば婦人會等に何か問題が起りて多數の婦人が寄つてたかつて紛擾する際に於ても、夫人の一言は能く之に解決を與へ、而も何時も能く肯綮に當る。

▲奥參謀總長夫人茂子

年が年だけに舊時代の處なきに非ざるも、頗る交際に長けられ、且つ貫目がある事とて、會合の際など夫人の姿の現はるれば是迄の喧騷も忽ち收まると云ふ。

▲龜井警視總監夫人眞洲子

嘗て靜岡に宮城に居られし時代より活動的の夫人として知られしが、良人の榮轉と共に中央に來られ、愛國婦人會の評議員として名聲漸く高まれり、言語明晰にて頗る要領を得たる人なれば、軈ては社交界の大立物ともならるべし。

▲三好中將未亡人梅子

陸海軍將校婦人會唱主者なるが、幾多の將校夫人中の最も遊藝に秀でられたる一人なるが、平生は至つて勤直な方なりといふ。

▲石本陸軍次官夫人ゑつ子

高等師範の出身なるが、比較的年齡も若く新時代の教育を受けたるだけに何事にも要領を得る方にて、訪問客などに向つても更に倦怠を生ぜしめらるゝ事なく愉快に應待せられ、是又將校婦人會中の藝人なりと。

▲仁尾貴族院議員夫人繁子

愛國婦人會評議員にて、牛込主任幹事を兼ねられたるが、先頃辭表を呈出されたり、其體軀の大兵なる點に於て、總て短刀直入なる點に於て、貴婦人中に有名なる人にて、其勢力も頗る大なり。

▲佐野中將夫人喜勢子

三好婦人と共に將校婦人會の主唱者にして、最も多藝の人なりと稱せらる、ビールも少しく召上がる樣子頗る付の活動家にて、萬事に要領を得、將校婦人會中の大立者なり。

▲大久保商工局長夫人榮子

貴婦人社會にては新顏の方なるが、年齡も若く、實家が近藤郵船會社長だけに、其服裝と云ひ、携帶品と云ひ、流行の粹を蒐めらるゝより、何か會があつて集まる際などは、貴婦人連中にお妃樣の御出ましなど蔭口を聞くもの多しとはほんとうか噓か知らず。

茸狩

昨夜まで降りつゞきし秋雨霽れたれば、村の少女等と茸狩に行く。今朝は少し遠き林に行かんとて、早く出でぬ。有明の月に照らされ、曉の風に吹かれて、心身爽快、浮雲輕く船上の山巓にかゝりて、曉景繪のごとし。瀬鳴りする河沿ひ道の朝寒く、遅れの少女等呼びとめつゝ行く。鷄鳴遙かにきこえて、東天の微光野末に亘る時、目指す林につけり。いざ此の籠に滿つるまでと、樹蔭なほ暗き林に入れば、思ひのほかに茸おほく、二つ三つづゝ並びて目の前にも足許にも、此處にも彼處にも、さて何れを先きに採るべきか、皆先づ驚きの聲を放ち、急ぎてとれり。松の葉降り堆みたる處かきわけて、大なるきのこの群見出でし時など、人呼びて共にとるも嬉し。斯くて早や籠に半ば滿れる頃、彼方にて藍茸見ずや藍茸みずやと云ふ聲す、此の林に入りてより、誰も之のみは未だ見ざる樣子なり暫くして、眞白の葉隱れに我れ此の茸を見出だし、珍らしとよく見れば、極めて小さきもの二つ節に又一つ、其の瞳じさうなる樣又なく可愛し、いかで此儘大きくなれよ、と密かに松の葉かけて置きぬ。廣き林の彼方此方あさり歩きて、あまりの面白さに、旣に日高きを知らず、かごに溢るゝばかりになりて、皆歸らんと云ひ出でぬ。見れば何れも籠重さうに、なほ前垂に入れたるありすゝきにさせるあり、皆嬉しさうに歸り來る。はや我村近く歸れる時、汽笛一聲、今朝一番上り列車は我等の前を過ぎ行けり、踏切越えて顧れば、少し後れて草刈も牛連れて歸り來れり。（梅子）

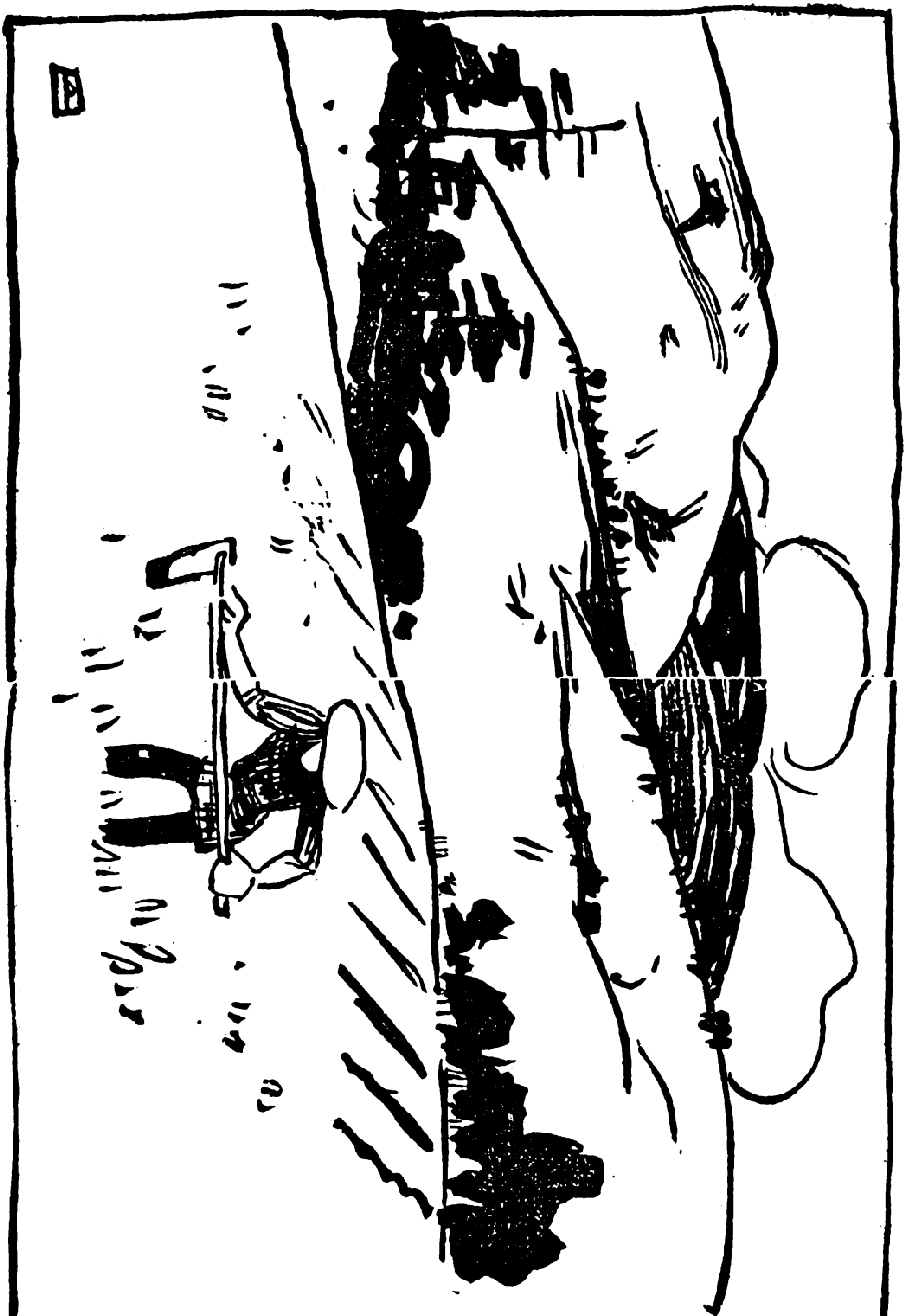
日光中禪寺の紅葉



中宮祠畔蔦
蒲ケ濱ニテ　百合子

徒然なる餘りと申しましては失禮では御座ますが御懷しさに不堪一筆申上ます、突然思立て去る廿四日この日光さして旅行の途に上りました、實は新婚早々此所へ參る約束では御座ましたが御承知の通り寒中の事で御座ますので夏まで延て置ました、處が身體の障りが出來ましたので一年暮し二年過し遂に今日に相成ました結婚後始めての旅行なので御座ますから新婚旅行ならぬ結婚新旅行ですのホヽヽ、上野七時半と云ふのに乘り込みました始めの内は左程にも御座ませんでしたが石橋よりこちら宇都の宮邊へ參りましたらもう頭痛がしまして〱困りました日光停車場を降りて神山まで車もそろ〱三時間ばかり休みまして東照宮へ參詣致しました、神社は餘りくど〱しいので此處に略します、神山旅館に一泊翌早朝出發馬返しまで車で參りましたの其所まで迎ひの人夫を出して置いて下さいましたのでそれから徒歩で四里の山道を昇りました、聞きしに勝る嶮しい道路にて、生れて二十有四年此樣な想をした事は御座ません、或時は石の頭を昇り或時は巖の角を這ひ又或時は木の根をよぢ昇り、漸く中の茶屋まで參りました時、難所はこれからだと申されました時は實に落膽致しました、途中處々にて越し方を眺めますと、下の方は一面雲に包まれてさながら我身も雲に乘て居る樣な心地でした、有らん限りの勇を鼓して先なる人を追ひ越し、追ひ越しては、遂ひに昇り終りました。廣い〱森の中を眞直ぐに參りますと左の方に石の碑に華嚴の瀧といふが御座まして直に參つて見やうと思ひましたが勞れて居りますので後で參る事にして行きました間もなく有名な中禪寺湖に山まし

た、レーキサイドホテルにも隨分西洋人の客が見える樣でした、昨日の新聞にも御座ましたが風景の佳絕なる實に瑞西山中を其まゝですの湖水を見ましたら急に足の勞を覺えましたので一と先米屋といふに結び附草履の紐を解きました、室は丁度湖水に臨める八疊の間にして奥向には歌の濱の何やら神社が見えまして光景頗る佳、翌日は少しの風もなき朗かな天氣で波一ッ御座ませんのでボートに帆を上げてのり出しました、一直線に白岩へボートを附けましてそれより各自に上陸觀音堂を拜見致しまして森の中の小笹を押し分けかき分け河原へ出まして其所より赤岩に至りました一葉二葉紅葉に成ましたが十月後が一番見頃なさうです、紅葉は赤岩よりも、白岩の方がきれいで御座ます葉の赤き所に岩が白くて水靑く、實に自然の美此水に勝るもの有らうかと存はれます、翌る日は又注文通りの好天氣にて湖水一面鏡の樣にて、山も木も、家も舟も、逆さに寫る心地好さ、今日は白岩より左へ折れて上野島へ上陸、此島には其昔此山を開き給へる何やら上人のお骨を埋めし所とや申ました、石の塔より外に誰と語り合す人も無げに上より姫小松のみが淋しげに立て居ります、其所より又左へ參りまして八丁出島といふが御座ます八丁程湖水の中に突出してますので付けた名だらうと思ひました、此所にも社が御座まして參詣人の名が社の周りに一面記されてありました、それより又左して歌ヶ濱へと舟を止めました、新築されました鐘樓が遙かの中禪寺からも見ゆる程の朱塗りの立派なものでした、此所は湖畔の眺望第一とか申所で御座ます、男體山を眞向ふに見て右は遮ぎるものが御座まして見えませんでしたが、左は菖蒲ヶ濱を隔てゝ大眼山小眼山、畑こそ見えね遠くには白根の噴火山も見えます更に翌る日は瀧を探檢に行きました、先頭第一に華嚴に行きました、行く手の右方に新き交番が設けられました、其交番の在る所よりだら〱降りて行きますと巖頭に立つので御座ます、瀧の音がザー〱ならぬドックドックといふ音がします、其音を聞いたばかりで半ば死ぬ氣の人は身を引込まる樣な心地します、其所よ



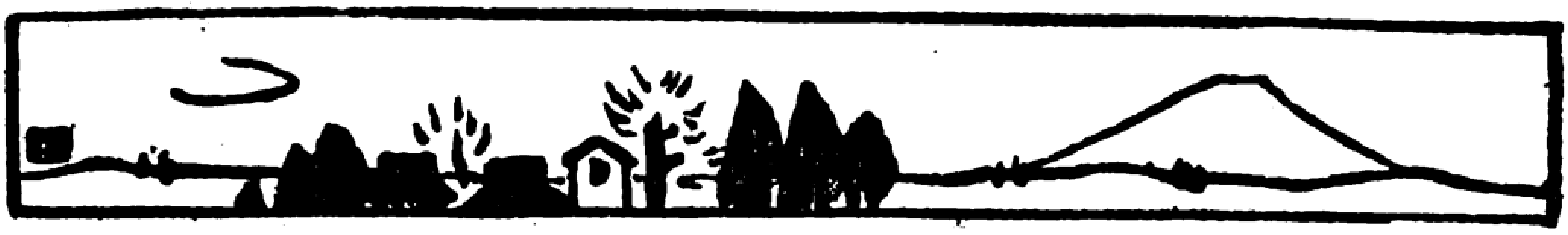
り一丁ばかり木の根にて造りし自然の階段を降りて行ますと瀧は一目に見えます、巖と巖の間より眞直に千尋ならぬ三百餘尺下なる瀧壺へ流れ込む狀の此れが水かと思はるゝばかりで御座ます、然し私は想像よりも小さく見ました、私ばかりならず誰が目にも意外に小さく見ゆるさうです以前は此程小さくもなかつたさうですが、例の樹身に巖頭の感を記されてより俄然小さく成つたさうです折しも夕立ちが參りましたので日雲迄は行かずに歸りました、翌日は男體山を右に湖水を左に見て行く事一里半、菖蒲ヶ濱なる所に帝室の養魚場を參觀致しました、助手なる某氏の詳細なる說明には流石文明なる世かなと思ひました、鱒を卵の儘にて米國より取り寄せ、孵化せしめて池中に放ち、養魚せしを賣却して帝室の御收入に當る事業の由で御座ます其傍に 龍頭の瀧なるが在ります、此瀧は華嚴とは趣が違ひまして華嚴が日本式なら此は米國式とも申さんか、ナイヤガラの小さきに似て居ります、歸途には迎ひのボートにて菖蒲ヶ濱より中禪寺へと着きました、翌日は又候草履を結付て猶山奥なる湯元に杖をひきました、龍頭より上りて一丁ばかりの所に地獄穴と云ふが在ります灯を點して幾程行きても先を知らず、途には灯消え息も絶ゆるさうで御在ます、好奇にも其所を二間ばかりは入て見ました、寒氣強く四季氷の絶る時はないさうです、山道を上り上りて戰場ヶ原へと出ました原の中に一筋の道が在るばかりにて左右とも廣々たる原野です珍らしきは水氣もなき所に一面花菖蒲が今を盛りと咲いて居ります直に湯の湖に出ました此所にも西洋人多く總じて此所中宮祠には外人の避暑多く眞に瑞西山中の感が在ります、湯の元其邊を見て歸途には湯瀧に寄りました、華嚴よりも稍々低く巾廣く水烟り立ちて轟々たる響はさながら天地を動かすばかりで御在ます。

勞れし足を引摺り引摺り夕刻宿へ着きました猶一週間ばかり滯在のつもり其内に亦御報知します末筆に一寸と氣候を申上ます、涼しいといふのは眞の日の中にて、朝夕は袷に羽織位では寒く感じます。

家庭衞生顧問

△貧血病の療法

貧血は病氣ではなく、固有の體質であるといふ一說もあるが、それも程度のもので矢張り貧血も一種の病氣である其の原因は出血、又は不良なる生活、結核、十二指腸虫、黴毒、精神肉體の疲勞、又は姙娠等である、又婦人が妙齢の時期に萎黃病といつて膠質貧血症を發する事がある、此の病にかゝる時は全身の皮膚が血色を失つて蒼白となり身體がだるく、食物が進まず、精神が疲勞し、記憶が減じ、少しも氣根を要する仕事に堪へなくなる、そして睡眠が缺ふして運動すれば動氣が激しくなり呼吸が切迫し頭痛、眩暈等を發するので、病の進むに隨つて是等の症狀が一層增進し遂に卒倒するやうな事もある、療法は專ら食物を改良するにあるが、平素の生活法を大に改めなければならぬ、即ち海濱、若しくは山間の如き空氣の清良なる地方に轉住し、消化し易い滋養分を取り、牛乳、鷄卵乃至は肉類の碎いたものを多分に食し適當な運動をなし、そして屢ゝ溫泉又は鹽湯に浴し、便通を整へる時は著るしい効がある、酒類は好みに任せ、ビール、葡萄酒の少量を與ふるもよろしい又胃の强壯な人は肝油を用ふるがよろしい、それから貧血症には血液を增す爲めに鐵劑を用ふる必要があるが、その用法は醫師の指圖によつて分量用法を極めるのがよろしい。



△腺病質の療法

腺病は專ら十三歲の子供に多い病で、營養不良症の一つである、又遺傳から起るのもあるが、空氣の不良、運動の不足、住居の不適當などのも亦其原因となることがある、この病氣には二た通りあつて、一を過敏性といひ、一を遲鈍性といふ、過敏性は專ら上流社會の小兒に見るところの病で顏面細長くして背は高く骨が細く、皮膚が青白くして薄く靜脈が顯はれて筋肉も又發育が十分でない、つまり虛弱蒲柳の質である。遲鈍性といふのは皮下に脂肪が多く、顏が腫れ上つて、鼻は低く口唇が厚く一般に蒼白色を帶び、猶多く膿のやうな汗を漏するものである、すべてこれ等瘰癧性の小兒は皮膚が弱く、諸種の疾病、殊に鼻カタル、咽喉カタル、氣管支カタル、耳漏、關節炎等に罹り易く、頸部の水脈腺は累々として腫張して居るものである、そして此の病氣は中々頑固なもので、種々の治療に抗抵して容易に治らず其内にいろいろな病氣を發するものであるから、早い内に充分に治療を施すのが必要である、其の法はまづ衣食住を改良し、清新なる空氣の充分通ふところに居らしめ、滋養物として牛乳並に鷄卵を與へ、其上平素の食膳に肉數を加へればならぬ、室内には光線が適度に

置入る様になし、常に濕氣を防ぎ天氣の良い時はなるべく屋外に運動させ、又毎日入浴して身體を清潔にするのである、そして温暖の季節から、冷水摩擦を行ひ、習慣をつけて冬季もそれに堪へ得られる様になし、その上餘裕のある人は海濱に轉居して海水浴若しくは水泳等をなし、頻りに身體の强壯法を行ひ、又肝油を服用し得られるならば適量に用ゐるがよろしい。

△條蟲の驅除法

條蟲（俗に眞田蟲）は一般に肉類の生食に原因するとの說である、蓋し肉類を煮て食すると生のまゝ食するとは消化の上又風味の上に大差のあるところから、自然刺身などの賞翫さるゝ次第であるが、肉食の生食は頗る危險で、往々其の中に含まれた寄生蟲の爲めに恐るべき疾病を釀すことがある、そして寄生蟲の中で一番多いのは條蟲である、條蟲は豚肉に多いもので豚は糞便や其他不潔物を食するから自然是等のものが筋内に宿りて發育して子蟲となり、筋肉の中や、其他の部分に轉ッて棲息するのである。それを知らずして生食し又は半熟のまゝで、食すると直ぐに腸內で發育し、成長して條蟲となるのである、條蟲が腸內に發生すると大便が秘結したり下痢を起したり、又腹痛が起り食慾不進となり、胃が膨れ、胸がつかへて全身の衰弱を來すのである、これが豫防法としてはすべての肉類を十分に熟煮して食ふのにある、それから



この蟲を驅除にはまづその豫備としてヒマシ油を與へ、一日間米飯を禁じ　魚、肉、芥子等の如き鹽味のもの、酸味のものを與へ、冷水、酒、ビールの如きものを多量に飲用せしめ、翌朝に至つて驅蟲劑を用ゆるのである、驅蟲劑はいづれも通常藥ではいけないから醫師の指圖によらなければならぬ。

△丹毒の療法

何かで創傷を受ける、其の傷を不潔にしたために毒物が侵入して起るのが丹毒である、その傷は强ち大創でなくとも極く些細な引掻きのやうなものからでも入るから注意せねばならぬ、この症狀は、始め創緣の皮膚に赤色を帶びた疼痛のある腫れを生じ、水泡が出來て痛みを發し、劇しく熱を取つて遂には全身に廣がる事がある、そして初め四十度位の高熱が出て食事が進まず、嘔氣を催ふし、譫言を發しなどした上、遂に餘病が起つて又劇しい衰弱の爲め斃るゝものである、この療法は、患者をなるべく閑靜な風通のよい室に安臥させて置き、消化し易い滋養物を與へて體力を保たせる樣に努めればならぬ、局部には三十倍のイヒチオール液を塗りつけ昇汞水のやうなもので濕布繃帶をするがよい、そして進行の劇しいものは惡性であつて、よく一命に係ることがあるものであるから專門醫の指圖を乞はねばならぬ、殊にこの丹毒といふ奴は創口や水泡から洩れた液が他に傳染する恐れがある

からなるべくこれに觸れないやうにし、又患者の使用したものは一々石炭酸水で消毒せねばならぬ。

△創傷の手當法

創傷を受けた時はなるべく早く醫師に見せるのがよい。併し急な場合で間に合はぬ時は豫め處置して危急を救はねばならぬ、創傷は一般に劇しく出血をするものであるから、狼狽して時期を失はぬ樣注意するのが肝腎である、まづ處置の方法は大略左の如きものである。

(一)創傷を受けた時はまづ第一に止血法を行ふべし

(二)創傷には不潔なものは極めて危險なれば創口にはなるべく汚物の入らざる樣汚穢の手に觸れざる樣にせざるべからず、彼の古手拭にて傷部を拭ひ、又は種々の膏藥等を貼用すべからず

(三)止血をなしたる後は、清潔なる手巾又は布片を以て創口を被ひ、清水にて洗ひし亞麻仁油紙を張り、三角繃帶にてまきつくべし、但し未だ止血せざるに繃帶をなすは屢々大出血を來し生命を失ふ事あれば出血止まざる間は決して繃帶すべからず

(四)創傷の不潔なる時は冷湯を以て清淨ならしめ、然る後繃帶をなすべし、冷湯の代りに三百倍サルチル酸水を用ふれば更によし、口、鼻、眼及び小兒などの創には刺戟性強き藥品は却つて害あり、硼酸水、サルチル酸水のごとき輕き藥を用ゆるがよし



(五)繃帶を爲したる後は局部を高めて動搖せざる樣にすべし、然らざれば一旦止血せしものが再び出血する事あり

(六)創傷小なりといへども痂をなしたるものはなるべくこれを保護して取り去らざる樣になし、創傷大にして止血の困難なるものは應急の手當をなして醫師の來診を乞ふべし

△破傷風の手當

一寸とした外傷から黴菌が侵入して遂には一命に係はるやうな大病を惹き起すものであるから創傷の消毒は餘程嚴重にせねばならぬ事である、この病も又黴菌の侵入から起るもので、病に感じてから一週間位の後に口がこはばつて來るのを覺え、間もなく全身の筋肉に痙攣を覺え、強直を起し、身體が反り曲つて弓狀のやうになり、腹は板のごとくに堅く、呼吸困難となり、食物を取ることも出來ず遂に心臟痲痺を起して斃るゝことのある尤も恐るべき病である、一體この破傷風の黴菌は土壤や塵芥などの中に澤山あるもので極めて些細な傷でも身體に侵入するものであるから、常に患部に接し易い手足の外傷は最も注意せねばならぬ特に踏ぬきなどの際には嚴重に消毒を行はねばならぬ、又破傷風の黴菌

は睡眠に適ふ時は其の發育を妨げられるものであるから、傷口はなるべく開いて置いて空氣に觸れさせるがよし、そして沃度ホルムを撒布するのである、それから被傷風に罹つたものはなるべく安靜にして置かねばならぬ、靜かで暗い室に臥かせ、決して騒々しくしてはならぬ、又訪問客なども避けねばならぬ、つまり患者はなるべく氣を落ちつける樣にするのが肝要である。又患者の食料は牛乳、鷄卵、スープのごときものを與へ、又近來用ゐられる血精療法をも試むるがよろしい。

△狂犬及び毒蛇に咬れた時の手當

狂犬に咬まれると早いのは二週間、遅いのは半年乃至一年の後に恐るべき狂犬病を發するものであるから、被傷後直ぐに毒血を吸ひ出すか、又は局部を切開して腐蝕さするか、若しくは燒灼を行つて病を未發に防ぐやうにしなければならぬ、然し既に是等の手當を怠つた爲め本病を發したものは靜かな暗室に臥させて精神を安靜した上に酒類のやうな興奮劑を與へるのである。

次に毒蛇に咬まれた時は、毒の力が中々猛烈なものであるから忽ち心臟を害するものである、故に傷を受けた場合には直ぐに口を以て其毒血を吸ひ取ると同時に又そこを堅く縛つて毒質が血中へ入らぬやうにしなければならぬ、但し此際若しその人の口唇等に創傷でもあつた場合には直ぐ感染するから避けねばならぬ、其の場合は仕方がないから傷口を切開いて毒血を絞り出すか、硝酸銀、又は腐蝕加里等で腐蝕さすのである、其他強い酒類を飲んで心臟の働らきを強めて體力を保たしめるが肝要である。

すべて狂犬にせよ毒蛇にせよ、咬まれた時は其毒物が創口から木脈管を通じて心臟へ入り更に血液中に交つて全身へ繞り渡り、害毒を逞ふするものであるから、そしてもう毒物が全身へ廻るやうになつては生命が危いのであるから、第一それを防ぐのが肝要である、若し創口の周圍が紫色になつて腫れ上り、少さな水泡が出來た時は危險の徴であるから速かに醫治を受けねばならぬ。



△雀斑と母斑の治法

そばかすを治するには百倍の昇汞アルコールを脱脂綿に浸して局部に塗り、水泡を發したらば、亞鉛華。澱粉等分のものをふりかけると皮膚は剝がれて段々雀斑は取れる又結晶石炭酸で腐蝕せる方法もあるが素人の手療治は何分にも危險であるから輕率な事を行つてはならぬ、安全で割合に効のあるのは炭酸加里と、硼砂と香水との合劑を塗るものである。又母斑は結晶石炭酸で腐蝕するのが一番よいが、母斑の外へ藥が付かない樣に注意せねばならぬ、近頃は電氣療法、外科手術で取る方法もあるが、兎角母斑は下手な事をやると却つて大きく見苦く、爲易いものである

韓國の日用料理

在京城 歌子

朝鮮人日常の飲食は其貧富貴賤に應じて差別あることは我國に異ならず、而して中等の飲食は赤飯に牛肉を煮、或は炙りしもの二三品と漬物なり、漬物は種々あり、彼國にてはこれを沈菹と名づけ、これに乾魚、乾牛肉等を合せ、別に甘醬、辛醬、胡椒などの加味品あり、食後、温湯を飲むの風習も亦我國の茶を飲むがごとし。

△赤飯 米に小豆を加へてこれを炊ぐなり、韓國にては麥少く、豆多き故豆は米に比して價甚だ廉なるを以て中等社會の人はこれを常食となす。

△肉蒸 これは韓國語にて「チム」といふ我國の牛鍋のごときものなり、牛肉と芹亦は葱の如き野菜とを鍋に入れて醤油と水を和してこれを煮る、その味も牛鍋と粗同じ。

△乾魚 これは蛤、蟹、鮑、烏賊、蛸其他の魚類を乾燥せしめたるものにて別に料理することなく其儘に食す。

△乾肉 牛肉を乾かしたるものなり、夏時の牛肉の精鮮なるを薄く廣く(厚さ二分位巾五六寸)切りてこれを日に干すこと二三日にして其色表は黒く割き見れば淡赤くなるに至る、これを藏すること二三年を經るもその味を變することなし、唯長霖の時保存に意を用ふるを要す、この乾肉を其儘にて食ふに味又甚だ妙なり、其効能第一滋養は鮮肉と毫も異なる事なく第二量少くして携帯に便なり、第三別に料理に手數を要する事なく直ちに食ふべし、故に携帯食糧には最も適せり。

△果物 春秋時々の果物多し、韓國にては殊に栗、柿、梨多し、概ね生食す。

△炙肉 韓國にてはこれをユクオといふ魚肉を薄く片片として炙り又は小麥粉か卵黄などにてこれを包みて炙りたるものなり、其味我が天麩羅に似てやゝ淡泊なり、尤もこれを炙る時必らず油を引くが故なり、醤油又は芥子をつけて食す。

△豆菜　大豆、赤豆等をもやしてその芽を吹かしこれを煮たるものなり、或は油にていためてこれを汁の實となし、又浸し物に作る。

△沈葅　これは大根或は蕪菜などを漬けたるものなり、其の漬け樣は種々あれども大抵甕に鹽と糠とを容れ、それへ大根、蕪を浸し、鰯又は其他の小魚を以て其味をつけ、蕃椒を多く加ふるを常とす、沈葅は凡そ三十日より五十日を經て其儘洗ふ事なく食す。

△麺　これはメヨンといふ蕎麥に小麥粉を混和して作る、この製法我國にて恰も線香を作るがごとく、まづ粉を水に和し溫めて粘となし器械に入れて上より壓せば下に餅のごとき目ありてこれより出づ、その形ち我が素麺の如く色白し、この麺は或は汁に入れて饗宴の後各人に一椀づゝ與へ或は大皿に盛り饌側に置きて肉蒸又は他の汁に和して食ふ。

△饅頭　麥粉にて團子を作り中に牛肉、鷄肉、卵黄、又は蕈類、野菜、魚肉など多きは十五六種、少きも三四種を細かに刻みてこれを容れ汁となして食ふ、但し汁は一般に醬油に酒又は水を和したるものに牛肉、鷄肉、及び野菜を入れて作りたるものなり。

△餅　餅は粳米にて作りたると糯米にて搗きたるとあり、製法概ね日本のものに同じ、多くは蜜を塗り、又は豆粉を付けて食ふ、中には色々に彩色したる畫餅あり、或は肉蒸又は麺汁に和して煮て食ふもあり。

△膾　なますは韓語にてホイといふ牛の肝臓、腦漿、又は舌肉などを酢、鹽、胡椒等に浸して食ふ。

△蜜果水　これは蜂蜜に梨其他果物の液を和し、他の植物色素を以て色をつけ飲酒の際に各々好みに隨ひて之を飮むなり、甘くして婦人小兒の嗜好なり。

△煥爐湯　これは眞鍮にて火地輪の如きものを作り、其上に大鍋をかけ、其の鍋中に肉類、魚、野菜、果物其他の珍味をいろ／＼に料理して入れ醬油に酒を和して煮ながら食するものなり。

△紅飯　これはわが國の赤飯のごときものなり、但し蜜を加へて其味を甘くす且つ炊ぎ方は頗る粘きを貴ぶ。

韓人日常の飲食には各人に一箇づゝ膳ありて其上に飯及び肴を載す、飯は大なる眞鍮の碗に盛りて手に採ることなく膳の上に置きたる儘これを食ひ、食ふに箸と匙とを用ふ、匙は恰も漢方醫の用ゐし藥匙のごとく肉菜などは箸にて挾み、飯と汁とは匙にて掬ふ又小刀を用ゐ、少し大なる肉類は切りて食ふ、而して食器の大部分は眞鍮製なり。

食時は朝夕二度にして朝は午前九時夕飯は午後七時を通例とす、午後二三時頃に或は果物又は餅などを喫すこれを點心といふ、點心とは胸に點ずるの謂にて僅かに食する事を意味す。



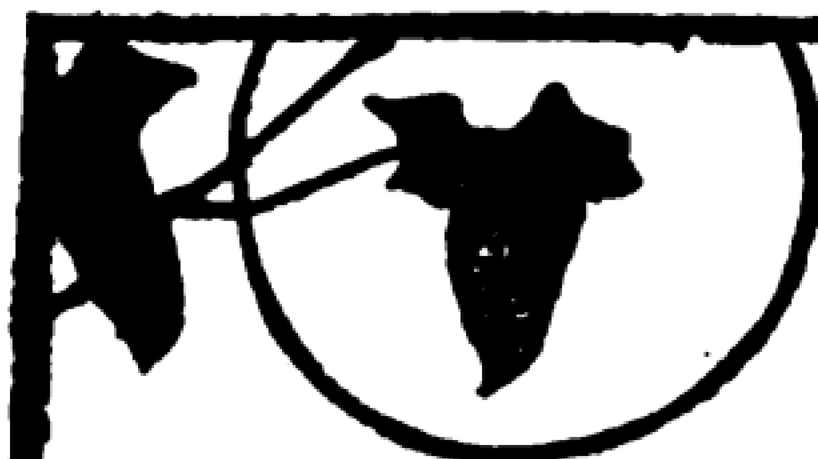
數多の客を饗應する時などは別膳にせず合饌にする事あり、合饌とは一切の料理を膳に載せ、一器に盛りて衆客皆共に食するなり。

宴會は概ね夜間にして來客まづ其席に入り煙草を喫し談話すること少時にして料理を出す、別に行酒人ありて客數に應じて盃を載せこれに酒を盛りて毎人の前に置き衆客飲み盡せば更に又これに滿たす、而して別に酒を勸むることなく又献酬のことなし宴將さに終らんとする時、麵汁を出し、尋で皿に水を盛り、巾をつけて出す、衆客これにて口を嗽ぎかくして宴を了るなり。

同胞の歎き

兄様、不意に私がこんな事申しあげましたら定めて女のくせに生意氣などといふ御叱りがあるかも存じませんが、どうぞ〳〵今一時だけ昔のやさしい好い兄様に立ちかへつて御きゝ下さいまし。

兄様、お母様は一心に兄様の御成業をまつておいでになります、あの御年よられた身で毎日機をお織りになり、私はともかく小さい妹まではづかしい學校へもやらず家において手傳ひをさせてやつと得る月々の學資金、御母様の汗と妹らの涙とでやう〳〵御送りするあのお金を兄様は何に御費やし遊ばしますかれて前から兄様が御出京後の御評判のよくない事は承つてなりましたがまさか〳〵、新聞に出る程とは誰が思ひませう。お母様の御子ですもの、私どもの兄様ですもの。今朝あの新聞を一目みて私は泣きました、兄様火のない處にけむりは上りませぬ。あれも少しはほんとうの事でございませうれた、お母様にあれが分りましたらおそらく御母様は死んでおしまひになります私はいそいで今日の新聞をそつとかくしてしまひました。どうせ〳〵知れずには居り升まいけれどせめてしる事の一分でもおそかれかしと思ひまして。兄様どうぞお願ひでございます、この事が母上の御耳にはいるまでに御心改めて下さいませ。父上の御たましも必らず草葉のかげから兄様を眺めてゐらせらるゝ事でございませうにどうぞもう一度もとの兄様に御かへり下さい、そして母上を安心させて下さい。兄様お願ひです。春子とやらはどの樣な美人かは存じませんが、御成業の曉にお求めになれば、それにも勝る美人は世にいくらもございます。どうぞ只一人の慶の母様を御みすてなさいますな。兄様を柱とたのむ二人の妹を御忘れにならずに下さいまし。くれぐれも母上を春子とやらに御みかへ下さいますな。（楓子）



裁縫室の一時間

夕ほし

「田口さんはね、宮殿下へ嫁らつしやるんだつて」
と、誰か低聲で云つた。
「えつ。」
「まあ！」
「ほんとう？。」
今まで、手も口も一緒に動かしてゐらしつた皆様は、一齊に聲の主の方へふり返つた。二十數



つの視線を浴た中田さんは、近眼の廻りへ例の皮肉な人を馬鹿にしたやうな笑を浮べて居る。皆樣は嘲弄、半信半疑と羨望の眼と眼で囁き合つてゐる、室は暫くシーンとした。階下の更衣室のオルガンが矢たらに鳴る、可愛らしい音は、食堂のピンポンであらう。突如寂寞を破つた。

「嘘うよ、夢に見てゐるつていふのよ。」と、本科の生徒から、此の室をして、「笑の敎室」と、あだ名せしめたる、滑稽好きの、浦月さんが、笑に茶化して終つたので、皆樣も、

「まあ吃驚したわ。」

餘計な心配しちやつたといふ如な風して、ドッと吹き出した。

こゝは、都下に此校ありと銘うたれたる〇〇女學校選科の裁縫室ー正午の遊歩時間。學校でも此室丈は異なる一城廓をなして、休み時間でも皆樣は、滅多に校庭へは出ない、さして古くない十二疊敷には、まだ木の香のする裁板が四脚……、板が四脚とは可笑しいけれど、脚が有るから、まあ机と云つた方が適切であう、眞中には「五德のない大きな火鉢があつて、八方からこてが突込んである、盛んに上る堅炭の炎は、若人の心にも譬へやうか。

「お嫁さんといへば御島さんも迯う〳〵嫁らしつたんですつてね。」

御自分のか、妹さんのかお手廻しのいゝ事、もう藍色がゝつた紋羽二重の脊縫へこてをかけながら岡村さんがいふ、すると、浦月さんが、

「理學士？。」

「イヽエ、軍人なの、海軍の中尉だとかですつてー。」

「ホヽヽヽ誰かの理想ね。」

と、笑つたのは何誰だかつい氣が付かなかつた。

「だつてね、理學士の方で大變な御執心な方があつて御島さんの御近所まで越してらしつたんですつて、何だか餘り恐しいわね、でもあの方軍人黨なのでせう。」

「ちやあ、理學士は依田さんへ廻すといゝわ。」

「結婚讓り渡しー當世女奇人ね。」

「直ぐあゝ應用されるから堪らない。」

方々から入る横槍を柳に風と受け流し、浦月さんは

「無論お父樣が軍人だからなのでせうけれど、軍人も中尉以上でなつきや嫁かないつて、仰有つてらしつたのよ、誰かの當て付けだわ。」

と、思はせ振りをする、

「あの方でせう？Tね。」

岡村さんがいふと、

「エヽエ、さうよ。」

と、浦月さんは首を前へふるのだ。

岡村さんも浦月さんも御島さんと同級で同じ第〇の出身。選科は女學校を御卒業になつた方が多い。

「お二人ばかり御存じだつて、私達、詰らないわ、その當付けの理由が、妙に聞きたい事よ、もう嫁らしつて了つたんですもの、仰有つたつていゝでせう。」

前の、結婚讓渡しの候補者たる數學狂の依田さんが

「ねえ、中田さん。」

と、中田さんを參謀に談判を申し込んだ。

中田さんは澄まし切つて、お兄樣の絣の袷羽織が、ゴツ〳〵して縫ひ難くゝつて仕樣が無いと、こぼしながら、付け了つた衿を、畢生の力を出して引繰り返してゐる、ほんとうに、中田さんの澄し樣、氣取り樣は一種特別、皆樣がお腹を抱へるやうに笑つても、漸く薄笑をする位のものだ、最も、一年でも目白の、而も英文科、況して自轉車で通學つたと云へば是非ともさうなくては無らぬのでせう。此間も、近眼が惡くなつて、少し隔てた物は、分明見えなくつて困るから、眼鏡を掛けて來やうかしら、などゝ獨言いつてたけれどあの風姿で、あの廂の下へ、、、ふち無しの目鏡と來た日にはおん姿は到底、仰ぎ見參らする事が出來ないかも知れぬ、こわいわ。

「秘密！ 秘密！。」

と、岡村さんが叫んだので、依田さんも口を噤んだ。けれど、默つてはゐない、

「先刻の事ね、中田さん、田口さんは嘘なんでせう？」

と。どこまでも理窟屋の依田さん、漸く返し了つた、

中田さんの手もとを凝視ながら云ふ、お二人は隣り合つてゐるのだ。珍らしく中田さんはホッと顔を赤くして口をつぐむ、

「宮殿下でなつきや嫁かないでせうつて想像したのよ。」

「田口さんて〇〇科の方でせう？あの方華族さんでも伯爵以上でなければ嫌だつて仰有つてるんですつてよ恐れ入るわね。」

と、云つたのは、これも古くから名高い小石川の〇〇〇の出身、藤村さん、よく華嚴のお話しが出るとからかはれる方。

「ぢや、田口さんは華族さんなの？。」と、

依田さんは五里霧中の顔付きで、眞面目に聞く。

「イヽエ、唯會社を一つ持つてゐる財産家つていふ丈なのよ、何れ、平民だわ。」と、

中田さんは嘲けつた口調で蓮葉にいふ。

「あら、平民なの？御自分の身分も考へないでね、校長先生の、御自說の理想を高尙に……も此位なら滿點だわ、第一「交際の技折」のお講義なんか、全で私達には分りやあしないわ、モーニングコートが如何の、晩餐がどうのつて西洋へでも歸化したら、實地に應用が出來るでせうけれど、だから……だから嫌いー。」

と、浦月さんは大氣焔、投げ出すやうに捨臺詞。

浦月さんは大の私立嫌いなのだ、第〇御卒業後、何學校へも行かないでゐると帝文科の兄樣が、

「何學校へでも通學つて呉れ、僕、友達に、妹の學校はどこだ」つて聞かれて、返事が出來ないと困るから。」

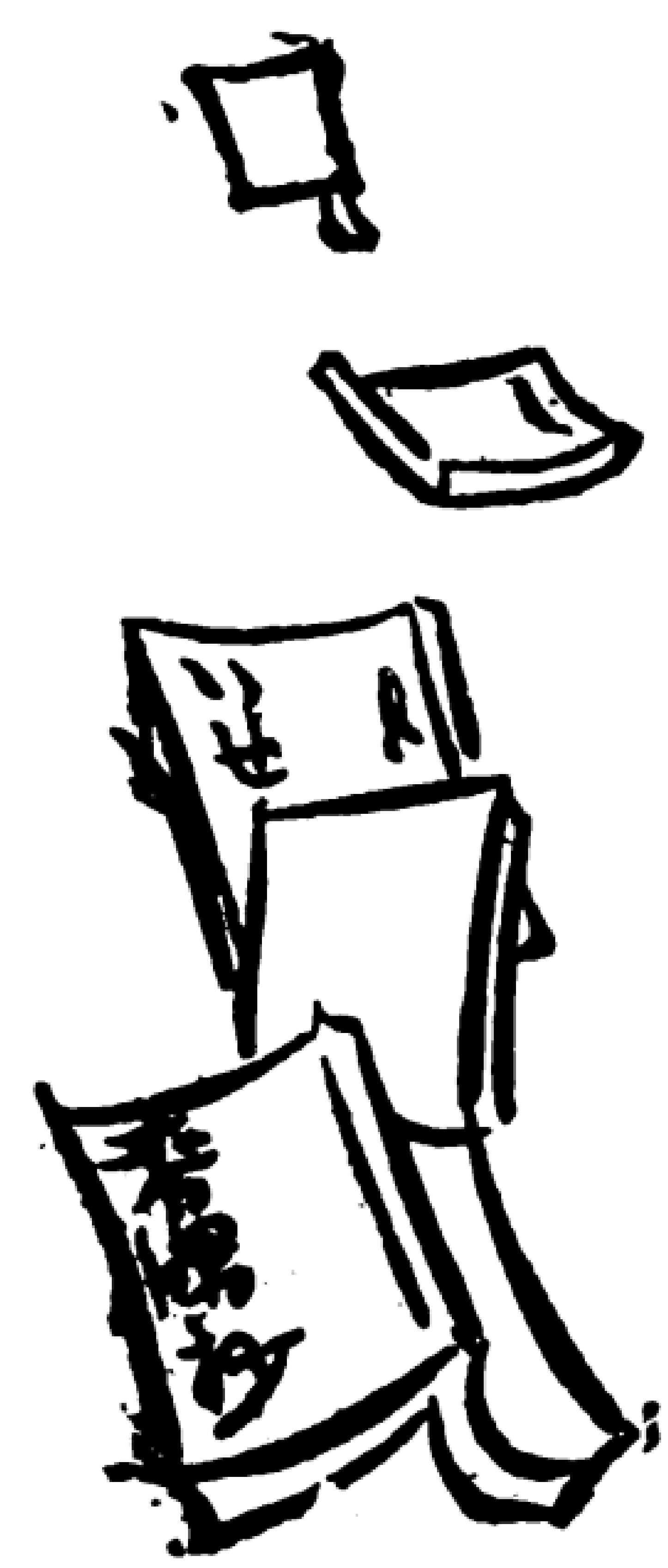
と、無理やりに進めて、入學らせたのださうだ、妙な兄樣もあればあるもの、私も一つさういふ兄樣が欲しいものだ。

「眞實ねえ。」

と、皆樣が口を揃へて悟つたやうに贊同するのを合圖に、チヨン／＼／＼と始業の鐘。



雀
やまがら
孔雀
うぐひす
つばめ
叭々鳥
きびたき
鶴
雉子
文鳥
はと
うづら
にわとり



短歌

一等　○　和泉　井上登美子

露しげき秋の別路ふと君は小さき花の草の名とひぬ

二等　○　三總　藤掛常子

眉は淺う瞳は清う愛らしきこのをみな子を君はいなみぬ

二等　○　下谷　山梶子

ほこりたる處女のころを思ひ出てなみたくみつゝむき飯かしく

三等　○　新潟　岩本芳子

撞きをへて鐘樓下る老僧の白衣の袖に栗こぼれちる

三等　○　下總　小出ほか子

朝露にしとゞぬれたる秋草をしづかにふみて人を思ひぬ

三等　○　大阪　はな子

ふと目と目相見て笑みぬ君とわれ小川にかけし橋渡るとき

秀逸

○　攝津　和久かつ子

湖の神秋の香ときてみそぐらむ月の汀に霧たちのぼる

○　千葉　加瀬紀久子

はづかしと扇かざせる其の袖につゝめどあまる妹のほほ笑み

○　牛込　平塚白百合

風光る十月の野は只一木椎の梢の空つくばかり

○　筑前　たつ茂

色褪せしきぬとりいてゝさめ〴〵と妹も泣けりわれも

なきけり」

○尾張　稲田美野流

若き日は齒を見せてよく笑ひわれに馴れたる少女なりしを」

○京城　中尾艶子

岩間よりもり來る水に絹ひたし妹が紅ほゝしめしてやりぬ」

○東京　萩枝

雙面をそとゆるがして山桐の葉にかくれたる初秋の風」

○芝區　松本美枝

なやみふす二十年の秋を面やせて今日も暮れゆくさすらひの世や」

○東京　中村千代子

新竹を割りてつくりし村長の垣根うつくし畑添の道」

○神田　信太きく子

灯をきりて歌合せ見ぬ君とふたり庭の美蓉に月うすき宵」

佳作

○豐後　菅原尾花子

馬子歌ふ節おもしろし花野道奈良へは三里有明月夜

○神戸　西尾紅涙

失戀の乙女狂ひて身をなげし古池のほとり蟲鳴きしきる

○大阪　山田芳枝

人妻のわれふけぬらし二十一粒むうす色紅にをとるを

○京都　船木ゆかり

十年の昔に返せかの君の瞳の色をこゝろの色を

○麹町　牧野はん子

照る月の此方に黑き雲湧きぬこよひ何處に時雨するらん

○麹町　宇山富美子

戀に生き戀に瘦せつゝ歌もなく二十の夏を現に過ぎぬ

○米國　村越光子

夜に入ればとりも叶はじ我夢は五千哩の古郷にとぶ

○愛知　成田てる子

たはむれし帽子におぢて飛び立ちし雀數群日は斜なり

○芝　英子

鬼網の舘面白き秋の漁濱村の軒に日は傾きぬ

○釜山　朱雀智佳子

くさ花は散りて流れぬ名なし野の小川さびゆく秋たけてゆく

○牛込　清水順子

家の幾幕うちて姬三人舞ひますさまに露草咲きぬ

○廣島　伊達まさ子

亡き母のおくつき訪へば手向けたる花はしぼみて虫の音しげし

○岐阜　飯島小枝子

うちつけにのたまはれども針つゝむつらき仰せに鄕家思ふ夜や

○小田原　飯田白露子

紫をかへしむかしは知らじ女郎花御法のにほになまめきて咲く

○　君代　城田いち子

あゝ寒き心よ魂よとこしへにかはらずあれと母は祈りぬ

○　京都　光子

明石潟白き頭に月うけて磯の浪音を聞く人やたれ

○　下總　小島保子

あゝ胸の君を呼ぶ笛こと〲くならなうなりぬさびしき夜かな

○　京都　藤原ムメ

寄て又返す浪路の浪の音のたへま〳〵に初かりのこゑ

○　伊勢　清水てる子

一刷毛の雲の中より青白き病女さながら月出でにけり

○　羽前　[illegible]毛なほ

みめよきをこよなき中と思ひてし少女心の昔戀しき

○　福岡　栗山はるな

海山もいまだめさめぬあかつきに港より出でゝ霧に入る船

○　大阪　野口たつ子

野分すと洲崎邊りの舟みなは川尻さしぬつばめのごとく

○　相模　春子

胸に利き刃を刺して砕きてと笑ひし君を我なつかしも

○　東京　飯塚綾子

月まろき嵯峨の庵の尼が許へ露[illegible]來の歌使かな

○　新潟　佐藤ナカ

庭のやどに黄金の玉はちりにけり月にむかへる白萩の露

○　四谷　林あい子

まちわぶる君とひまさずひとり居のいほり淋しき秋の夜半哉

○　秋田　芝田波留

朝ぎりの深谷まがきに香をこめて千代なしめたる白ぎくのはな

○　四谷　林あい子

鳴るかみにちひさき手もて耳おほひわれにかけより妹うつぶしぬ

○　福島　小林げん子

萩こえて遠く流るゝ野の水に夕日の光しばしたゆたふ

○　日本橋　須磨子

横つゞき[illegible]背に紫に夕日うすれぬ嵯峨の野路

○　札幌　鈴木雪子

立つて舞ふ松の葉や風涼し暮れ行く沖に眞帆片帆見ゆ

○　横濱　小豆澤薔薇

一とむらの庭の白はぎ花咲きぬなき姉君のめでしその花

○　日向　羅波美代

谷あひのけはしき路を辿りゆくうしろに鳴きぬ山時鳥

○　東京　夕ほし

かなめ垣あまたつゞける青山のうてなに低くにほふ姫よ

○　千葉　萩野露子

霜晴けてよき日を祝ふ朝の姉君の喜なりぬ我が歎なりぬ

○　名古屋　千石梅子

鏡とりて見る度毎にしのばるゝふり分け髪の古きむかしを

○　岐阜　山田榮子

美くしき乙女と生れ戀しらで老いゆく若き尼を慕ひれ

○　信濃　吉川多美子

草枯れて日の[illegible]寂びたる筑摩野に立てる田人を父とおもひし

○　東京　小室花子

夜に更けて蚊帳淋しき下影に妹が寝顔の笑いぢらしも
○　京都　いく
その垣にそと立ちよればあなうたてぬしは匂へる日扇の花
○　大阪　愛子
秘めおきし文とせかみの古日記を君に見られてうらはづかしき
○　台北　小百合
水うちて柴の折戸にたちよればすゞしさまさる夕顔の花
○　四坂島　渡邊泰子
母君の教を追ひながら姉ちのはなしにふけぬ鎌倉の夕
○　千葉　吉原靜江
白露に天地あらば七彩の絵具抱きてわれ描まむを
○　紀伊　田中富美子
白きよし秋の花園にむらさきの朝顔とる子の額しろきよし
○　阿波　西野いさな
われとはに君を見すてぬしかはあれど君ひと添ふることをゆるさず
○　相州　中田富子
夏の日に湯水浴ひし髪あれて夕波高し小岡校の秋
○　丹後　小坂綱　ふぢ子
名なし草生ふる野中の夜羽蝶似たりや生につかれし我に
○　麹町　野の花
まきて植ゑしその草花のかるゝ日に思はざりけり君去にましぬ
○　相模　しら藤
あたりみなものさびみゆるさが野路にのうぜんかづらくれなゐにさく
○　豊後　加納豊子
夜中の森ほの／＼はれて遠里の秋祭賑ふ灯火にうかびぬ

○　山形　松岡かれん
病みませる母をみとりて夜もすがらもの思ふまどにこほろぎのなく
○　青森　楓岸たま
いざさらば君よ別れんこの後は淋しく世路を我は辿らん
○　信濃　靜子
松多く大厦が横に苔清水あふるゝあたり女郎花さく
○　土佐　つゆくさ
君はなどかへりきまさぬ夕顔の花ましろなるうつくしき宵
○　岐阜　井川松枝
思ひわびて我ふる里の夕空をふりさけ見れば雁なき渡る
○　飛騨　福木
ちゝとなく虫の聲にも思ふかな故郷はるけき父母やいかにと
○　堺　芳枝
美しき芙蓉の海邊に佇みて思出多き夕雲を見る
○　下総　岩瀬不二野
月ふみてはなぐさふみて君とゆく野路に裳裾はぬれてけるかな
○　鹿兒島　肥後しの子
朝風に岸の秋草ゆらぐなり白鳥浮ぶ山中の湖
○　大阪　薫花
このちごは爺とよばむと母君が姉の座敷によろこびの聲
○　美濃　福井とみ子
夕暮に姉と妹の縁に光り虫の音聞きぬ相默しつゝ
○　中河内　紅葉
わけ入らば露やこぼれん秋萩の今を盛りの野への細道
○　伊勢　西岡久子

さまざまの鳴蟲の音もあらはれぬ尾花の末に月は登りて

○　京都　梅子

我がうきをうばひ顔なる野菊にもまたしと〳〵と雨のそぼふる

○　日本橋　澄子

そと墓覚忍び来りて我むれの花もち去ると夢に見しかな

○　千葉　大野つれ子

縁に出でゝ物狀ぎ居る若者をほのかに照らす朝月夜かな

○　神田　諸星みち子

寂しびに喜び求め泣く人を慕ひたえゝぬかよわき心

○　下總　小澤まゆみ子

美くしき灯影ぞ染ゆる蟲しげき京はみ室の紅寳れる家

○　深津　瑛花

夏くるまで君はうたおや慕ふらむ清き今宵の月に笑みつゝ

○　淺草　紅谷貞子

秋草にすだく蟲の音したひつゝあふげば高しいざよひの月

○　大阪　昌子

戸によれば眞葦野今し七人の紅き傘さすよき人の来る

○　伊勢　道子

わがにはの垣根の萩は咲きぬれど愛にし人は今世にあらず

○　武藏　西村千代子

てる月の影いつしかに消えはてゝ大海原はたゞ波の音

○　岩代　阿部とめ

君ゆきし道なつかしみ訪ひ来れば去年にかはらぬ萩ぞこぼるゝ

○　仁川　伊崎しか子

十六夜の月みんものとさまよへば庭の柳も影ほがらなり

○　上毛　石黒むめ子

戸をくれば明方白う月ありてけだかく寂し秋のあけぼの

○　宮城　白菊女

つゆふかき庭の千草にちら〳〵と涼しくやどる秋の夜の月

○　東京　小室初子

訪ふ人もなき深山路のさびしさをかこち顔なる姫百合の花

○　大阪　殿谷白萩女

海めぐり山はむらさき山めぐり霧しろじろと暮るゝ紀のくに

○　長崎　天野春子

亡き人の奥津城近き入千草に籠の鈴蟲はなちやりけり

○　大阪　かつら子

庭ふかき町もしづけき山里も同じ光りに月はてらしぬ

○　若松　やなぎ

なき母がかたみの小袖とり出て今日もぬらしぬ小雨ふるよひ

○　熱海　紅花

蟲の音に夜あけて蟲の音に更くるわびしき宿のおばしまに居ぬ

○　兵庫　今井敏子

ゆく秋を命とたのみなく蟲と母のみとりに夜をあかすかな

○　神戸　小菊

月さしぬ丸窓清う蟲なきぬ歸らんとせし友は止りぬ

○　岡山　下野靜江

いと清き心の水をかき濁す君の姿を恨みても見ぬ

○　小石川　高橋ちか子

高殿の鼓の音もおぼろげになりつゝ更けぬ京の夜の町

○　北海道　安藤つゆ子

○宮島や神の灯寒くまたゝきし夕べ涼しく鹿のこゑする　越後　小坂つまえ

○目とづればうつゝに見ゆるうせし子のほゝの色なる朝顔の花　金澤　寛久江

○居すめる庵も籬の鶏頭も野分するなり月夜ながらに　北見　信太英子

○あさましや悩みの神のにくしみにふれてそむきぬあゝ君とわれ　香川　藤村すがえ

○秋きぬと目にはさやかに見えれども草むらかげに鈴虫のこゑ　京都　市川しげを

○君は今此島ら送りにをはすると地圖取出して赤く印しぬ　上總　岩瀬房子

○髪あげてしばしほゝゑむたゆたへに木犀散りぬ病める枕に　大分　是永古滿子

○[illegible]な道のしぶきにうるほはせ君へのつとに紅葉つむ　久留米　安藤すゞ

○をちこちに葉うつ音の聞えつゝ雨に靜けき秋の山里　東京　木の葉

○にはの面はしとゞにぬれて葉末なるつきかげそよぐゆふだちのあと　東京　くら子

○少女てふ美き名のうせし面のごとかなしき色に秋の日暮れぬ　讃岐　小野定子

○こほろぎの鳴く音きゝつゝ露しげき夜寒の小野をさまよひて行く　伊豫　小萩之舍

水清く小萩はなちる野にたてば思出おほし〳〵夕ぐれ

○さらぬだに物のかなしき秋の夜に妻こふ鹿の聲ぞきこゆる　鈴木せい子

○三日月は物すごきまでさえわたり物を思ふ我が片頬照しぬ　愛知　白濱女

○さらでだに淋しき野邊を旅僧の衣の袖に秋風のふく　小田原　白露子

○うちなびく尾花の波に月出でゝ秋风清しむさし野の原　埼玉　宮倉歌子

○すみゑにもにたるまつかえ月かげのもりきておのがそでにやどりぬ　須磨　有村敏糸

○新しき家にうつりて我せこと共に花見る夕嬉しも　丹後　寺岡節子

○乳兒いだく今も昔のおさな名によびます君のなつかしきかな　鳥取　山路文子

○新まくら萩さく頃のうす月に物がたりめく君とかたりし。　岐阜　鐡子

○秋晴れや心足らへるよき人の瞳のいろす青澄める空　越後　小林明子

○折らまほし折りなば人やとがめなん庭よりもれし一本のばら、　豐後　木部富士子

○八百八[illegible]死にたる人の顔の靜けさ見せて夜は更けんとす　大阪　西澤かつ子

○眠りそへよありし昔を忍びなん衣の墓前に十三夜の月　堺　きぬた

その夜こそやみます姉と語りしを今はかたみぞ月すめる夜



短文

(甲)　和樂

水戸　中根雅子

縫ひなほした繻子の帯をしめて、一寸姿見の前へ立つと、お父様がいつになく私をじつと見ていらつしやつたが、「その帯は母さんのおゆづりだらう」つてお聞きなさるから、「よく御存じですこと」と申上げるとほゝゑみながら「知つとるつて、二十年前俺がお前の母さんと見合をした時締めてたやつだもの、そのときあ今の様なばあさんぢやなくて高島田の美しいお嬢様だつたよ」、とおつしやる、次の間にお居でになつたお母様が、「お前だつて、生れつきの禿頭ぢやなかつたらう」つて、まぜつかへしなさると、不加減でお臥つていらつしやる母様まで、「ホゝゝ」と事やかにお笑ひになつた、

(乙)　暁

牛込　百合子

雨戸をあくると、庭の隅さへ見えない位にもやが一面にかゝつてゐる、其の中からぼんやりと朝がほの赤いのがぼかした様に浮き出て見える、未だ母様も御目ざめでない、そつと柴折戸をあけて花園へ出ると、兵作はもう中分ほどこやしをやり終へた處で、御嬢様の御大事のコスモスが三本蕾を持ちましたといふ、これは種子から私が蒔いたものだ、畑では秋やが亀の子ざるをかゝへ込んで茄子を取つて居る、茄子の露をふくむでゐる色は實にいゝ、私も手つだつてやらうと言つて二つ三つもぎとつた、

(丙)　御髪上げ

札幌　伊佐敷消子

鏡臺にむかつた姉様は、今兩方の手で根の所をしつかりおさへて居らつやる、髪結さんは叮嚀に毛筋を揃へて居た、やがて鉄鼠の子の流行ろ様な手柄がかゝつて、いつの間にか大きな丸髷が出來た、あら姉様なぜお島田にしなかつたのといへば、髪結さんはほんとに去年の今頃は、お島田にばかりお上げでしたれ、月日のたつのははやいもんで御ざいます、坊ちやんもうはひ〳〵がお出來になるんですもの、と一人で饒舌て居る、私は何の話やらさつぱりわからなくなつたのでたゞぼんやり聞いて居た、

夕雲

東京　道子

「秋れえ」、と妙さんは思ひ出した様に沈んだ調子で云ふ、私は美しい樹

顔をじつと瞶つめてゐたが、ふと庭を眺めると、白い茶が、ホロ／＼と散つてゐる、

「淋しいわれ」、と茶の實を見送りながら姉さんは重ねて言つた、（秀逸）

茶の湯

三重　近藤幸子

此の塾では毎月五の日が茶の湯のお稽古ときめられてある、けふは九月五日だから何時ものやうに午後からおけいこが始まつた、今日はいつもほめられる晶子さんからなので、皆最前にしてお手並を拜見した、運びから始まつて、袱紗さばきから、立て前など、一々禮法にはまつて居るので、先生も默然として一言も指圖せられない、やがて床しい香りのするお茶碗は先生の前へ置かれた、

晶子さんはホツとせられた樣に美しいお顔を櫻色にして袱紗をなほして居られた、先生が茶碗を取り上げられた時、お庭の青桐がひら／＼と落ちて來た、（秀逸）

葡萄

京都　京子

家の葡萄の木は私が植付けたもので、朝な夕なに水をやり、蔓を止めたり、蟲を取つたり、いろ／＼世話した甲斐があつて、漸く去年から實がなりだしたのだが、初成りの時には房が青い葉と葉の間から見える樣になつたら、アノ憎らしい裏の子供がいたづらをして、とう／＼たゝきおとしてしまつたから、今年こそはと早くから試驗場の眞似をして袋を被せておいた、そして日々この袋の中をたのしみにしてゐたら、丹精の功が見えて、大きな見事な房は害蟲の被害もなく、色も美しく熟した、さて両の手にあふれさうになるのをかゝえたが、私はうれしくてどうしてもムザ／＼食べる氣になれぬ、母上樣の仰のまゝにまづ御先祖の前にさゝげた、（秀逸）

田園

大分　八坂たけ子

あゝ今日も又暮れてしまふ、あとは明日にすべい、もうそろ／＼歸らんべいかと、田のあぜに腰かけて煙草くゆらして居た吾作爺やが云ふと、小さい聲で鄙歌うたひつゝ一心に草を取つて居た婆やは、あゝと腰を打ちつゝ立ちあがり、ぬれ手で一寸頭の手拭を取つて顔をふいた、うつくしうかゞやいて居た夕日は、此の二人の顔を紅にそめて、山の端にかくれてしまつた、（秀逸）

秋雨

深川　佐久間さだ子

雨がしと／＼と降つてゐる、窓を開けるとリボン屋の嫁さんは、柱にもたれて、細い手に胸を押へてゐる、もう電氣が灯いて白い踏脚を華やかに照らしてゐるが、しかし何か心配事があるらしい、私も十八の身、嫁さんの身の上にしみ／＼同情した、（秀逸）

待合室

牛込　寺村留子

今しもどや／＼と入り來る若者連中、紋付もあればわらじばきも有り、中には髮を叮嚀にコスメチツクでこねまはし馬鹿にハイカラがつたのもある、東京見物の歸りらしい、やがて銚子方面のお方は……と驛夫が柱

意したので、室内は急にさう〳〵しくなつた、最前より一等室に待ちあぐみし令嬢風の美人、髪を品よき高島田に結び、お納戸絣のお召の一重にホワイトシヨールうつりよく、空氣草履の足ゆるやかに、ダイヤモンドの光りのまばゆさ、若きも老ひたるも多くの眼線は令嬢の一身を射る、最前の若者は口をパツタリ目をきよと〳〵、美人は一等室へ若者連中は殘り惜しさうに三等へ……汽笛はピーと鳴つた、（秀逸）

筏舟

京都　赤松梢子

「イヨー遲いなあ」、夕暮の岸から男が聲をかけた、「オウ兄貴か、俺あ何でも今日は臺岡に二三ばい流さうと思とつたに、龜岡の木當でつい臺暇して、お庭でこんな體ぢや」、悠々として筏操る大堰の流れ、今は落花の風情もない水面に浮んだ黒い嵐の山かげを、水棹の一掉りにぱつと碎いて、水のまに〳〵輕く〳〵流してゆく、空には月もなく、嵯峨野の夕風水を渡つて岸邊の人の袂を拂ふ、（秀逸）

お買物

東京　若紫

洋傘や小間物の、欲しい物ばかりの處をやうやく通りぬけて新模様の圖案を一通り見る、何れもこれも美しくつて目がさめる様なのばかり、やつと目的の帶地の處へ來て早速あれかこれかと寄り始める、いゝ柄ばつかりだと思つても、さて買ふとなると、何れにしていゝかさつぱり分らなくなつてしまふ、「姉様どれにしませう」、「これがよかなくつて？」と、肉色の地に白でバラの大輪の出て居る繻子を一寸私の背につけて見る、「それがおよろしいでせう」と店員が可愛らしい聲で云ふ、やつとの事に其と極めてホツと息をつく、（秀逸）

小さな庭

淀橋　さと子

建仁寺垣をめぐらした二坪ばかりな小さな庭に、並んだ鉢の數もしれてゐる、日あたりは極わるい、家根から二三尺頭を出した檜が二本、物干の代用もすれば、蟬の宿にもなる、そのかわり毎日蜘蛛の巣もはらつてやれば、時には鋏も入れてやる、庭の片隅は紅葉が占領してゐる、鬼蔦か姫蔦かとこのころは大分はびこつて、垣の外まで蔓を延ばしてゐる、手水鉢の下のは水をかぶるせいか未だ小さい、花好きの妹が播いた朝顔は今朝も二輪咲いた、明朝も亦二つ咲くらしい、西の日をそびらにうけて我宿につかれた軀するともしびのもと　（秀逸）

女の不安

東京　夕ほし

私の家は街路の四ツ辻にあります、其の道の二つは下り坂で他の二つは上り坂です、それゆゑ長閑な春の日にも、冬の朝も、秋の夕も、石や、木を積み重れた車を有り丈の掛聲をあげて坂を上つたり下つたりするのが絶えません、二階でお裁縫を致してをりますと、疲れたやうな、細いやうなその叫び聲が何時でも耳にはいりまが、鳥渡物干へ出てさへめまひのするやうな私ですから、其の聲を聞く毎に、もし私が落ちぶれてあゝいふ境遇に陥つたら如何しやうなどゝえならぬ不安の念に襲はれます、（秀逸）

病床

栃木　五月女衣子

めづらしくいゝお月夜だ、
仰向けになつて、ぢつと冴々した空を眺めて居ると、胸の痛みも頭の鬱血も神々しい光に吸ひ取られて仕舞つた樣に淸々しい心地がして、まだ慈母の添乳に寢て居た頃の樣が朧ろげに胸に浮んで來る、チリン〳〵と風鈴が鳴る、青い呂蚊帳にかすかな漣が打つて、波紋は遠く月の面に漂つて見える、

無題

麹町　よし子

忘れて下さらなくつてもようございます、忘れましたといつた私の聲を記憶して下さいますなら、花は恐ろしい女、血のかれた女、涙も何もない女でございます、いゝへ、涙はあなたに涸らされました、いまはたゞうつろの花、もう何も仰しやつて下さいますな、

黒煙

姫路　鈴木ふじ子

日はカン〳〵照る、垣根には松葉牡丹の紅い花が見事に咲いてゐる、轟々と眞黒の煙を吐いて汽車は止つた、油に光つた黒い服を着けた火夫が石炭を抛り込む、奥には眞赤な火が見える、火夫は窓から覗いた、血の氣のない青い顔を煤だらけにして、眼をギヨロギヨロさせてゐる、

秋光

本郷　もの花

萬象ははつきりと白い光につゝまれて、折々華かなパラソルが通る、毛繻子の深張が行く、竹の子笠が飛ぶ、秋の日ざしを眞向に受けてのそりのそりと歩む老人がある、それをじつと見てゐると、何だか古い〳〵夢を見てる樣な氣がする、

銀座の夜

牛込　平塚白百合

電車の光がうすぐらい道をぬつて、長い蛇のやうになびいてゐた並木の柳が闇の中に吸ひこまれたやうに黒くなると、物干場の干物が綺麗に運び去られて縁日ものゝ植木鉢が四つ五つ見え出す、といつの間にか青い程の月が家並をこえて電信線へスウーと昇つて、そこ此處の物干場に浴衣がけの町娘のにぎやかな話聲がもれてくる、銀座の夏もすてがたい、隣家の氷屋から鈴蟲のころがるやうないゝ音がリン〳〵とあたりをふるはせて、どこからか蓄音機の追分がかすかに風に流れてくる、

回章

市川　すなほ

卒業してから三年ぶりの今日、うれしくも第五回目の友の回章を手にしたが、之は私にとりては何よりもの慰藉となつてゐる、遠くはなれてゐらつしやる先生方の消息を初め、諸方にちらばつた親しき友の兒童相手の面白き話、教授の經驗談、流行の唱歌遊戯、或は家庭の人となりての實話など種々の事項が思ひのまゝに書かれて、なか〳〵に興味がある、

友

麹町　野の花

「いつまでも今までの隔ない仲で」と泣いて誓つた卒業式はもう三年の昔となつた、そして白いリボンを蝶とひらめかした信様はもう赤様を抱いて三度の手紙にやう〳〵一度お返事、それも世間くるいきまり文句が書いてある許り、不運つゞきと洩れきいた千鶴様は、如何んな事情か話しても下さらぬうち、兄様の御名で「病氣の處薬石効なく」とのおしらせが來た、あゝ。

朝

静岡　小夜

遠くに箒の音がする、お庭に出ると康爺が落葉を焚いて居る、名も知れない蟲がしきりに泣く、吹く風は肌寒い、東の空が段々あかるくなつて來る、四方で雨戸をくる音が聞えはじめた、

そゞろ歩

越後　羽下波奈子

越路の山里は、ソヨ〳〵と袖をなぶる風がうら寒い、私は思はず襟に顔を埋めた、暮れの幕に被はれたわたりは只ボーツとして向ひ山の消え殘りの雪がいやにほの白う見える。ゴー〳〵と絶え間のない早出河瀬の音はナカ〳〵断腸の思ひがする。今より三とせの昔松原つゞきの寄宿舎で就寝近うきいたドー〳〵たるひゞきを思ひ出さずに居られない。

夕ぐれ

岡山　貞子

菫色の雲は今しも沈みかゝる夕日の光を包まうとして居る、庭の夕顔は開き初める、眞赤な葉鷄頭はだん〳〵暗にかくれて、黒く風にゆれて見える、妹は此間伯母さんからお土産に頂いた廻り燈籠を大切さうにくるくるまはして居る、打ち水をした庭の草むらから、何蟲かジージーと鳴き出す、母様は「もう月があがりさうなもの」とおつしやる、「さうれえ」と空を仰ぐと星はぴか〳〵輝て居る、

韓人町

釜山　朱雀智佳子

夕方韓人町を通つた、丁度夕飯時で、煤ぼけたカンテラの下に、韓童の五六人が豚の子の様に低い飯臺にかゝつて夕飯を食つてゐる其横に、六十あまりの韓翁は木の片の四角枕ですう〳〵ときつい息して眠つてゐた、

温泉宿の朝

埼玉　扶美子

ふと醒めてみまはせば、もう雨戸は開いてゐる、お隣の御隱居さんが大きなアクビをしてゐられる、私等姉妹は手拭片手に楊子を以て洗面所へ行くと、昨夜おそくまで私等の部室でお話しして入らしつた三階の方がしきりと冷水摩擦をしてゐる、お早う御座いますと言へば、ヤア昨夜は大に失敬しましたと、肉キユー〳〵とふいてゐる、顔だけ洗つてお湯にゆく、朝の風呂場はなか〳〵にぎやかだ、二階の部室へかへると、お父さまは一人でお茶を召上つて居られた、

夕の海濱

石川　越上美登里

磯臭い風が鼻をうつ、ひやりと波が足を洗つて行く、海の果の薄れづみ色の雲のつきたる所に白帆が三つ四つ浮ぶ、不意に兇童が三四人ざくざくと波打際に足跡を殘してかけて行く、その眞黒な背と膽いたやうな白い足の裏とが暮れかゝる砂の上に反射してまことに奇妙な對照を示してゐる、

扇の嘆

神戸　西尾紅涙

世の中に私程はかない者はあるまい、私は水無月の初に、緣日の露店から、此の家の孃樣に買はれて以來、身をおしますはたらき、黄金とろける暑いのもいとはずに、時ならぬ涼風を起して孃樣の御心を慰め、華やかに語らせ給ふ時にも、詩想にふけらせ給ふ時にも、そゞろ歩きにも、片時たりとも孃樣のそばはなれず、扇よ扇よと、愛を一身に受けて、居たが、萩の上風身にしむ今日此頃と成ては、さしもの寵も衰へて、机の上に置ざりにせられ、遂に手荒らい坊ちやまに捕へられて、皮はやぶれ骨は折られ、はては、下女に、塵塚へほうむられる、けれど、だれ一人哀と暴うて呉れる者がない、

秋日和

東京　紅萩子

萩の咲いて居る垣根には、小犬が首を長くして眠つ居る、萩の咲いた井戸端に蓙を敷のべて、雪の樣な白い髮のお婆さんと、愛らしい五つばかりの女の子とが遊んでゐる、やがてお婆さんは昔話しを語り出した、乳子は目をぱつちりさして聞いて居たが、見てゐる中にすや〳〵とねむて了つた、秋風はそよ〳〵吹いて、子供のお下髮がみだれてゐる、

滿洲

滿[illegible]　むらさめ

原に日が落ちて橙黄色の雲が北に流れた、打見る限り蒼茫として、夢のやう、黒い大きな鳥が低く野面を横切た、

雨の日

東京　淑菫

今日は朝から雨がシヨボ〳〵降つていつになくあたりがヒツソリとして居る、たゞ聞えるのは雨垂の音と時々池の鯉がはれる音ばかり、今更ながら秋の淋しい感がヒシ〳〵と胸にせまる、此樣な時にはいつも故鄕の離座敷で二つ上の姉と飯事して遊んだ幼い時を思ひ出す、あゝともに遊んだ姉上は去年三つになる正ちやんを殘して此世を去られた、きつと今頃は彼座敷で正ちやんは母を慕つて泣いて居るであらう、

都へ

日本橋　澄子

停車場のわきの、のうせんかつらが、ハラ〳〵と散る、薄暗いプラツトホームの寂寞を破つてピーと鋭聲をえぐられるやうな汽笛、はつと思つて見あげると「ぢやあ澄さんからだを大切に、ぢき歸るからね」「どうぞ兄樣も……」、涙はわな〳〵して言葉も出ない、汽車は再び黑烟を吐いて遠い夕暮のうちに消えて行く、兄樣は生存競爭の烈しい都へ……、

去年の思出

近江　八重子

あまたある友の中で取り分け仲のよかつたのは、お隣りにいらしつた靜

子さんでした、今でこそかうして西と東にお別れしては居り升が、それは實の姉妹も及ばぬ程仲がよかつたのです、其の靜さんも、浮世の波に誘はれて、見知らぬ他郷に行きました、忘れもしませぬ、丁度今宵のやうに空よく晴れ渡つて月が清く照つてゐる靜かな夜でした、吁靜さんも大方、今宵の月を眺めてあの水音高い千曲川のほとりを相變らずうつむきがちにさまよひながら去年の今宵を追懐してあのりゝしいお目に露の玉を宿してゐらつしやるであらう、

秋の海

神戸　波多野廣子

オレンヂ色の入日が、寄せては返す千波萬波の浪頭に碎けて、海の彼方に淡路島がぼんやり浮いて見える、淡墨で描でたやうなのは紀伊の山々沖からはふなうたが流れて來る、波はピチャ〳〵と足許に囁く、

二人連れ

麹町　君影草

新橋を立つと川崎で二人の女教師風の人が乘り込み私等の前に腰を下した、色が青白くて卅近い年頃、新お召の着物をきて居る、も一人は廿四五、白餅を着て、顔には白粉を濃くつけて頬紅が赤過ぎる程、共に紫紺の袴をはいて居る、二人はしきりに話し始めた、車がガタンゴトンとやかましいので大きな聲を出すからすぐ前に居る私にはよく聞える、同じ學校に勤むる教師の悪口らしい、其内に汽車は横濱にいつて二人は下りてしまつた、

磯の夕

名古屋　梅田きよ子

三十五反の帆を卷き上げて行くよ仙臺石の舂、と長く〳〵すき透つた聲は、やはらかい、夕なぎに送られて來る、「ア、あれが家の人だ、聲もよく似て……」と小手をかざして、沖の彼方をじツと見た、

初秋の夕暮

福井　浮子

鮮やかに彩られた空を見ながら、廣い芝生の中をあてもなく歩いた、弟は無言で手を引かれたまゝ小さい足音をたてゝついてくる、野菊のかげで蟲がなき出した、弟が「あの蟲とつて頂戴」といつて歩かない、自分は迷想を破られた、「さあ後ちやんの影を蹈むよ」といつて長い影を追ひながら走り出した、秋風が颯と吹いて頬をなぶつて向ふの柳の葉を二ひら散らした、空を仰ぐと紅の色は薄くなつた、鳥は東へとんでゆく、

引越し

麹町　名もなき花

荷物をヤツト送り出す、いくら新世帶でも一年も住つたから何やかと道具があつて驚くばかり、僅か五間の家ながら、私共には天上の極樂園にも増す思で、相信じ相愛して此の一年は夢の樣に暮した、色々考へると去り難くなり、モ一度と又奥へ廻ると、花畑に撫子が一輪、折つて頭にさす、あゝなつかしい家よ、永遠に吾等の樂しき思ひ出となるだらう、

夕ぐれ

栃木　澤井千代子

輕く柴戸を押すと夕闇に白萩がほろ〳〵と音もなく零れる、露に足濡ら

して歩行いて行くと、ジッと聲立てゝ居た蟲がパッタリ啼き止むだ、仰ぐ空には早や星も出てゐる、

妹の許へ

播磨　堀内美知子

清子さんお產はもう一月ですれ、男でせうか、女子でせうか、早く出來ればいゝに、待ち遠しいわ、御體はいらいでせう、御察し申ます、成るべく用心をなさいまし、私もれ今から初生着の事を考へて居ますの、なかしいわ、

近況

大阪　利子

卒業後ちつとも文通しなかつたあや子樣から帶の長さ程の手紙がきた、在學中からの理想通り實業家に嫁いではや二人のお母樣になつて理想の獨逸主義をやつてるなど氣焰は依然として昔に變らぬ、其終りに近況を知らせてくれと書いてあつたので、すぐに筆を取つた、返事はわざと短簡に「御文拜見仕候、年來の御宿望をとげさせ給ひしを賀す、妾の近況は已往將來一貫したるものに候、敎育者の一員たることを自覺いたし居候、卒業後今日まで怠らずまた勉めずたゞ職責をつくすといふ定規に適合せんことをつとめ居候、而して常に小學兒童といふ事の外腦中無一物に候」、

我家

神田　新村基子

悶ゆる胸をじつと押へて、月無き庭に佇んだ、空は黒く覆はれて、降るでもなく、はれるでもなく、星影一つ瞬かない、淋しい暗い我家によく似てゐる、實に厭だ、

窓の月

金谷　中村千代子

お月樣貰つ十三七つと美代ちやんは唄つて居る、其聲の可さに書齋の窓をあけると、姉さん出ていらつしやい、大きなお月樣よと云ふ、今宵は恰も名月である、それに想をのせて私は遠く同じ學びの窓に親しんだ友達の上をおもふた、澄んで美しい夜である、

秋思

四日市　水谷靜子

ざわ〳〵と風が吹く、袖垣の下にはこほろぎが鳴いて居る、ほんとに秋の夜は寂しい、思出せば、今宵は、姉樣が四國へ御出なされし月であるつい此頃の樣に思ふて居たが、早や一年になる、

無邪氣

岐阜　山田榮子

縁先に鏡臺をすゑて、髮を結つてゐると、今年五つになる腕白盛りの達夫がパタ〳〵奥からとんできて、「姉やん」と叫びながら妾の背におぶさつた、ふと鏡をみると、圓顏の眼のパッチリしたニコ〳〵した小さい顏が映つてゐる、「やあ坊がをる！」と嬉しさうに指しながら前へ廻つて、「バアー」と鏡を覗いては、又ニコ〳〵して妾の顏を眺める、其顏の無邪氣さ、可愛らしさ、妾は思はず髮結ふ手をやめて、膝の上へ抱き上げた、

秋風

飛驒　埋木

ふと針の手をやめて庭を見れば、いつの間に散つたか、風もなかつたに桐の葉か一片二片散つて居る、まだ蟬の聲のおとろへぬのにもう秋が來た、

月光

豐後　加納豐子

いざよいの月光は靜に庭を照して低れかゝつた朝顏の葉にも、亂れさいた小萩にも、無花果の廣葉にも、針の樣な松の葉にも、露の玉が生々と輝いて、そよ風の渡る度にサラ〱とこぼれる、地面の草もしつとりと露に濕ふた、何處やらで幽に蟲の音がする、

斜陽

宇都宮　峰尾治子

榛掛山のあたりに湧き出づる黑雲をさながら山かとぞ見るうちに、電光一閃稻葉も搖ろけ家も覆へるばかりの夕立、折角の干物も取り入れねばならぬ、鷄は雨に打れて軒端に喙く、雨は庇より橡に遠慮なく吹き込む火鉢の灰殻は吹き溢るゝばかりに沸きかえる、小兒は蚊帳の中で泣き叫ぶ、やがて風もなぎた、雨も止むだ、西窓をあくれば夕日が斜に空に紅に染つてゐた、

荷物

四谷　宮松やす子

羽織袴の晨めし作りの男を眞先きに、唐草の油單を掛けた數臺の荷櫃が、紺の香りのぷん〱するはつぴを着て、既に半ば御酒に醉ふた若者に擔がれてやつて來た、お針歸りらしい島田銀杏の五六人連れが、ぴたりと足を止めて中を覗き込む樣にして見て居る、暫して振り返つて見たら、さつきの隊進はまだ立ち止まつて何か頻りとしやべつて居た、

乳母

伊勢　細野ふみ子

「ではもうこれでお暇をいたします」、と乳母は力なくいつた、お父樣は腕を組んだまゝ俯し目になつてゐられる、お母樣も、姉樣も、いつもの賑々しい笑聲は今日はどこへやら、家の中は水を打つた樣に寂閑としてゐる、乳母は立ちかけた、と今迄お母樣の膝に抱かれて音無しくしてた澄子は不意に「乳母アや……」と呼んだ、聲はうるんでゐた、あゝ乳母の行くのは、澄子にとつては生木を割かれるよりもつらからう、悲しからう、

午睡

近江　中村清子

外はカン〱と照り付けて暑苦しい、家の内はシンとして居る、北に面いた書齋の窓を開けると、流石に涼しい風が習々と流れ込む、避暑案内を拾ひ讀みして居る中に、身は何時しか月光碎くる和歌の浦邊に立つたが、ザブリ〱と、波に素足をかまれて冷りッとしたので目がさめた、

笑　話

○妹の心配

信州　斎藤美江

姉「お母樣光子さんと妙子さんとは同じ日に御よめに行くのよ」。母「それは御目出度いれ」、そばできいて居た妹「そんなに皆が御よめに行くとあたいの大きくなる頃にはおむこさんがなくなるわ。」（丙賞）

○北極と南極

芝　春日子

坊ちやん世界地圖をひろげて、「おい爺や、此の世界中で一ばん北に行くとさむくて始終氷のはつて居るやうな所ばかりなのだよ」爺やはさも合點したらしい顔付で、「おやわ、一番南へ行つたらどんなもんだろ、爺やのやうな夏ざらひはしよつちう日射病とやらが絶えませんでがせうなあ、」（秀逸）

○なまけもの

岐阜　田中白葉

從妹が學校から歸つて來て、袴帶び乍ら何か話して呉れと申しますから、「あるところに寢て居て金の欲しい人がありました、ある日大黒樣に大黒樣々々々、どうかその打出の小槌を振つて金を出して下さいと拜みますと、大黒樣は目をむいて、この槌は金を出す槌ではない、なまけもの〻頭を打つ槌だッて叱れた」といふと、「あてこすりはいやだわ、」（秀逸）

○散歩の出がけ

信州　斎藤美江

ハイカラの妻君、散歩の出がけに、「一寸あなた白粉よくつきまして？」夫「男にそんな事が解るものか、うるさい、」妻「一寸見てさへ下さればよいのに、それもして頂けない位なら散歩のお供なんかしませんわ」夫「ナニ？　白粉か、白粉なら大そうよくついたよ、だれに習つてそんなに上手になつたのだい、」（秀逸）

○當世風の娘

尾張　岩田みのる

母「お前夕立に追はれてさぞ困まつたゞらうれ一體どちらから追はれてどこから濡れかけたの？」娘「は妾後ろから追はれてれ、濡れかけたのは前髪からでしたの」、

○お氣の毒樣

大阪　山田芳枝

或老紳士孫ほど年の違ふ花子と云ふ嫁を貰ひましたが、間もなく老紳士は病氣に罹りました、そこで老紳士或日嫁を呼んで「のう花子、俺はこの通りの病氣で何時死ぬるかも分らんがたゞ一ッ氣に罹るのはお前のことぢや、幾ら金があつても未亡人と云ふ名が附くとどうしても人が馬鹿にする、それを思ふと俺はお前が可哀想で」、「ナニそんな御心配ならお止しあそばせ、私は貴郎の御遺產を以て此度は今より一ッ以上の所へ嫁入つて幸福に暮しますから……」

○話上手の法

神奈川　齋藤美津子

娘「ほんとにあの方はお話上手れ、」父「どうしても水道の水をのんだ人はちがふよ」娘「ぢや私今度お父樣が東京にいらつしやる時お願みして汲づて戴いて呑んで見ますわ、」

○按摩の愛嬌

福島　佐藤たけし

お母さんが按摩を呼んで揉んでお貰ひになつて居りました時、恰度此前撮つた寫眞が出來て參りましたので、お母さんの前で封を切つていろいろ批評しながら皆んなで笑らつて見て居りますと、按摩さんが側から口を出して、「お孃樣は本當に一番よく撮れました。」

讀者倶樂部

▲よくお臺所を困らせる油蟲を取る法は度々これ迄聞きましたが、私が經驗したのは、極軽便でよくとれると思ひますから、一寸御知らせ申します、先づ御鉢か壺のなる可く深いのゝ内側に油を塗り、底の處へ魚の骨かなんかを入れて置きます、すると油蟲は澤山其處へ集つて參りますが、今度外へ出ようしましても、油で辷つて出る事が出來ません、それへ沸騰したお湯をさしますと、皆死んで仕舞ひます、鉢や壺は使ひ古しの、かけたので結構で御座います。(京都美爾子)

▲五月號の本誌上にあつた、羅井片山千里さまの、「回覽雜誌」の興味あるお思ひ立ちは、其後どんなになつて居りますか、御消息を承りたうございます、それから内藤千代子さま、あなたは誰れからもなづかれてゐらつしやいますれお淚しう御座います、寫眞御寄贈になつて、此誌上でお目にかゝりたうございますわ。(羅岡竹石はる子)

▲皆樣方がふつくらといゝ恰好に丸たぼにして束髪をお結ひ遊ばしていらつしやいますが、どなた樣でも其結ひ方を教て項戴な、甚だ恐れ入りますが。(東京京橋たつ子)

▲私は昨年中から、所々の繪葉書を集めて居りますが、地理上の參考にも致したいと存じますから、御同志の御方は、名所繪葉書を下名の所まで御送り下さい、當地のものを御送り致します(栃木縣宇都宮市一條町十八番地、佐藤方松浦千鶴子)

▲私は當年四十六歳、六年前に山口縣から此米國に渡つた者で、米國出立の折、家に生れて十二ケ月の女の子、名はため子、外に五人の子供を殘して出で、只今も當地で働いて居ますが、當地は米國と言ふても全くの田舍で、樂みは更に有りませぬから、太陽と女學世界を讀んで日本のうつりかわりを目の前に見つゝ一日も故國の事を忘れません、殊に朝夕に思ふのは末のため子ですが、彼女が此内手紙をくれましたのを見て歸り嬉さに皆樣に通信致します、手紙の寫を左に、

お父さん、ないないあたたかくなりまて、ななしやでありますか、わたくしどももみなまめでまいち學校に通ひています、御あんしん有れ、このうちりぼんと人形ををくりてくされうれしく御禮申ます。

りぼんわすみ姉さんがくれい申てで有るけれど、これわ御父さ給物あげられぬ、私わ今かみがちかいからなゝしてなきます、人形わ脈から二ッ割れました、御母さんついでもらいてとこのまにかざてあります、毎日御父さんをかえりまあてをります。

佐々木ため子

父上さま

私は右の手紙見て落涙致しました、一字千金とはほんに此事でせう、そして天皇陛下の大御心を教育になやませ給ふ故に斯くは親子の意思が通ずるのだと日本の方に向ふて萬歳を唱へて三拜致しました。(八月十五日アシントン、ウフツン郡リイランドにてため子の父)

▲私先々月も先月もこの欄へ投書致しましたが載せられませんでした、あまり自分勝手な事ばかり申した故でせうか、皆樣の御爲めになる樣な事でなければ、不可なので御座いますか、又文章の巧拙にもよるので御座いますか、どうぞ親愛なる記者樣、次號の讀者倶樂部でお敎へ下さいませ。(記者曰、成るべく互に樂み互に益を得る樣な投書を御出し下さい、文章は短くて上手なのを希みます)牛込の平塚白百合樣、御交際を願ひ度う存じます、御住所を御知らせ下いませんか。(北見國信太英子)

▲大阪あい子樣、御親切に御敎へ下さいまして誠に有がたうございます、幸ひ此頃は出ません

が、今度出たら早速實行してみませう、厚く御禮申上げます。(羽後みよ子)

▲私は田舍者で何も知りませんから皆樣にお伺ひいたします、紅茶とコヽアの飲用法を御存じの方は敎へ下さいませんか。(越後深山百合子)

▲衣かつぎの女樣、播磨明石附近の者樣、及び四谷楓子樣、毛髮に付いての御投書拜見いたしまして御同情申上ます、續いてはたしかに有効と私の信じて居ります事が御座いますから、右御三方樣の内誰方樣でもよろしうございますから何卒現御住所御姓名當欄でお知らせ下さいまし、委しく御手紙で申上げたいですから、又下名まで直接御申越下さいましても宜しいです。(京都市室町通り六角下る紳谷都子)

▲皆樣のうちに餅腹腸と云ふものおなほしになつた方はありませんか、もし御座いましたら何處でおなほしになりましたか、何の位ゐ痛いものですか、何日位かゝりますか、誠に恐れ入りますがお知せ下さい伏して願ひます(靜岡芳子)

▲京都の平塚みどり樣先達てはお手紙難有とう幸御推薦に依て女學世界第九ノ六號より、愛讀することにしました、今後は何分よろしく御指圖を願ひます、是非一度御遊びに入らしやいませ、粗末物で澤山御馳走致します。(尾張濁原やす子)

▲野澤君代樣!、あなた今何處に被在いますの?、御國へ御歸りになつて?それとも麻生の伯母さまの御宅?、學校で御別れ致したぎり其後如何遊ばしたかと明暮御慕ひ申して居りますお二人で讃美歌を唱ひましたつけれえ、あなたのソロが本統に好きでしたわ、門倉先生にオルガンを弾いて頂いて、八十三番を合唱した時の事が忘れません、懷い樣な御顔、薔薇色の御唇、表情に富んで被る御眸、あゝ御目にかゝりたいわ、之を御覧遊ばしたらどうぞ一日も早く御住所御知らせ下さいれ、學校の皆さまにも聞きましたけれど何誰も御存じありませんのよ、(北見國佳太英子)

▲私はこんな山里に居ますから、友と智識を交換して樂しむと云ふ事は出來ませんで、本誌をよむのが何より好きで、いつでもくると其の日に大方見てしまつて又次の發行日をまちかれます、それに此の倶樂部が出來て誌友の方々に親しくお目にかゝる樣な氣がして、ほんとに嬉しうは御座います、ねがはくばますます此の誌の發展せん事を切にのぞみます。(三重山吹)

▲私のすんで居る所は信州の中でもごく交通の不便な所ですから、したがつてすべての事が東京など異つて質素なものでございます、女學校の生徒なども至つて質朴で、奢侈に流れず、學藝を熱心にやりますから、比較的出來のよい人が多く、且身體は皆丈夫です、尙此の上交通がひらけ、大都會の悪風をのぞいた文明がしみ渡つたならば、如何ばかり立派な所となるであらうかと思つて居ります。(信州あや女)

▲私は本年當地の女學校を卒業したものですが、いまは家庭にあつて女學世界を唯一の友として暮して居ります、ほんとにこの本から我身を暮すことは如何ばかりでせう、皆樣何卒御みちびきください。(埼玉さゆり子)

▲短文の水戸中根稚子樣、ようこそ御投書なさいましたれえ、私も度々致しますけど駄目でしたのおはづかしいわ、それにつけても茨城縣人名が見えないのを殘念に思つてたのよ。以後どしどし御投稿遊ばませ。(茨城縣筑波子)

▲竹ホヤの黒くなつたのは却々美しくなりませんが、色々考へて左のやうに致して居ります、先づホヤを左の掌へ立て、上の口から灰を少し入れます、そこへお湯のぬるいのをホヤに中分ほど入れ、上の口を右の掌でおさへていゝほど振ります、そしたらその灰水を捨てゝしまつて、ぬるいお湯の中でゆすぎ、それを何かに立てかけておきますと水氣がとれて綺麗になります。(愛知杉原しづ子)

▲粉炭を戸棚の中に入れて置くと肉や魚などが早く腐りません、(埼玉染谷ひろ)

新刊紹介

△桂月書翰　大町桂月著

手紙をして光彩を放たしむるものは眞情の流露である、如何に文がうまいといつても情が盈れてゐなければ死文である、桂月君は眞情の人、天眞爛漫性格を丸出しにして一事も隱すところがない、そこでその文側々として人を動かす衒氣の多い今の世の中に一點己れを蔽はざるこの文を出す桂月氏の襟懷こそ床しき限りなれ小石川水道町龍江堂發行價四拾錢

英語世界叢書第四篇 からたちばな　深澤由次郎譯註

本書はホーソルンの神おろし、アノニモースの暴富日記を初め、其他十餘種の短篇に就き、原文と譯文とを掲げ、尙ほ作者の小傳、解題、文法、故事等を詳しく附したるものなれば、英語研究者の爲によし、定價參拾五錢、本館發行、

△珍物畫傳　珍物子編

曩に大阪朝日新聞に連載して喝采を博したるものを一册となしたるものなり、內容は即ち珍らしき人物の評傳にして、學者あり、實業家あり、變人あり、藝者ありて收むる所無慮百名に達す、而して一人每に畫像を附しあり、秋の夜の徒然の讀物なり、定價金五拾錢、京橋區南小田原町鍾山堂書房發行、

△筆帥　大町桂月著

當世の社會人事を批評するものに學者あり、敎育家あり、新聞記者あり文專門の評論家といふのも澤山あれど、桂月氏のごとく平易にして何人にも解り易く何人にも面白く、且つ奇拔な見解を下す人は少い、桂月氏は如何なる方面に向つても思ふ儘を率直に、無遠慮に、無頓着に打出して憚らないところは眞にこの人の價値のあるところである酒匂博士を罵り、自然派文士を罵り彼等の頭上に一大鐵鎚を下して痛快を極めた當世得難き快文である、金尾文淵堂發行金五拾錢、

賢なる偉人模範女子　齋藤鹿三郎編

中江藤樹の母、山內一豐の妻、東鄕平八郎の母、乃至は岩崎彌之助の母等、乃ち所謂模範女子十數人の傳記逸話等を記したるもの、定價金四拾錢、日本橋區[illegible]町六盟館發行、

△文庫第四十卷第一號　內外出版協會發行

本號より特に册子の體裁を更へて小形のものとなしたるが、內容は相變らず面白し、佐々木邦譯のマーク、トウエーン作小說千萬圓、日高柿軒の小說樹下醫等其の主なるものなり、

女子大學講義錄

當十月より新學期開始

女子敎育の普及と婦人思想の開發を以て着實穩當なる婦人の養成を目的としたる同講義錄は今回新學期開始に就て一段の擴張をなし從來の講師の外更に童話傳說に芳賀博士英文學に松浦政泰氏、社會史に松本文三郎博士擔當して、平易切實に學科の講說を掲げたり、殊に本講義錄の特色は現代の中等社會の家庭を標準として專らそれに適應せる科學を說述して、主婦が實地の活用に資するにあり、學科並に講師は左の如し。

△實踐倫理（成瀨仁藏）△敎育學（麻生正藏）△心理學（福來友吉）△兒童研究（高島平三郎）△家庭物語（後藤牧太）△博物學（渡瀨庄三郎）△生理學（大澤謙二）△衛生學（三宅秀）△經濟學（中隈敬藏）△法制（奧田義人）△應用社會學（浮田和民）△文學研究（[illegible]井正男）△園藝（佐々木祐太郎）△和歌作法（三宅龍子）△家事、△料理△裁縫編物會）、會費一ヶ月五十錢一ヶ年六圓別に講義錄の外に每號家庭雜誌を添ふ女子大學校編輯、小石川區久堅町精美堂發行

△洋服の心得　武田[illegible]編

洋服の保存法、著用法、取扱法、其洗濯法、或は色揚法より、近時發明の乾燥洗濯の事に至る迄詳細に說き、尙ほ諸名家の經驗談等をも掲げありて一寸重寶な册子なり、定價金拾五錢府下大井町洋服乾燥洗濯開眞白洋會發行、

懸賞募集 嫁に行く人

百人百種結婚の經歷談を募る（〆切十月二十日）

大きい女は大きく望めど大望必らずしも幸福ならず、一般に虚榮心の強き女は成功すれど、向上心に燃ゆるものにして又失敗不遇に終る者あり、品性水晶のごとく高潔にして却つて人に嫁はるゝ女あり、人格豚の如く賤しくして却つて人に好かるゝ者世間中々に多し、是れ畢竟混沌として複雜せる人間社會の活作用にして、一片の理窟を以て解釋し難きところなり、されば人事の中にありて最も微妙の關係ある結婚に就ては多く理窟を並べんよりは實際の事實を示すに如かず事實は眞に活ける敎訓なり。

私しはどうして嫁に行つたか、彼の人はどうして嫁に行かうとして居るか、私は如何なる方面を望んで居るか、彼の人は如何に運動しつゝあるか、私は何故に失敗したか、彼の人はどうして成功したか、要するに結婚に就てのあらゆる關係を尋ねてその因緣結果を描寫せよ。

賞金

一等	五拾圓	一名
二等	參拾圓	一名
三等	貳拾圓	二名
四等	拾圓	五名
五等	五圓	十名

規定

△文體は各種隨意日記文體、小說文體、書簡文體等いろ〳〵なるべし
△紙數は二十枚內外の事
△當選したる文は十一月中旬發行の本誌に揭載
△賞金は發表の當日發送す

讀者文藝 懸賞募集（〆切十一月十五日）

▲こゝろの日記

▲樣々の社會觀察

▲才媛筆蹟（書翰文體の一節）

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話 ▲短文 ▲和歌

▲讀者俱樂部

投稿規則◎笑話、和歌、狂句、短文、讀者俱樂部は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は書翰文の一節を示す事◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、△和歌、狂句、短文、笑話、讀者俱樂部——甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢、秀逸參拾錢
△社會觀察△こゝろの日記△風俗の記事△食卓日記の四種は孰れも特賞拾圓甲賞五圓乙賞參圓

毎月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內〔定刊數……十二冊、增刊四回……一、五、九、十一月價格同一〕

郵稅 一冊 二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年十月一日發行　第九卷第拾參號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百廿九番

見よ数百萬の難病者を全治せしめたる

電氣帶發明者 サンデン博士之像



サンデン電氣帶

主治効能

神經衰弱諸症－腦神經衰弱－不眠症－胃擴張－胃腸病－常習便秘－消化不良－生殖器衰弱及無氣力－遺精－夢精－早漏－遺尿－腎臟炎－糖尿病－其他一般內臟の衰弱

諸神經痛－坐骨神經痛－頭痛－顏面神經痛－腕部及腰部神經痛－リユーマチス－腰痛－脚氣

婦人諸病－ヒステリー－貧血症－月經不順－子宮病－憂欝症－脊髓－中氣－產後及病後一般の衰弱症

●本具に依り慢性不治の難病を根治したる實證實に數百萬

（説明書無代進呈）

定價

舶來品

	附屬共	
三號帶	附屬共	金八圓
四號帶	同	金拾五圓
五號帶	同	金貳拾圓
六號帶	同	金貳拾五圓
七號帶	同	金參拾圓

和製品

戊號帶	附屬共	金五圓
丁號帶	同	金七圓
丙號帶	同	金九圓
乙號帶	同	金拾壹圓
甲號帶	同	金拾參圓

アクチナ

奇効可驚

主治効能

眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す（説明書無代進呈）



登錄商標

探見電燈



定價

大小形共參圓半

參圓

貳圓半

丙大形壹圓半

丙小形壹圓

送料十二錢

懷中電燈



定價

最上參圓半

上等參圓

並貳圓半

B形 上貳圓 並壹圓半

替電池 上七十五錢 並六十錢

送料十二錢

デンキークリーム

本**クリーム**は米國タウン化粧品會社の最近發明に係り顔面皮膚を艷美にし**キメ**を滑ならしめ且つ白粉代用として最好適品たること天下無比なり

定價 見本送料共八錢 大五拾錢 小參拾錢 送料八錢

○營業品目（電話、電鈴、表示器、電球電池其他電氣器具一式卸小賣）

○一丸式ハイローランプ▲凡て代金引換は前金貳割御送附を乞ふ

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目 銀座通東側 電話新橋四一二二 振替口座東京一八四七三）

●支店（橫濱市相生町四ノ六三 電話一九三一 大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側 振替口座大阪七三四四番）

サンデン電氣商會

●（後付の一）

文藝倶樂部

每月一回

一日發行

第拾五卷第拾三號——十一月一日發行

洋裝菊判 紙數三二〇頁

口繪 ●木版摺錦畫 原色版 ●寫眞版十頁挿入

定價金廿五錢 郵稅貳錢五厘



時いよ〳〵燈火親しむべくなりぬ本誌は此好季を逸せざらんと益〻趣味の向上と實益の充實を謀らんと卷頭には德田秋聲子の傑作「里の女」を載す。子は此の小說に於いて、果して何物を語らんとする乎讀者刮目して見よ。山岸荷葉子の「念力」、佐野天聲子の「エトナの雪」共に前號に揭載すべかりしもの本號漸く讀者の渴を癒やさむ黑田湖山子作「腰かけられぬ人」をも收む、是れ山人が一新機軸を出せるもの最後に山崎紫紅子作脚本「學者の血」を揭ぐ。是れ紫紅子が我が劇界に新趣味を寄與せんとするもの演藝界、活社會其の他の各欄例に倍して賑かなるは豫告するまでもなし！愛誦を賜へ!!!

東京 博文館 發行

（女ノ後付の三）

獨逸　チヨツケ著

司馬亨太郎君譯

立志小說　黄金村

全一冊洋装菊判　體裁優美高雅　紙數約三百廿頁

正價四拾八錢　郵税八錢

一軍人、退役の後、郷里に歸り、業を勵まし職を奬め、道を說き德を講じ、貧弱取るに足らざる僻村をして、豐裕比儔を見ざるの黄金村たるに至らしめたるもの、之を本編結構の大要と爲す、原著は獨逸の大家チヨツケ氏の筆に成り、其趣旨とする所奇とするに至らざるも、起伏曲折多く、波瀾抑揚少からずして、讀み去り讀み來て卷を措く能はざらしむるもの、著者苦心の存する所と、其識見筆力の凡ならざるを見るべきなり、而して譯文軽妙、毫も飜譯の痕を留めず、德育の方面に大なる缺陷を有し、奢侈怠惰の風、熾なる本邦に在ては、此好個の讀物を得たるを賀せざるべからざるなり。

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

女（後付の四）

冒險世界 第貳卷第拾貳號 增刊

明治書生氣質

明治年間に新たに生れたる一階級に書生なるものあり。囊中錢なきも未來の富豪を以て居り、豆を噛つて大臣を罵り、或はチックに憂目をやつす。本書は各方面の書生氣質を網羅せるものにて、記事は押川春浪、河岡潮風、阿武天風、平塚斷水その他數氏が快腕を振ひ、挿繪は、小杉未醒、山中古洞の兩氏の筆にかゝるもの。內容豐富、趣味無盡藏、眞に學生界の一大パノラマ。秋の夜これに過ぐる讀み物なからん。サア評判ぢや評判ヂヤ

洋裝四六倍判
紙數百廿八頁
口繪愉絕快絕
正價十五錢
郵稅一錢五厘

十月二十日發行

雄辯書生　轉校道樂書生　音樂書生　慾張り書生　浪花節書生　カンニング書生　强情書生
運動狂書生　海軍狂書生　苦學書生　剛膽書生　理窟屋書生　徒歩主義書生　女學生釣書生
苦蟲書生　痛快書生　神秘書生　ハイカラ書生　食道樂書生　泣みそ書生　鐵拳書生
放蕩書生　落第書生　腰拔書生　蠻骨書生　チヤンカラ書生　大食書生　老書生
文學書生　柔道書生　名物書生　神經質書生　のんき書生　哲學書生　厭世書生

附錄 ▲東都學生界通用語辭典▲東都各學校學生氣質評論▲各學校寄宿生活▲學生向飲食歷訪記▲當世紳士の書生時代

（後付の五）

東京日本橋本町 博文館 振替東京二四〇

實業少年（第參卷第拾貳號）臨時增刊

夜學會

出世的實業少年と二大要領

◉毎月一回一日發行◉四六倍判上等紙七十二頁毎號寫眞版數十面入

修養

品性を作り人格を高むるは成功の大根元であります。修養欄に**勤勉、勞働、忠實、正直、勇氣、獨立、質素**等の諸徳を最も分り易く又一々内外國大實業家の實例を擧げて述べてあります之を實踐すれば必ず成功の道を見出しませう。

獨習

獨習欄には**速算獨習、實業地理獨習、手紙作法獨習、ABCより英語獨習、日用必知の文字數千字等**何れも餘暇夜學の寶典立身出世の早道であります

▲十月十五日發行▼

正價一冊金十錢郵稅一冊金壹錢

振替貯金口座 東京二四〇番

東京 博文館 本町

販賣用電話 本局二六二〇番

（後付の六）

女（後付の七）

女（後付の八）

タカヂアスターゼ

●消化不良に就て熊本醫學専門學校長谷口博士は曰く、澱粉不消化の徴候たる胃の大疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積、便秘、前頭部疼痛及下痢を生じ營養不充分なるが爲め筋肉及體力を喪失する者はタカヂアスターゼを用ひ快速に治するを得べしと、又本邦消化機病學の泰斗長與博士は曰く、予の實驗に依ればタカヂアスターゼは獨り胃の澱粉不消化を治するに有要なるのみならず慢性下痢に於ける腸不消化をも治するに適當なるを信ずと、

信ずべき統計に徴すれば消化不良の七割五分は實に澱粉不消化に起因すされば タカヂアスターゼは胃腸障害に對する最も有力なる藥物なり。

タカヂアスターゼ發賣元三共合資會社は東京市日本橋區南茅場町より同區室町三丁目へ移轉せり從て當分本劑の包裝には新舊町名番地のもの混同して販賣せらる孰れも眞正品なり

●世に幾多の摸造品及類似品あり高峰博士發見のヂアスターゼを求めんには必ずタカヂアスターゼと御指定あるべし各地の信用ある藥舗にて取次販賣す



●消化力強大なるは總てのヂアスターゼ劑中タカヂアスターゼを第一位と爲す近く官報を以て發表せられたる本田博士の學位論文に徴するに坊間に販かる、多くのヂアスターゼはタカヂアスターゼを用ゆるに比し數倍乃至十數倍にあらざれば之と同効を收め難きなり、此くの如きは高峰博士の製法が他の總てに超絶して完全なるに由るものにして、これ以て一は眞正品は他摸造類似品たることを區別し得るなり、

タカヂアスターゼの說明書は發賣元たる東京市日本橋區室町三丁目拾番地三共合資會社へ御申越に從ひ無代郵送す

●營養增進の目的を以て虛弱者貧血者重病者等にタカヂアスターゼを用ゆれば能く消化を佳良にし營養自ら增進し體力速に恢復するを見る、殊に肺結核患者に之を應用すれば其効力著明なりされば、大阪高等醫學校長佐多博士は曰く、タカヂアスターゼは予が數年來肺結核患者の消化補給劑として用ひ有効を認めたる所とすと、又在京の栗本博士は曰く、今や予は實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著効を確認すと、柴山博士も亦此目的にタカヂアスターゼを使用したる結果多大の良成績を擧げたることを公示せられたり

●藥効均等論は輓近の學者間に唱道せらる、所なり、內務省橫濱衛生試驗所長西崎藥學士の研究論文中に曰く、タカヂアスターゼは各購求の時日と場所とを異にするものなれども其糖化の効力は固よりグリカーゼの効力も亦常に一定せりとタカヂアスターゼの効力毎常一定なるは其特長なりこれパークデビス社の如き規模の宏大なる者に於て始めて見るべきのみ。

用量は一回〇・一—〇・三錠劑(〇・一三)なれば一錠—二錠毎食後直に投與すべし而して此用量はタカヂアスターゼにのみ限ることを特に言明す

女學世界

(明治四十二年十一月一日發行 毎月一回一日發行) 第九巻第拾參號 (明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可)

婦人は何故に男子より虚弱なるか

婦人は男子と異なり種族繁殖と云ふ重大なる天職の主要部を司り居れば、平生の攝生にも男子の知らぬ部分あり、疾病も男子とは特種のもの多く、此の特種攝生に注意せず、女に白帶は持物である、女は冷る者である、頭痛のするは時候の關係である、子供は授り者で生れるも生れぬも致し方がないと、自分の身體に病氣あるも顧みず、又自身に病氣と知ながら、醫師の許へ行けば厭な所をも診察される恥しさに治療を怠る婦人が多い、是婦人の男子より虚弱となる大原因である、之は一應尤もの次第では有が、要するに簡便なる自宅療法を知ぬ結果であらう●●●斯樣な御婦人方に向て極て簡單に完全な治療を講じ得らるゝは順天堂の自宅療法である●津村順天堂は一藥萬能主義でない數種の内服藥と外用藥を以て婦人病の根治を保證するのであるが、今内服藥中將湯と外用藥中將球を使用すべき諸症を同病患者に告白す、幸に自己の症狀を考慮して本劑を用ゆれば必ず滿足なる結果を得べし……尚詳細を知らんと欲すれば詳しき容體を記して本舖津村順天堂へ申込れよ





●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く又下腹腰足の引つり痛み●婦人神經(ヒステリー)血の道にて氣欝ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠ず●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動悸強く手足痺れ水腫●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人●白血赤血滯下多く顏色蒼白き人●冷症にて難產流產の癖ある人●產前何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く

中將湯は前に逃た諸症には凡て服用の必要が有升が外用藥中將球はさうでは有ません●子宮内膜炎、白帶赤帶、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、惡臭搔痒、尿意頻促、月經前後の疼痛、痳毒性子宮病等に中將湯を服用して中將球を兼用の必要が有升

中將湯定價	
五週間	二円五十錢
三週間	一円六十錢
二週間	一円十錢
一週間	六十錢
四日分	三十五錢

中將球定價	
五圓	五十錢
二圓	試分
一圓	二十錢

中將湯中將球本舖は東京日本橋區通四丁目……津村順天堂です

(定價金貳拾錢●郵税貳錢)